特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ

第15・25次、第24次調査

1993

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

口 絵 1　　第15・25次，第24次調査

全　　景（北から）

口 絵 2　第15・25次調査

主殿(ＳＢ405)、離座敷(ＳＢ406)、門(ＳＩ415)遺構　(東から)

第15・25次調査区全景(第15次調査分は既に整備してある)　(北から)

元様式染付器台と赤絵皿

SK450一括出土遺物

口 絵 4　第24次調査

▲
第24次調査・庭園SG829

◀第24次調査出土
不遊環青磁花生

序

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査事業も，昭和47年４月に福井県が朝倉氏遺跡調査研究所を設立し，本格的に着手してから20年を超えました。これまで平地部の主要な遺構の朝倉館や一族の屋敷，武家屋敷，町屋，寺院，城戸などの発掘調査が終了し，朝倉館や中の御殿跡，新馬場や出雲谷の武家屋敷跡の報告書はすでに刊行されています。

今回の報告書は第４冊目になりますが，対象地としては城下町で最も重臣の屋敷が集中している地区の一画をとりあげました。新馬場の東側と北側にあたりますので，すでに発行されている報告書Ⅱとあわせてごらんいただくとよろしいかと思います。東北部で発掘された中規模の武家屋敷跡は，昭和57・58年度に原寸で立体的に復元整備されており，その整備報告書も刊行されています。

これらの地区は比較的遺構の残存状況もよく枯山水の平庭も検出され，また種々の花器や茶器，文房具なども数多く出土し，武家屋敷内での優雅な文化的生活がしのばれます。この報告書が戦国時代の城下町の構造や生活の実態を知る上で，いささかでもお役に立ちますれば幸いです。

なお，事業の実施にあたり，懇切なるご指導とご高配をいただきました文化庁をはじめ関係各位の皆様，ならびに終始かわらぬ暖かいご支援をいただきました城戸ノ内をはじめとする地元の皆様に対し，心から感謝申し上げます。

平成５年３月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長　藤原武二

目　　次

口　絵 …… 3
序 …… 11
目　次 …… 13
図版・表目次 …… 14

Ⅰ．調査事業概要

1．調査目的 …… 3
2．調査経過 …… 3
3．調査方法及び組織 …… 5
4．経　費 …… 7
5．本報告書について …… 8

Ⅱ．第15・25次調査

1．調査概要 …… 11
2．遺　構 …… 15
3．遺　物 …… 25
4．小　結 …… 37

Ⅲ．第24次調査

1．調査概要 …… 43
2．遺　構 …… 47
3．遺　物 …… 53
4．小　結 …… 65

図 版 目 次

口 絵（カラー）

1．第15・25次、第24次調査（全景）
2．第15・25次調査（遺構）
3．第15・25次調査（遺物）
4．第24次調査（遺構・遺物）

図　　面

第15・25次調査

第1図　土層図
2　遺構平面詳細図（1）
3　遺構平面詳細図（2）
4　遺構平面詳細図（3）
5　遺構平面詳細図（4）
6　遺構平面詳細図（5）
7　遺構平面詳細図（6）
8　遺構平面詳細図（7）
9　遺構平面詳細図（8）
10　遺構平面詳細図（9）
11　遺構平面詳細図（10）
12　遺構平面詳細図（11）
13　井戸実測図
14　石積施設実測図
15　第15・25次調査遺物（1）
16　第15・25次調査遺物（2）
17　第15・25次調査遺物（3）
18　第15・25次調査遺物（4）
19　第15・25次調査遺物（5）
20　第15・25次調査遺物（6）
21　第15・25次調査遺物（7）
22　第15・25次調査遺物（8）
23　第15・25次調査遺物（9）
24　第15・25次調査遺物（10）
25　第15・25次調査遺物（11）
26　第15・25次調査遺物（12）
27　第15・25次調査遺物（13）
28　第15・25次調査遺物（14）
29　第15・25次調査遺物（15）
第30図　第15・25次調査遺物（16）
31　第15・25次調査遺物（17）
32　第15・25次調査遺物（18）

第24次調査

第33図　上層図
34　石垣立面図
35　遺構平面詳細図（1）
36　遺構平面詳細図（2）
37　遺構平面詳細図（3）
38　遺構平面詳細図（4）
39　遺構平面詳細図（5）
40　遺構平面詳細図（6）
41　遺構平面詳細図（7）
42　第24次調査遺物（1）
43　第24次調査遺物（2）
44　第24次調査遺物（3）
45　第24次調査遺物（4）
46　第24次調査遺物（5）
47　第24次調査遺物（6）
48　第24次調査遺物（7）
49　第24次調査遺物（8）
50　第24次調査遺物（9）
51　第24次調査遺物（10）
52　第24次調査遺物（11）
53　第24次調査遺物（12）
54　第24次調査遺物（13）
55　第24次調査遺物（14）

写　真（モノクロ）

第15・25次調査

PL.　1　調査区全景航空写真
2　調査区全景
3　調査区全景
4　調査区主要部
5　調査区主要部
6　土塁（SA383，266，267，384他）
7　門と溝（SI279，SI415他）
8　建物と庭（SB405・406とSG420他）
9　建物（SB407～409他）
10　諸施設（SA392，SK451他）
11　石組井戸（SE428～435，905他）
12　石積施設（SF436～443）
13　石積施設（SF444～446他）
14　石積施設（SF907，908他）
15　A地区Ⅰ期整地層出土遺物
16　A地区Ⅰ期整地層，Ⅲ期整地層出土遺物
17　A地区Ⅲ・Ⅳ期遺構出土遺物
18　A地区Ⅲ・Ⅳ期遺構，Ⅳ期遺構出土遺物
19　A地区Ⅳ期整地層出土遺物（1）
20　A地区Ⅳ期整地層出土遺物（2）
21　A地区Ⅳ期整地層出土遺物（3）
22　A地区Ⅳ期整地層，B地区Ⅲ期遺構出土遺物
23　B地区Ⅲ・Ⅳ期遺構（SK450）出土遺物
24　B地区Ⅲ期遺構（SK452）出土遺物（1）
25　B地区Ⅲ期遺構（SK452）出土遺物（2）
26　B地区Ⅲ期遺構出土遺物
27　B地区Ⅲ期遺構，同整地層出土遺物
28　B地区Ⅲ期整地層出土遺物
29　B地区Ⅲ・Ⅳ期遺構，Ⅳ期遺構出土遺物
30　B地区Ⅳ期整地層出土遺物（1）
31　B地区Ⅳ期整地層出土遺物（2）
32　B地区Ⅳ期整地層，表土出土遺物

第24次調査

PL.　33　調査区全景
34　調査区全景・土塁（SA265・SS260）
35　礎石建物SB830・SB831
36　礎石建物SB835他
37　庭SG829他
38　土壇・石敷・首暗渠（SX867・SK853他）
39　柵列SA846他
40　門・土塁（SI821・SA263）
41　溝・柵列・石敷（SA857・SD827他）
42　石積施設・井戸（SF851・SE848他）
43　庭・礫畔設遺構他
44　Ⅰ期遺構面・整地層出土遺物（1）
45　Ⅰ期遺構面・整地層出土遺物（2）
46　Ⅱ期遺構面・整地層出土遺物
47　SE847出土遺物（1）
48　SE847出土遺物（2）
49　SE847出土遺物（3）
50　SE849出土遺物
51　Ⅲ期各遺構出土遺物
52　Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物（1）
53　Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物（2）
54　Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物（3）
55　Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物（4）
56　Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物（5）
57　Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物（6）

挿　　図

第15・25次調査

挿図1　周辺地形図
2　第15・25次調査グリッド設定図
3　武家屋敷門SI 415内面上層図
4　建物SB405の柱据え刻線間の寸法
5　SE434出土手水鉢実測図
6　SX462出土鋼盤実測図
7　B地区III期整地層出土銅銭

第24次調査

挿図8　第24次調査区位置図
9　第54，10・11，24次調査区遺構模式図
10　第24次調査グリッド設定図
11　庭跡SG829平面図・立面図
12　井戸SE847平面図・立面図，石積施設SF 851平面図・立面図
13　井戸SE 848出土漆器椀・曲物
14　III期遺構面・整地層出土の土師質皿
15　第I期遺構配置図
16　第II・III期遺構配置図
17　第I期遺構主要部断面図
18　第24次調査出土の土師質皿
19　第77次調査出土の土師質皿

表

第15・25次調査

表1　第15・25次調査遺構一覧表
2　時期区分表
3　A地区検出の井戸・石積施設一覧表
4　B地区検出の井戸・石積施設一覧表
5　第15・25次調査出土遺物一覧表
6　SK452出土大甕一覧表
7　陶磁器の生産地別比率
8　陶磁器の生産地別器種構成

第24次調査

表9　時期別遺構一覧
10　第24次調査出土陶磁器組成表
11　一乗谷朝倉氏遺跡出土陶磁器組成表

付　　図

付図1　一乗谷朝倉氏遺跡地形図
2　第15・25次調査遺構全測図
3　第24次調査遺構全測図

Ⅰ、調 査 事 業 概 要

Ⅰ．調査事業概要

1．調査目的

一乗谷朝倉氏遺跡は，戦国大名朝倉氏が，その領国支配の拠点とした所であって，ここには，当主の館を中心として，山城・上下の城戸・一族の居館・家臣団屋敷・町屋・寺院等が一体となり，極めて良好に遺存している。この良好に遺存する遺跡を国民共有の文化遺産として保護を計るため，昭和46年，278 haという広大な区域を国の特別史跡として指定し，同時に遺構の集中する平地部の内，人家集中地を除く約25haを公有化することを決定した。

遺跡保護の目的は，単に遺構を物理的に保存することに止まらず，遺跡を究明し，その成果を公表し広く一般の人々の知的向上に資することにあるといえよう。そのため，遺跡の発掘調査は欠くことの出来ない基礎作業として位置付けられる。また，こうした遺構を保護すると共に，見学者に公表するための遺跡整備事業が必要となる。こうした事業を計画的に進め，「遺跡をして自らを語らせる」ことをテーマに『史跡公園』化計画を立案，着手した。

発掘調査は，この事業の基礎として，計画的かつ継続的に現在も実施している。

2．調査経過

本遺跡が，朝倉氏五代の居城跡であることは，古くより知られており，近世の地誌等にもその記述がみられる。降って，昭和5年7月8日には，朝倉館跡及び湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡，1.4 haが国の史跡及名勝に，西山光照寺跡1.6 haが国の史跡に指定され，その保護が計られることとなった。第二次世界大戦後に至り，管理団体であった足羽町は，朝倉遺跡の唐門の修理（昭和38年），一乗谷初代孝景墓（英林塚）の覆屋建設（昭和40年）の事業を実施すると共に，昭和42年には，これらの史跡の保存と活用を計るため，朝倉氏遺跡整備事業委員会を設け，環境整備事業3ヶ年計画を立案し，着手した。また，同年12月11日には，山城跡・上下の城戸跡等が国の史跡として追加指定され，その指定面積は，6.8 haに拡大した。事業は，まず，良好に残る庭園跡の整備から始められ，翌43年には，朝倉館跡の発掘調査が実施され，極めて良好に遺構が残ることが確認され，遺跡の重要性が高まった。

一方，昭和44年には，当遺跡を含む一乗谷地区の農業構造改善事業が始まり，谷の奥部，上城戸以南から着工され，ここにおいて多量の遺物や遺構が露呈し，遺跡は破壊の危機に直面することとなった。事の重大さに気付いた知識人や文化財関係者は，この事業の中止を求め，奔走し，遺跡の中心となる城戸ノ内住民の同意を得て，上下の城戸により区画された「城戸ノ内」と山城を含む周囲の山林の278 haという広大な地域を国の特別史跡として格上指定し，保存することを決定し，昭和46年7月29日に，その旨が告示された。そして，住民の居住地を除く農地の大半は一括全面買収され，以前からの公有化地と合せ，約25haを公有化し，保護することとなった。

この広大な遺跡の保存と活用を計るため，管理団体（足羽町は昭和46年に福井市に合併され，福井市がこれを引き継いだ）が実施してきた発掘調査・環境整備事業を福井県が分担し，管理団体と共同して

諸事業に当ることとなった。そこで県は，まず，昭和47年３月，この事業の指針となる「朝倉氏史跡公園基本構想」を策定し，同年４月，その実施機関として教育庁に「朝倉氏遺跡調査研究所」を開設し，事業の本格的推進の基礎を固めた。また，昭和49年３月には，「基本構想」の実施に向け，「一乗谷朝倉氏遺跡整備基本計画」を策定した，諸事業は，これらに基いて，計画的かつ継続的に実施されている。

これまでに実施した諸事業の概要は，以下の通りである。

○第１次５ヵ年計画（Ｓ．42～46）　〔発掘調査面積　6,780㎡〕

内容　当初は３ヵ年計画として足羽町が開始したが，後に延長された。これを第１次と位置付ける。湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の各庭園の修復整備，および朝倉館跡の発掘調査・整備を主な内容とする。また，遺跡基本図（１／1,000 ）の作成も合せて実施。

○第２次５ヵ年計画（Ｓ．47～51）　〔発掘調査面積　18,989㎡〕

内容　朝倉館跡の発掘調査および武家屋敷跡・寺院跡等の発掘調査を通じ，遺跡の概要の解明を主眼とする。合せて，これらの検出遺構を平面整備する。第１～20次調査がこれに当たる。

「一乗谷石造遺物調査報告書Ｉ」刊行（Ｓ．49）

「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘整備事業10周年記念展」（於、県立岡島美術記念館）開催（51年10月）

○第３次５ヵ年計画（Ｓ．52～56）　〔発掘調査面積　29,310㎡〕

内容　第２次５ヵ年計画により検出された武家屋敷を主とする平井地区，寺院・町屋群を主とする赤渕・奥間野地区の面的調査を実施し，城戸ノ内の概要を解明する。また，その平面復原整備を実施する。第21～40次調査がこれに当たる。また，懸案となっていた出土遺物等の展示を目的とする資料館を開館（昭和56年８月20日）。

「環境整備事業報告書Ｉ」刊行（Ｓ．52．３）

資料館展示図録「一乗谷」刊行（Ｓ．56．８）

○第４次５ヵ年計画（Ｓ．57～61）　〔発掘調査面積　16,513㎡〕

内容　赤渕・奥間野地区を中心として面的調査の拡大を計り，これを通じて城戸ノ内の町割の計画のあり方の解明を目指す。これらを平面復原整備すると共に，武家屋敷を立体復元整備する。第41～56次調査がこれに当たる。史跡公園センター開設（昭和58年５月15日）。

「県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」刊行（Ｓ．58．３）

「朝倉氏遺跡発掘調査報告Ｉ　朝倉館跡の調査」刊行((Ｓ．59．３）

開館５周年記念特別展「一乗谷と中世都市　―まちなみとくらしの復原」開催（Ｓ．61．８）

同図録「一乗谷と中世都市」刊行（Ｓ．61．８）

同シンポジウム「一乗谷と中世都市　―都市の構造と生活の復原」開催（Ｓ．61．８）

○第５次５ヵ年計画（Ｓ．62～Ｈ．３）　〔発掘調査面積　21,553㎡〕

内容　上城戸等の要所の調査を通じ遺跡の全体像の解明を目指す。また庭園跡の再調査を実施する。なお，その結果を加えて，庭園跡は平成３年５月28日，「一乗谷朝倉氏庭園」として国の特別名勝に格上指定された。平面復原整備と共に，平成３年度から町並立体復原を主とする史跡等活用特別事業に着手（４ヵ年を予定)。第57～76次調査がこれに当る。

「一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ」刊行（S．63．3）

「一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅲ」刊行（H．2．3）

「一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告Ⅱ　一武家屋敷立体復元事業」刊行（H4.3）

企画展「朝倉文化と茶の湯」開催（S．62．8）

第2回企画展「石の鬼　――乗谷の笏谷石」開催（S．63．8）同図録刊行

第3回企画展「一乗谷のくらしと木」開催（H．元．8）同図録刊行

第4回企画展「一乗谷と越前焼」開催（H2．8）同図録刊行

開館10周年記念特別展「朝倉の遺宝」開催（H．3．8）同図録刊行

3．調査方法及び組織

調査は，国庫補助事業として，福井県が直接実施している。その実施機関として，福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所（昭和47年4月1日～昭和56年8月19日），及び，これを改組した福井県立朝倉氏遺跡資料館（昭和56年8月20日～。なお，平成4年4月1日から，名称が一乗谷朝倉氏遺跡資料館となった）が設置され，その任に当っている。また，その指導のため，朝倉氏遺跡調査研究協議会が設置されている。

本報告書に関係する年度における組織を以下に示す。

○昭和50年度（第15次調査時）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

会　長	青園謙三郎	（福井テレビ　社長）
委　員	石田　昇	（城戸ノ内町　町内会長）
〃	大久保道舟	（県文化財専門委員会　委員長）
〃	黒板　昌夫	（国士館大学　教授）
〃	田治　六郎	（大阪公園協会　理事長）
〃	戸塚　文子	（評論家）
〃	松下　圭一	（法政大学　教授）
〃	水上　勉	（作　家）
専門委員	伊藤　滋	（東京大学　助教授）
〃	岸谷　孝一	（東京大学　助教授）
〃	木原　啓吉	（朝日新聞　編集委員）
〃	近藤　公夫	（奈良女子大学　助教授）
〃	重松　明久	（福井大学　教授）
〃	鈴木　嘉吉	（奈良国立文化財研究所　平城宮跡発掘調査部　部長）
〃	田畑　貞寿	（千葉大学　助教授）

朝倉氏遺跡調査研究所

所　長	河原　純之	（考古）
次　長	藤原　武二	（造園）

文化財調査員　水藤　真（文献）
〃　水野　和雄（考古）
〃　小野　正敏（考古）
〃　岩田　隆（考古）
〃　吉岡　泰英（建築史）

○昭和52年度（第24・25次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

会　長　青園謙三郎（福井テレビ　社長）
委　員　梅田　豊一（城戸ノ内町　町内会長）
〃　大久保道舟（県文化財専門委員会　委員長）
〃　黒板　昌夫（国士館大学　教授）
〃　戸塚　文子（評論家）
〃　水上　勉（作　家）
専門委員　伊藤　滋（東京大学　助教授）
〃　岸谷　孝一（東京大学　教授）
〃　木原　啓吉（朝日新聞　編集委員）
〃　近藤　公夫（奈良女子大学　教授）
〃　重松　明久（福井大学　教授）
〃　田畑　貞寿（千葉大学　助教授）
〃　坪井　清足（奈良国立文化財研究所　所長）

朝倉氏遺跡調査研究所

所　長　河原　純之（考古）
次　長　藤原　武二（造園）
文化財調査員　水藤　真（文献）
〃　水野　和雄（考古）
〃　小野　正敏（考古）
〃　岩田　隆（考古）
〃　吉岡　泰英（建築史）

○平成4年度（本報告書作成）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

会　長　青園謙三郎（福井テレビ　会長）平成5年3月2日逝去
副会長　近藤　公夫（神戸芸術工科大学　教授）
委　員　石井　進（国立歴史民俗博物館　教授）
〃　石田　昇（朝倉氏遺跡保存協会　会長）
〃　木原　啓吉（千葉大学　教授）
〃　岸田　清（城戸ノ内町　自治会長）

委　員　小林健太郎（滋賀大学　教授）
〃　田畑　貞寿（千葉大学　教授）
〃　玉置　伸俊（福井大学　教授）
〃　坪井　清足（大阪文化財センター　理事長）
〃　平井　聖（昭和女子大学　教授）
〃　松浦　義則（福井大学　教授）

一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館　長　藤原　武二（造園）
次　長　大塚セツ子（事務）
主任文化財調査員　水野　和雄（考古）
〃　岩田　隆（考古）
〃　吉岡　泰英（建築史）
主　査　南　洋一郎（考古）
〃　佐藤　圭（文献）
〃　月輪　泰（考古）
嘱　託　舟澤　茂樹（学芸）
〃　高野　正春（事務）

また，発掘調査・遺物整理は多くの補助員，作業員の協力により進めることが出来た。その名を以下に記す。

補助員　（発掘調査・遺物整理）　南洋一郎，川村俊彦　（事務）　吉越強

作業員

（発掘調査）　石田カズヰ，石田艶枝，石田はまを，石田ミヨ子，伊興ふじ子，梅田みさを，奥田恵美子，奥田末子，奥田まつえ，奥田ユリ，小林澄子，小林ヒサヲ，田中和子，田中トシヲ，谷口惣次郎，戸田起世子，平井茂左衛門，福岡敏子，福岡まつ子，福岡遊蔵，福岡義信，藤田武志，前田しなえ，三崎チエ子，山口堅，山口さだを，山下喜美子，吉川サダ子

（遺物整理）　朝倉八重子，石田隆代，上田優子，佐飛康子，杉本直子，田中直美，辻岡幸子，長谷川和子，平井悦子，藤田恵美子，安田春代

4．経　費

本報告書に関係する各年度の発掘調査経費及び印刷製本費は以下の通りである。

○昭和50年度（第15次調査）

発掘調査経費　22,000千円　〔発掘調査面積　4,450㎡　内第15次調査　2,400㎡〕

○昭和52年度（第24・25次調査）

発掘調査経費　20,000千円　〔発掘調査面積　4,600㎡　内第24・25次調査　4,400㎡〕

※なお，第25次調査には県道改良工事に伴う事前調査として200m²が加わっている。

○平成４年度（本報告書）

報告書印刷製本費　2,000千円

５．本報告書について

内　容　本報告書は，国庫補助事業として福井県が昭和50年度，及び昭和52年度に実施した第15次調査，第24・25次調査の報告である。各年度毎に事業概報として速報を公刊しているが，その内容については本報告書が優先する。また，第15次調査区と第25次調査区は，一つの屋敷を分割調査していることもあり合せて取り扱う。また，県道改良工事に伴う事前調査として第25次調査内で実施した約200 m²もこれに含んでいる。本書の構成は，３章からなり，Ⅰは，全体の調査概要，Ⅱは第15・25次調査，Ⅲは第24次調査について記す。

執　筆　本報告書は各調査時の諸記録等を基に，館長藤原武二の指導の下，以下の分担により執筆し，編集は月輪泰が当った。Ⅰ　吉岡泰英，Ⅱ－１　吉岡，Ⅱ－２　水野和雄，Ⅱ－３　月輪泰，Ⅱ－４　水野・月輪，Ⅲ－１・２　南洋一郎，Ⅲ－３　岩田隆，Ⅲ－４　岩田・南

図　面　遺構実測図原図の内，第15次調査については当時の研究所員及び調査補助員南洋一郎（当時）が当り，第24・25次調査についてはアジア航測（株）に委託し，空中写真測量により作成したものである。遺物実測図の作成は，担当者と共に遺物整理作業員もこれを助けた。なお，版下は主として執筆者が作成した。また，挿図として使用した地形図は，昭和44年度に足羽町がパシフィック航業（株）に委託して作成した基本図（１／1,000）及びこの集成図による。

その他　本報告書の遺構図に用いた座標は「第Ⅵ系」である。

また、遺構番号の頭に付した記号は以下の分類によるものである。

ＳＡ：土塁・塀・柵，ＳＢ：建物，ＳＤ：溝，ＳＥ：井戸，ＳＦ：石積施設，ＳＧ：庭園，ＳＩ：門
ＳＫ：土坑，ＳＳ：道路，ＳＶ：石列・石垣，ＳＺ：暗渠，ＳＸ：その他

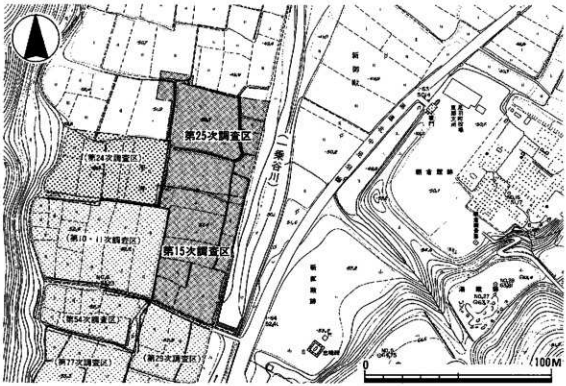
II、第 15 ・ 25 次 調 査

Ⅱ．第15・25次調査

1．調査の経過と概要

調査対象とした所は、上・下の城戸により区画され、遺跡の主要部として知られる「城戸ノ内」の中程やや南寄の、一乗谷川西岸に位置している。朝倉氏五代義景が居住したことが判明しているこの城戸ノ内の中心ともいえる朝倉館とは一乗谷川を隔ててほぼ相対する所である。この地区には、山裾部を中心に、水田畦畔等から、比較的規模が大きな区画が連続している様子が読み取られ、また、「一乗谷古絵図」にも、「斎藤兵部大輔」・「新馬場」・「平井」・「鳴淵将監」・「河合安芸守」等の有力家臣を含む名称が記されていることから、重臣屋敷地区の可能性が考えられ、注目されていた。こうしたこの地区の様子を解明するため、まず、その中央部の古絵図にみられる「新馬場」に比定される所に、昭和48・49年度に第10・11次調査区約3,665㎡が設定され、その結果、南北方向の幅約4.5ｍの道路と、これに面する周囲に土塁を巡らす大規模な屋敷が存在したことが確認された。今回の調査は、この第10・11次調査の成果を受け、その調査地を面的に拡大することにより、その計画性を解明すると共に、南北方向道路を挟んで西の山裾側と東の一乗谷川側の規模の異る屋敷の構造を比較検討することを目的として計画された。

第15次調査区は、福井市城戸ノ内町字平井地係であり、先の第10・11次調査により検出された南北方向道路の東、一乗谷川との間に、水田区画を参考にして、南北約66ｍ、東西約36ｍ、面積約2,400㎡として設定した。調査は、昭和50年５月16日に開始し、途中、緊急調査（第16次）のための約１ヶ月の中



挿図１　周　辺　地　形　図

断をはさみ、同年9月26日に終了した。この調査では、屋敷の明確な北境界を確認するに至らず、次の調査を待つこととなった。第25次調査区は、福井市城戸ノ内町字平井及斉藤地係であり、先の第15次調査を受けて、その北に設定されたものである。南北約55m、東西約45m、面積約2,400㎡の範囲で、昭和52年8月3日に調査を開始し、同年11月8日に終了した。

調査区の位置する一乗谷川西岸の字平井地係を中心とする地区の地形をみてみると、西の山裾と一乗谷川までの間は、ほぼ平坦で、全体は水田化されている。その平坦地の幅は約100mで、中程やや東寄に南北方向の石垣が若干雇行しながら存在し、これを境として、西の山裾部が東の川寄に比べ、0.6～1.2m程高くなっており、さらに一乗谷川に沿って帯状の幅10m程の小区画の水田は、0.3～0.5m程下る。一乗谷川水面はこの1.5～2.0m下となる。ちなみにこの中央部の海抜高は西山裾部の水田が52.8m、南北石垣の上部の水田で52.4m、下部の水田で51.5m、一乗谷川沿の水田で50.8m、水面は49m程であり、また、この付近の一乗谷川の勾配は15～20%である。水田の規模は、大きなもので1,200㎡程、小さなものは60㎡あまりと差が大きいが、300㎡、いわゆる1反程のものが平均的である。水田耕土は、0.1～0.15m程度と比較的浅く、山裾からは、山からの地下水が若干浸出する所も散見されるが、比較的水田の水放けは良い。ここで報告する第15・25次調査区は、こうした地区の内、中央やや東寄りの石垣から東、一乗谷川との間、幅35～45m、南北約120mの範囲で、大小合せて16区画の水田から成る。最も高い西南の水田で海抜高約52m、最も低い東北の水田で約50mである。

調査グリッドは、この地区にみられる土塁の痕跡を伝えると考えられる高まりや水田畦畔に基いて先の第10・11次調査時に設定したものを踏襲した。

第15次調査は、南北に約66mと長く、かつこの調査区の西はすでに第10・11次調査を実施し、その平面復原整備を実施しており、また東は一乗谷川であることから、その発掘排土地は調査区の南北に設定せざるを得ないこと等から、調査区を南北に2分して調査を実施することとした。まず、南半からベルトコンベアーを使用し、耕土除去を始めた。一部建物礎石や井戸・石積施設等の遺構で床土上面にて検出されるものもみられる。また遺物もこの床土面に若干みられる。しかし、調査で目指すのは、この床土下の遺構・遺物を主としていることはいうまでもない。耕土・床土除去後、本格的な遺構検出を開始し、南半部の概略の遺構を検出後、北半部へ移った。北半部では、きわめて良好に遺存する建物跡・庭園跡が検出され、この建物全体を解明するため、一部調査区を北へ拡張した。ほぼ1.5ヶ月で概略調査を終え、一旦、一乗小学校体育館建設に伴う緊急調査のため約1ヶ月中断し、その後、土層実測図作成、遺構写真撮影、そして遣り形測量を用いた実測図作成と調査を進め、下層遺構等確認の補足調査を実施し、調査を終えた。

第25次調査は、まず、調査区南半に存在した第15次調査廃土を機械により除去し、次いで、調査区の耕土・床土をベルトコンベアーを使用して除去した。先の第15次調査により検出されていた屋敷境界となる土塁を確認し、全体の屋敷割を明らかにした後に、その屋敷内の遺構検出を行うこととした。その結果、ほぼ中央に幅約8mの東西方向道路が存在し、南は第15次調査で検出した屋敷の一部となり、北は別屋敷となることが判明した。また、南半の屋敷は良好に遺構が残るが、北半の屋敷は後世の水田化に際して削平を受け、ほとんど遺構は残らないことが明らかとなった。また、この地区の中程を南北に貫く道路跡を本調査区の西境界として考え、先行する第10・11次調査、第15次調査、第24次調査で検出されていた道路とこの西側石垣の検出を実施した。北西端では石垣が西へ折れ曲ることが明らかとなったため、調査区を西北に拡張することとし、その結果、ほぼ道路幅分（約6m）西へ短折れとなり、北

へ延びていることが判明した。こうした概略調査に約２ヶ月を要し，遺構写真撮影，下層遺構の確認等の補足調査を実施し，遺構平面図をヘリコプターを用いた空中写真測量により作成し，土層図・石垣立面図等は手書により作成し，調査を終えた。

こうした調査の結果，町割の基本となる道路や，屋敷を区画する土塁等が明らかとなり，また，一部後世の削平部がみられたもののきわめて良好に残る遺構群等が検出され，当初の目的をほぼ達成することが出来たといえよう。なお，こうした調査成果を受け継ぎ　この地区の調査範囲も拡り，町割の構造等がかなり明確になって来ている。

調　査　日　誌　抄

第15次調査（1975年５月16日～９月26日）

5・16　調査開始。ベルコン搬入。グリット設定，地区杭打。調査区を南北２分し，南半より耕土除去を始める。

5・21　排水路を兼ね南北溝発側溝ＳＤ 268を掘り下げる。

23　Ｅ15で擂鉢出土，底に穴有。

24　石積施設ＳＦ 440　一部検出。建物ＳＢ 407・408の南辺を検出。

27　井戸ＳＥ431・435，石積施設ＳＦ443検出。

28　南半の耕土除去終了し，床上下の遺構検出に着手。

29　溝ＳＤ 387，石積施設ＳＦ445・447等を検出。土坑ＳＫ 452を検出，内部は焼土で，多量の大甕片有。

30　井戸ＳＥ 431を確認。ＳＫ 452内に人骨が設置されていたことを確認。

6・２　土塁ＳＡ 383の北面石垣を確認。

3　溝ＳＤ387・391等を検出。

4　南北土塁ＳＡ 266の東面石垣を確認。井戸ＳＥ 358，石積施設ＳＦ448検出。

5　ベルコンを北半部へ移動。

6　北半部の耕土除去開始。

10　建物ＳＢ407・408のほぼ全容判明。

11　北半部耕土除去終了。床上下の遺構検出に着手。

12　庭園ＳＧ 420の一部を検出。溝ＳＤ393・394を検出。

13　建物ＳＢ405一部検出。

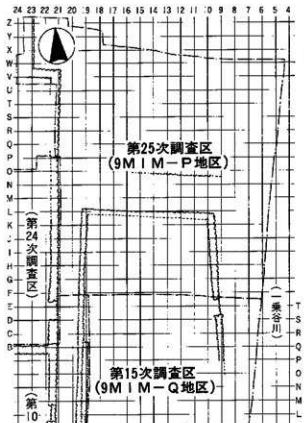
14　井戸ＳＥ430検出。

17　建物ＳＢ 405の規模判明，保存はきわめて良好。

19　通路ＳＳ386，溝ＳＤ387検出。

20　井戸ＳＥ429検出。

24　建物ＳＢ 405の全容解明のため，調査区を一部北



挿図２　第15・25次調査グリッド設定図

へ拡張。東土塁ＳＡ384検出。

26　建物ＳＢ405内より井戸ＳＥ428検出。

30　溝ＳＤ388，掘立柱列ＳＡ392検出。

7・2　ピットより鉄釉茶入・小壺，硯等一括出土。遺構検出をほぼ終了。

3　一乗小学校体育館建設に伴う緊急調査（第16次）
⋮　のため，本調査は一時中断する。
28

29　調査再開。土層実測図作成。（～31）

8・1　土層観察用畦を除去。（～5）

6　遺構清掃。（～8）

9　写真撮影。（～11）

12　遺り形を設定。実測図作成開始。（～9.3）

9・4　補足調査。（～16）

17　補足調査部実測。（～24）

25　清掃

26　写真撮影。第15次調査終了。

第25次調査（1977年8月3日～11月8日）

8・3　調査開始。ベルコン搬入。第15次調査表土及埋土除去に着手。

25　表土除去はほぼ終了。グリット設定。地区杭打。

29　遺構検出に着手。

31　東土塁ＳＡ384の検出を始める。

9・1　東土塁ＳＡ384の北端を確認。北土塁ＳＡ891の検出に着手。

2　北土塁に平行する溝ＳＤ896検出。

5　建物ＳＢ903検出。北土塁に平行して北に石列ＳＶ894を検出。この間が東西方向道路ＳＳ944と推定される。

6　溝ＳＤ900，石積施設ＳＦ909等を検出。

7　石積施設ＳＦ910等を検出。

8　石積施設ＳＦ909には溝ＳＤ943が付属することが判明し，この溝より銅鏡出土。

10　井戸ＳＥ905，溝ＳＤ898等検出。

14　北半部確認のため断ち割りトレンチを設定。削平のためほとんど遺構は残っていないことを確認。

17　調査区北西辺に屋敷境界確認のためのトレンチを設定。

21　南北道路の西側土塁ＳＡ892は調査区北端近くで西へ折れることが判明。この短折部確認のため調査区を北西に一部拡張。

26　西側土塁ＳＡ892・893の全容を確認し，上塁の幅・高が明らかとなる。また短折入隅部で暗渠ＳＺ914を検出。

28　道路短折部を東西に横断する溝ＳＤ901を検出。この溝上に礎谷石の蓋がかけられていたことが判明。

30　遺構検出を終了。清掃。（～10.5）

10・6　写真撮影

7　補足調査に着手。

11　北土塁ＳＡ891脇より和鏡出土。

14　東土塁ＳＡ384の確認のためのトレンチを設定し，下層で石垣を検出。

10・15　先に検出した下層石垣（土塁ＳＡ384）に伴う下層遺構確認作業に着手。

20　補足調査終了。清掃。

21　補足調査に伴う写真撮影。

25　24次調査も含めた空中写真測量実施。

26　石垣立面図，土層図等作成。

11・8　調査終了。

2．遺　　構（第1図～第14図，ＰＬ．1～ＰＬ．14）

第15次調査区は，9MIM－Ｑ地区の東半分であり，西半分は報告書Ⅱで報告されている第10・11次調査区である。第25次調査区は，9MIM－Ｐ地区の東半分であり，西半分は本報告書で報告されている第24次調査区である。ここで詳述する第15・25次調査区は，道路ＳＳ975・260・944と東の一乗谷川とで画されたＡ・Ｂ地区内についてである。なお，第25次調査区の北半分では，一部で道路ＳＳ260やその矩折部分，隣屋敷の土塁ＳＡ892などが検出されたが，この屋敷は平成３年度発掘調査することになっており，また，大半の部分が一乗谷川の氾濫で削平されていることもあって，今回の報告では省略することとした。Ａ地区（第15次調査区の北半分と第25次調査区の南半分）は，東西約30m，南北約60mの武家屋敷であり，遺構の残存が極て良好であった。Ｂ地区（第15次調査区の南半分）は，土塁を巡らした武家屋敷とみられる時期から，多数の石積施設が並ぶ小規模建物の時期まで町並が多様に変遷しているようであり，一乗谷城下町の構成を考える上で極て貴重な遺構であるといえよう。

種別	番号	時期	概要	備考	種別	番号	時期	概要	備考
道路	ＳＳ260	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	第10・11次で検出		石列	ＳＸ431	Ⅲ・Ⅳ	厨屋	
土塁	ＳＡ266	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	〃		〃	ＳＸ432	Ⅲ・Ⅳ	〃	
〃	ＳＡ267	Ⅲ・Ⅳ	〃		〃	ＳＸ433	Ⅲ・Ⅳ	〃	
側溝	ＳＤ268	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	〃　一部検出		〃	ＳＸ434	Ⅲ・Ⅳ	〃	
〃	ＳＤ271	Ⅲ・Ⅳ	〃　検出		〃	ＳＸ435	Ⅲ・Ⅳ	ＳＦ440付近	
〃	ＳＤ273	Ⅱ	〃		〃	ＳＸ436	Ⅲ・Ⅳ	〃	
門	ＳＩ279	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	〃		井戸	ＳＸ437	Ⅲ	ＳＦ441付近	
井戸	ＳＥ358	Ⅳ	〃		井戸	ＳＸ438	Ⅲ・Ⅳ	武家屋敷の北端にある	
土塁	ＳＡ363	Ⅲ・Ⅳ	武家屋敷と町並間を区画		〃	ＳＸ439	Ⅲ・Ⅳ	湧く水があふれる	
〃	ＳＡ364	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	武家屋敷の東辺を区画		〃	ＳＸ440	Ⅲ・Ⅳ	ＳＥ434井戸廃棄物	
〃	ＳＡ365	Ⅲ・Ⅳ	ＳＢ426の北辺に構		〃	ＳＸ441	Ⅲ・Ⅳ	井戸廃棄物ｃ	
道路	ＳＳ366	Ⅲ・Ⅳ	ＳＩ279に接続		〃	ＳＸ442	Ⅲ・Ⅳ		
溝	ＳＤ367	Ⅲ・Ⅳ	ＳＳ366の側溝		〃	ＳＸ443	Ⅲ・Ⅳ		
〃	ＳＤ368	Ⅲ	暗溝？		〃	ＳＥ444	Ⅲ	石製手水鉢井？	
〃	ＳＤ369	Ⅲ・Ⅳ	ＳＳ366の側溝		〃	ＳＸ445	Ⅲ	礎石残っている	
道路	ＳＳ370	Ⅲ・Ⅳ	ＳＸ451への石段あり	石積施設	〃	ＳＸ446	Ⅲ・Ⅳ	北辺に作り替え	
溝	ＳＤ371	Ⅲ・Ⅳ	ＳＳ370の側溝		〃	ＳＸ447	Ⅲ・Ⅳ	ＳＢ426と一体	
柵	ＳＡ372	Ⅲ・Ⅳ	神殿ＬＢ？		〃	ＳＸ448	Ⅲ・Ⅳ	排水溝をもつ	
溝	ＳＤ373	Ⅲ・Ⅳ	ＳＡ365に沿う		〃	ＳＸ449	Ⅲ・Ⅳ		
〃	ＳＤ374	Ⅲ・Ⅳ	ＳＢ426北西の張出付近		〃	ＳＦ440	Ⅲ・Ⅳ		
〃	ＳＤ375	Ⅲ・Ⅳ	ＳＺ467に接す		〃	ＳＦ441	Ⅲ		
〃	ＳＤ376	Ⅲ			〃	ＳＦ442	Ⅲ・Ⅳ		
〃	ＳＤ377	Ⅲ			〃	ＳＦ443	Ⅲ		
〃	ＳＤ378	Ⅲ	ＳＦ438の排水溝		〃	ＳＦ444	Ⅲ		
〃	ＳＤ379	Ⅲ・Ⅳ	ＳＢ426の南側溝		〃	ＳＦ445	Ⅲ	一列に並んでいる	
〃	ＳＤ380	Ⅲ・Ⅳ	ＳＢ426の西側溝		〃	ＳＦ446	Ⅲ		
〃	ＳＤ381	Ⅲ・Ⅳ	ＳＢ426の地下を流れる		〃	ＳＦ447	Ⅲ		
〃	ＳＤ382	Ⅲ・Ⅳ			〃	ＳＦ448	Ⅲ・Ⅳ		
〃	ＳＤ383	Ⅲ			上塁	ＳＸ449	Ⅲ・Ⅳ		
〃	ＳＤ384	Ⅲ・Ⅳ			〃	ＳＸ450	Ⅲ	武具倉か，石垣，御殿路出土	
建物	ＳＢ385	Ⅲ・Ⅳ	武家屋敷の北側に現存		〃	ＳＸ451	Ⅲ	雲ビット群	
〃	ＳＢ386	Ⅲ・Ⅳ	〃　小屋敷（礎石）		〃	ＳＸ452	Ⅲ	〃	
〃	ＳＢ387	Ⅲ・Ⅳ	東南隅に張り出し部（礎石）		〃	ＳＸ453	Ⅲ	〃	
〃	ＳＢ388	Ⅲ・Ⅳ	武家屋敷の東端をつとめる		石敷	ＳＸ454	Ⅲ	雲ビットもあり	
〃	ＳＢ389	Ⅲ	（掘立柱）		〃	ＳＸ455	Ⅲ	天幕	
〃	ＳＢ390	Ⅲ・Ⅳ	（礎石）		井戸	ＳＸ456	Ⅲ		
〃	ＳＢ391	Ⅲ	（礎石）		〃	ＳＸ457	Ⅲ・Ⅳ		
〃	ＳＢ392	Ⅲ	倉か（礎石）		〃	ＳＸ458	Ⅲ・Ⅳ	ＳＸ417付近	
〃	ＳＢ393	Ⅲ	（礎石）		溝	ＳＤ459	Ⅲ	ＳＸ454石敷付近	
他	ＳＡ394	Ⅲ・Ⅳ	柵か	石列	ＳＸ460	Ⅲ・Ⅳ	庭の飾りか	石列	ＳＸ1096
門	ＳＩ395	Ⅲ・Ⅳ	武家屋敷の裏門（礎石）	〃	ＳＸ461	Ⅲ		〃	ＳＸ1101
建物	ＳＢ396	Ⅲ・Ⅳ	井戸屋敷（礎石）	土塁	ＳＸ462	Ⅲ	雲ビット		〃
道路	ＳＸ397	Ⅲ	ＩＳＡ前	ガラ石	ＳＸ463	建物	一部は柱の痕跡（建物ではない）	石列	ＳＸ1113
	ＳＸ398	Ⅲ・Ⅳ	礎石とその周辺まで	石敷	ＳＸ464	〃	一乗谷川の護岸石垣	＊第25次調査のＳＡ892・893，ＳＤ901・902，ＳＺ913・914，ＳＸ932～939，ＳＹ940，ＳＸ942については別稿にゆだねる。	
	ＳＸ399	Ⅲ・Ⅳ	ＳＤ400の端れ＊	石敷	ＳＸ465	Ⅲ・Ⅳ	ＳＦ440付近		

表１ 第15・25次調査遺構一覧表

検出した主な遺構は，道路および通路5，土塁や塀・柵列9，溝27，暗渠5，井戸10，石積施設20，礎石建物11，掘立柱建物1，門2，庭1，土坑6，石敷面4，石列19などである。これらは大きく4時期に大別することができる（表一1・2参照）

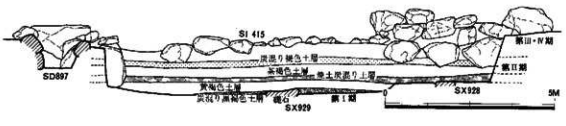
Ⅰ期は，朝倉氏が一乗谷に勢力基盤を伸張しはじめた宝徳2年頃から，文明年間を経て，永正初年頃までの約50年間をあてる。この時期の遺構は，下層の調査が極端に制約されている現状では，あまり明確なものはないが，それでも町割の規制を受けない下層面が若干ではあるが検出されている。Ⅱ期は，斯波・甲斐氏を越前から追放し，加賀一向一揆を撃破し安定期に入った朝倉政権が，京の都に優るとも劣らない町作りを開始した時期で，永正年間から天文までの約40年間をあてる。道路面や土塁の基盤の様相から町割作定開始の状況が把握される。Ⅲ期は，Ⅱ期とⅣ期の中間の時期で，天文から弘治までの約25年間をあてる。Ⅱ期よりも新しく，Ⅳ期よりも古い面が多く検出されている。Ⅳ期は，足利義秋を迎えるため朝倉義景館を大改築したのを中心として永禄初年頃から，織田信長との戦いで敗北し焼じした天正元年までの約15年間をあてる。床上直下の諸遺構は，掘平されていない限り，全てこの時期のものとすることができる。

期	町割	年代		関連記事
Ⅰ	作定以前	1450	宝徳2年	「一乗城野」
			享徳	
			康正	
			長禄	
			寛正	
			文正	
			応仁	
		1471	文明3年	「一乗谷移城」
		1482	〃 14年	「一乗谷大焼亡」
			長享	
			延徳	
			明応	
			文亀	
Ⅱ	作定期(1)	1507	永正3年	「朝倉貞景新調一乗西谷中」
			大永	
			享禄	
Ⅲ	作定期(2)	1543	天文12年	「朝倉孝景館新造」
			弘治	
Ⅳ	作定期(3)	1567	永禄10年	朝倉義景館改築
			元亀	
		1573	天正元年	朝倉氏滅亡

表2　時期区分表

時期区分の具体例としては，武家屋敷東辺土塁に開いた門SI 415の内側に設けた土層観察用トレンチでみることにする（挿図3）。それによると，まず炭混り黒褐色土層に覆われて礎石SX 929が検出されている。土塁が設けられる以前の遺構であり，町割作定以前のⅠ期のものとみることができよう。次に，茶褐色土層や炭混り褐色土層で整地が行われた後，土塁SA 384の石垣が積まれ，武家屋敷の区画（A地区）が成立したものと思われる。これがⅡ期であり，土塁はその後Ⅳ期まで存続したものと捉えることができる。溝SD 897や門SI 415は，Ⅱ期の土塁の基底部を埋めて整地された面から検出されており，Ⅲ・Ⅳ期にわたって使用されていたことが分かる。

以下，遺構について詳しく述べていくが，まず町割等にかかる道路や側溝，土塁を記述したのち，A地区の武家屋敷，B地区の順で報告する。なお，ここで使用する方位は，通例にならい谷地形を重視して，谷の入口を北，奥を南とする大まかなもので，地図上の方位と若干異っている。正確には，側溝SD 268と地図上の南北線は，側溝が，北で東へ約10度振れている。



挿図3　武家屋敷門SI 415内面土層図

SS 260　この南北方向に走る道路は，町割の骨格をなすもので，1.2/100から2/100の勾配で北へゆるやかに傾斜し，両側には武家屋敷が整然と配されている。幅員は，道路横断溝SD269付近で3.7m，SD268とSD896の接続する付近で4.2mと，他の幹線道路と比べて狭く作られている。また，西の武家屋敷の排水を道路を横断する溝で行う手法は，この地区の特徴となっている。この道路は，北方の調査区の端で矩折となっている。すなわち約5m西へずれ（ちょうど道路幅1本分程度），再び北へ延びていることが確認された。この部分は，見透しをさける意味をもつ「矩折」という道普請で，東西道路SS944とSS260が交叉する中心点から，矩折部までの距離は約30m（1尺＝30.3cmで100尺）を測る。路面は，直径1cm前後の川砂利を敷きしめた状態で敷いている。砂利敷面は，3面以上重っており，道路横断溝SD273を付け変えてSD271が作られていることからも分かるように，最低新旧2つの遺構面も確認されている。Ⅱ期からⅣ期にわたる遺構である。

SS 975・944　東西道路SS975は，調査区南辺に位置しておりSS260とT字形に接続している。幅員は7.2mと広く，一乗谷川を橋で渡れば山城へ登る蛇谷地籍の山道に接続している。SS944もA地区の北辺に位置する東西道路で，SS260とT字形にとりついている。道路面はかなり削平を受けているが，土塁の痕跡とみられる石列SV894を境にして，北は攪乱の礫が多いのに対して，南の道路と考えられる幅員7.2mの区域は全くといってよいほど礫が見られず，きれいな砂利混りの砂質土であるというきわだった違いをみせている。この道路の東正面には，一乗谷川の対岸に位置する朝倉館の西南隅にある隅櫓跡がみえ，西正面には，武家屋敷の土塁SA265がみえる。SA265の土塁石垣は，この道の正面にあたる部分だけに巨大な石（径1～2m）を用いており，朝倉館方面から歩いてきた者にその貫禄をみせつけているかのようである。SS975とSS260の交叉する中心点からSS944とSS260の交叉する中心点までの距離は，90.6m（1尺＝30.3cmで300尺）を測る。以上，この地区の道路は幅員に広狭があったり，T字路が多くみられたり，矩折があったりして非常に使用しにくい道普請であることが分かる。防禦面を重視して工夫された結果のものといわざるをえない。このような道普請は，従来，近世城下町特有のものと考えられてきたが，すでに戦国時代に遡ってこの一乗谷城下町で成立をみていたことは驚きという他はない。

SS 945　A地区東辺を南北に走る道路である。一乗谷川に沿って設けられていたとみられるが，河川の氾濫で砂利敷面や幅員などは確認できなかった。武家屋敷東辺土塁SA384に開かれた門SI415に接続していたものと考えられる。

SD 268・896　SD268は，道路SS260の側溝であり，西側武家屋敷3軒分の排水をSD269・271・273・274の道路横断溝から受ける機能を果している。また，SS260そのものも若干東にむかって傾斜しており，路面上にたまった水をこの溝に集めるようになっている。溝は，幅約0.4mで大略3段に石積みがなされている。下の第1石目は小さく，東へずれ，頂部も平坦にそろっている。古い時期の溝の天端石と考えられる。この溝内の底と上面には焼土が認められ，その中間には砂が堆積していた。第3石目は，B地区の西側では小振りの石で，天端もそろった感じはしない。天端となる石が欠損している可能性も残されている。北流してA地区にさしかかると，天端石も平坦でよく残っている。SD269から北へ78.8m（1尺＝30.3cmで260尺）の所で，SD268は東へほぼ直角に折れ，SD896となる。SD896は，A地区の武家屋敷の溝SD898・943の排水を集め，一乗谷川へと流れ下っていた。しかし，東端は一乗谷川の氾濫のため攪乱されていて不明となっている。溝のコーナーから土塁SA384の外側までの距離は丁度30m（1尺＝30.3cmで約100尺）を測る。

SA 266・267　SS 260の東側を南北方向に走る土塁である。石垣に使用されている石は比較的小さく，対面する土塁SA 261の巨石と比べて対照的である。幅は1.3mと狭い。上塁の北端から48.5m，南端から30mの距離の所に（1尺＝30.3cmで160尺・100尺）門SI 279が開いている。Ⅲ・Ⅳ期になると，SA 266の土塁内側中央部で約20mにわたって，幅約1.2mの土塁SA 267が拡幅されている。なお，Ⅳ期の井戸SE 358が掘られた頃まで，この土塁SA 266が存在していたかどうかは不明である。

SA 383　A地区とB地区とを限る上塁である。B地区の西半分（通称オコヤシタ）をⅢ期に整地のため約0.5m盛土した時，同時に築かれた土塁である。そのため，北側と南側との上塁基底で約0.5mの段差が生じている。この土塁は，幅約1.3mあり，長さ17.2m分検出した。西方の土塁SA 266とは約3m切れており，東方は河川の氾濫等でどこまで延びていたかは不明となっている。検出土塁の東よりの所には石段が設けられており，B地区の道路SS 390からA地区の井戸SE 431へ水を汲みに行くことができるようになっていた。遮蔽を目的とする土塁本来の意味からは，かなりルーズな作りの土塁ではあるが，武家屋敷の門SI 279や建物配置等を考慮に入れると，Ⅲ期以降，武家屋敷（A地区）の南辺を限る敷地境になっていたものと考えざるをえない。

SA 384　A地区の東辺を限る南北土塁で，長さ34m分検出したが，南端は一乗谷川の氾濫で削平されていた。上塁の幅は1.4mで，石垣には比較的大きな石を使用している。土塁北端から南へ19.8m（1尺＝30.3cmで65尺）の所に武家屋敷の裏門SI 415が開いている。この土塁が，SA 266やSB 405などと平行関係にないのは，一乗谷川の川筋に制約を受けた結果とみられる。

SA 891　武家屋敷（A地区）の北辺を限る東西土塁である。土塁内側の石垣が検出されなかったため，これが土塁であるのか，石の段差遺構になるのかは不明という他ない。溝SD 898の末端が1.4m分暗渠SZ 915構造になっていることや，SD 943が開渠のままになっていることなどから，簡単な塀のようなものが設けられていた可能性も残されている。

SA 978　発掘区南端のSS 975北側の東西土塁である。西端で北へ折れ曲りSA 266となる。削平が著しく，長さ6.5m分しか検出できなかったが，B地区南辺を限る土塁である。

A　地　区

土塁SA 266・383・384・891で区画された地区で，南北57.6m（約190尺），北辺で東西29m（約95尺）の規模の武家屋敷である。『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告Ⅱ，一武家屋敷立体復元事業』の報告書では，この区画の北半分を1軒の武家屋敷とみているが，本報告では，南半分も含めたA地区全体を1軒と捉えている。

SI 279　SA 266にとりつく門遺構である。土塁を3.4m切って，掘立柱の棟門を設けている。掘立柱穴は，一辺0.2m，深さ0.8mの角穴で，柱根は残存していなかった。柱と柱の間隔は2.42m（8尺）である。一部分に細かい礫が詰くしまった状態で敷かれていた。道路横断溝SD 271・273が門に直交しているが，Ⅱ期の溝SD 273が門の前に位置していたため，道路をかさ上げしたⅢ期以降に若干南へずらしてSD 271をつけかえ，門の通行に支障のないように配慮していることも分った。また，対面する「新馬場」屋敷の門SI 278と少しずらした位置に門SI 279を築いているのも特徴的である。A地区における門は，次に述べるSI 415と2カ所しかなく，この門が通路SS 386と繋がっていることなどから，「表門」と考えることができよう。

SI 415　土塁SA 384にとりついた門である。門の幅は，約3mあるが，礎石や掘立柱穴も検出されず，

規模や構造は不明であった（挿図３参照）。門を入った左手には庭SG420が位置しており，正面には武家屋敷の主殿ＳＢ405 の井戸や洗い場のある土間へ続いている。武家屋敷の主人や使用人が使用する通常門「裏門」とみることができよう。

SS386　SI 279に続く通路である。幅2.3m，長さ12.7mにわたって固く叩きしめられた砂利面が検出された。通路の両側には縁石が一段高く並べられ，南の縁石を利用して溝 SD387 が通路排水として築かれている。北の縁石列は，途中から北へ直角に折れ建物への導入を促している。通路の中央部にも，通路を二分するように石列が１本配されており，この石列を境にして北の通路は南の通路より約５cm高く砂利面が敷かれている。通路正面には，SD387に接続する溝SD389があり，その後方は掘立柱の柵列SA392で遮蔽されている。通路の東南隅には，やや大ぶりの敷石面があり，南方へ延びていて，その中央に井戸SE431が穿たれている。

SA392　SS386の目隠し塀である。掘立柱穴は，一辺13～15cmの方形で，深さは68～75cmあり，一列に並んで６カ所で検出できた。柱根は角柱で全ての穴に残存していた。柱と柱の距離は，北から南へ1.34m，1.34m，1.2m，1.34m，1.34mと寸法を用いていたことが分かる。1.34mは，１尺＝30.3cmの曲尺では4.4224尺であり，中世に用いられた１尺＝29.633cmの和銅大尺では4.5220尺となる。

SB407　SS386のすぐ北に位置する東西3.76m，南北7.52m（２間×４間）の礎石建物である。この建物の南辺には，幅1.06m（3.5尺）の縁がとりついており，東南隅には１間四方の小建物が張り出してとり付いている。縁の西１間分には河原石の狭間石が並んでおり，ＳＳ386からこの縁に直接上ったものともみられるが，柵列SA392などとは，北で４度東へ角度の振れが生じている。

SB408　一辺3.76m（２間四方）の正方形の平面をもつ建物である。建物の周囲には，礎石大の平石を一列に並べているが，柱を据える礎石と分かる石がどれかは不明である。建物内部床面には焼土や炭が堆積しており，Ⅲ・Ⅳ期の建物と考えられる。建物の方位はSB407とほぼ同じである。

SB409　SB408よりも一時期古い掘立柱建物で，東西3.76m，南北4.7m（２間×２間半）の規模をもっている。建物方位はSB407・408と同じである。

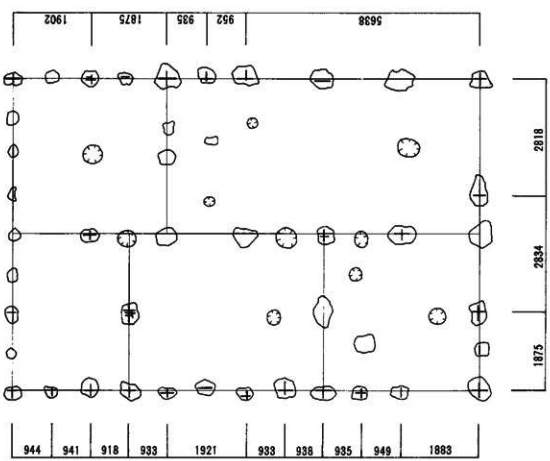
SB410　Ⅲ期の溝SD396を廃棄して建てられた礎石建物であるが，一乗谷川の氾濫にあって，礎石が３・４石しか残存していなかった。

SB416　井戸SE430に付属する建物で，溝SD393・394に挟まれて建てられている。東西4.7m，南北は2.8m分（２間半×１間半以上）を検出した。建物の西北隅には溝らしき石組がみられ，SD 393に接続していた可能性も考えられる。井戸SE430を中心とした井戸屋形と想定できる。

SB405　A地区の中央，やや北よりに位置する建物で，武家屋敷の中心となる主殿に比定できる。この建物は，一乗谷川の氾濫を示すと思われる茶褐色砂質土層が遺構面に厚さ0.3mも堆積していたため，きわめて保存状態が良好であった。東西11.29m，南北7.52m（６間×４間）の規模をもつ礎石建物で，東西方向に棟通りを考えることができる。礎石は43個，礎石抜き跡10個が検出できた。礎石は，基本的には，建物の四周と棟通りに半間づつ配しているが，北辺東側の３間分と南辺東隅の１間分，東辺の南２間分は，１間置に礎石を配している。また，東辺の北隅部礎石だけは１間半の間隔になっており，出入口と考えられる。ほとんどの礎石上面には，柱を据えつける際に用いられた「－・＋」などの線が刻まれている。線刻間の距離をスティール巻尺で計測したが，多少のバラつきが認められた（挿図４参照）。しかし，全体としてみれば，１間＝188.16cm＝6.21尺（１尺が30.3cmの曲尺として）の竿で割り切れるようである。ただし，中世に多く用いられたと考えられる和銅大尺の１尺＝29.633cmでもかなりの完数

で割り切れ，曲尺か和銅大尺かの検討は，今後の資料の増加に期待せざるをえない。例えばSB405の南辺全長11.295m（6間），北辺全長11.302m（6間），東辺全長7.527m（4間）という実際の長さを曲尺の1尺＝30.3cmで割ると，6.2128尺，6.2167尺，6.2104尺となり，和銅大尺の1尺＝29.633cmで割ると，6.3527尺，6.3566尺，6.3502尺という数値がえられる。1間を曲尺の6.21尺で割りつけたか，和銅大尺の6.35尺で割りつけたとみるか，微妙な選択となろう。

次に，主殿SB405の部屋割を検討してみると，まず東西中央の棟通りで南北2間幅で2分される。南半は西から1.5間（3間），2.5間（5間），2間（4間）の3室に分割され，北半は西から2間（4間），それに井戸や洗い場，囲炉裏と考えられる長径2.2m，短径約1mのピット等が位置する4間の空間に分割される。各部屋には床受けの束石もあることから床を張った部屋であったと考えられるが，井戸や囲炉裏をもつ4間の空間だけは，土間であったものと思われる。南半の西から6畳の前室，10畳の主室，8畳の奥の間，北半の西から8畳の納戸，土間（4間×2間）の台所と，各部屋の機能が想定される。SB405の南辺，溝SD399に沿って礎石らしき石が2個存在することから，SB405の南辺に縁がとりついていた可能性も考えられる。また，西辺の北から2間目には，幅1.2mにわたって石列がL字形に張出しており，この内側には白い砂利が認められた。縁入りの出入口と考えられよう。建物の西辺南端には，石積施設SF437も設けられている。西辺礎石列を中心に，こぶし大の河原石が列状に積み上げられているのは，床下の目隠しを意識した施設と考えられる。なお，西辺を除く建物の周囲には，雨落溝SD399・400・401が設けられており，東辺南端にはSB406の建物が繋がっている。



挿図4　建物SB405の柱掘え刻線間の寸法（スティール尺での計測値，上が北 単位mm）

SB406　SB405の東南隅に接続した一辺2.82m（1間半）の正方形の礎石建物である。その東辺と南辺には，幅約0.45m（1尺＝30.3cmで1.5尺）の縁がとりついている。この4畳半小座敷の西辺床下には，SD399からの雨水を受けるSD401が流れている。建物の東側には坪庭SG420が配されていることなどから，主殿SB405に付属した茶会用等に使用された座敷と考えられる。

SG420　小座敷SB406と土塁SA384との狭い空間に配された坪庭である。天端の平らな巨石を庭石として10個ほど伏せた状態で配置しており，その周辺には砂利が敷かれていた。砂利面は，SB406の東縁の下まで敷かれている状態がよく分かる。庭の南西部は，砂利が敷かれておらず，庭石に囲われた範囲が一段高く盛上されていた。おそらく低木などが植栽された植込み（築山）と推定される。この庭は，小座敷SB406から観賞できるよう，一体に配されたもので，絵巻四畳半の茶室の図にみられる「面坪ノ内」に相当する遺構と考えることができる。

SB903　主殿の北に位置する東西5.65m（3間），南北6.02m（3.2間）の規模をもつ礎石建物である。この建物の四隅は，直径0.5m程度の偏平な石を並べており，礎石がどれかははっきりしない。石列が途切れた南辺の東側が出入口と考えられる。入口を入ると内部には，直径0.2m程度の石がL字形に敷きつめられており（SX922），建物を東西に2分する棟通りと考えられる位置に，礎石とみられる多少大きな石が配されている。SB903の石敷のみられない西南部には，低い床（転根太）が存在した可能性が大である。蔵遺構ではないかと想定しているものである。

SD387・388　SD388は素掘りの溝であるが，一時期古く，通路側溝SD387が作られた際廃棄されたものと思われる。いずれも東方の一乗谷川へ排水する目的で設けられた溝である。

SD397・398　石列SX422と土塁SA267で囲われた場所は，遺構面もみられず，厚く泥が堆積していた。溝SD397や398の排水もここに注がれており，沼の様相を呈していた。

SD393～396　これらの溝は，屋敷中央部の水を一乗谷川へ排水するために設けられたもので，暗渠SZ467に繋がっている。

SD399～401　主殿SB405の雨落溝で，門S1415の北に設けられた暗渠SZ916に繋がっている。なお，SD399と393の間には，SB405の目隠し塀SA385がある。柱間の距離は3.6mである。

SD898～900　方形の浅い水溜SX920からの水や，井戸SE905の水を排水する。北辺土塁SA891に設

No.	上面内径	深さ	底の木組	天端石杙	主な出土遺物
428	0.62	2.07	なし	あり	越前焼甕・壺・鉢鉢，土師質皿，青磁碗・鉢，染付碗・皿，石錘・バンドコ
429	0.68	(1.4)	なし	なし	越前焼壺・壺・鉢鉢，土師質皿，青磁片，染付器台，鉄釘，銅銭
430	0.88	2.25	なし	あり	越前焼甕・壺・鉢・擂鉢，土師質皿，白磁片，板の木部，鉄製鉈先，バンドコ
431	0.9	2.3	なし	あり	越前焼甕・壺・鉢・擂鉢，鉄釉碗・皿，土師質皿，染付碗・皿，灰，鉄釘，銅銭，硯石・砥・バンドコ
905	0.6	2.2			鉄釉碗，土師質皿，染付皿，朝鮮製板，銅銭

No.	長辺	短辺	深さ	設数	主な出土遺物
436	1.15	0.65	0.7	5	灰釉皿，白磁皿，染付碗，鉄釘，銅銭
437	0.9	0.75	0.66	5	越前焼甕，土師質皿
438	1.26	0.88	0.52	5	越前焼甕・壺，鉄釉碗，土師質皿，染付碗・皿，小柄
906	1.3	1.1	1.0	5	越前焼甕・擂鉢，土師質皿・土釜，青磁碗，銅銭
907	1.7	1.05	0.2	(2)	越前焼甕，鉄釉碗，灰釉皿，土師質皿，青磁碗・皿，白磁皿，染付皿，鉄釘，石製品
908	1.8	0.9	0.2	3	土師質皿，鉄釘
909	1.48	0.9	0.5	2	越前焼擂鉢，土師質皿，青磁碗，白磁碗，染付皿，鉄釘，銅銭，バンドコの蓋
910	1.4	1.1	0.58	4	
911	1.3	0.85	0.5	4	
912	0.9	0.8	0.32	2	越前焼甕・お歯黒壺・鉢・擂鉢，土師質皿，白磁皿

表3　A地区検出の井戸・石積施設一覧表

けられた暗渠SZ915で，道路側溝SD896に流している。

SE428～431・905　A地区で5基の石組井戸を検出した。井戸上面の踏石も比較的よく残っており，SE428からは井戸上面に据えられた枠石も一部完形で出土した。この井戸は主殿の十間に掘られており，洗い場の石敷もよく残っていた。SE905の井戸は，井戸屋形を復元しているが，発掘では，その礎石や掘立柱などは検出できなかった。

SF436～438と906～912　A地区で10基の石積施設を検出した。石積施設SF437は，主殿SB405の西南隅に設けられており，他のものが，土塁や屋敷境近くに位置するのと対照的であった。第40次調査のSF1617から「金隠し」の板材が発見されたこともあって，石積施設の大半が「便所」遺構と認識されるに至っている。SF437は，「晴」の空間に設けられていることから，便所であったとしても「来客用」あるいは「座敷便所」的性格を有し，常日ごろは使用しないものであった可能性が強いといえよう。SF910と911は，2基並んでおり，男女別があった可能性も残されている。SF909は，溝SD943がとり付いており，便所内にたまった尿などの上澄液を排水する一種の水洗式便所であった可能性も考えられる。

B　地　区

A地区の南，土塁SA383，266，978と一乗谷川とで区画された地区である。Ⅱ期に土塁SA266や978で一応の区画がなされ，Ⅲ期には一乗谷川側に小規模建物が多く建てられ，西側や北側には，SB411や412など町屋らしからぬ建物が建てられ，Ⅲ・Ⅳ期になると一乗谷川の氾濫を受け，東半分の遺構が大きく削平されたものとみられる。

SB411　Ⅲ期の礎石建物で，東西8.47m（4.5間），南北5.65m（3間）の規模である。上層に遺構が残存しているため，建物の全貌は明らかにできなかった。

SB412　これもⅢ期の礎石建物で，東西4.52m（2.4間），南北3.76m（2間）の正方形に近い規模を有している。建物の周囲には，直径0.2m程度の河原石を束石として並べている。建物の内部のうち，東南部を除く部分には，越前焼大甕片を多量に含んだ焼土層が投棄された状態で検出された。この建物は甕蔵と考えられる。

SK452　SB412の甕蔵内部は，建物絶囲ぎりぎりで，深さ約0.5m掘り下げられていた。その底からは，越前焼大甕の底部が並んだ状態で4個体分検出できた。越前焼大甕を埋め，口縁部だけを0.3～0.5m出した状態で何かを貯蔵する施設であったものと想定される。SB412が廃棄される際，大半の甕を抜いたものと思われるが，そこへ大量の焼土や炭，甕片を投げ込んだ状態が考えられる。なお，復元できた大甕類は，合計14個体であった。

SK451　Ⅲ期の甕ピットである。7個以上の越前焼大甕の抜き跡である。甕底は全く出土しなかった。なお，西方向にまだ出土するかどうかは未調査のため不明であった。

SX454　Ⅲ期の石敷遺構である。Ⅲ・Ⅳ期の井戸SE433は，Ⅲ期面を重上げして作られており，Ⅲ期の時，井戸SE433の洗い場としてSX454は使用されたものと考えられる。溝SD459もその時の遺構と考えられる。SX454の石敷内東北側にピットがあり，越前焼の甕が据わっていたものとみられた。

SX462　越前焼大甕のピットで，4個のうち3個は甕の底が据えられた状態で出土した。この付近は，ガラ石が多く，その間に焼土がところどころで散見できた。一乗谷川が氾濫して攪乱された様相を呈している。なお，筋状になったガラ石層の間に，越前焼大甕の破片がある程度のまとまりをもって5カ所

で確認されている。

SK449・450　SK449はⅢ・Ⅳ期の土坑である。SK450は，Ⅲ期の土坑で，とくに南側の土坑からは，鉄釉徳利形瓶や石硯，飯椀他の遺物が一括して出土した。

SS390　土塁SA383の南辺に沿って走る通路であり，幅約0.4m分に石が敷かれている。通路は，東端で幅約1.3mになって北方へ折れ，土塁SA383の石段に続き，井戸SE431に行くことができるように作られている。長さ約11.3m分検出できた。

SD391　この溝は，通路SS390の側溝で，土塁SA383に沿って東から西へ流れていた。西端は，土塁が切れているため，北方へ折れているが，どこへ排水するかは不明となっている。溝幅は，約0.2mで，非常に浅く作られている。

SA414　SB411が廃棄された後に作られた掘立柱の柵列である。柱穴は3カ所に一直線で検出された。その柱間隔は，2.12m（7尺）等間である。

SX424～427　石列であるが，屋敷境になるか，建物の東石なのかよく判らない。

SX427　この石列は，土塁SA383の東方に続いている。土塁そのものの石垣は大きめの石を使用しているが，この石列は小さな石を乱べたものである。A地区とB地区を区画する意味をもっていたものと思われる。

SV464　甕蔵SB412の東方，一乗谷川近くに石垣が検出された。この石垣は，一乗谷川の氾濫で上面などは削平をうけていたが，深く積まれているようである。旧一乗谷川の護岸石積の遺構とみられ，この付近まで，B地区の遺構が存在していたものと想定された。

SE358・432～435　B地区で5基の石組井戸を検出した。SE358は，第10・11次調査時に検出されたもので，土塁SA266の土塁内に築かれている。壁土が多く投げ込まれており，Ⅳ期に属するものであろう。SE432は，天端路石も残されていたが，底までは掘り下げられなかった。SE433は，B地区では深さ3.4mと最も深く，石の積み方もほぼ垂直で丁寧に仕事がなされていた。SE434は，調査区の最も南で検出された井戸である。天端石は欠損しており，天端近くまで石の積み方が垂直であることから，かなりの削平が考えられる。この井戸内に投げ込まれていた遺物の中で，特に注目すべきものとしては，石製の手水鉢があげられよう。長径62.5cm，短径55cmの山石の上面を平らに削り，直径30cm，内径22.5

No.	上底内径	深さ	底の木枠	天端石枠	主な出土遺物
358	0.58	2.8	な し	?	越前焼甕・擂鉢，灰釉皿，壁土多し
432	0.84	(2.0)	不 明	?	越前焼甕・壺・鉢・擂鉢，鉄釉碗，上師質皿・銅仕碗，青磁碗，砥石・バンドコ
433	0.75	3.4	な し	あ り	越前焼甕・壺・鉢・擂鉢，鉄釉茶入・小壺，土師質皿，染付碗・皿，木製品，鉄釘，銅銭，石製盤・茶臼・バンドコ
434	0.9	2.07	な し	あ り	越前焼甕・壺・鉢・擂鉢，鉄釉碗・茶入・小壺，土師質皿，青磁碗・皿，白磁皿，木片，鉄釘，銅銭，石硯・砥石・鉢・盤・手水鉢・茶臼・バンドコ
435	0.52	2.03	な し	な し	土師質皿，木片，鉄釘，壁土多し

No.	長 辺	短辺	深 さ	段 数	主な出土遺物
439	1.35	0.8	0.8	2	越前焼甕・鉢・擂鉢，土師質皿・壺，白磁皿，鉄釘
440	1.48	0.8	0.48	3	越前焼甕，土師質皿・壺，鉄釘，バンドコ，壁土
441	1.3	0.7	0.51	2	越前焼擂・壺・鉢鉢，土師質皿，青磁碗，白磁皿，染付皿，朝鮮製陶器，鉄釘，銅銭，バンドコ，炭
442	1.3	0.9	0.4	2	越前焼擂・壺，土師質皿・丸皿・土鍋，鉄釘，銅銭，骨片
443	1.32	1.2	0.58	3	越前焼甕・擂鉢，土師質皿・土釜，青磁碗・皿，鉄釘
444	1.26	1.1	0.25	(1)	越前焼壺，灰釉皿，土師質皿，青磁皿，白磁皿，染付皿，炭
445	0.88	0.84	0.5	4	越前焼鉢・擂鉢，土師質皿，瓦質香炉，白磁皿，染付碗，鉄釘・括，銅銭，石製品，炭
446	1.15	1.0	0.6	3	越前焼甕・壺・擂鉢，鉄釉碗，上師質皿，鉄釘，炭片
447	(1.2)	1.2	0.5	3	越前焼甕・擂鉢，土師質皿，鉄釘・小札，炭
448	[illegible].3	0.9	0.8	5	

表4　B地区検出の井戸・石積施設一覧表

cmの穴を深さ13.75cmまで丁寧にくり抜いている。円形穴は，上面の平坦面より3.75cm高く削り残してあり，金森宗和好みの手水鉢とすることができよう。SE435は，天端石は残存していたが，非常に小ぶりの作りであったため，側石の実査はできなかった。この井戸は，焼土で完全に埋められており，壁土も非常に多く出土した。井戸底は，いずれも地山を少しくぼめた素掘りとなっている。

SF439～448　B地区で10基の石積施設を検出した。SF424から447の6基は，ほぼ一直線上に並んでいる。石積施設（便所）の特長としては，土塁や柵，敷地隅に接して設けられている例が多いことから，これらの6基も小規模建物の裏庭に整然と配されていたものと思われる。しかし，建物跡や区画する塀や溝は，一乗谷川の氾濫によって削平され，不明となっている。SF442は，Ⅲ期の面で検出されたが，天端の石はⅢ・Ⅳ期の面にみられた。SF439・440の平面は，他の石積施設よりも若干大きく，石列SX425・426で囲われた空間（建物が建っていたかもしれない）に伴うものと考えることができそうである。

3．遺　　物（ＰＬ.15～ＰＬ.32，第15図～第32図）

ここで取り扱うのは，遺構の報告に従い，第15次調査と第25次調査で出土した遺物のうち，道路ＳＳ975・260・944と一乗谷川で区画されたＡ・Ｂ地区内から出土した遺物群である。四方を土塁で囲む武家屋敷＝Ａ地区と，その南に隣接する土塁で囲まれた武家屋敷から多数の石積施設を伴う小規模屋敷群に改変されたＢ地区では，屋敷の性格が多分に異なり，この時者間に遺物からみた場合に，どのような違いが見られるのか興味がもたれた。またＡ地区では，町割に先行する下層の調査が一部行われており，当該時期の遺物の様相を知るための資料も得られた。これらの点については，後述の本文や小結で触れることにする。

遺物は，総数24,341点を数える。その内訳をＡ・Ｂ両地区に分けて示したのが表５である。表に示した数量は破片数であるが，なかには越前焼大甕に代表されるように，多数の破片数をもって１個体と明かに判明する場合は１点と数えた場合もあり，厳密に各々の個体数に比例する数値とはなっていない。しかし，総点数の量からみて，大略の出土数の傾向を把握する上で支障はないものと考えられる。

以下，従来の報告書に従い，時期の古いものから遺構・整地層の順に遺物の報告を進めるが，ここでは遺構の報告に準じて，Ａ地区，Ｂ地区の順に記すことにする。

なお，本項における遺物の分類について，越前焼大甕と擂鉢は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』（1983）の小野分類，土師質皿は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅰ』，染付は「15，16世紀の染付碗，皿の分類とその年代」（『貿易陶磁研究№２』小野正敏1982），硯は「日本石硯考」（『考古学雑誌70－４』水野和雄1985）の分類を基準とした。

区画				A		B	
器種				破片数	%	破片数	%
土師質	越前焼	甕		2,325		2,147	
		壺		402		152	
		擂鉢	体	151		69	
			大	502		330	
			その他	47		3	
				15		2	
		小計		3,535	23.0	2,703	30.1
土師質	瓦器	椀		134		40	
		皿		2		2	
		釜		15		17	
	鍋	長	入	8		4	
		その他		15		6	
	小計			174	1.1	69	0.8
瓦器	瓦			17		15	
	陶器	壺		75		31	
		鉢		18		3	
		その他		6		10	
	小計			117	0.8	59	0.6
土師質	土玉			9,421		5,747	
	土錘			45		53	
	土偶			4		1	
	その他			10		3	
	小計			9,481	61.7	5,804	69.1
土師質	丸瓦	瓦		9		7	
	平瓦	瓦		4		5	
	火鉢			19		1	
	瓦	その他		16		7	
	小計			39	0.3	20	0.2
位牌				1		0	
外道				4		6	
泥塔・その他				98	0.6	24	0.3
計				13,446	87.5	8,179	81.1

区画			A		B	
器種			破片数	%	破片数	%
陶磁器	中国	青磁	碗	140		97
			皿	111		45
			鉢 体	32		5
			壺	4		4
			香炉	13		2
			その他	20		3
		小計		320	2.1	154	1.7
		白磁	碗	2		2
			皿	416		111
			壺	29		6
			梅瓶	6		1
			その他	7		3
		小計		460	3.0	123	1.4
	朝鮮	染付	碗	135		38
			皿	351		83
			壺	14		2
			その他	8		0
		小計		511	3.3	123	1.4
	赤絵			0		1
計				1,291	8.4	401	4.5
陶器類	陶器	硯		3		2
		瓶		22		2
		その他		35		12
計				60	0.4	16	0.2
陶磁器類の計				14,797	96.3	8,596	95.6

区画		A		B	
器種		破片数	%	破片数	%
金属製品	釘	56		42	
	鍵	1		0	
	鉄鏃	1		0	
	鎧	1		0	
	刀子	1		0	
	小柄	0		2	
	小刀	1		1	
	銅銭	55		87	
	鏡	1		2	
	分銅	0		1	
	鐘	1		0	
	鉄砲の玉	1		0	
	その他	45		36	
	計	174	1.1	171	1.9
石製品	硯	12		13	
	茶臼	2		27	
	パンドコ	120		50	
	鉢	44		2	
	温石	1		9	
	砥石	36		27	
	硬れ	37		13	
	その他	87		46	
	計	321	2.1	186	2.0
木製品	櫛	1		0	
	漆塗椀	1		0	
	その他	14		5	
	計	16	0.1	5	0.1
	埋鞠	0		5	
	陸上	3		9	
	鉄化石	1		0	
	その他	53		4	
	計	57	0.4	18	0.2
合計		15,365	100	8,976	100

表５ 第15・25次調査出土遺物一覧表

A 地 区

Ⅰ期整地層出土遺物〔ＰＬ．15・16，第15・16図〕

屋敷の北東部，土塁ＳＡ384付近とＳＡ891南部に設定した深掘りトレンチから出土した遺物である。

越前焼 甕・壺・鉢・擂鉢がある。(1)は，外反した口縁に幅の狭い口縁帯をもつⅠ群の甕である。(2)は，口縁帯が退化して外側に名残をみせ，内側が凹線に変化したⅡ群の甕である。(4)は，口縁帯がなくなり，外側の凸帯状の稜と内側の段に変化したⅢ群a，(3)は，口縁外側の稜が単純化されたⅢ群ｂの甕である。(5)は撫で肩の胴から口縁が立ち上がる中甕である。(6)は，丸い口縁に1条の沈線を巡らすⅠ群の鉢，(7)は，口縁を内傾して切る擂鉢型の鉢である。(8)は，口縁下の内側を強くなでてくびれを作り出す擂鉢である。(9)は，口縁断面が四角く，口縁から少し下がって沈線が巡るⅢ群ｂの擂鉢である。Ⅰ群の甕，擂鉢の出土は少なく，甕口縁部が2点，鉢は(6)だけであった。Ⅱ群も同様に少ない。Ⅲ群がやや多く見られるものの，Ⅳ群も同数以上出土している。

瀬戸・美濃焼 鉄釉は，碗と茶入がある。(10)は，張りのある肩から短い口縁の立ち上がる，いわゆる大海茶入で，回転糸切痕の残る底部を除いて，全体に釉が施される。

灰釉は，皿と鉢がある。(11)は，口縁が端反りの皿で，高台内に輪土鉋痕を残す。(12)は，器壁が厚く，胴が内湾気味の皿で，外面半ば以下は露胎となる。(13)は，口縁の内側に蓋受状の段をもつ鉢である。内外面とも胴部以下が露胎で，外面に強いロクロ目を残す。

土師質土器 (14～16)は，Ｃ類の皿である。(16)は，肘に押し当てて成形したようで，内面に布目痕が残る。器形は，Ｂ・Ｃ・Ｄ類があり，灯明皿はＣ類に多い。

丹波焼 壺(25)が出土した。肩の張った大壺で，断面が丸く，外反する口縁をもつ。7～8段の紐土はぎ作りで成形され，器面の内外面は細かい横なでの調整痕を残すが，口縁は丁寧になでる。胴下部の縦目に，筆状の幅約1cmの凹線が認められる。口縁から肩へ，青味を帯びた鮮緑色の自然釉がかかる。肩部に，粗略な筆描きをもつ。一乗谷での出土は極めて少なく，一般の流通品とは考え難い。

中国製陶磁器 青磁は，碗と皿がある。(17)は，口縁外側に雷文帯をもつ碗である。(18)は，線描蓮弁文の碗で，見込に吉祥文の押印がある。全体に釉が施され，高台内のみ拭き取る。(19～21)は，口縁の外反する稜花皿である。見込に印花文をもつ。

染付も碗と皿がある。(22)は，口縁が外反する八角形の碗である。稜に沿う縦の界線で8面を区切り，各面に花草文を描く。(23)は，見込に玉取獅子を描くＢ1群の皿である。(24)は，見込に花草文を描く皿で，外面は無文である。

石製品 (26)は砥石である。3面に細かい擦痕がみられる。仕上げ砥である。

その他 (27)は，炭化米である。籾殻付のまま焼けており，藁や竹材片も部分的に見られる。

Ⅲ期整地層出土遺物（ＰＬ．16，第16図）

Ⅲ期の遺構を覆う整地層から出土した遺物である。

越前焼 (28)は，擂鉢形の鉢で，口縁内側に段がつき，扇状の櫛描き文をもつ。(29)も擂鉢形の鉢で，片口があり，口縁内側に筆記号をもつ。(30)は，口縁が内湾する鉢である。(31・32)は，Ⅲ群ｂの擂鉢である。(31)は，内面に指1本を押し当てて作る片口部である。(33)は，器壁の厚い擂鉢で，口縁直下まで密に引かれた擂目の中に，擂目と同じ櫛で扇状の刻文をもつ。

中国製陶磁器 (34)は，桜高台の白磁皿である。乳白色の釉がかかり，外面腰部以下は露胎である。

(35)は，底部が碁笥底の染付皿C群である。胴部外面に芭蕉葉文，見込に捻花文を描く。(36・37)は，口縁が端反りの皿B群で，胴部外面に唐草文，見込に十字花文や玉取獅子を描く。(38)は，坏である。高台内に「大明年造」が書かれる。

ＳＤ389出土遺物（ＰＬ．17，第17図）

以下，ＳＦ909まではⅢ・Ⅳ期遺構の出土遺物である。屋敷の西門から延びるＳＳ386の突き当りにある南北溝から出土した遺物である。越前焼甕・鉢・擂鉢，灰釉皿，土師質皿，青磁・白磁・染付の碗・皿類などが出土した。

越前焼　(39)は，薬研である。どっしりと安定したつくりで，上面と台部側面に同じ篦記号が刻まれている。溝底は摩耗して滑らかである。同じ篦記号をもつ輪部の周縁部も摩耗が顕著である。

ＳＤ394出土遺物（ＰＬ．17，第17図）

屋敷南部の建物群（ＳＢ407～409）の北を東流する溝から出土した遺物である。越前焼甕・壺・擂鉢，土師質皿，白磁皿，鉄釘，バンドコなどがある。

朝鮮製陶磁器　(40)は，径約18cmの広い底部から胴が膨らみ，頸部で径約４cmとくびれる徳利形の壺である。器壁は0.3～0.4cmと薄く，チョコレート色の胎土は堅く焼き締まる。表面には，やや緑がかった灰褐色の釉がかかる。

ＳＤ395出土遺物（ＰＬ．17，第17図）

屋敷中央東部を東流する溝から出土した遺物である。

瀬戸・美濃焼　(41)は，胴が直線的に開く碗である。外面腰部以下に錆釉が施される。

土師質土器　(42)は，底部中央を指で突き上げたＡ類の皿である。(43)は，Ｃ類，(44・45)は，Ｄ類である。

中国製陶磁器　(46)は，幅広の蓮弁を篦で描き出す青磁碗である。(47)は，桜高台の白磁皿である。見込の上鉄痕は，研磨される。(48)は，波濤文帯とアラベスクを描くＤ群の染付碗である。(49)は，碁笥底の皿で，外面に文様をもたないＣ群Ⅳである。(50～52)は，見込に十字花文を描くＢ₁群の皿で，図示した以外にも数個体分あり，セットとして使用していたようである。

ＳＤ897出土遺物（ＰＬ．17，第17図）

屋敷の主屋ＳＢ405の北辺を東流し，土塁ＳＡ384を暗渠ＳＺ916でくぐる溝の出土遺物である。

越前焼　(53)は，胴径約40cmを測る小形の甕である。肩は撫で肩で，やや開き気味の頸が直線的に立ち上がる。(54)は，口縁断面の四角いⅢ群ｂの擂鉢である。

瀬戸・美濃焼　(55)は，口縁が端反りの皿で，見込にカタバミの印花をもつ。

中国製陶磁器　(56)は，外面口縁下に雷文帯を巡らす染付碗Ｅ群である。内面には界線を巡らす。(57)は，底部が厚く，高台内を強く抉る碗で，ややくすんだ青味を帯びた釉が施されている。

この他，珠洲焼甕片や朝鮮製の徳利形壺などが出土した。

ＳＤ898出土遺物（ＰＬ．17，第17図）

屋敷の北西部，井戸ＳＥ905から北流する溝から出土した遺物である。

中国製陶磁器　(58)は，胴部外面に片切彫の鎬のない蓮弁文，内面に篦状工具による縦の条線が巡る青磁碗である。明瞭ではないが，見込に印花文をもつ。(59)は，見込に十字花文を描くＢ₁群の染付皿である。この他，越前焼火桶や鉄釉碗，灰釉皿，銅銭（熙寧元寶）なども出土した。

ＳＤ899出土遺物（ＰＬ．17，第17図）

屋敷の北西部，ＳＤ900とＳＤ898を繋ぐ東西溝から出土した遺物である。

瓦質土器　(60)は，底径約6cmの香炉である。脚を3カ所に貼り付け，外側を丁寧に篦磨きする。

中国製陶磁器　(61)は，胴部外面に片切彫による鎬のない蓮弁文をもつ青磁皿である。見込には，不明瞭ながら双魚文の印刻が見られる。(62)は，腰がなく，胴がラッパ状に開く白磁の坏である。

この他，越前焼甕・擂鉢や銅銭（天聖元寶，元祐通寶，熙寧元寶）などが出土した。

ＳＤ900出土遺物（Ｐ Ｌ．17，第17図）

屋敷の北部中央，ＳＢ903の西側を北流する溝から出土した遺物である。

土師質土器　(63)は，壺である。器形は土釜の鍔を外した形であるが，鍔の痕跡は全く見られない。

中国製陶磁器　(64)は，青磁香炉である。底部は輪高台で，腰部下面に形骸化した脚が3カ所貼り付けられる。（65・66）は，底部が蓮節底の染付皿Ｃ群である。共に，外面に波濤文帯と芭蕉葉文，内面に捻花文を描く。(65)は，畳付脇の砂目跡を丁寧に研磨している。

この他，越前焼甕・擂鉢，白磁皿，染付碗等が出土している。

ＳＤ943出土遺物（Ｐ Ｌ．17，第17図）

屋敷北辺の石積施設ＳＦ909から流れ出る溝から出土した遺物である。

金属　(67)は，銅椀である。仏教法具の六器に似るが，胴部の1カ所に板状の銅材を鉄鋲で固定しており，後述する(207)と同一形態であったと考えられる。この他，鉄釘をはじめ器形の分からない鉄製品が錆びて一塊になったものが出土している。

ＳＥ430出土遺物（Ｐ Ｌ．18，第18図）

屋敷の中央に位置する井戸から出土した遺物である。

金属・木製品　(68)は，鉄製の鍬先と，台となる木部である。鍬先は，やや開いた耳から刃先に向けて幅の狭くなる，いわゆる先細りで，刃先は四角い。木部との接合部は，約0.8～1cmの深さを測るＶ字状の溝になっている。木部は，鍬先の形状に合わせてＵ字状に先細りとなる。頭部の両側に，鍬先の耳部を受ける出張りが削り出されている。朝倉氏遺跡における鍬の出土例は，他に第40次・第46次調査の２例があるが，いずれも鍬先の形態が異なる。木部は，第46次調査のものが同一形態である。

この他，越前焼小壺や口縁の内湾する大振りの鉢，Ⅲ群ａの擂鉢等も出土した。

ＳＥ431出土遺物（Ｐ Ｌ．18，第18図）

屋敷の南辺中央にある井戸から出土した遺物である。

越前焼　(69・70)は，口縁の肥厚化したⅣ群の大甕である。肩部に「本」と格子目の凹字スタンプをもつ。(71)は，卵形の胴に(93)と同様の口縁部が着く壺の胴部である。肩部に「(|)」の篦記号を刻む。(72)は，口縁の内湾する鉢である。内面胴部下位に横方向の細かい段が巡る。

瀬戸・美濃焼　(73)は，徳利形の鉄釉壺である。くびれた頸部からラッパ状の口縁が開く。ロクロ目の残る内面には，かせた下地釉が施される。

中国製陶磁器　(74・75)は，見込が高台内に凹む蓮子（レンツー）碗で，文様構成などから，順にＣ群Ⅴ，Ｃ群Ⅲに分類できる。

この他，紡谷石製の長方形脚付盤等がある。

ＳＥ905出土遺物（Ｐ Ｌ．18，第18図）

屋敷北西部の井戸から出土した遺物である。

瀬戸・美濃焼　(76)は，鉄釉天目茶碗の底部である。高台は削り高台で，高台内を内反りに削る。

中国製陶磁器　(77)は，見込に玉取獅子を描く，B_1群の皿である。

朝鮮製陶磁器　(78)は，(40)と同器形の徳利形壺の口縁部である。ラッパ状の口縁の端部を外に折曲げ，玉縁風に作る。２次的に火を受けて，表面の釉はかさつき，灰緑色を呈する。

金属　(79～82)は，銅銭である。順に開元通寶，天聖元寶，元豊通寶，景德元寶である。(82)の孔は，文字の一部を削る径約0.9cmの円孔である。類例は、新安沈船の出土銭にもみられ，輸入される以前に，既に加工されていた物かもしれない。

ＳＦ909出土遺物（ＰＬ．18，第18図）

屋敷北辺中央の石積施設から出土した遺物で、越前焼擂鉢や，土師質皿，青磁碗，染付皿等がある。

中国製陶磁器　(83)は，白磁碗である。腰部が大きく膨らみ，口縁は端部で外反する。

ＳＫ453出土遺物（ＰＬ．18，第18図）

屋敷南辺土景ＳＡ383に穿たれたⅣ期の土坑（埋甕施設）で，越前焼甕をはじめ，壺や擂鉢，白磁・染付類が廃棄された形で出土した。

越前焼　(84)は，口縁の肥厚する大甕であるが，肥厚は完全でなく，Ⅳ群ｂの段階とみられる。肩部に，「本」と格子目の四字スタンプを巡らせ，「(1)」の箆記号も刻まれる。内外面とも，胴から口縁にかけて表面がはじけたように荒れている。

Ⅵ期整地層出土遺物（ＰＬ．19～22，第19～22図）

Ⅲ・Ⅳ期遺構とⅣ期遺構を覆う整地層から出土した遺物である。

越前焼　甕は，Ⅳ群が大半で，Ⅲ群が多少含まれる。(85)は，口縁帯が退化し，外側の稜と内側の段に変わるⅡ群の甕である。ＳＢ406付近から比較的まとまって出土した。(86)は，口縁帯がなくなったⅢ群の甕である。(88)は，Ⅲ群からⅣ群に変化する過渡期に位置づけられる甕で，(87)は，更にその直前の形態と考えられる。(89)はⅣ群の甕である。(90)は，中甕である。肩に「（1）」の箆記号をもつ。

壺は，口縁内側に箆で縦溝をつけた片口をもつ，いわゆるお歯黒壺(91)や，径約30cmの胴部に短い口縁のつく(92)，直立する頸部をもつ(93)等が出土した。(94)は，箆記号をもつ小壺の肩部破片である。

鉢は，口縁に１条の沈線が巡るⅡ群(96)や，内湾気味に立ち上がる口縁端部を外に捻りだし，内側のやや下がったところに弱い凹線を巡らす(97)，擂鉢形で片口をもつ(98)，口縁がすぼまる深鉢(99)，腰部内面に箆記号をもつ(100)，擂鉢形で口縁内側に「干」の箆記号をもつ(101)，口縁のあまり開かない(102)，口縁の内湾する(103)等がある。

擂鉢は，(106・107)等に代表されるⅣ群が多く出土した。(105)は，口径約29cm，高さ約６cmの浅い擂鉢で，内面は胴部，見込とも縦横斜に擂目が引かれている。

瀬戸・美濃焼　鉄釉の天目茶碗は，口縁下のくびれが弱い（108)や，くびれの強い(109・110)がある。(108・110)は，高台が輪高台で，腰部以下に錆釉が施されるが，(109)は，高台内を内反りに削り，腰部以下は露胎とする。(111・112)は，鉄釉の肩衝茶入で，底部に回転糸切痕がある。(113)は，徳利形の鉄釉壺である。回転糸切痕の残る底部は，露胎である。(114)は，茶入の蓋である。鍔の裏面以下は露胎で，小さな底部に回転糸切痕が見られる。(115)は，口縁に片口をもつ鉄釉の擂鉢である。

灰釉は，碗，皿，茶入等がある。(116)は，スタンプで線描蓮弁文風に文様をつける灰釉碗である。(117)は，輪高台の中に輪土鎮痕を残す碗の底部である。(118)は，腰部が腰折れで，底部が削り高台の皿である。(119)は，底部が碁笥底の皿である。(120)は，口縁が端反りの皿で，胴部外面にロクロ目を残し，高台内に土鎮痕が残る。(121)は，胴上部に最大径をもつ大海茶入である。(122)は，鉢の底部である。粘土玉を貼り付けた脚をもつ。(123)は，瓶子の底部である。

土師質土器　(124) は，平担な底部から口縁が直立するマル皿の両側を指で挟みつけた，いわゆる耳皿である。(125) は，胴を球形につくる小壺である。(126) は，口縁下から鍔にかけて平行線の篦記号をもつ土釜である。(127) はA類のヘソ皿，(127～132) はC類，(133・134) はD類の皿である。

中国製陶磁器　青磁は，碗・皿のほか，香炉，壺が出土した。碗は，口縁外側に界線をもつ (135)，雷文帯をもつ (136)，波濤文帯をもつ(137) のほか，胴部外面に弱い鎬の蓮弁文をもつ (138)，片切彫りによる幅の広い蓮弁文をもつ (141)，線描蓮弁文の (140)，5条1単位の櫛描文をもつ(139) 等がある。また(142) は線描蓮弁文碗，(143) は無文の碗の底部である。概ね，線描蓮弁文碗と無文碗が多く，他は図示した以外に数点出土したにすぎない。皿は，口縁が外反する (144)，菊皿風の (145)，外面に界線と櫛描文をもつ (146)，稜花皿 (147)，外面が無文で，胴部内面に筆状施文具で条線を引く (148) 等が出土した。(149・150) は，腰部が屈折れの坏である。重ね焼きのため，見込の釉を輪状に拭き取り，高台畳付も露胎とする。(151) は，盤である。凸帯で区切られたなかに印花を施すが，全体の器形は不明である。(152) は，口縁が朝顔状に開く瓶の口縁部である。断面には，漆による補修痕が見られる。(153・154)は，酒会壺である。(155) は，高台内を内反りに抉る香炉，(156) は，高輪台の香炉で，ともに形骸化した脚が3つ貼り付けられる。

(157) は，青白磁の梅瓶である。底部と胴部の接合部の内面は，明確な段となる。外面は，腰部に2重界線，胴部に渦文が配されている。

白磁は，皿，坏が出土した。(158) は，蓋笥底の皿である。(159) は，桜高台の皿で，見込の土錆痕は研磨される。高台内には，2次的に黒色漆が塗られる。口縁が端反りの皿は，大形の(160) と小形の(161) がある。(162) は，腰部に張りのある坏である。見込は，(149) 同様に釉が拭き取られる。

染付では，碗，皿類の他，器台が出土した。(163～166) は，C群の蓮子碗である。(167) は，見込を広く平坦に取った碗で，胴が直線的に開くD群の碗である。皿は，B1群が多い。外面胴部に唐草文をもち，内面胴部に花草文を描く (168)，見込に玉取獅子を描く (170・171)，同じく花草文を描く(173)，外面に密な唐草文，内面にアラベスクを描く (169・172・177) 等がある。この内 (170) は，露胎の高台内に赤色漆で「三」を記す。また見込に十字花文を描く (174～176) は，セットで使用されたようで，A地区における出土量は多い。(178) は，口縁が端反りの坏である。(179) は，小形の梅瓶などとセットになる元様式の染付器台である。直径約5.2㎝の円形の穴をもつ甲板を蕨足が支えた卓の形で，幕板には方圏、足には唐草風の葉，下部の台の足には波状の文様が描かれる。

朝鮮製陶磁器　(180) は，竹を模した花生である。横断面は楕円形であるが，節などを写実的につくる。胎土は緻密で，淡いチョコレート色を呈する。懸花生と思える。

金属　(181) は，直径約6.6㎝，重さ43.45ｇを測る銅鏡である。鈕座は亀で，上部に双鶴，下部に菊花を配する。縁は，やや内傾する細縁である。屋敷北辺の石積施設ＳＦ908付近から出土した。(182)は，刀装具の責金である。銅製の板材を曲げて，下端で接合する。(183) は，鉄砲の鉛玉である。不整形の球で，直径約1.3㎝，重さ11.05ｇを測る。朝倉氏遺跡での出土例では，小玉の類である。この他図示しなかったが，銅銭が37枚出土している。

石製品　(185) は，小形の長方硯である。裏面は平担で，側面が直立する1Ｂｃタイプである。(186) は，笏谷石（火山礫凝灰岩）製のバンドコ（行火）である。前面にやや上向きの窓が開き，内部を四角くくり抜いたもので，底部側面に脚を削り出している。朝倉氏遺跡における出土例は極めて少ないタイプである。(187) は，平面がＤ字形のバンドコの蓋である。(188) は，底部に3カ所脚の付く鉢である。

外面と胴部内面の屈曲部より上は，器面を丁寧に削り，内面底部は，粗いノミ痕を残す。(189) は，硅化木である。盆石として用いられたものであろう。

その他 (184) は，堆黒の破片である。黒色の漆を幾層も重ねて固め，彫刻を施す。

B 地 区

Ⅲ期各遺構，Ⅲ期整地層，Ⅲ・Ⅳ期各遺構，Ⅳ期遺構，Ⅳ期整地層の順に記す。

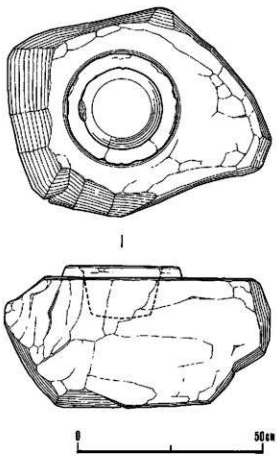
ＳＥ434出土遺物（ＰＬ．22，第22図）

Ｂ地区の南端で検出した井戸から出土した遺物である。

越前焼 Ⅲ・Ⅳ群の甕や，壺，鉢，擂鉢がある。(190) は，片口をもつⅢ群ｂの擂鉢である。

瀬戸・美濃焼 鉄釉碗や茶入，壺がある。(191) は，鉄釉壺の底部である。ロクロ目を残す内面には厚く釉がかかり，回転糸切痕が残る外面には錆釉が施される。

石製品 (192) は，ＩＢｃタイプの長方硯である。裏面には，割れた後に砥石として使用した擦痕がある。(193) は，底部に３脚をもつ笏谷石製の鉢である。(194) は，笏谷石製の摺鉢である。内外面とも丁寧に削る。挿図５は，手水鉢である。石材の上面を平坦に削り，中心をずらして鉢部をつくり，内側を円筒形に掘りくぼめる。後に流行する草庵風の侘茶には不可欠の道具である。



挿図５　ＳＥ434出土手水鉢実測図

ＳＫ450出土遺物（ＰＬ．23，第23図）

Ｂ地区南西隅の土坑ＳＫ450の一括出土遺物で，ほとんどが完形品に近い状態で出土した。

瀬戸・美濃焼 (195～199) は，徳利形をした鉄釉の瓶である。胴下部に最大径があり，頸部は指１本が入る程度にすぼまる。この内，(196) は，最大径がやや上位にあり，底部に回転糸切痕がみられる。(200) は，回転糸切底の小さな壺である。(201) も，回転糸切底の小壺である。形態から茶入とも考えられる。

(202) は，内面胴部に幅約３cm程の条線を密に引き，見込みに菊花の印花をもつ灰釉皿である。高台内に，輪土鎖痕が残る。(203) は，口縁が端反りの皿である。(204) は，見込にカタバミの印花をもつ小皿で，底部は碁笥底である。

中国製陶磁器 (205) は，底部が碁笥底の染付皿Ｃ群である。見込に人形化した「壽」が描かれる。

金属 (206・207) は，銅製椀である。(206) は，仏教法具の六器であろう。(207) は把手を鋲留めしており，高台が低く，高台内に小さい「大」の線刻がある。

石製品 (208) は，脚をもつ長方硯，ＩＢａタイプで，内面硯尻を２次的に掘り下げ海にしている。頭

部上面に一旦割れて剝離した痕があって，漆で接合しており，この時に視尻を海に改造したものと考えられる。(209)は，裏面の平坦なＩＢｃタイプの長方硯である。裏面は平滑にするが，ノミ痕が残る。また，裏面には黒色漆が薄く付着しており，黒漆塗の硯箱に納められていたものと見られる。石材は，小豆色で，所々に虫喰い状の白斑がある。(210)は，笏谷石製の球状石製品である。頂部を凹ませ，中央に径約0.5cm，深さ約1.3cmの穴を穿つ。用途は不明である。

ＳＫ452出土遺物（Ｐ Ｌ．24・25，第24・25図）

Ｂ地区北東部の埋甕群から出土した遺物である。

No.	胴径(cm)	口　径(cm)	高さ(cm)	ヘラ記号	スタンプ	横断面形	備　考
211	91	86.6	90.6	小	本・格子目	楕円	漆補修
212	91.5	89(72) ※	87	王	本・格子目	楕円	漆補修
213	86.3	80.6	——	小一	本・格子目	円	漆補修
214	92	83	——	——	本・格子目	楕円	漆補修
215	86.8	85(76)	92.8	△	本・格子目	楕円	
216	87	84.6(68)	——	小二	本・格子目	楕円	漆補修
217	91.4	83.5(75.2)	——	小	本・格子目	楕円	
218	90	86.4	——	本	本・格子目	円	
219	87.8	84.6(75)	——	丁小	本・格子目	楕円	
220	89.8	82	——	日	本・格子目	楕円	
221	85.1	80.3(75.5)	——	小	本・格子目	楕円	
222	90	86	——	小	本・格子目	楕円	

※　（　）内は、短径

表６　ＳＫ452出土大甕一覧表

越前焼　大甕が12個，中甕が２個，小甕が１個出土した。表６は，大甕の観察表である。大甕は，全て口縁が肥厚するⅣ群で，口縁の肥厚しきった(211・212・215・217～222)はⅣ群ｃタイプで大半を占め，肥厚の少ない(214)はⅣ群ａ，頸部に厚みのない(213・216)は，両者の中間に位置するⅣ群ｂタイプである。大甕の中には，破損部を漆で接合補修したものもある。いずれの甕の内面にも内容物を攪拌した擦痕は見られない。(223・224)は，肩部の下位に最大径をもち，外傾した頸部をもつ中甕で，この器形を小形化したものが(225)と考えられる。中甕・小甕には，肩部のスタンプが見られない。(226)は，粗雑な作りの小壺である。内面に鉄錆が付着しており，お歯黒壺と思われる。

中国製陶磁器　(227)は，蓚筒底の皿の中では珍しく口縁が端反りの皿である。胴部内外面に蓮池魚草文を描き，見込には意匠化された法螺貝が描かれる。

ＳＫ451出土遺物（Ｐ Ｌ．26，第26図）

Ｂ地区西南部の埋甕群から出土した遺物である。

越前焼　大甕は，Ⅲ群とⅣ群が混在する。(228・230)はⅢ群ｃ，(229・231)はⅣ群の大甕である。ともに，肩部に「本」と格子目の凹字スタンプをもつ。口縁が最も肥厚するⅣ群ｃは，出土していない。(232)は，大甕Ⅲ群と同形態の口縁の中甕で，肩部のスタンプは見られない。

ＳＸ462出土遺物（Ｐ Ｌ．26・27，第26・27図）

Ｂ地区の中央，南東寄りに位置する埋甕群付近から出土した遺物である。

越前焼　大甕は，Ⅲ群とⅣ群が混在する。(233)は，Ⅲ群ａの大甕である。肩の屈曲が強く「く」字状に曲がり，外面の調整は粗い。肩部には，凸状の「大」と凹字の格子目スタンプがつく。(239)は，肩がやや丸くなるⅢ群ｂの大甕である。表面の調整は粗く，肩部に凹字の格子目スタンプがつく。(234・235)は，Ⅲ群ｃの大甕である。(236・237)は，Ⅳ群ｃの大甕である。(238)もⅣ群であるが，前者に対して頸部が薄く，屈曲が強い。

金属　銅製盤（挿図６）が，埋設された大甕の中から出土した。直径約34cmを測る円盤で，縁の立ち上がりは，約1.8cmを測る。

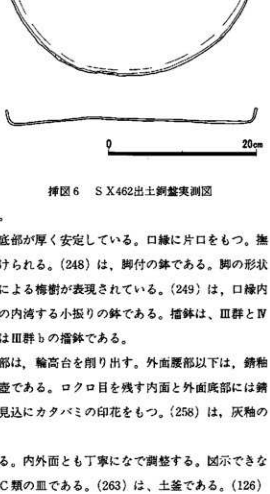
ＳＦ443出土遺物（ＰＬ．27）

埋甕群ＳＫ452の南に位置する石積施設から出土した遺物である。

越前焼　(240）は，(85)と同じ口縁形態のⅡ群の大甕である。(241）は，同一個体の肩部破片である。肩は屈曲が強く，凹字の「本」と格子目スタンプがつく。

土師質土器　(242）は径約7.5cm，(243）は約9.3cmを測るＣ類，(244）はＤ類の皿である。

中国製陶磁器　(245）は，線描蓮弁文の青磁碗，(246）は，青磁の稜花皿である。



挿図６　ＳＸ462出土銅盤実測図

Ⅲ期整地層出土遺物（ＰＬ．27・28，第27・28図）

Ⅲ期の遺構群を覆う整地層から出土した遺物である。

越前焼　(247）は，胴部に最大径をもつお歯黒壺で，底部が厚く安定している。口縁に片口をもつ。撫で肩の肩部に篦記号をもち，縦方向の耳が一対貼り付けられる。(248）は，脚付の鉢である。脚の形状は不明であるが，脚の貼り付く部分の腰部に，粘土紐による格樹が表現されている。(249）は，口縁内側に扇形の櫛描きをもつ擂鉢形の鉢，(250）は，口縁の内湾する小振りの鉢である。擂鉢は，Ⅲ群とⅣ群が混在する。(251・252）はⅢ群ａ，(253・254）はⅢ群ｂの擂鉢である。

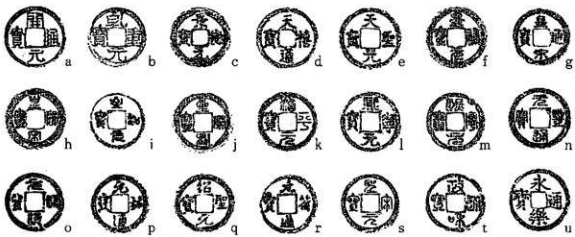
瀬戸・美濃焼　(255）は，鉄釉の天目茶碗である。底部は，輪高台を削り出す。外面腰部以下は，錆釉が施される。(256）は，広い底部をもつ徳利形の鉄釉壺である。ロクロ目を残す内面と外面底部には錆釉が施される。(257）は，口縁が端反りの灰釉皿で，見込にカタバミの印花をもつ。(258）は，灰釉の卸皿である。口縁部だけに釉がかかる。

土師質土器　(259）は，胴の立ち上がりの急な皿である。内外面とも丁寧になで調整する。図示できなかったが，わずかに脚の痕跡がある。(260～262）はＣ類の皿である。(263）は，土釜である。(126）同様，口縁から鍔にかけて，２本の平行線が篦書きされる。

中国製陶磁器　青磁は，線描蓮弁文碗や稜花皿等がある。(264）は稜花皿で，見込中央の釉を丸く拭き取る。(265）は，胴の内湾する皿，(266）は，腰部が腰折れで，胴が外反する皿である。

白磁は，碗と皿がある。(267）は，口縁が玉縁の碗である。横田・森田分類案（横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』1978）によるⅣ－１類である。(268）は，口縁が端反りの皿である。内面胴部に篦で弱い条線を引く。乳白色の透明な釉は貫入が多く，口禿となる口縁端部に，鉄分を多く含んだ釉を施す。(269）は，底部が桜高台の皿である。見込の土鎮痕は丁寧に研磨される。

染付は，碗・皿がある。(270）は，見込の平坦なＤ群，(271）は，見込が高台内に凹むＣ群の蓮子碗である。皿はＢ₁群が多く，見込に玉取獅子を描く（272），胴部外面に密な唐草文，見込にアラベスクを描く（273）等が見られる。



挿図７　Ｂ地区Ⅲ期整地層出土銅銭（縮尺３分の２）

金属　(274) は，分銅である。上部に紐穴があり，重量は約21.85g（約5.82匁）である。(275) は，鉄釘である。角釘で，先端を平たく潰している。(276) は，小柄である。挿図７は、ＳＫ451北東部の炭層からまとまって出土した37枚の銅銭の内の21枚である。すべて渡来銭で，鋳造の古いものから開元通寶（ａ），乾元重寶（ｂ），景德元寶（ｃ），天禧通寶（ｄ），天聖元寶（ｅ），景祐元寶（ｆ），皇宋通寶（ｇ・ｈ），至和元寶（ｉ），至和通寶（ｊ），治平元寶（ｋ），熙寧元寶（ｌ・ｍ），元豐通寶（ｎ），元祐通寶（ｏ・ｐ），紹聖元寶（ｑ），元符通寶（ｒ），聖宋元寶（ｓ），政和通寶（ｔ），永樂通寶（ｕ）である。

石製品　(277) は，平面が楕円形のパンドコである。底部の左右両側に脚を削り出し，前面に５窓が開く。(278・279) は，２～３条以上の溝状研痕のある砥石で，玉砥石に似ている。(280) は，１条の溝状研痕のある砥石で，これら３点はＳＫ451付近から出土した。(281) は長さ約16.5cm，幅約3.6cmを測る角柱状の砥石で，ＳＸ465の南から出土した。

その他　(282) は，坩堝である。口径約９cm，内側の深さ約1.5cm程の皿状の器形を呈し，ＳＫ451付近から出土した。

ＳＥ432出土遺物（ＰＬ．29，第29図）

以下ＳＦ440までは，Ⅲ・Ⅳ期遺構の出土遺物について記す。ＳＥ432は，Ｂ地区の西辺中央に位置する井戸で，越前焼Ⅳ群の甕，擂鉢や鉄釉碗，土師質Ｃ・Ｄ類の皿，パンドコ、砥石等が出土した。

越前焼　(283) は，口縁内側に篦で縦溝をつけて片口とする壺で，肩に篦記号をもつ。内面の底部に鉄錆状の付着物がある。

土師質土器　(284) は，底部に牛角状の脚をもつ碗である。胴部立ち上がりの屈曲は強い。

中国製陶磁器　(285) は，胴部内外面が無文で，見込に印花をもつ青磁碗である。底部は厚く，高台内に土鎮痕を残す。

ＳＥ433出土遺物（ＰＬ．29，第29図）

Ｂ地区中央西寄りに位置する井戸の出土遺物で，越前焼甕・壺・擂鉢やパンドコ、石製盤等がある。

瀬戸・美濃焼　(286) は（195）等と同器形の鉄釉瓶である。(287) は，肩衝形の茶入で，釉は内面にも均一に施される。底部は回転糸切痕がのこる。

中国製陶磁器　(288) は，見込に如意雲，胴部外面に馬と花草文，高台内に年款をもつ染付碗である。見込は平坦であるが，文様構成は，鍵頭心（マントーシン）碗Ｅ群Ⅱと共通する。(289) は、高台内に「正

徳年造」を書く坏である。

石製品 (290) は，茶臼である。目は８分画で，１画内に17～19条引かれている。

ＳＦ439出土遺物（ＰＬ．29，第29図）

Ｂ地区の北部中央西寄りに位置する石積施設の出土遺物である。少量の越前焼類の他，土師質Ｃ・Ｄ類の皿、白磁皿などが出土した。

土師質土器 (291) は，椀である。手づくねで成形され，口縁部のみなで調整を施す。

ＳＦ440出土遺物（ＰＬ．29）

ＳＦ439の東に接する石積施設の出土遺物である。越前焼甕・壺類，土師質Ｃ類の皿等がある。

その他 (292) は，土壁である。裏面に木舞の痕跡があり，木舞と表面間の厚さは，約３cmである。

ＳＥ358出土遺物（ＰＬ．29，第29図）

土壇ＳＡ266上に穿たれたⅣ期の井戸から出土した遺物である。越前焼甕・壺・擂鉢等が出土した。

越前焼 (293) は，Ⅳ期の擂鉢である。内面の腰部から見込周辺部の摩耗が顕著である。

瀬戸・美濃焼 (294) は、見込が広く口縁が端反りの皿である。

Ⅳ期整地層出土遺物（ＰＬ．30～32，第30～32図）

Ⅲ・Ⅳ期遺構とⅣ期遺構を覆う整地層から出土した遺物である。

越前焼 大甕はⅣ群が多い。(295) はⅣ群の大甕で、地区内南東隅でまとまって出土した。(296) は、類の短い中甕で，肩部に篦記号をもつ。(297)は，口縁断面が逆三角形を呈する，類をもたない壺である。(298) は，直立する縁と捻り返しの口縁をもつ壺である。(299・300) は，お歯黒壺である。

鉢は，口縁が内湾する (301)，口縁の開きが少なく，口縁断面の丸い (302)，擂鉢形で，口縁内側に肩状の櫛描をもつ (303)，同じく内面に篦記号をもつ (304) 等がある。

擂鉢は，Ⅳ群が最も多く見られた。(305) はⅣ群で，擂目は隙間なくびっしりと引かれている。ＳＦ439の南で，地面に据え置かれた形で出土し，底部は打ち抜かれ，中に径15cm大の偏平な石が置かれた。(306) はⅢ群ａ，(307・309) はⅢ群ｂで，(308・310～312) はⅣ群である。

瀬戸・美濃焼 鉄釉・灰釉の碗・皿等が出土した。鉄釉碗は，口縁下のくびれが顕著な (313)，くびれの少ない(314)，小振りの (315) 等がある。いずれも外面腰部以下に鉄釉が施される。(316) は，胴が直線的に開く鉄釉皿である。(317) は，口縁が外に折れる鉄釉香炉である。外面胴部から内面口縁下にかけて施釉され，以下は露胎である。(318) は，灰釉碗である。釉は均等にむらなく施される。高台内に輪土鎮痕がある。(319) は，口縁を６カ所摘んで輪花風につくる皿で，見込に印花をもつ。この他胴部が肥厚する (320)，口縁が端反りの (321) がある。(322・323) は，瓶の口縁部と脚部である。同一個体の可能性もある。(324) は，底部に３足を貼り付ける香炉である。釉は，銅緑釉であるが，２次的に火を受け，白っぽくかすれる。銅緑釉製品の出土例は少なく，朝倉館で美濃妙土窯の資料と類似する皿が８個体分出土している程度である。

土師質土器 皿や土釜，土鈴等が出土した。皿は，口縁の直立するＧ類の丸皿 (326)，手づくねのＢ類 (327) も出土したが少なく，Ｃ類 (328～330) やＤ類 (331) が大半を占める。

瓦質土器 (325) は，瓦燈の身である。内面には指頭痕を残すが，外面は丁寧に篦磨きされる。瓦質では，この他瓦燈数点と香炉や火鉢類が出土した。

中国製陶磁器 青磁は，碗・皿等がある。碗は，口縁が大きく開く無文の (332)，胴外面に不規則な縦の櫛描文をもつ (333)，外面に，界線と間隔の広い線描蓮弁をもつ (334)，線描蓮弁文碗 (335・336・

340)、染付C群と同器形で，胴部外面に線描の芭蕉葉文をもつ(337) 等があり，底部片(338～340)は，見込に印花をもつ例である。皿は，胴部外面に片切彫による蓮弁文をもち，口縁が外に折れる(341) や，稜花皿(342) 等がある。(343) は，胴部外面に縦の鎬文を巡らす壺である。頸部は短く，口端部の釉は，蓋を合わせて焼いているため拭き取られ，露胎としている。

白磁は，碗・皿・坏がある。(344) は，見込が平坦で，腰部に多少張りのある碗で，足の長い高台が付く。(345) は，口縁が端反りの皿で，重ね焼きのため，見込の釉を高台大の輪状に拭き取る。(346) も口縁が端反りの皿である。(347) は，腰がなく，高台からラッパ状に胴の開く坏である。

染付も碗・皿がある。(348・350) は蓮子碗C群，(349) は級頭心碗E群である。(351～353) は，基箇底の皿C群である。(354) は，見込に花草文を描く B_1 群の皿である。

赤絵 (355) は，広い見込と端反りの口縁をもつ，染付 B_1 群と同タイプの皿である。外面は，高台脇に界線を引いて牡丹唐草文を描き，内面は口縁下と見込に界線を引き，胴部と見込に花草文を描く。赤色の上絵具で花びらや輪郭を描き，花央や輪郭内を緑色絵具で塗りつぶしている。

朝鮮製陶磁器 (356) は，碗である。灰色を呈する胎土は，緻密で堅く焼き締まり，無釉の器面は茶褐色を呈する。見込にロクロの回転を利用した篦描文をもつ。

金属 鉄釘や銅銭，小柄(357) などが出土した。

石製品 (358) は，小形の長方硯で，脚のないＩＢｃタイプである。(359) は，平面がＤ字形のバンドコである。底部は側面に沿って脚が削り出され，前面には縦長の４窓が開く。(360) は，(210) と同形態の球形をした石製品である。両者の出土地点は比較的近く，(360) は，ＳＤ402の北側から出土した。

表土出土遺物（ＰＬ．32，第32図）

Ａ・Ｂ両地区の遺構面全体を覆う床土，耕土など表土から出土した朝倉時代の遺物である。

越前焼 甕はⅣ群が大半を占め，擂鉢もⅣ群が多い。(364) は，内面口縁下に凹線を巡らし，扇形の櫛描をもつ擂鉢形の鉢である。(362・363) は，Ⅲ群ｂの擂鉢である。

瀬戸・美濃焼 (364) は，口縁下のくびれが弱い鉄釉の天目茶碗である。腰部以下に錆釉が施される。(365) は，胴が大きく外反する腰折れの灰釉皿である。腰部以下は露胎で，削り出しによる高台は，輪高台につくる。見込に土錆痕が残る。

中国製陶磁器 (366) は，腰がなく，高台畳付から直線的に胴が開く青磁の皿である。(367) は，見込に印花をもつ青磁皿で，見込から口縁に向かって片切彫の刻線が引かれる。(368) は，鉢の胴部である。

(369) は，口縁が端反りの白磁皿である。高台内には，四角く囲んだ中に「福」が書かれる。(370) は，底部が蕎物底の輪花皿である。灰色がかった透明な釉は貫入が多い。

(371) は，染付皿である。やや厚手の底部に低い高台がつく。やや青味がかった釉は貫入が多く，見込には花樹文が描かれる。

4．小　　結

a．遺　　構

前項では，第15・25次発掘調査で検出した遺構を個別に記載してきた。ここでは，これらの遺構が全体としてどのような関係で存在していたのかについて，若干の考察を加えてまとめとしたい。

この地区は，領主朝倉義景の住いする朝倉館から一乗谷川を隔てた西側に位置しており，城下町の中でも中枢部に相当する場所であったと考えられる。屋敷地も約1,000㎡から2,500㎡もの広大な面積を与えられており，朝倉氏の家臣の中でも有力な武士達が住いした閑静な屋敷街を形成していたようである。

道路と町割について

この地区には，道路ＳＳ260が南北に走っており，それに東西道路ＳＳ944と975の２本が「Ｔ字形」にとりついて，街の区画が形成されていた。道路は，①道路を幅１本分ずらした「短折」がみられる。②通常道幅は一定であるのが基本であるが，徐々に幅員を狭くしている箇所がみられる。③道路は直線であるが，「ショーゲドン」屋敷の門あたりで「く字形」に屈折しており「遠見遮蔽」を意図している。などの特徴を有している。以上のような道のあり方は，従来から近世城下町特有のものであるとされてきた道普請の実態が，戦国時代にすでに発生・展開していたことを明確に物語るものであった。いいかえれば，領国経営に重点を置いて普請されたはずの近世城下町に，①～③のような防禦中心の戦国普請の造制がなおも採用されていることは，驚きというほかないであろう。

道路面は，道全体に薄く砂利を敷き，叩き締めた普請が城下町内では一般的であったようである。同じ時期の勝山市平泉寺の僧坊跡を繋ぐ縦道・横道，一乗谷城下町への導入路である「朝倉街道」の大手道にあたる東大味から鹿俣への峠道，さらには滋賀県の観音寺城や安土城などの道路が，河原石や山石を敷きつめた石畳道であるのと対象的であるといえよう。道路に面した屋敷の石垣は，見栄のためか巨石を積んでいるにもかかわらず，土塁内側や隣足敷との境界はさほどの巨石を用いず，積み方も粗い点興味が引かれる。さらに，土塁石垣積みが各屋敷ごとに実施されていることも，１軒ごとの石の積み方の相違から認められ，領主による道普請のための縄張りが実施された後，各自実施したことが判る。

Ａ地区について

前項では第15次調査区の北半分と第25次調査区の南半分を合わせた東西約30ｍ，南北約60ｍの敷地を１軒の武家屋敷（Ａ地区）として記述を進めてきた。しかし，昭和57・58両年に実施したこの武家屋敷の立体復元事業（『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告Ⅱ』）では，Ａ地区の丁度北半分（東西約30ｍ×南北約30ｍ）を１軒の武家屋敷地として扱っている。発掘調査事実と立体復元に際しての考え方に齟齬がみられ，後世この復元屋敷が史実として語られる危惧も考えられるので，考古学の立場から若干の考察を試みておきたい。まず第１点は，正門である。これは掘立柱の門ＳＩ 279 遺構を約30ｍ北へ移動して正門としたもので，この位置には，もともと門遺構があったわけではない。第２点は，復元に際しては四辺を土塁で囲繞しているが，発掘の結果では北辺に土塁のあった形跡は認められなかった。道路ＳＳ 944 とは段差があるので，目隠し塀や生垣状のもので区切っていたかもしれないのである。また南辺土塁も，掘立柱の目隠塀ＳＡ 385 で主殿をさえぎってはいたものの敷地境を示すほどのものではないのである。ましてや塀中門に比定する遺構も確認はされていない。第３点は，３畳敷の雛座敷につい

てである。復元建物を考古学的に論じるのは難しいが，遺構のあり方からみて溝ＳＤ399を跨いで主殿と繋った4.5畳の座敷と考えている。坪庭ＳＧ420遺構との関連で，この座敷が茶の湯の席として使用されたことは明らかであるが，4.5畳の茶室の出現時期は安土・桃山時代以降とする従来の説のみで３畳台目を採用するのはいかがなものであろうか。戦国時代には4.5畳の座敷はすでに普及しており，現在1.5畳分の吹き抜け床が雨で濡れ，雪が積ってしまう現実を目のあたりにして，３畳台目の必然性は少ないものと考えられるのである。第４点は，便所についてである。ＳＦ910・911 2基の便所遺構を，復元では１棟の杉皮葺屋根の建物としている。そして両側に汲取りもしくは小便用の空間も作られている。最近，便所遺構の考古学的発見が相ついでおり，佐賀県名護屋城跡のように金隠しの位置から，入口に向いて当時の人が使用したことの明らかな事例も報告されるようになってきた。しかし，便所に小便専用の空間があったか，汲取りのための場所が設けられていたかなどは不明である。筆者は，汲取りは簡単に渡し掛けた床板や金隠しをはずす程度のものではなかったかと考えている。『洛中洛外図屏風』などの絵画資料にも，汲取のための専用空間は描かれていない。また，主殿の西南隅に繋っている便所遺構ＳＦ437は，近世の座敷便所のように，来客用などの特別な時に室内から使用した便所と考えることもできるかもしれない。第５点は，「晴と褻」についてである。一乗谷城下町においては，領主の館はもとより，武家屋敷，寺院，町屋にいたるまで，敷地内における建物配置や建物内における遺構に，表向空間「晴」と内向空間「褻」の意識が貫徹している。Ａ地区では，門ＳＩ279，通路ＳＳ386，建物ＳＢ407・408，主殿ＳＢ405の南半分，座敷ＳＢ406，坪庭ＳＧ420など，主に敷地南半分にある遺構が「晴」空間で，主殿ＳＢ405の北半分，便所ＳＦ910・911，井戸ＳＥ905，蔵ＳＢ903，東辺に設けられた門ＳＩ415など，主に敷地北半分にある遺構が「褻」空間とみなすことができよう。「復元武家屋敷」として立体復元した敷地のみでは，あまりにも「晴」空間がなさすぎるものと思われる。

まとめ

Ａ地区は，一乗谷川の氾濫の際Ⅲ・Ⅳ期面に砂が堆積したため，遺構の残存状況は極めて良好であった。また，Ⅱ期の町割時に作られた土塁のさらに下層からＳＸ924・926～929など町割以前のⅠ期の礎石なども検出され，城下町成立の謎をにぎるものとして注目された。30ｍ×60ｍの規模は，一乗谷では中規模の敷地とみられるが，この程度の武士であっても茶の湯の座敷や坪庭を有している点興味あるところである。Ｂ地区は，もとはＡ地区と合わせて１軒の敷地であったかもしれないが，後には東側に便所遺構が列をなして並んでいることから町屋あるいは使用人達の長屋風の建物が建てられ，一乗谷川の氾濫でかなり削平されてしまったと考えられる。Ｃ地区は，大半が一乗谷川の氾濫で，削平されてしまったようである。

b．遺　　物

前項では，A・B両地区で出土した個々の遺物について，出土遺構や出土層ごとに分けて説明を加えてきた。ここでは，A・B両地区における遺物の構成や，機能分担などについて概括してみたい。

両地区における出土遺物の内訳は，既に表5で示したとおりであり，総数はA地区が15,365点，B地区が8,976点であった。この内の陶磁器類(近世以降は除く）に限って，生産地別の構成比を示したのが表7である。これを概観すると，両地区とも土師質皿を主とした土師質土器が最も多く，越前焼と合わせた地元産で90%前後を占めている。次いで中国製陶磁器を主とした輸入陶磁器，残りが瀬戸・美濃焼を主とした国産陶器類である。

個々を見てみると，土師質土器は60%余りの値を示している。一乗谷では，朝倉館，中の御殿（第4・13次），南陽寺（第64・65次），中惣（第68次）で90%を超す値を示す以外は，寺院・武家屋敷・町屋を問わず，ほぼ60%前後に集中しており，A・B両地区の場合も，後者の一般的な数値を示したものと考えられる。越前焼は，A地区が24%，B地区が31.5%で，一乗谷の一般的な比率の30%前後に納まっている。ただし，土師質土器を除いた比率は，SK451・452，SX462など大甕埋設遺構が検出されたB地区で82.7%となり，一般的な比率の60%～80%を多少上回る。瀬戸・美濃焼は，A地区が2%，B地区が1.5%で，一般的な比率（1～4%）のなかでは比較的低い数値となり，瓦質土器・その他は，A地区が0.3%，B地区が0.2%で，平均的な数値を示している。中国製陶磁器は，一般的比率6～8%と比較して，A地区が8.8%と多い部類，B地区が4.7%と少ない部類になる。瀬戸・美濃焼と中国製陶磁器の比率を比較すると，A地区が1：4.4，B地区が1：3.1となり，A地区における中国製品の優位が窺える。朝鮮製陶磁器は，A地区が0.4%，B地区が0.2%で一般的な数値を示したものと言えよう。

単位面積（1㎡）当りの出土破片数を見ると，A地区が8.17点，B地区が9.52点で，ややB地区の方が多いが，典型的な町屋地区の調査である第36次調査や，寺院跡の調査である第17次調査での数値が20前後を示すのに比べれば半分以下である。B地区は，Ⅲ・Ⅳ期において一乗谷川の氾濫で東半が削平されており，本来は多少大きな数値が得られたものと思えるが，推測にとどめざるをえない。

		A 地 区		B 地 区	
地元	土師質土器	——	64.5	——	61.9
	越前焼	67.7	24.0	82.7	31.5
			(88.5)		(93.4)
日本	瀬戸・美濃焼	5.6	2.0	3.9	1.5
	瓦質土器・他	0.8	0.3	0.6	0.2
			(2.3)		(1.7)
外国	中国製陶磁器	24.7	8.8	12.3	4.7
	朝鮮製陶磁器	1.2	0.4	0.5	0.2
			(9.2)		(4.9)
総破片数		5,218	14,699	3,268	8,572
発掘面積		1,800㎡		900㎡	
破片数／㎡		8.17		9.52	
地区の性格		武家屋敷		町屋(？)	

（左欄は土師質土器を除いた比率）

表7　陶磁器の生産地別比率

以上のように，陶磁器の生産地別構成比率等の比較では，A・B両地区とも一乗谷における一般的な出土傾向の範疇で捉えることができるが，両地区間に微妙な差がみられたことは注意すべきであろう。

次に，陶磁器を産地・器種別に機能分担を含めて見よう。

先ず，越前焼は，貯蔵や調理などの機能を分担している。甕は，Ⅳ群の大甕が主体である。A地区では（53・90）等の中甕のほか，少数ではあるがⅡ群の(85)等も出土している。B地区では，SK451・452やSX462等のように埋設された甕があり，何らかの生産に関わるものと思える。いずれもⅢ期の遺構ではあるが，SK

越前焼	A地区	B地区	瀬戸・美濃焼	A地区	B地区	青　磁	A地区	B地区	白　磁	A地区	B地区	染　付	A地区	B地区
甕	65.8	79.4	鉄釉碗	46.0	31.3	碗	43.8	63.0	碗	0.4	1.6	碗	26.4	30.9
壺	11.4	5.6	皿	0.7	1.6	皿	34.7	27.9	皿	90.4	90.2	皿	69.3	67.5
鉢	4.3	2.6	他	13.1	21.1	鉢	10.0	3.3	坏	6.3	4.9	坏	2.7	1.6
擂　鉢	16.8	12.2	灰釉碗	5.8	11.7	他	11.5	5.8	他	2.9	3.3	他	1.6	——
他	1.7	0.2	皿	26.1	24.2									
			他	8.3	10.1									

表8　陶磁器の生産地別器種構成

451とＳＸ462でⅢ・Ⅳ群が混在するのに対し，ＳＫ452は全てⅣ群で構成される点で異なる。壺は甕に比べて量が少ないが，台所の貯蔵具としては，やはり越前焼が最も多い。壺の内（91・226・247）等小型で片口をもち底部がしっかりした作りのものは，お歯黒壺に用いられた。擂鉢は甕に次いで出土量が多いが，各屋敷における必要量が一定していたようで，Ａ・Ｂ両地区とも他調査地における10～20％の値に納まる。Ⅳ群が主体であるが，（251～254）や（306～309）等Ⅲ群も混在する。

瀬戸・美濃焼は，碗や皿が主体である。鉄釉は碗が最も多く，喫茶用と思える天目茶碗が大半である。喫茶に関するものには（111・200・201・287）等茶入もあり，その他用途は分からないが，ＳＫ450一括遺物中にみられる徳利形の壺がある。灰釉は皿が主体で，（11・55）等口縁が端反りの皿が最も多いが，中には(319）の様に稜花皿風の皿もある。碗は青磁の写しで，線描蓮弁文の(116）や無文の(117）等がある。他に１点のみであるが銅緑釉の香炉も出土している。

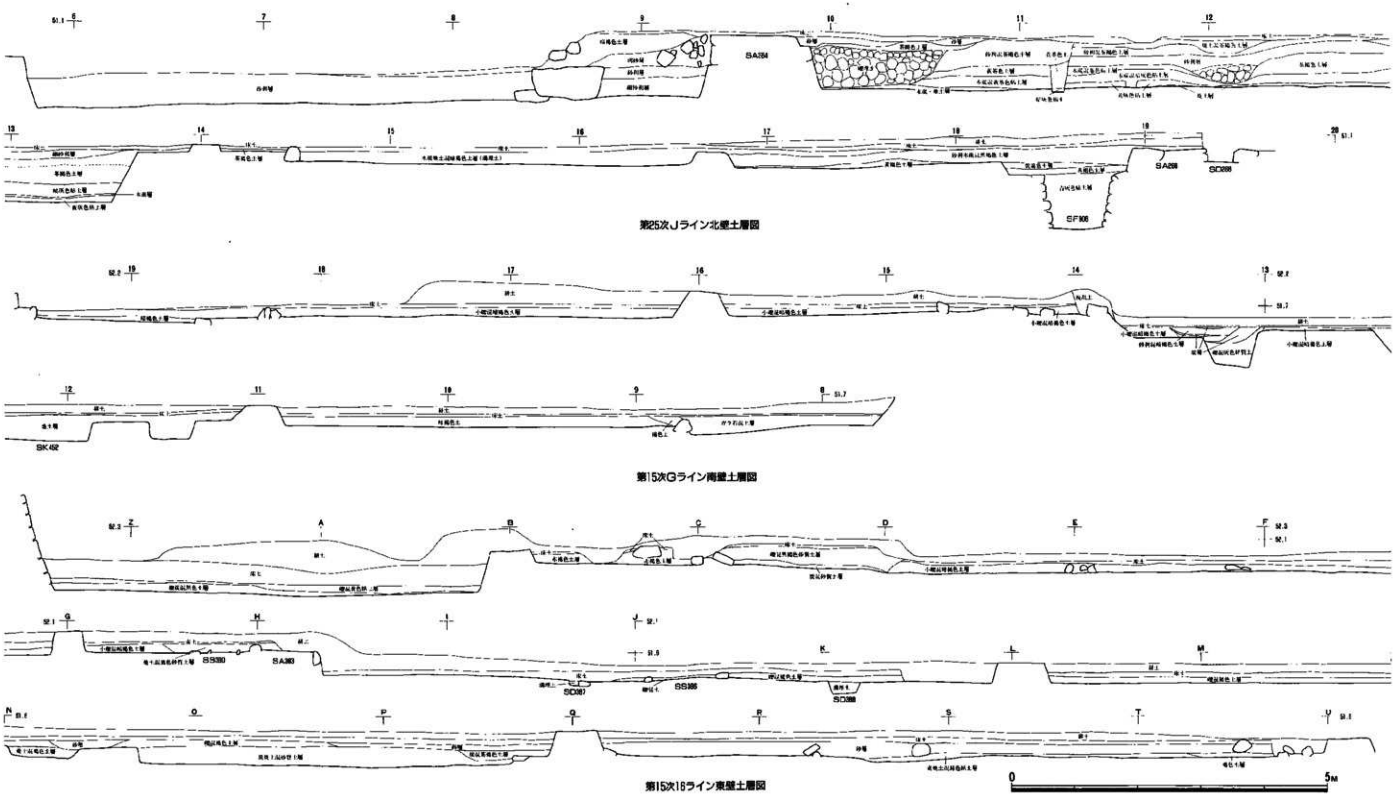
土師質土器は，前述のように皿が最も多く，坏・皿等飲食器の他，灯明皿にも用いられている。土釜は煮炊具であるが，いずれも（126・263）等小振りのもので，Ｂ地区でやや多く出土した。

瓦質土器は，火気に関する瓦燈・火鉢・香炉があるが，火鉢は笏谷石製品が補充し，香炉は青磁・灰釉が主体であるため，全体に占める出土量は少ない。

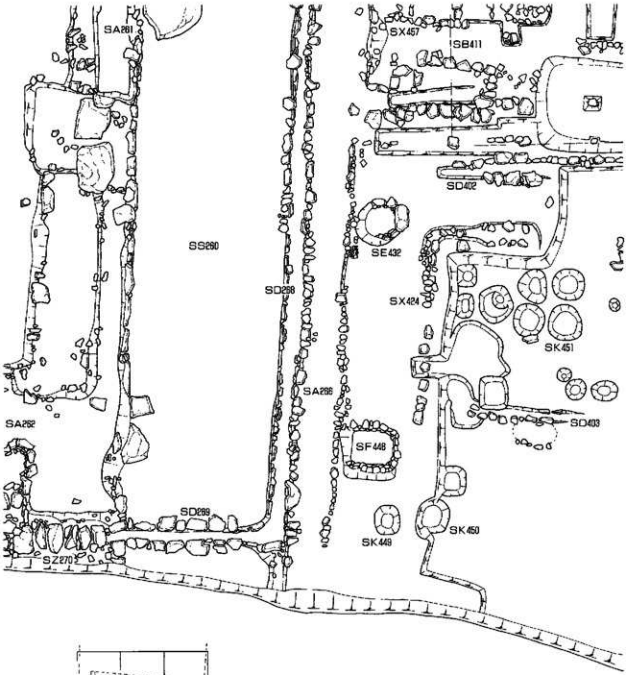
中国製陶磁器は碗・皿等食膳具が主体である。青磁は碗が多く，Ｂ地区では特に比率が高いが，皿は30％前後で比較的差が少なく，Ａ地区では碗の少ない分，鉢や香炉が多くなっている。タイプ別では，碗は(18）等線描蓮弁文碗の他（135・143）等胴部が無文の碗が多く，皿は（19）をはじめとする稜花皿が多い。白磁は皿が大半で，Ａ・Ｂ両地区とも90％余りを占める。(160）等口縁が端反りの皿が大半を占め，(159）等桜高台の皿も見られるが，菊皿は数点が出土しただけである。染付は，皿が70％近くで最も多く，碗は約半数の30％前後で，この傾向はＡ・Ｂ両地区に共通する。タイプ別では，碗は（163・166）等Ｃ群の蓮子碗が多数を占め，鐘頭心Ｅ群の碗は(349）の他，数片が確認されただけであった。皿はB_1群が主体で，Ａ地区では見込に十字花文をもつものが多くみられた。

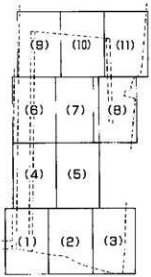
以上，陶磁器類の構成と機能分担について概要を述べた。これらの時期的なまとまりをみた場合，他の調査地と大きな違いはないが，中国陶磁器では上記のように新しい時期の遺物が少なく，越前焼では甕・擂鉢ともⅣ群が主体ながら，各々Ⅲ群が比較的多く混在しており，全体に古い様相を示す遺物が目立っている。このことは，Ａ地区の下層で町割に先行する遺構面（Ⅰ期）が確認され，越前焼Ⅰ群の甕・擂鉢も出土しており，この地区が町割実施以前から続く生活地区であった事を反映したものと思える。また，町割にのる２遺構面とこれに先行する遺構面と間には，遺物の変化が漸移的であり，時間的に大きな空白があるとは考えられなかった。

第１図　土層図

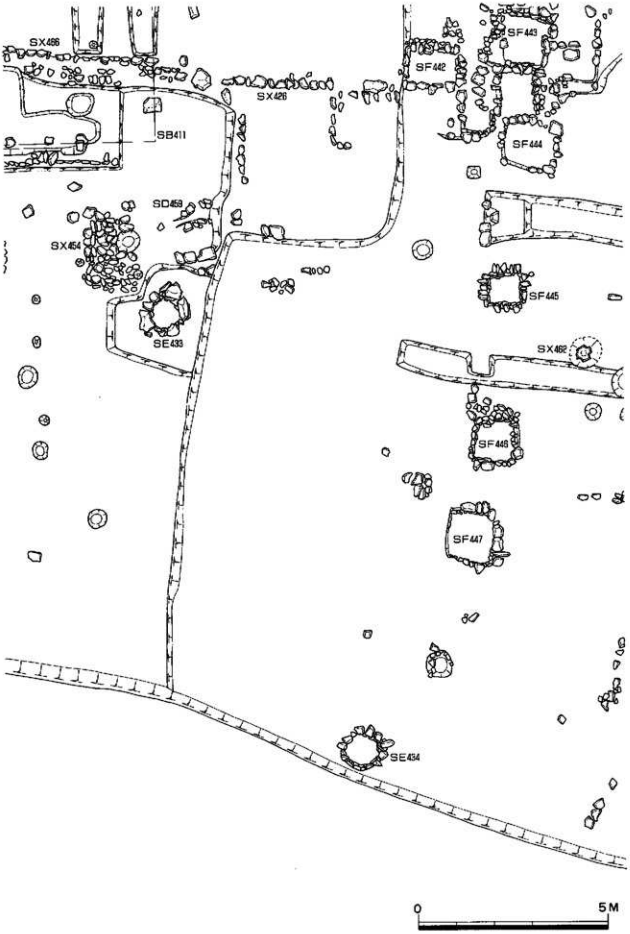

SA384
SA298
SC388
SF308
第25次Ｊライン北壁土層図
SK452
第15次Ｇライン南壁土層図
SS380
SA383
SD387
SS386
SD388
第15次16ライン東壁土層図
0
5M

第２図　遺構平面詳細図(1)



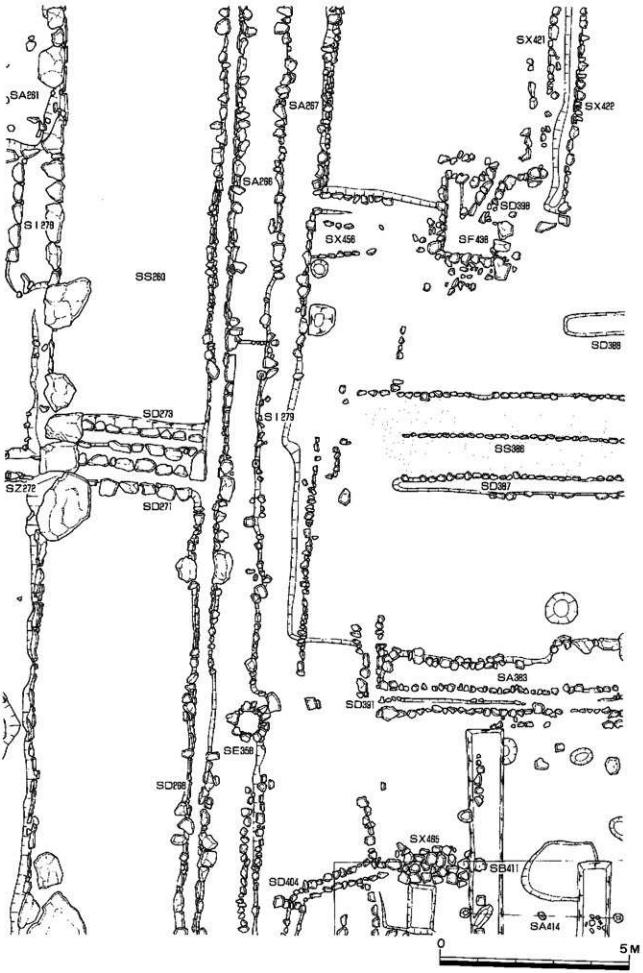


第３図　遺構平面詳細図(2)

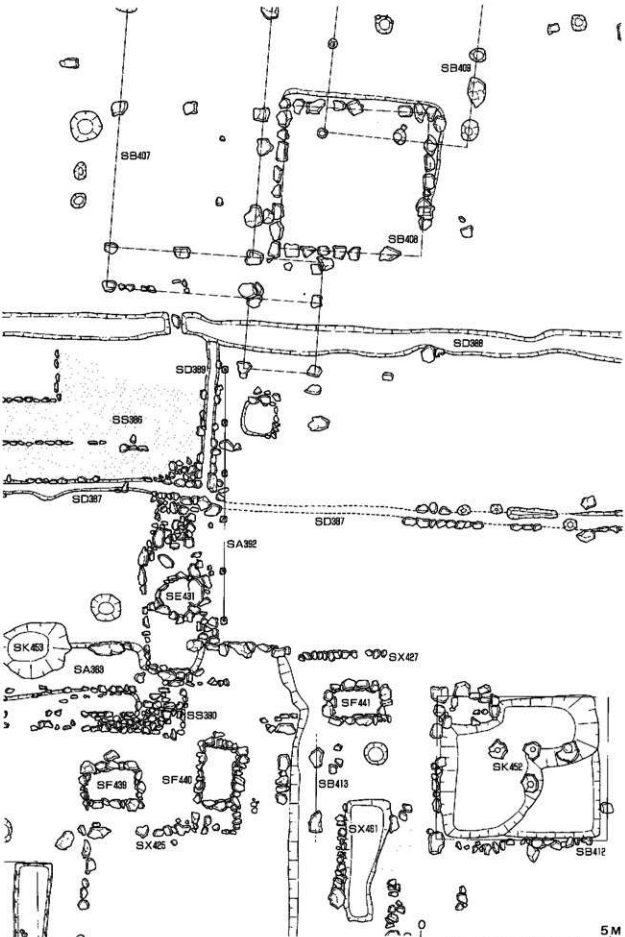


第４図　遺構平面詳細図(3)

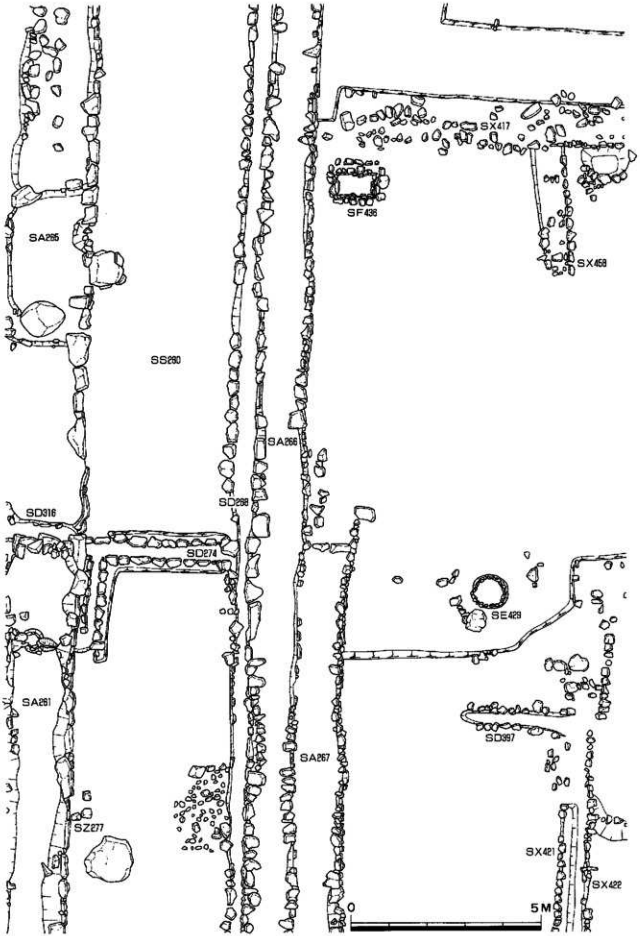
第５図　遺構平面詳細図(4)



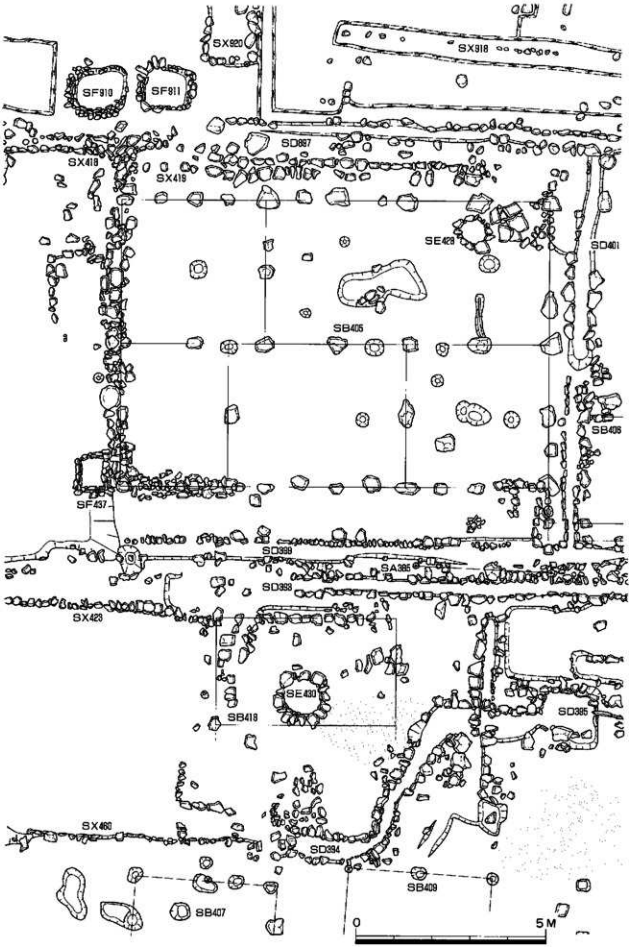
第6図　遺構平面詳細図(5)



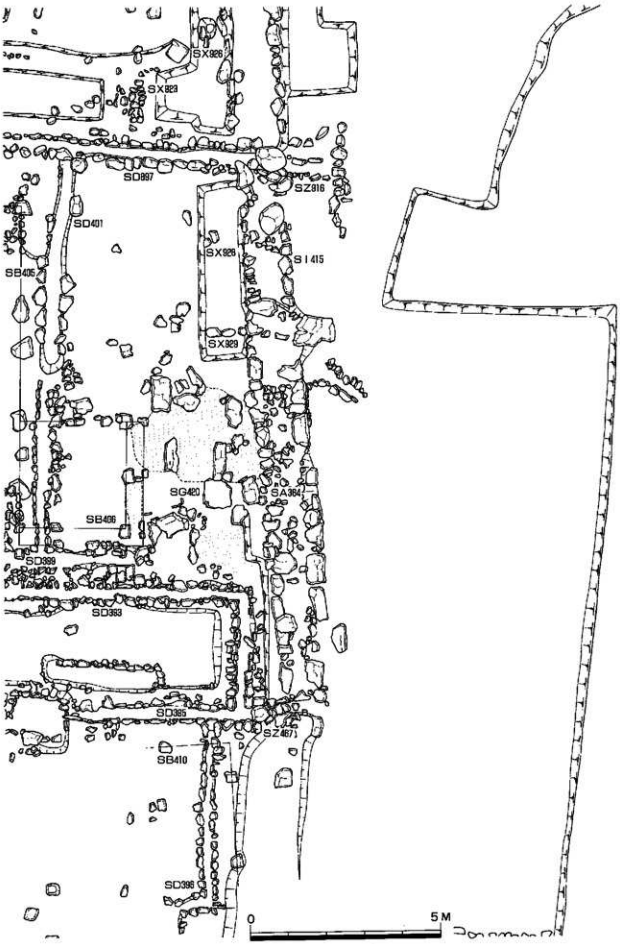
第７図　遺構平面詳細図(6)



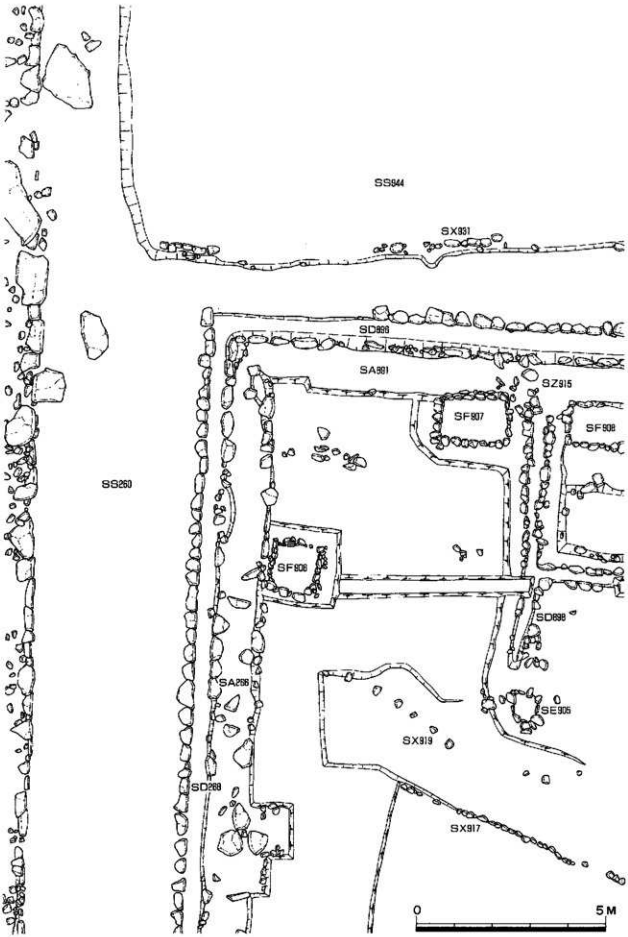
第８図　遺構平面詳細図(7)



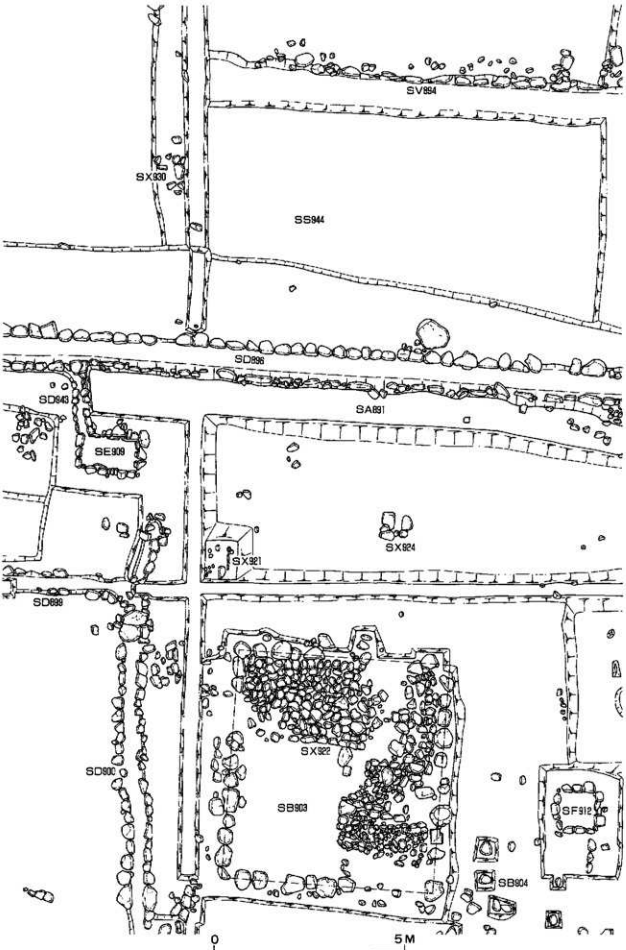
第９図　遺構平面詳細図（８）



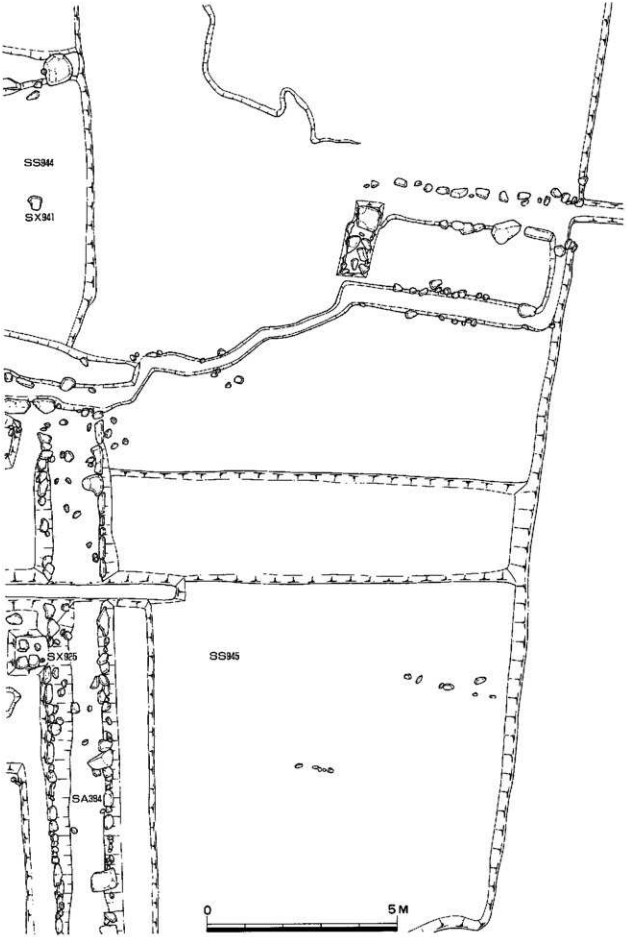
第10図　遺構平面詳細図(9)



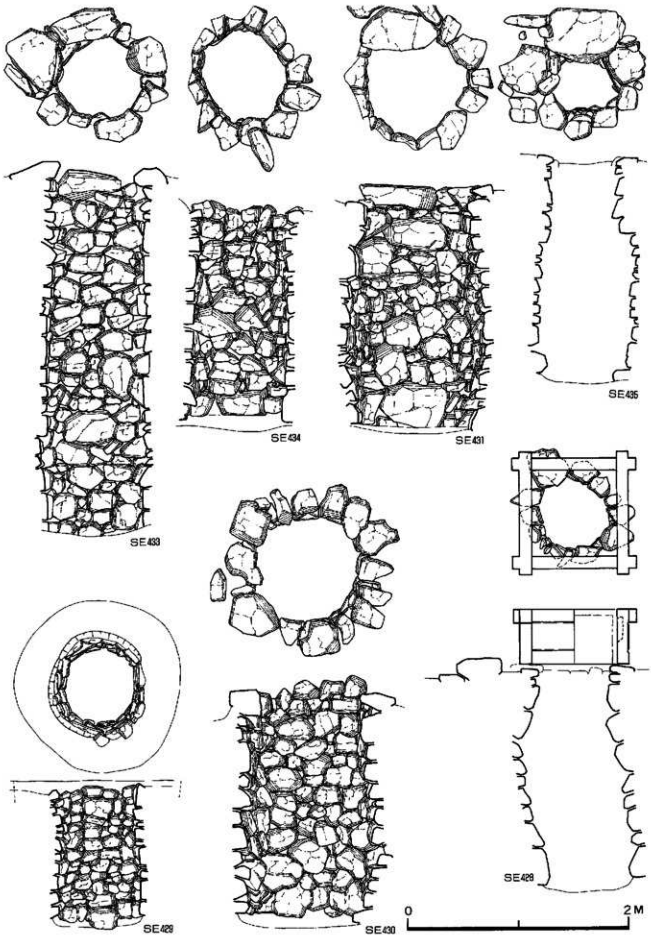
第11図　遺構平面詳細図(10)



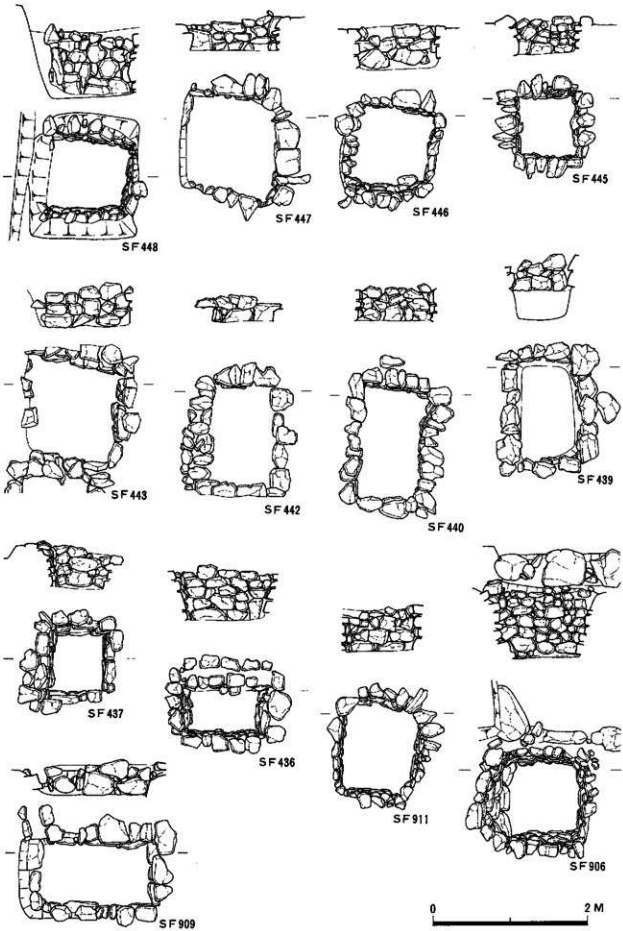
第12図　遺構平面詳細図(1)



第13図　井戸実測図



第14図　石積施設実測図



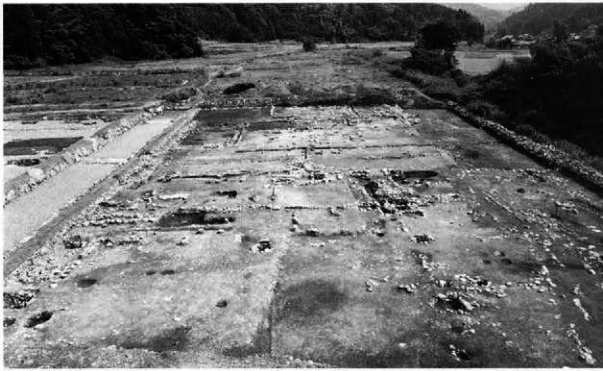
調査区全景航空写真

第15次調査区

第25次調査区

調査区全景

第15次調査区
（西南から）



第15次調査区
（南から）

第15次調査区
（北から）

調査区全景

第25次調査区
道路矩折部
（北から）

第25次調査区
（北から）

第25次調査区
（東北から）

調査区主要部

第15次調査区
A地区南半部
（東から）

第15次調査区
A地区中央部
（東北から）

第15次調査区
B地区北半部
（東から）

調査区主要部

第15次調査区
B地区西半部
（東から）

第25次調査区
A地区西北部
（東から）

第25次調査区
A地区北半部
（東から）

◀SA383
（西から）
▶SA266・267
（北から）

◀SA384・891
（北から）
▶SA266
（北から）

◀SA384
（南から）
▶SA892・893
と道路屈折部
（東北から）

門と溝

◀SI279
(東から)
▶SI415
(東から)

◀SD395・SZ467
(東から)
●SD897・SZ916
(東から)
▶SD898・SZ915
(北から)

主殿SB405の
南の溝群
(南から)

建物と庭

ＳＢ405・406と
ＳＧ420
（東北から）

ＳＢ406と
ＳＧ420
（北から）

ＳＢ405西辺の
方形石列

建　物

礎石建物ＳＢ407・408
掘立柱建物ＳＢ409
（南から）

ＳＢ903と
石敷ＳＸ922
（東から）

ＳＢ412と
埋甕ＳＫ452
（北から）

諸施設

◀目隠し塀ＳＡ392
（北から）

▶通路ＳＳ390の
石段
（北から）

◀埋甕ＳＫ451
（南から）

▶道路ＳＳ944
（東から）

◀多くの遺物が出
土したＳＫ450
（南から）

▶町割以前の
礎石ＳＸ929
（西から）

石組井戸

◀SE428

▶SE429

◀SE430

▶SE431

◀SE433

▶SE434

◀SE435

▶SE905

SF439・440

◀SF436
▶SF437

◀SF438
▶SF441

◀SF442
▶SF443

石積施設

◀SF444
▶SF445

◀SF446
▶SF448

◀SF906
▶SF909

◀左から
SF907
・908・909
▶SF909

石積施設

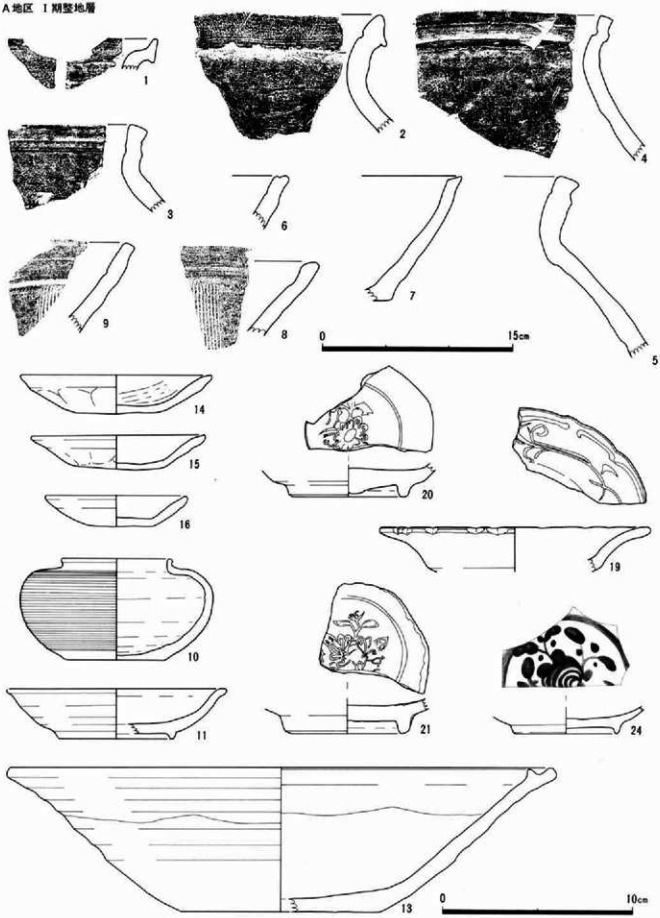
◀SF907
▶SF908

◀SF912
▶SF910

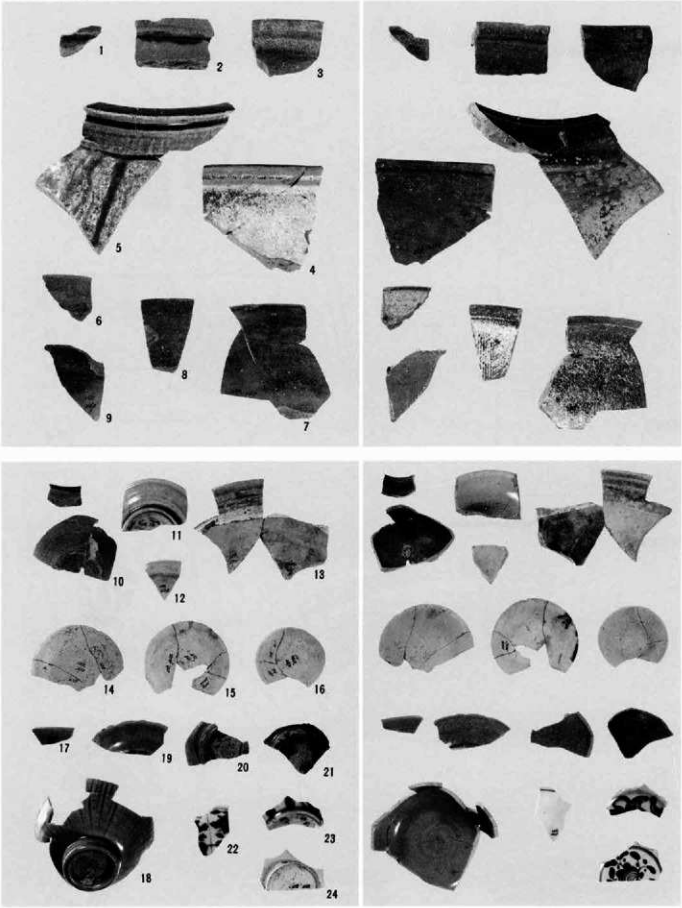
◀SX920
▶SF911

手前からSF910・911
SX920

第15図　第15・25次調査遺物(1)
A地区　Ⅰ期整地層

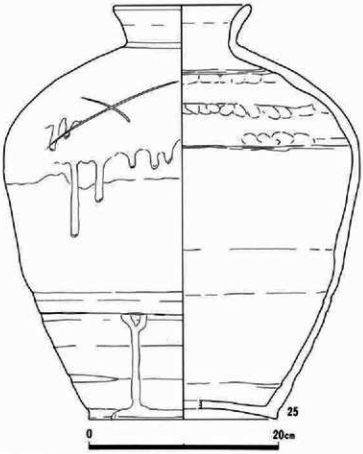


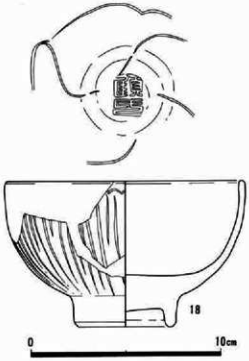
越前焼甕1～5　鉢6・7　擂鉢8・9　鉄釉茶入10　灰釉皿11　鉢13　土師質皿14～16　青磁皿19～21　染付皿24



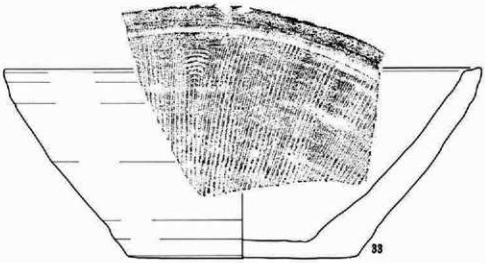
Ⅰ期整地層 **越前焼**1～5 鉢6・7 擂鉢8・9 **鉄釉**茶入10 **灰釉**皿11・12 鉢13 **土師質**皿14～16 **青磁**碗17・18 皿19～21
染付碗22 皿23・24

第16図　第15・25次調査遺物(2)



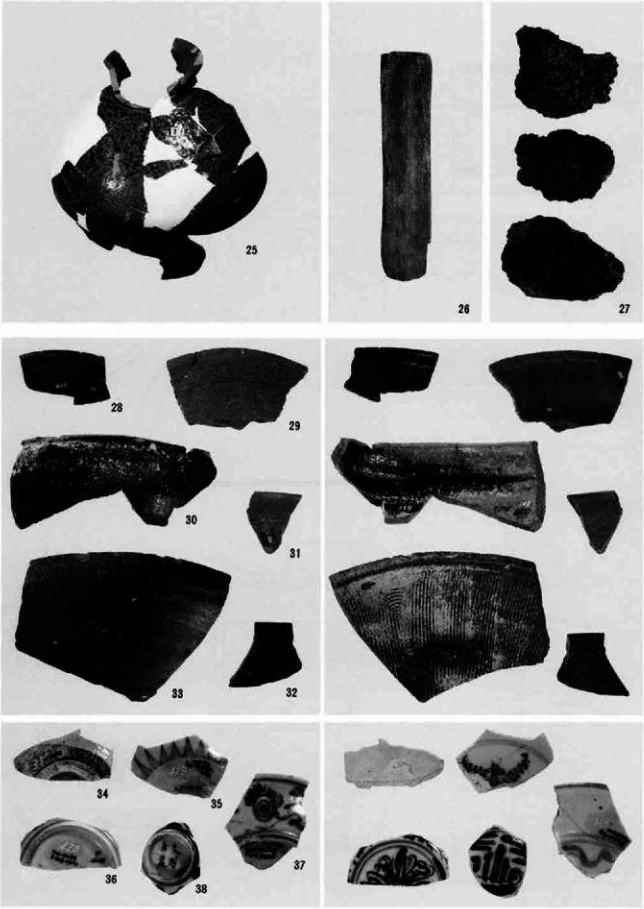


III類整地層



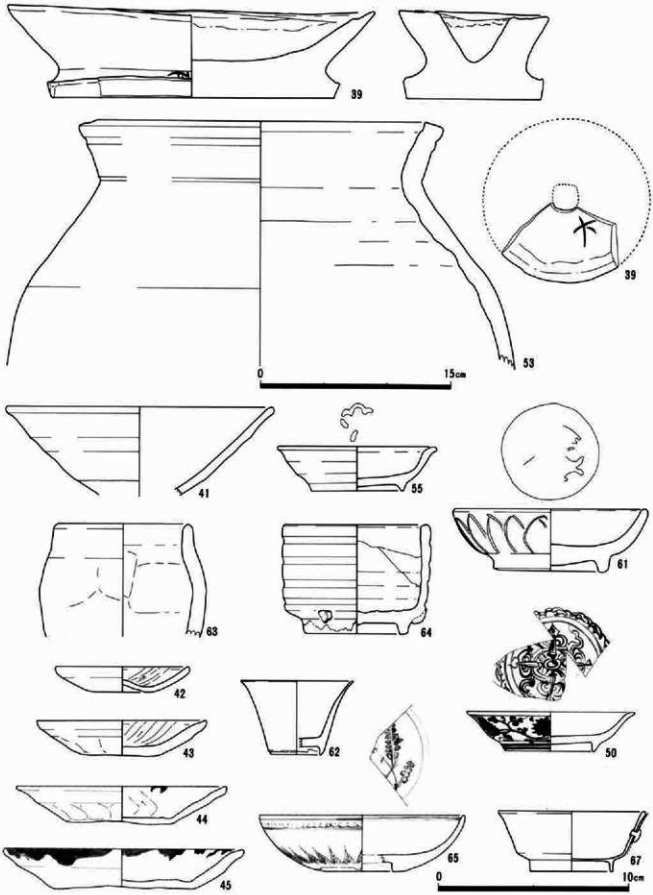
0　15cm　　0　10cm

青磁碗18　丹波焼壺25　越前焼鉢28・29　擂鉢33　染付皿35・36　瓦38

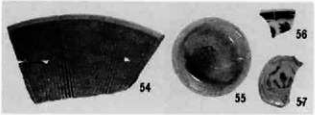


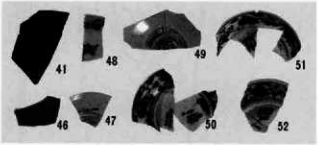
Ⅰ期整地層 **丹波焼**壺25 **石製品**砥石26 **その他**炭化米27 Ⅲ期整地層 **越前焼**鉢28～30 擂鉢31～33 **白磁**皿34 **染付**皿35～37 坏38

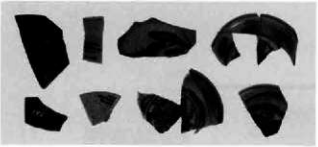
第17図　第15・25次調査遺物(3)
Ⅲ・Ⅳ期各遺構

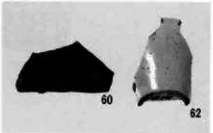


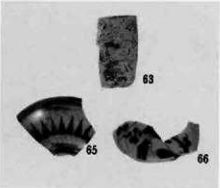
越前焼薬研39　壺53　鉄釉碗41　灰釉皿55　土師質皿42～45　壺63　青磁皿61　香炉64　白磁坏62　染付皿50・65　金属銅椀67





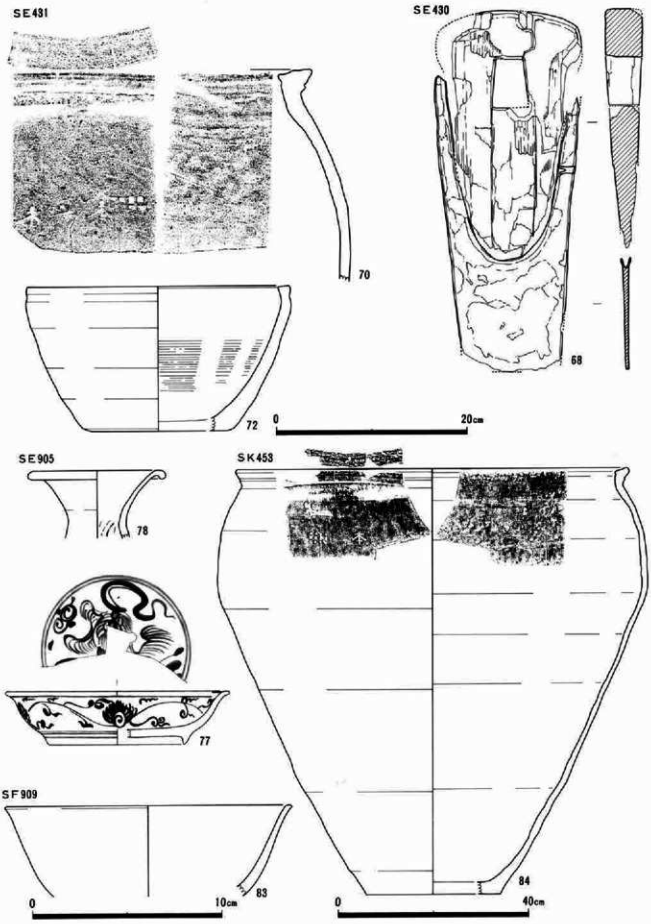




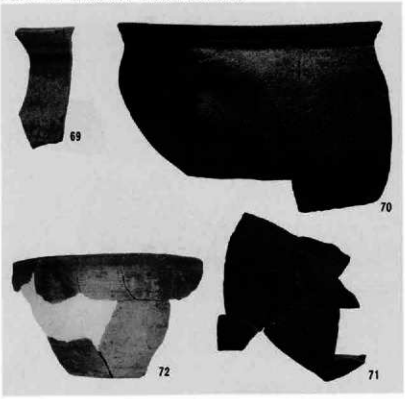


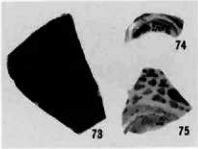
SD389 越前焼高研39 SD394 朝鮮壺40 SD395 鉄釉碗41 青磁碗46 白磁皿47 染付碗48 皿49～52
SD897 越前焼壺53 擂鉢54 灰釉皿55 染付碗56・57 SD898 青磁碗58 染付皿59 SD899 瓦質香炉60 青磁皿61
白磁坏62 SD900 土師質壺63 青磁香炉64 染付皿65・66 SD943 金属銅板67

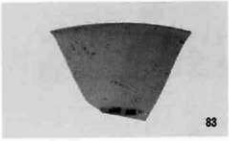
第18図　第15・25次調査遺物(4)

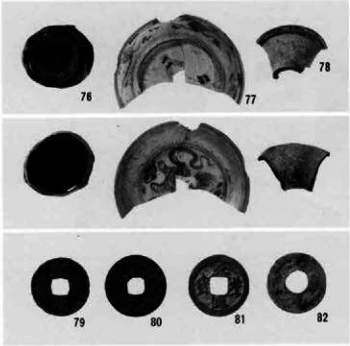


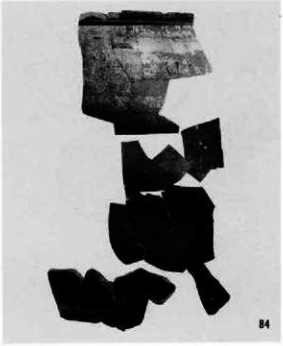
鉢68　越前焼甕70　鉢72　染付皿77　朝鮮瓶78　白磁碗83　越前甕84







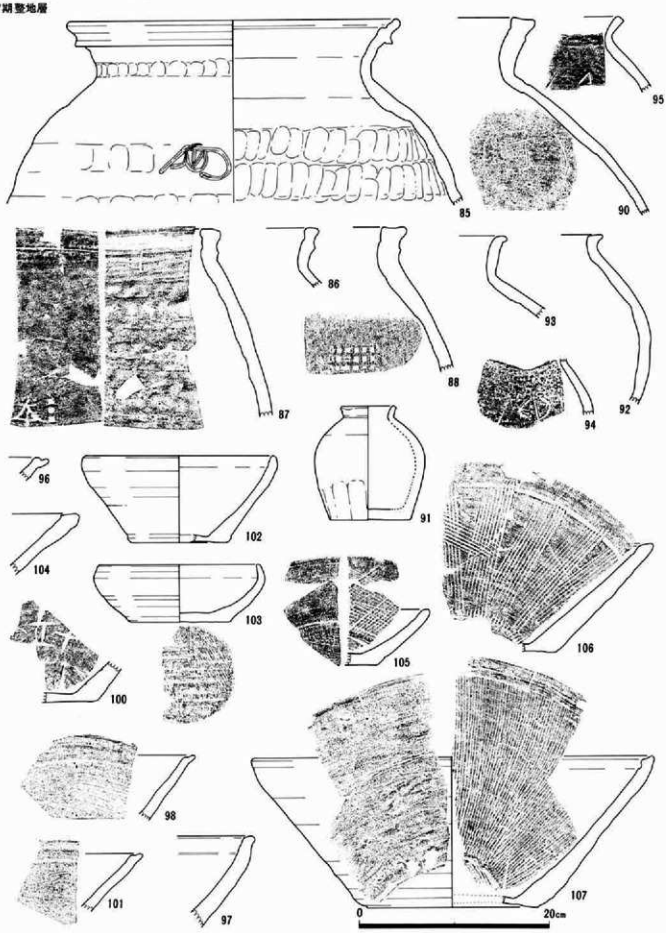




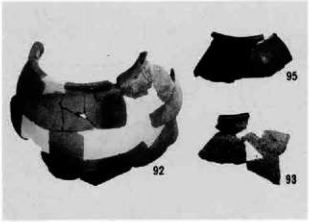
SE430 錆68 SE431 越前焼甕69・70 壺71 鉢72 鉄釉瓶73 染付碗74・75 SE905 鉄釉碗76 染付皿77 朝鮮瓶78
金属製銭79～82 SF909 白磁碗83 SK453 越前焼甕84

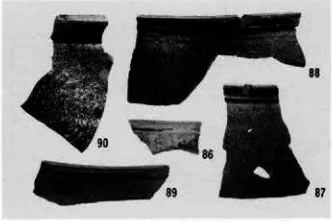
第19図　第15・25次調査遺物(5)

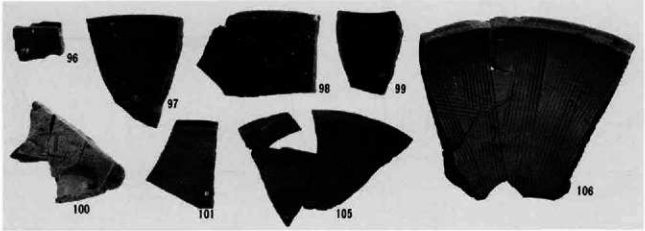
Ⅳ期整地層

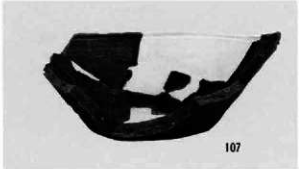


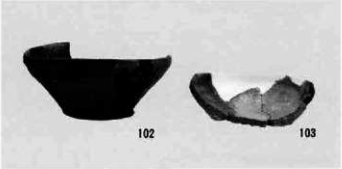
越前焼甕85～88・90　壺91～94　鉢96～98・100～104　擂鉢105～107　丹波焼壺95





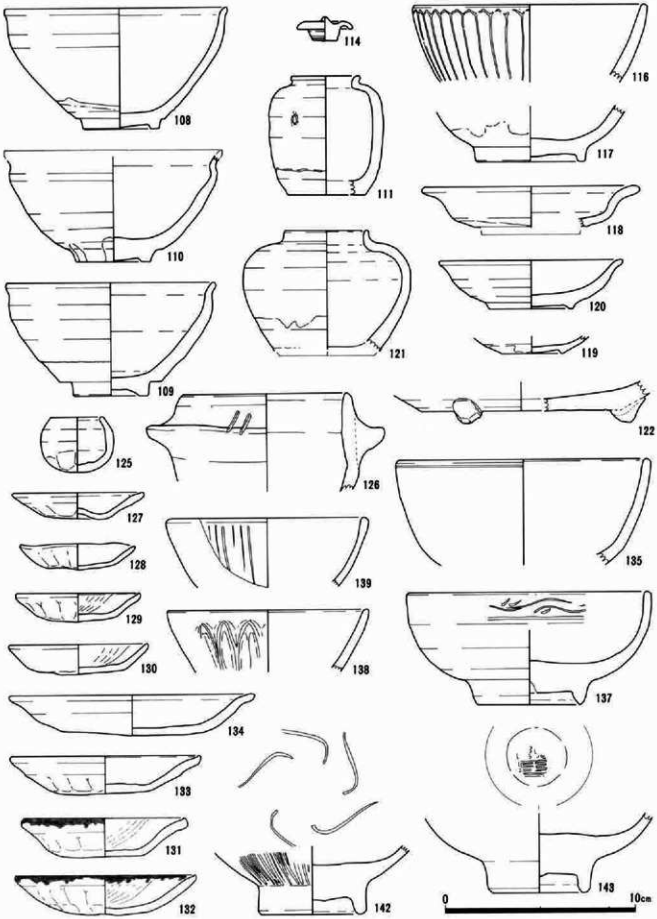




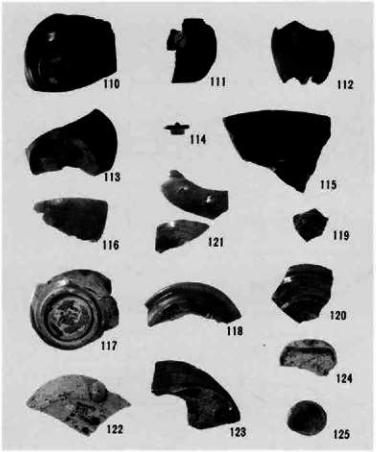


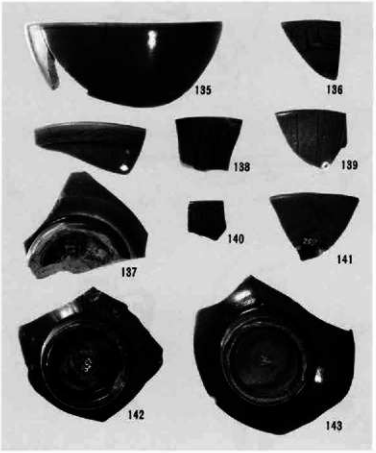
Ⅳ期整地層　越前焼甕85～90　壺91～93　鉢96～103　擂鉢105～107　丹波焼壺95

第20図　第15・25次調査遺物(6)



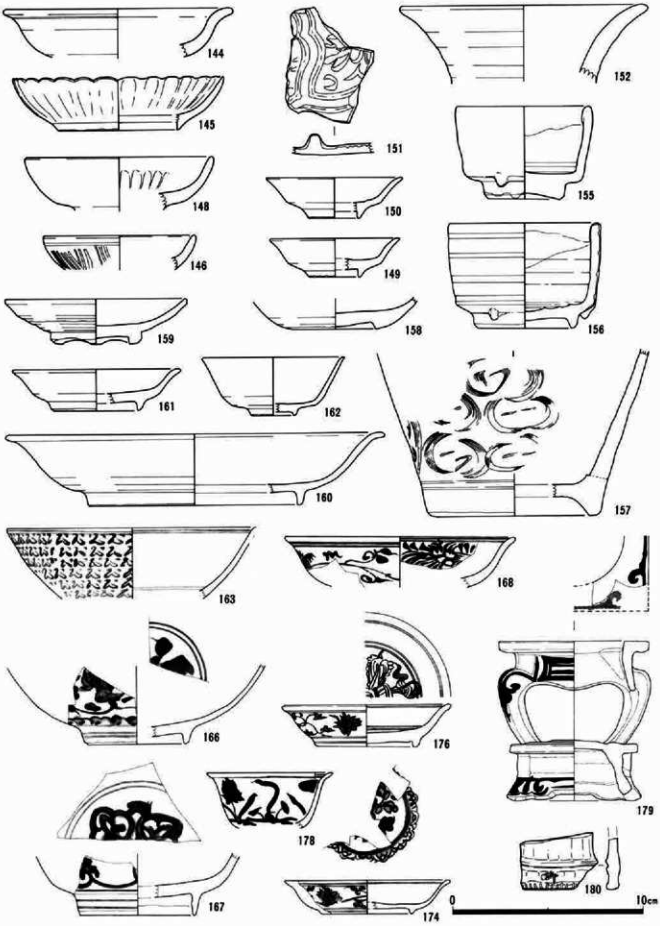
鉄釉碗108～110　茶入111　蓋114　**灰釉**碗116・117　皿118～120　茶入121　鉢122　**土師質**小壺125　土釜126　皿127～134
青磁碗135・137～139・142・143



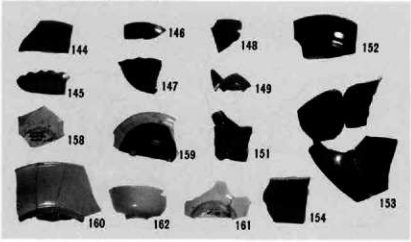


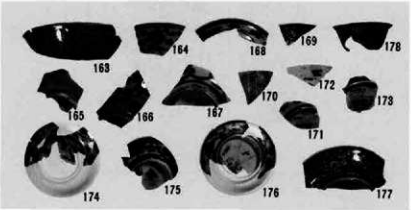
Ⅳ期整地層　**鉄釉**碗108～110　茶入111・112　壺113　蓋114　擂鉢115　**灰釉**碗116・117　皿118～120　茶入121　鉢122　瓶123
土師質耳皿124　小壺125　土釜126　皿127・131・132・134　**青磁**碗135～143

第21図　第15・25次調査遺物(7)



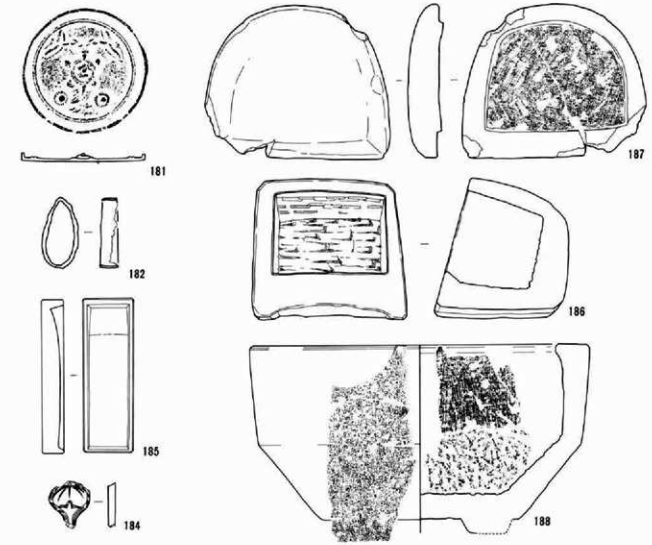
青磁皿144～146・148　坏149・150　盤151　瓶152　香炉155・156　**青白磁**梅瓶157　**白磁**皿158～161　坏162　**染付**碗163・166・167　皿168・174・176　坏178　器台179　**朝鮮**(？)花生180



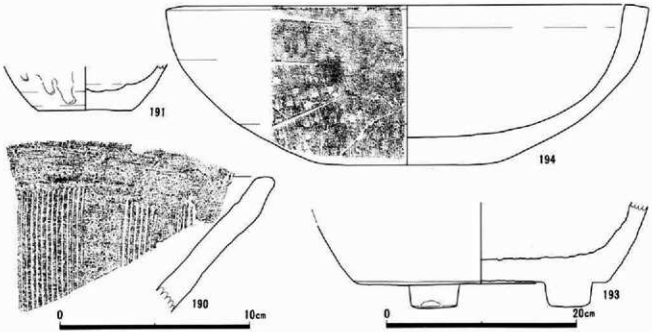


Ⅳ期整地層　**青磁**皿144～148　坏149　盤151　瓶152　壺153・154　香炉155・156　**青白磁**梅瓶157　**白磁**皿158～161　坏162
染付碗163～167　皿168～177　坏178　器台179　**朝鮮**(？)花生180

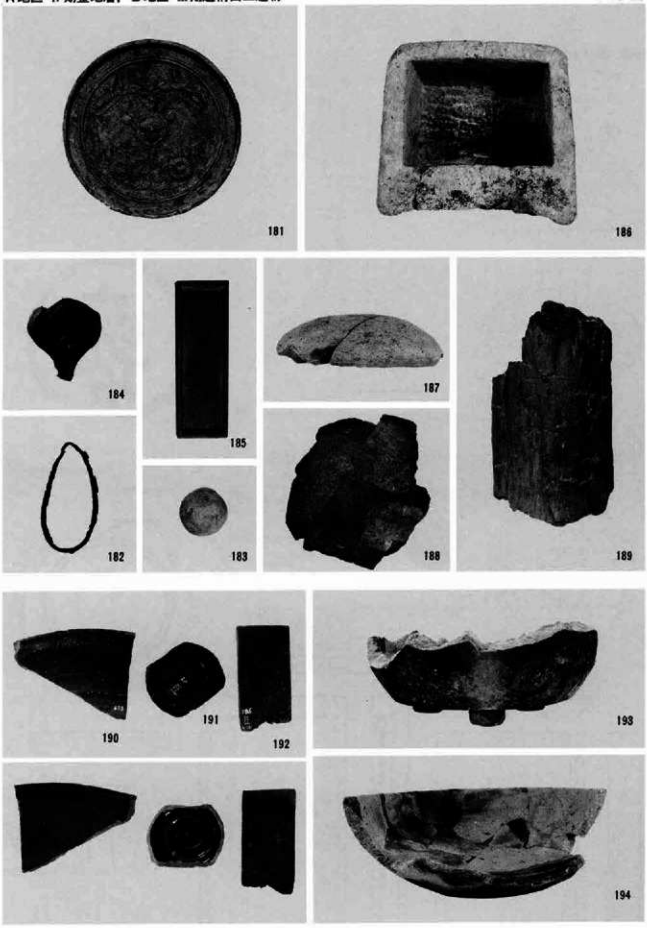
第22図　第15・25次調査遺物(8)



B地区 SE434

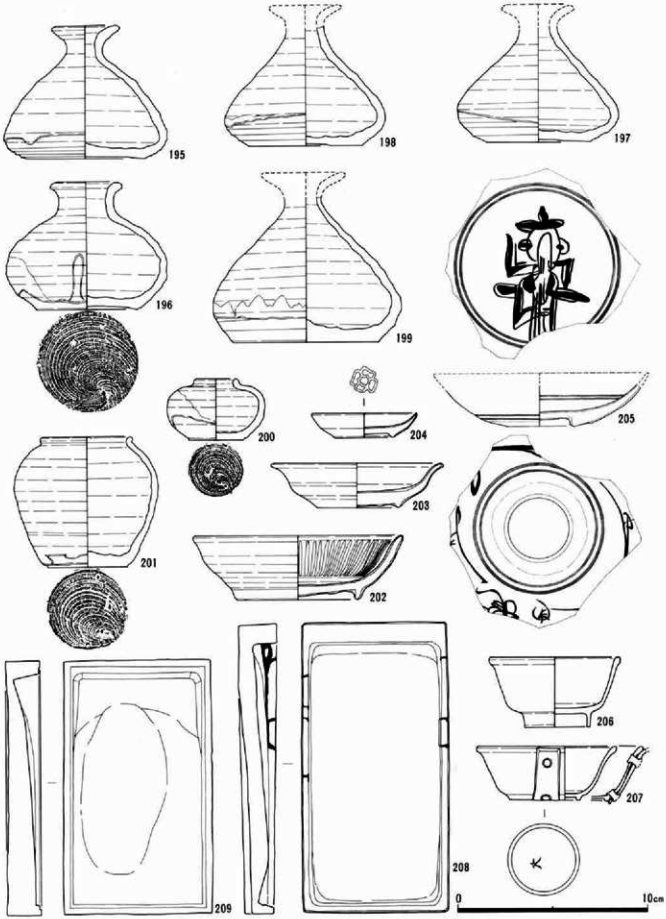


金属銅鏡181　青金182　**その他**墨黒184　**石製品**硯185　バンドコ186・187　鉢188　**越前焼**擂鉢190　**鉄釉**壺191　**石製品**鉢193　捏鉢194



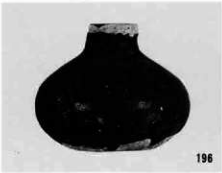
A地区Ⅳ期整地層　**金属**銅鏡181　青金182　鉛玉183　**その他**堆黒184　**石製品**硯185　パンドコ186・187　鉢188　盆石189
B地区SE434　**越前焼**擂鉢190　**鉄釉**壺 191　**石製品**硯192　鉢193　捏鉢194

第23図　第15・25次調査遺物(9)

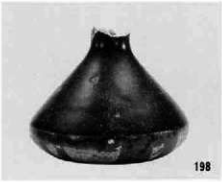


鉄釉瓶195～199　小壺200・201　**灰釉**皿202～204　**染付**皿205　**金属**鋺206・207　**石製品**硯208・209

195


196

197


198

199

200

201

206

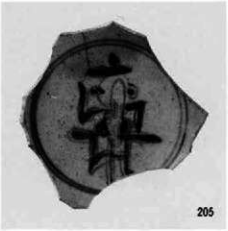
207

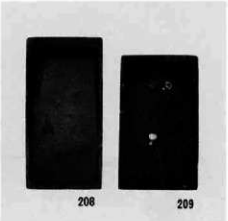
210

202

204

203

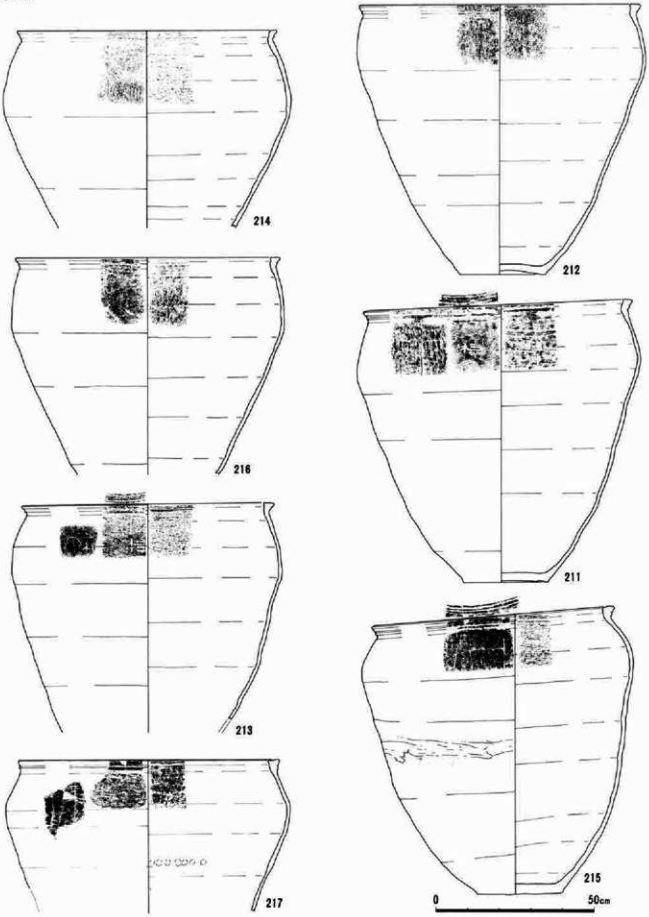

205


208 209

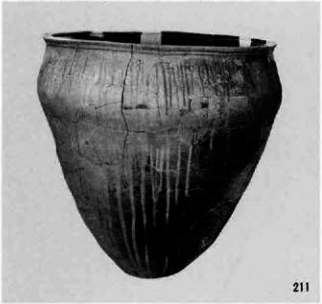
S K450 鉄釉瓶195～199 小壺200・201 灰釉皿202～204 染付皿205 金属銅椀206・207 石製品硯208・209 鍾状石製品210

第24図　第15・25次調査遺物⑩

SK452



越前焼211～217


211

212

213

214

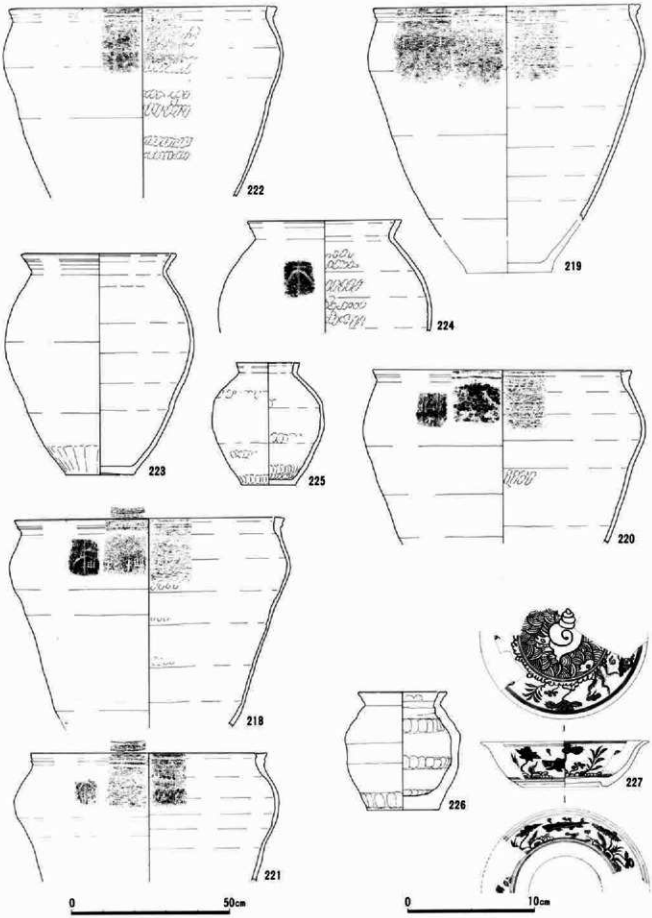
215

216

217

SK452 越前焼壺211～217

第25図　第15・25次調査遺物(1)

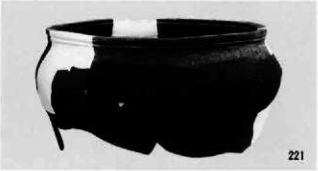


越前焼甕202～209　小壺210　染付皿211

218

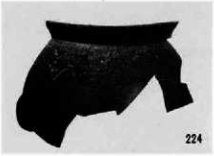
219

220


221

222

223


224

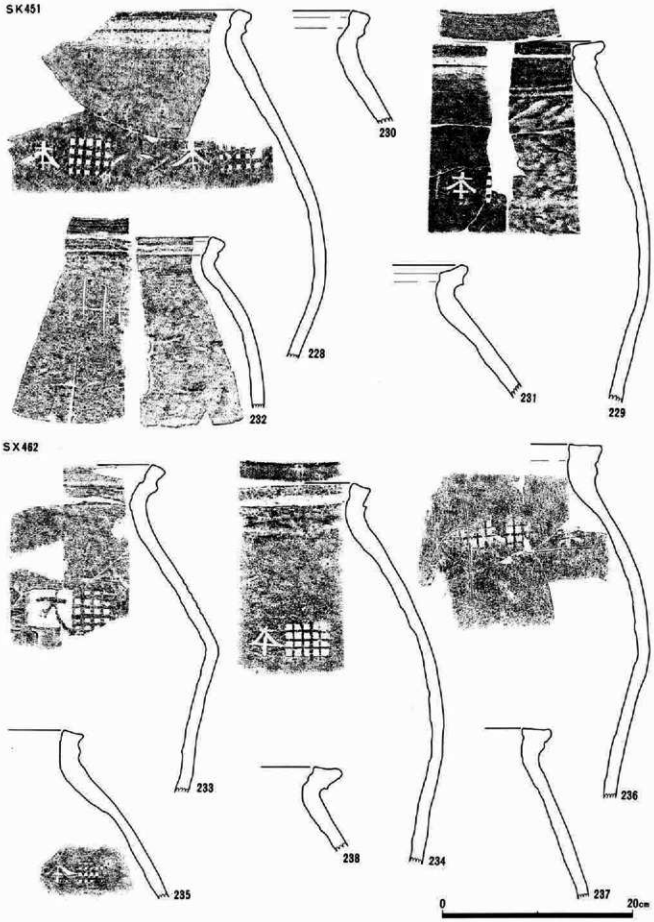
225

226

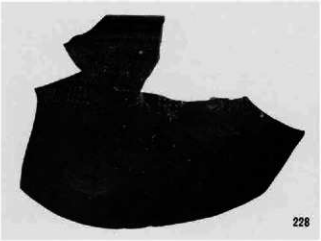
227

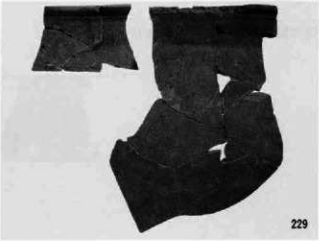
S K452 越前焼甕218～225　小壺226　染付皿227

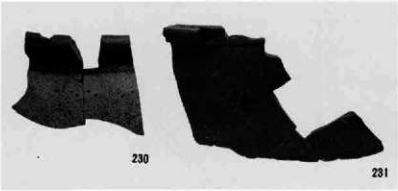
第26図　第15・25次調査遺物(12)

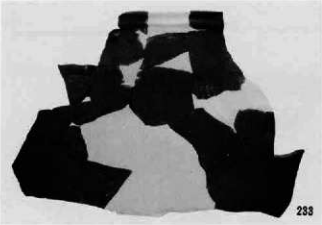


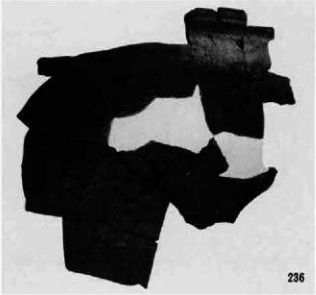
越前焼実228～238

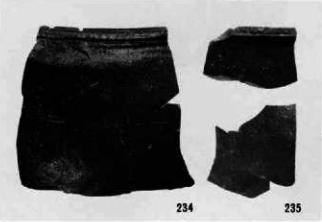


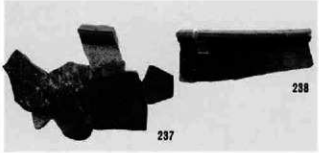






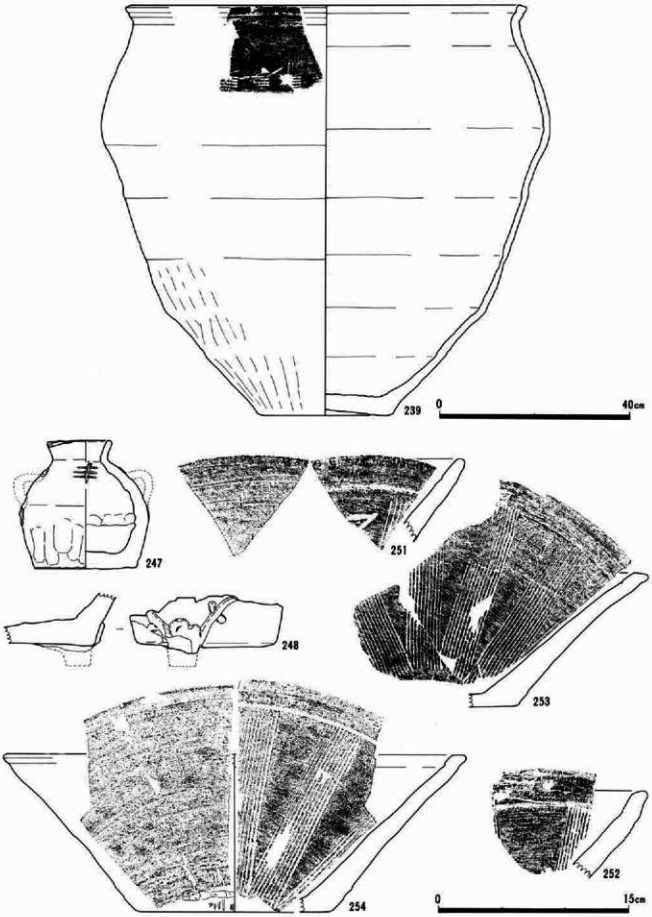




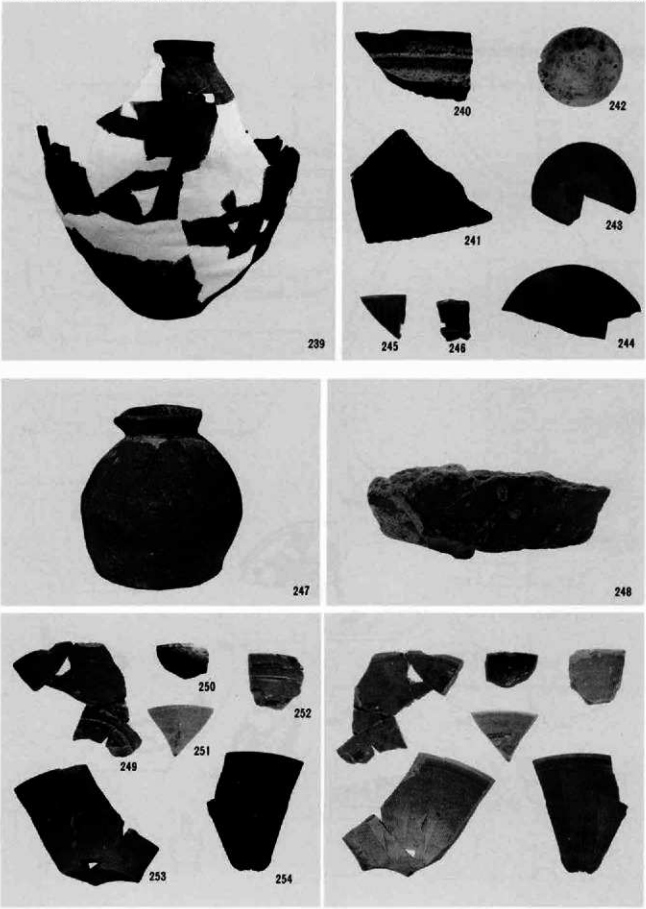


S K451 越前焼壺228～232 S X462 越前焼壺233～238

第27図　第15・25・調査遺物(13)

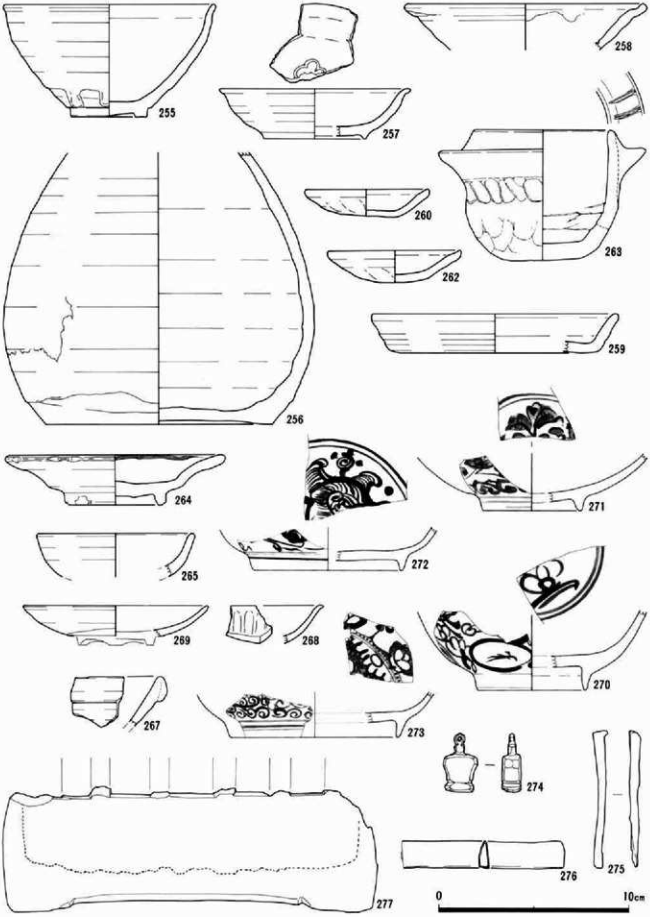


越前焼甕239　壺247　鉢248　擂鉢251～254

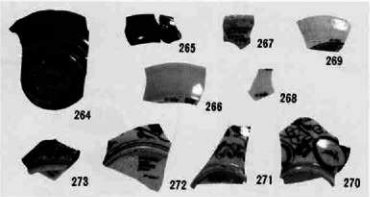


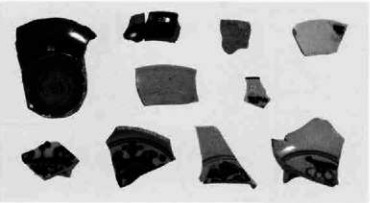
SX462 越前焼壺239 SF443 越前焼壺240・241 土師質皿242～244 青磁碗245 皿246 Ⅲ期整地層 越前焼壺247 鉢248～250 擂鉢251～254

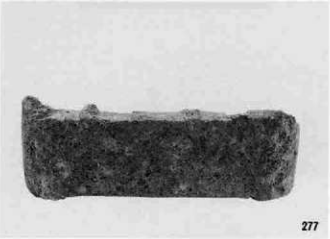
第28図　第15・25次調査遺物⑭

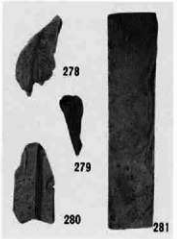


鉄釉碗255　壺256　**灰釉**皿257　坏皿258　**土師質**皿259・260・262　土釜263　**青磁**皿264・265　**白磁**碗267　皿268・269　**染付**碗270・271　皿272・273　**金属**分銅274　釘275　小刷276　**石製品**ベンドコ277



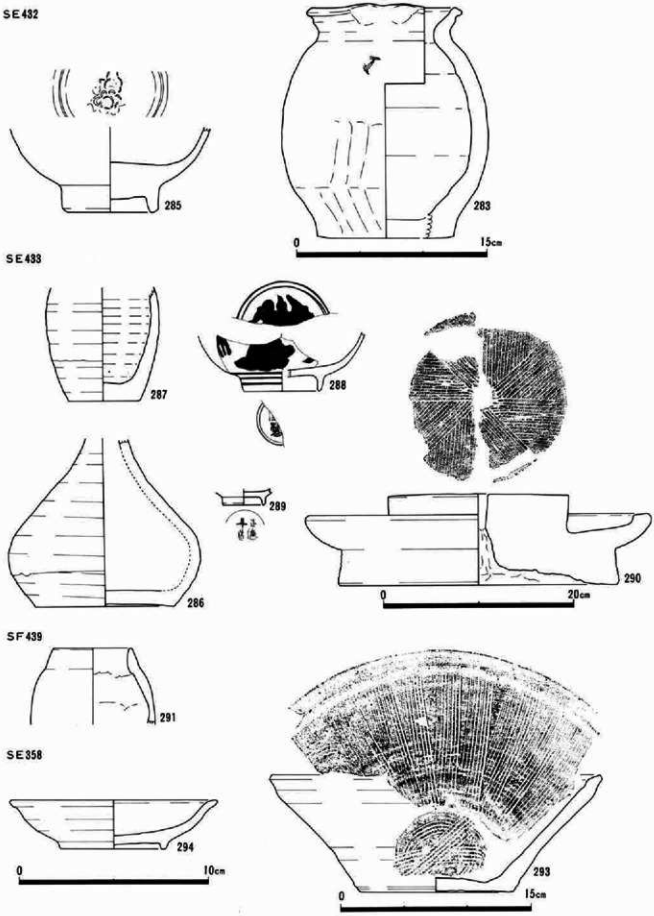




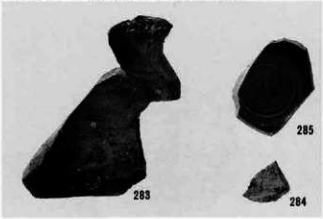


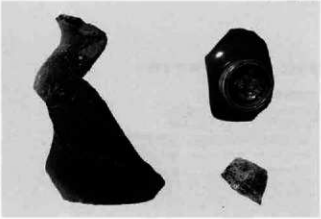
Ⅲ期整地層 **鉄釉**碗255　壺256　**灰釉**皿257　鉢皿258　**土師質**皿259～261　土釜263　**青磁**皿264～266　**白磁**碗267　皿268・269
染付碗270・271　皿272・273　**金属**分銅274　釣275　小柄276　**石製品**バンドコ277　砥石278～281　**その他**ルツボ282

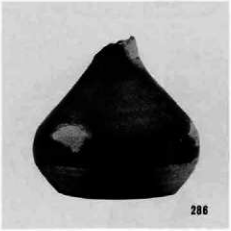
第29図　第15・25次調査遺物(5)

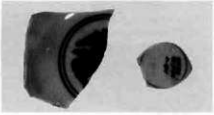


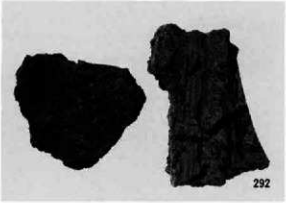
越前焼壺283　青磁碗285　鉄釉瓶286　茶入287　染付碗288　坏289　石製品茶臼290　土師質小壺291　越前焼擂鉢293　灰釉皿294

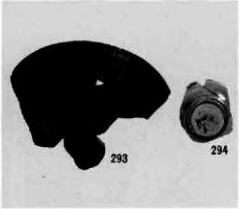


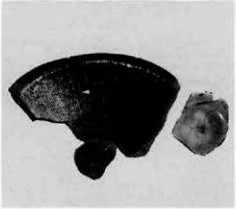








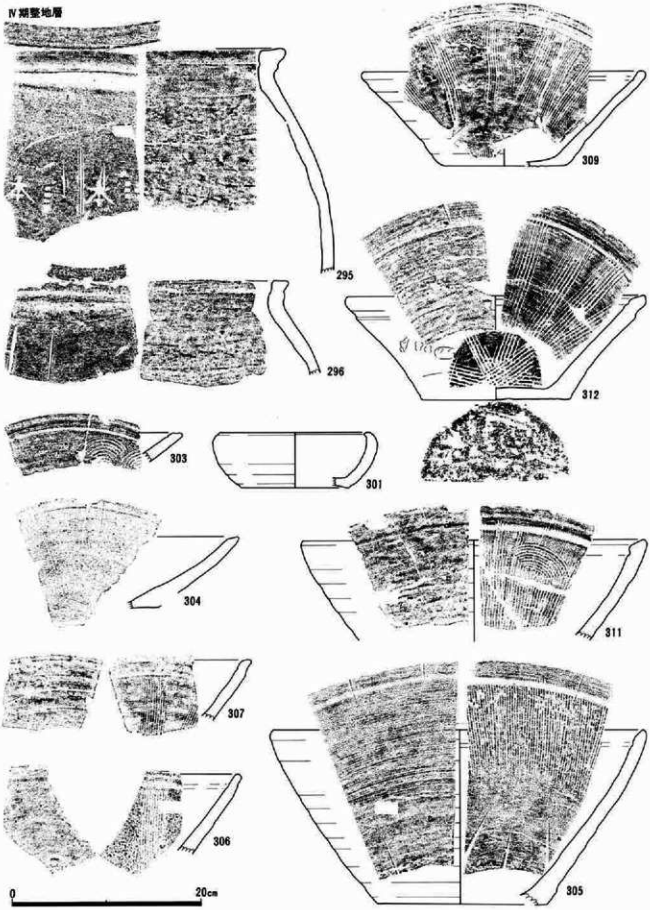




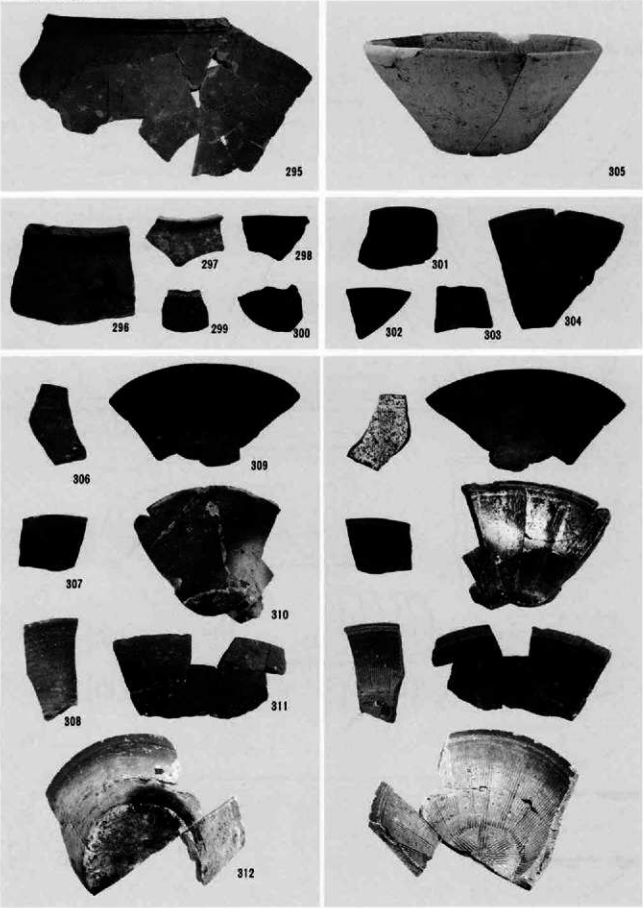
[S E 432] 越前焼壺283 土師質脚付碗284 青磁碗285 [S E 433] 鉄釉瓶286 茶入287 染付碗288 坏289 石製品茶臼290
[S F 439] 土師質壺291 [S F 440] 壁土292 [Ⅳ期 S E 358] 越前焼擂鉢293 灰釉皿294

第30図　第15・25次調査遺物⑯

Ⅳ類整地層

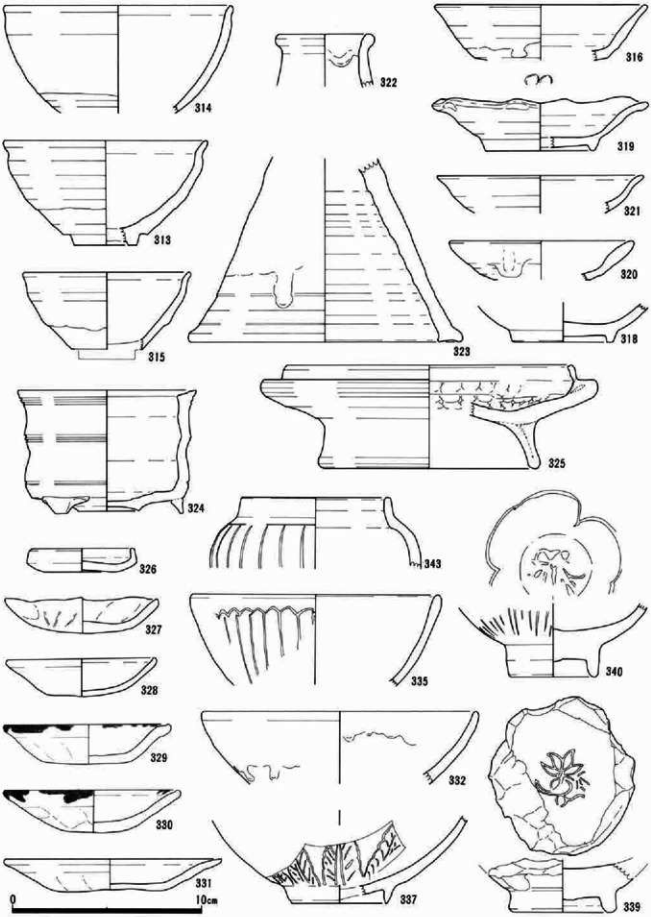


越前焼甕295・296　鉢301・303・304　擂鉢305～307・309・311・312

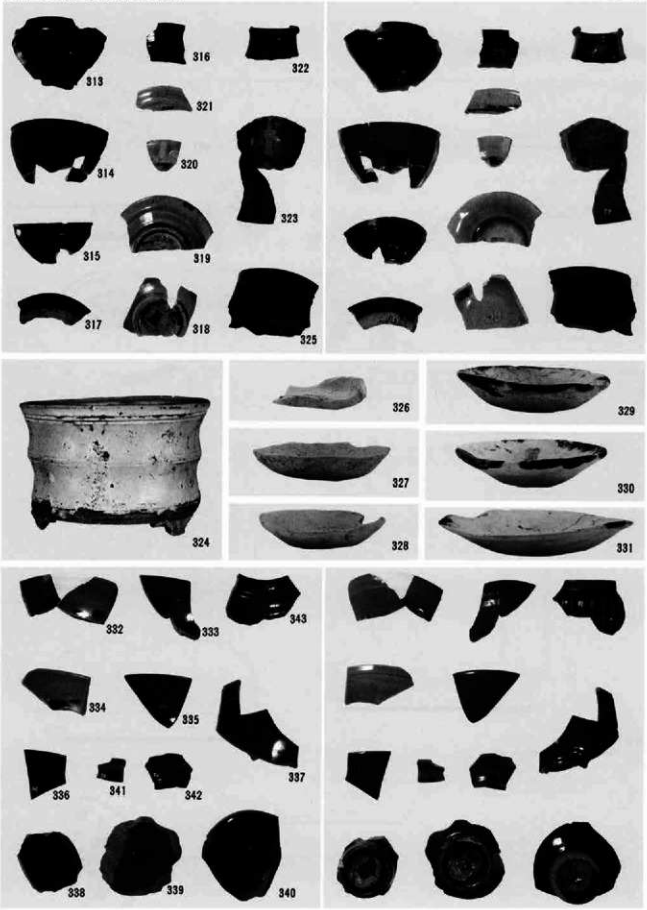


Ⅳ期整地層　越前焼甕295・296　壺297・300　鉢301～304　擂鉢305～312

第31図　第15・25次調査遺物(17)

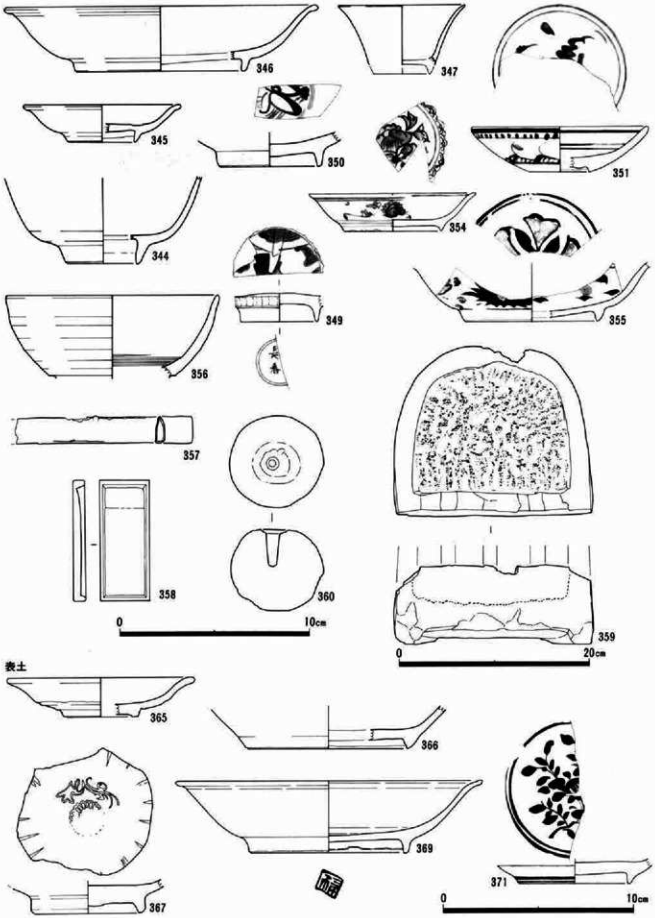


鉄釉碗313～315　皿316　**灰釉**碗318　皿319～321　鉢322・323　香炉324　**瓦質**瓦塔325　**土師質**皿326～331　**青磁**碗332・335・337・339・340　壺343

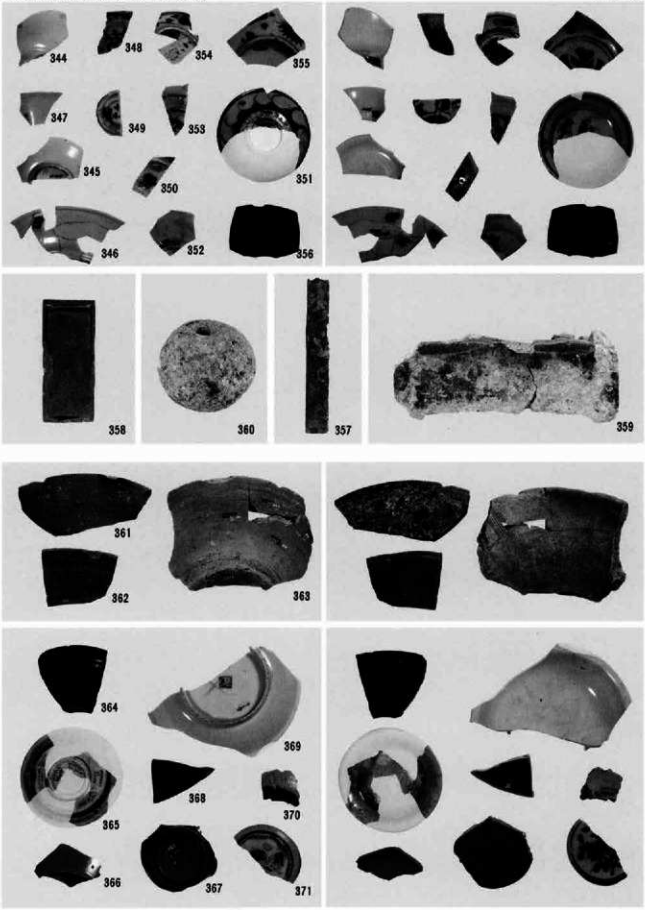


Ⅳ期整地層　**鉄釉**碗313～315　皿316　香炉317　**灰釉**碗318　皿319～321　瓶322・323　香炉324　**瓦質**瓦壇325
土師質皿326～331　**青磁**碗332～340　皿341・342　壺343

第32図　第15・25次調査遺物⑱



白磁碗344　皿345・346　坏347　**染付**碗349・350　皿351・354　**赤絵**皿355　**朝鮮**碗356　**金属**小柄357　**石製品**硯358　パンドコ359　錘状石製品360　**灰釉**皿365　**青磁**皿366・367　**白磁**皿369　**染付**皿371



B地区Ⅳ期整地層　白磁碗344　皿345・346　丸347　染付碗348・349・350　皿351～354　赤絵皿355　朝鮮碗356　金属小柄357　石製品硯358　パンドコ359　擂状石製品360　表土　越前焼鉢361　擂鉢362・363　鉄釉碗364　灰釉皿365　青磁皿366・367　鉢368　白磁皿369・370　染付皿371

Ⅲ、第 24 次 調 査

Ⅲ．第24次調査

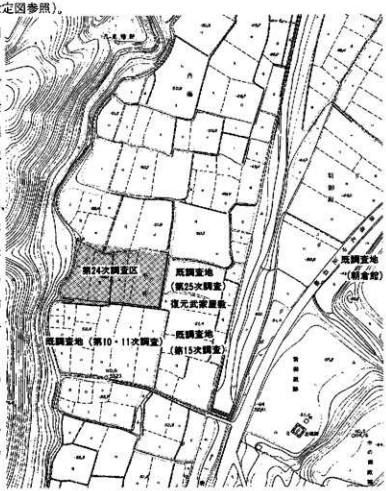
1．調査概要

本調査区は，一乗谷のほぼ中央部，朝倉館が位置するところに近く，川を挟んで西側の緩やかな傾斜地に位置している。既に発掘，報告が終了している「新馬場」，すなわち第10・11次調査区の北側の区画にあたる。又，東側には「復元武家屋敷」があり，今回前半で報告している第15・25次調査区があるところでもある。字番は城戸ノ内町24字平井にあたり，朝倉氏の重臣クラスの屋敷が連続して建ち並ぶ地区である。

発掘調査は動力用の電線工事や作業用の移動式テントの設置等の準備を終えて，耕土とり作業から開始することとし，５月１日より７月31日まで行った。調査面積は，遺構の延長をチェックするためのトレンチ等を含めて，全体で2,200㎡に及ぶ（付図第24次調査全測図，調査日誌抄参照）。地区割りの設定については，先の第10・11次調査において使用した基準点No.６（53.23ｍ）を使用し，南側から北に向かってＢ～Ｐとし，一乗谷川側から山側に向かって20～42のそれぞれに３ｍ×３ｍのグリッドを設定した。土層セクションベルトは南北のセクションを38ラインと27ラインに，東西のセクションをＨ列に設定した（挿図10調査グリッド設定図参照）。

発掘は川側の南北幹線道路に面する土塁から掘り下げを開始し，順次山側へ平行移動するかたちで行った。一旦折り返して遺構の検出を行いながら，部分的には深掘りのトレンチを入れて土層の確認を行い，下層の有無を見た。特に調査区の中央より川側，すなわち，東半分は水田の耕作によって削平されてしまったのか，遺構の遺存状況は良くなく，この部分については更に下層の掘り下げを集中的に実施した。その結果，中央部分では区画上塁の造成以前の遺構と考えられる，柵列や建物跡が検出された。

一乗谷の発掘調査は，本調査以前に，第10・11次調査地の「新馬場」，第15・25次の「平井」地区，があり，一乗谷川を挟んで東側に



挿図８　第24次調査区位置図

は，当主である朝倉氏の館跡，或は中ノ御殿をはじめ一族の居館群がある。それぞれの調査の成果については『調査概報』，『本報告書』等で明かにされてきている。

又，本調査区周辺には『一乗谷古絵図』や水田の字名によって知られるように，北から「斉藤治部大輔跡」，「市原」，「鰐淵将監跡」，「半井」，「朝倉角三吾」，「河合安芸守」等の武将名があり，一乗谷川を挟んで東側の「朝倉館」周辺には「中ノ御殿」，「新御殿」，「西御殿」，「前波九郎兵衛」，「三田崎備中守」などがあり谷中央部の屋敷群のおおよその配置についての推定が行われていた。又，歴史地理学的調査によっても，現在まで水田の畔や区割りに朝倉氏時代の屋敷割や土塁等の遺構が遺存していることが推察されていた。今回の調査では，そうした，従来の研究の成果や発掘の結果を受けて，武家屋敷の個々について発掘を実施し，武家屋敷の構造の実態，成立の時期，或は内部の，個別の建物の配置や構造を微細に解明していくことに目的がおかれた。

ここで，南溝に並ぶ武家屋敷の遺構の概要について，第10・11，54次調査の成果を踏まえて略述し，本調査区と関連することに触れてみたい。

第10・11次調査区，すなわち「新馬場」における武家屋敷の様相は，南北に走る幹線道路ＳＳ260に面しており，北・東・南の三方に土塁を有する。そのうち北側の土塁は本調査区の南土塁と共有しており，東側の道路に面する土塁もそのまま延長したかたちで本調査区の東土塁を形成している。面積は約3,000㎡に及ぶ。検出された遺構は概ね３時期に区分され，下層のⅠ期は南側土塁が造成される以前の時期と考えられる。Ⅱ～Ⅲ期は滅亡期に至るまで継続され，町割にのっている時期である。

調査区の中央には屋敷を東西方向に貫く柵列が走り，これを境として各遺構は南北の２区画に大きく区分される。そして，北側の区画には石積施設，井戸，掘立柱建物など雑舎的な建物や施設が並ぶところから，内向きの空間と考えられる。南側の区画には，後世の攪乱があってはっきりしないことが多いが，庭や礎石建物が見られるところから，表向きの空間と考えられる。

同じようなことが，次の第54次調査区の武家屋敷にも言え，門を入ったすぐの，屋敷の前半分が表向きのいわゆる接客空間，後ろ半分が内向きの空間と考えられる。第54次調査区は「ショーゲドン」と称された場所で，以前から朝倉氏の家臣「鰐淵将監」の屋敷であろうとの予測が立てられていたところでもある。調査の結果は予測通り，武家屋敷であることが確定し，面積こそ1,800㎡足らずで第10・11次

神図９　第54・10・11・24次調査区遺構模式図

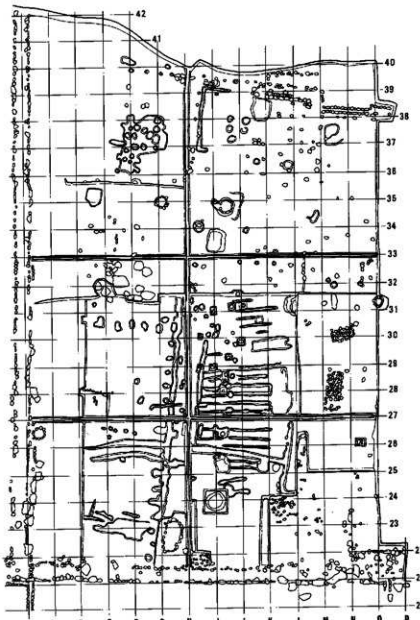
調査区と比較して少ないものの，朝倉氏の有力家臣の屋敷であるという予測とは矛盾しないものである。

又，前述しているが，本調査区は各遺構の時期が概ね３時期に区分され，Ⅰ期は土塁築造以前の時期が想定され，続いてⅡ期には北・南・東側の土塁が築造されるが，Ⅲ期になると北側の土塁が取り払われるというように，区画の移動が見られることがわかっている。同様に第10・11，54次調査区の間でも区画の移動が見られることがわかっている。こうした移動がどのような意味を持っているのか，今後の調査の中で明らかにし，道路や土塁による区画の造成や屋敷の建物との関連，ひいては「町割」の問題へと昇華して行かねばならない。この点については，「小結」のところでも再度取り上げて述べることにしたい。

ここで調査区における基本層序について述べておく。

調査区の東西方向については，ほぼ中央部のH列にセクションを設定した。土層図は第33図に示した通りである。基本的には表土・床土を排除した後に，その下位に山際の方から小礫混じりの「黄灰色土層」があり，下層を検出した調査区の中央部では一段下位に「暗褐色土層」がある。下層の柵列としたものは，概ねこの暗褐色土層の下位から掘り込まれているが，前述のⅡ期とした時期の柵列が暗褐色土層から掘り込まれている場合もあり，一様ではない。土層は中央部より東側では砂利層となり，東土塁SA265の下位に斜行している。

南北方向のセクションについては27・33ラインの２本を設定した。山側の33ラインでは，床土の下位に「茶褐色土層」がある。東西セクションの「黄灰色土層」に対応する。この層の下位にⅢ期の遺構が造成されている。調査区の北側，ＳＢ838，ＳＸ862を境に土層が変



挿図10　第24次調査グリッド設定図

わり，砂を含む「茶褐色土」と炭混じりの「灰色粘土層」になり，レベルも下がる。27ラインでは，床土の下位に砂利を含む「砂質土層」がある。これは後世の攪乱などに伴うものであろう。この層は北半では「暗茶褐色小礫混じり土層」となる。この下位にⅠ期の柵列が掘り込まれる「暗褐色土層」がある。

調 査 日 誌 抄

第24次調査(1977年5月1日～7月31日)

4・26　ベルト・コンベアー運搬，作業小屋の設置。
4・27　動力用電源の配電盤設置。排水用の溝掘り。
4・28　排水用溝掘り。石英の石除去作業。

＊　＊　＊

5・1　本日より調査開始。表土・耕土除去作業に入る。
5・16　第17次調査区（サイゴージ）の整備写真撮影のため，耕土除去作業中断。
5・19　耕土除去作業再開。
5・20　地区割り設定。杭うち作業。基準点は№6（53.23m）。
5・21　石垣除去作業。
5・26　南北道路に面する土塁(東土塁)の検出に入る。第15次調査で検出した上塁付近での調査区の屋敷における門に相当することが判明する。
5・27　門跡の検出。道路に面する土塁の内側を掘り下げる。あまり，遺構の遺存状態は良くない。H22・23付近で小トレンチを入れる。遺物を含む層は確認されず，小礫混り暗褐色土であった。
5・31　24～27ラインの床土除去。遺構面の検出を行う。中央の33ラインで柱穴確認。
6・1　26～29ラインの掘り下げ。M27で井戸跡確認。O列で礎石を複数確認。
6・2　28～30ラインの掘り下げ。礎石確認。
6・3　30・31ラインの掘り下げ。
6・4　32・33ラインの掘り下げ。この付近は東西方向に段差があり，山側が高い。E・F32付近で廃跡を検出。
6・6　32～35ラインの精査を行う。ガラ石除去。I34で石積施設検出。
6・7　35～38ラインの掘り下げ。石列，礎石建物など確認。K36付近で鉄付皿，天目台など遺物多数出土。
6・8　37・40ラインの掘り下げ。本日で調査区全体の上層部分の掘り下げが終了する。F37付近で盛ピット検出。
6・9　調査区西側部分の掘り下げ。山際にある畔は後世につくられたものと判明。G35の井戸を完掘する。
6・10　調査区西側の畔に接する盛り土部分を除去。
6・13　調査区西側の山際で南北方向の溝，敷石部分を検出する。I35の井戸を掘り下げる。
6・14　I35井戸の掘り下げ。漆椀や曲物，土器が出土。
6・15　I35の井戸掘り下げ。調査区北側の土塁と見られる部分を精査したが現代の製品が含まれており，かつ下位の面に瓦土が落り込んでいることからも，この高まりを土塁とは判断できず。
6・16　I35の井戸掘り下げ。排水作業。
6・20　ガラ石除去作業。
6・21　調査区の南側土塁の検出作業。北面は比較的残りが良い。
6・22　38～41ラインの遺構検出作業。I35井戸掘り下げ。下底で木枠を検出。井戸枠板石，一輪挿し，藁灰の蓋，白磁皿，「いへ」木札3枚出土。J38付近で盛ピット群検出。
6・23　36～38ラインの掘り下げ。遺構面の検出作業。
6・27　36ラインの掘り下げ。南側の土塁端に砂を確認。土塁に伴う溝底と考えられるが，上面が削平されておりプランは不明。中央部でピットをいくつか確認する。北側の礎石建物付近に炭層を検出する。東側へ向かって傾斜していることが判明。
6・28　33～36ラインの掘り下げ。タメマスやピット，柱痕などを検出するが，検出面が削平をうけており，はっきりしない。
6・29　32・33ラインの掘り下げ。特に廃跡の砂層の精査を行う。
7・4　廃跡のガラ石除去。O31で井戸を新たに検出する。
7・5　30・31ラインの掘り下げ。この部分は廃跡のある部分より一段低くなっている。柱穴を数カ所で検出。
7・6　28～30ラインの掘り下げ。O31の井戸掘り下げ。
7・7　26～28ラインの掘り下げ。北側では砂利層があり，遺構は検出できない。南側の端で井戸を検出。
7・8　26・27ラインの掘り下げ。北半部分で下層の掘り下げを実施。直線状の溝を数本検出。又，一段上の層で，石敷面を検出。
7・15　21～25ラインの掘り下げを行う。南北道路に面する東土塁は内側の遺存状況が良くない。C22・23で楕円形の石積施設を検出する。中央部分で下層のピット群検出。
7・18　調査区北東隅部分の掘り下げ。排水作業。
7・19　遺構写真撮影のため，発掘区の清掃作業に入る。
7・26　遺構写真撮影実施。
7・27　〃
7・28　セクション，エレベーションの実測作業。
7・29　〃
7・31　器材の撤収。調査を終了する。

2．遺構（第33図～第41図，PL.33～PL.43）

検出された遺構には，土塁2，門1，柵列8，礎石建物13，溝10，井戸4，石積施設1，庭1，土壙3，石敷遺構3，甕埋設遺構2などがあり，その他に「布堀」又は「宵暗渠」と見られる溝状遺構が，20本以上確認されている。これらの各遺構は概要の項でも述べたように，それぞれ3期に区分される。今，これらの各遺構を時期別に表にあらわすと，以下のようになるであろう。

表9　時期別遺構一覧

	第Ⅰ期の遺構	第Ⅱ期の遺構	第Ⅲ期の遺構	
			$Ⅲ_1$	$Ⅲ_2$
土塁		SA263　SA265	→	→
		北土塁？		
柵列	SA836　SA840	SA881	SA845	SA844
	SA846　SA879			
	SA880			
土塀			SA857 →	→
門		SI821 →	→	→
建物	SB842　SB843	SB841	SB831　SB832 →	→
			SB835　SB837 →	→
			SB833	SB830　SB838
				SB839　SB890
道路		SS260 →	→	→
石組溝	SD822　SD823	SD316　SD828 →	→	→
	SD824　SD825		SD826　SD884	SD827
	SD868			
暗渠		SZ275　SZ913 →	→	→
井戸		SE850	SE848　SE849	SE847
石積施設				SF851
宵暗渠	SX866　SX867			
石敷			SX864　SX871	
			SX873　SX874	
石列			SX889	SX856　SX859
				SX860　SX862
庭			SG829 →	→
土壙				SK852？SK853
甕ピット			SX855	SX854　SX861
その他	SX882　SX883	SX870？SX888？		SX863　SX872
	SX869			

〔第Ⅰ期の遺構〕

屋敷を区画している土塁築造以前の造成にかかるものである。遺構の切り合い関係や，方向の若干の違いなどから，数度の建て替えが考えられる。概要の項で土層に関して触れたように，Ⅱ期・Ⅲ期の遺構は床土より下位に位置する砂利・礫などを含む「暗褐色土」層上に造成されており，Ⅰ期の遺構は明かに，この「暗褐色土」層の下位に位置する。以下にⅠ期の遺構について述べる。

SX866,867　いずれもほぼ南北に平行に走る浅い溝である。溝は砂利で埋められており，間隔が0.9m前後であることから配水を目的とした，「盲暗渠」とも推定される。合計20本以上が確認されるが，幅や方位がすべて同じではなく，一部のものには建物の壁，土台などの下部に施される「布堀」の可能性もある。これらの溝は概ね南北に走っており，ＳＡ881の柵列とはちょうど90度の角度をなす。

SD822　本来，石組の溝であるが，ほとんどが抜き取られた状態でなくなっていた。その一部がわずかに残る。ＳＸ874付近で北に曲がっている。西へはセクション用の畔を超えて2.5m分ほど続くようである。

SD825　幅0.6～0.7mの素堀りの溝でＳＤ822に直交して接続している。約22m分を検出した。その北半はガラ石，東西の畔のセクションを超えて南半では川砂利で埋まっていた。ＳＤ868が隣接して，東側に走る。ＳＢ842付近で検出されたＳＤ823が東側に延びて，このＳＤ825と直交している。

SD824　調査区の中央をＥ－W23°Ｓの方向に走る，素掘の溝である。25m分を検出した。その東側部分は柵列ＳＡ879，880などで攪乱されている。従って，上下の関係から見るとＳＡ879，880よりは下位とみることができ，少なくとも１時期は古いことが言える。

SA846　前述のＳＤ824を埋め立てて造られた柵列である。床土の下位に安定的に広がっている「暗茶褐色小礫混じり土」層の下位より掘り込まれている（土層図参照）。長さ27.7m（17間×1.63m）を検出した。南側に引き倒した抜取り穴があり，又，根石が残っている柱穴もある。柱痕数は16カ所である。重複，切り合関係はＳＡ846→ＳＡ879。

SA836　ＳＡ846にほぼ直交して造成された柵列である。10m分を検出した。

SA840　ＳＡ846の北側に７ｍの間隔をおいてほぼ平行に造成された掘立ての柵列である。柱穴には根石を据えている。５カ所が確認されている（1.87ｍ×４間）。東端で北に折れ曲がっている。

SB842　柵列ＳＡ846と方位を同じくしており，２間（3.7ｍ）×１間（3.7ｍ）の掘立柱建物である。この建物はＳＢ843やＳＡ840とも方位を同じくしており，一連の建物と見ることができよう。

SB843　１ｍ×3.4mの礎石建物で，梁行方向に浅い「布堀」を施している。

SX869　溝ＳＤ825，868の上に重なるように造成された掘立柱建物と考えられる遺構である。間口3.5m，奥行き4.75mをとることができる。柵列ＳＡ846と方位を同じくしており，同時期か近い時期の所産と考えられよう。

以上，Ⅰ期の遺構をみてきたが，これらの遺構を整理すると，

①先ず，直交して交わる溝ＳＤ822，825，868がある。建物の周囲に掘られた雨落溝であろうか。

②続いて，これらの溝を切るかたちでＳＤ824が造成される。建物の区画はこの溝によって北と南に折半されたようなかたちとなる。

③この溝を埋め立てて，柵列ＳＡ846を中心にしたＳＢ840やＳＢ842，843，ＳＸ869が造成された時期

がある。ただ，ＳＤ824とは方位がほとんど同じであることから，時間差をおかずに継続的に造成された印象を受ける。

④方位を変えてＳＡ881を中心に，「盲暗渠」あるいは「布堀」と見られるＳＸ866，867が造成される，と考えられる。このＳＡ881についてはⅢ$_2$期としたＳＢ839などと同じことからⅢ期まで下がる可能性もある。

〔第Ⅱ期の遺構〕

屋敷を区画している土塁，南北道路が造られた時期である。南土塁や東土塁はそのままⅢ期にも引続き使用される。門ＳＩ821も同様と見られる。この時期に，北土塁が造成されているものと考えられるが，前述したように発掘調査では確認することができなかった。従って，推定の域を出ないことではあるが，ＳＤ828とＳＺ913の間にほぼ直交して取り付き，ＳＥ849の上を通って山裾に延びていたものと見られる。しかしⅢ期には取り払われて北側の区画と併合されたもの，との考えに立って，以下に個々の遺構について述べることにする。

SA263　第10・11次調査区（新馬場）との境界土塁で，ＳＡ261・265と直交して接続している。長さ約60ｍ，基底部幅1.8ｍを測る。石組は東側で比較的大きな石を組んでいるのに対して，山際部分では小さな石を細かく組んでいる，という違いが見られる。石組溝ＳＤ316が並行しており，暗渠ＳＺ275を潜って排水される（第34図　南土塁エレベーション参照）。

SA265　南北道路に面した土塁で，今回検出した長さは40ｍである。0.75ｍ前後の石を横方向に均等に２段組みしている。この上はやや小振りな石が２～３石乗るものと思われる。門付近の幅は2.1ｍを測る。北端部では攪乱が見られ，形状をほとんど残さない。

SI821　南側コーナーより北に6.5ｍの位置に開く門である。屋敷内部と道路とはあまり高低差がなく，階段状の遺構は見られない。この門は外側の幅４ｍ，内側の幅2.6ｍを測り，台形に開くかたちを取る（第34図　東土塁エレベーション参照）。

発掘区北端ではＳＤ828に続く暗渠ＳＺ913がある。これについては，第25次調査区でも触れているが，溝ＳＤ828の存在によって，これに並行する土塁が西側の山裾に向かって延びているものと考え，ここまでをこの屋敷の北側の範囲とする。開口は40ｍとなろう。調査段階では北側土塁は明確には検出できず，恐らく次の第Ⅲ期の段階で取り除かれたものであろう。

SS260　既に第10・11次，及び15次調査で検出されている南北道路である。今回はその北側延長部分40ｍ分について発掘した。北側では若干幅が広くなっており，幅８ｍの東西道路と接続している。

SB841　発掘区のほぼ中央に位置する礎石建物である。礎石列４カ所について検出した。1.92ｍを１間としているようである。その他にも礎石が散見されるが，まとまりはなくつながらない。

SD316　土塁ＳＡ263に並行する溝で，井戸ＳＥ850付近まで確認できるが，それより西側では不明である。後世の攪乱が考えられる。

SD828　2.3ｍ分を検出した。ゆるく円弧を描きながら西へ延びているようである。土塁に近い方は底石を敷いている。通常，土塁中に造成される暗渠は，排水性向上の目的から溝底に石を敷くことが多い。ＳＤ828の場合もそのように考えると，この時期に北土塁がＳＤ828の上を走っていたとも言える。

〔第Ⅲ期の遺構〕

この時期は北上泉を取り払った時期を想定し，調査区の北側部分に拡張されたものと考える時期である。西側山裾部分と北側で比較的遺構の遺存度が良い。遺構群の方位や層位の上下関係から，更に小2期に細区分が可能である。

＜$Ⅲ_1$期の遺構＞

SB831 調査区の西側，山裾に位置する礎石建物で，この付近の主要な建物と見てよい。棟方向は，東西で8.2ｍを測る。南北はほぼ4ｍである。東半の南面には1.95ｍ×1.95ｍの「方形張り出し」が取り付き，北面には3.1ｍ×0.95ｍの「下屋」が取り付く。この下屋，張り出しが取り付く東半の柱間寸法と西半の柱間寸法は異なっており，東半2分間は1.95ｍ，西半3間分は1.4ｍである。この建物と恐らく時期的にかなり近い時期のものとみられる，別の建物ＳＢ832がある。これは礎石が2，3個しか残存せず，規模や性格などについては不明であるが，何等かの関連があるものと考えられ，小規模の建て替えを想定したほうがよいと思われる。

SA857 ＳＢ831の西側には土塀の基礎と考えられる石敷ＳＡ857がある。幅0.65ｍを測り，約5.3ｍを検出した。更にその西側には礎石列ＳＢ833がある。

SD826 「コの字」形の溝で，東西7ｍ，南北3ｍを検出した。この溝は大甕埋設遺構ＳＸ855を納めていた施設の雨落し溝と考えられる。この溝と重複してＳＢ834がある。切り合い関係から$Ⅲ_2$期の造成と考えられる。

SX855 大甕埋設遺構はピット計5基が検出された。南北の間隔は少し空き気味の感があるが，東西の間隔は，ちょうど最大径が90cm前後の大甕を据え得る位置にある。この大甕埋設遺構の北には石列ＳＸ885がある。

これら西側に集中する建物群は位置や規模等から考えて，日常雑舎的な性格を有するものと考えられる。これに対して後述の庭や付属の建物が調査区中央部に位置している。

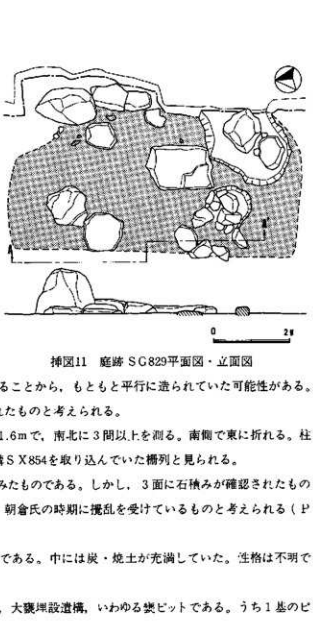
SE848 径0.95ｍの井戸で，深さは完掘できず不明である。天端石はなく，削平によって飛ばされているものと見られる（PL.42）。

SX871 ＳＢ839の礎石列で，一時期古い面より検出された。石敷と見られる部分の東端にある。発掘当初は井戸の可能性を考えて深く掘り下げて見たが，下位には石積みは見られなかった。

SX864，873，874 いずれもＳＸ871と同じ遺構面上で検出されたもので，ＳＸ864，871は長方形プランを有して一定のまとまりをなす。ＳＸ873，874はあたかも「集石遺構」の状況を呈し，「L字」形にＳＫ853の下位に向かっている。「土層図」では砂利層（「ガラ石」とした層）が東土塁に向かって傾斜している。あるいは地山に近い河川の氾濫による礫層かも知れない。

SG829 典型的な枯山水の形式に属する平庭の遺構である。8ｍ×5ｍの広がりをもって「白砂」が敷かれていたものと考えられ，この範囲が庭の規模と見られる（挿図11参照）。旧水田の畔に突出していた巨石を除いて，ほとんどが伏石である。西南部には海石を利用した，"踏蹈様"石組が残存しており，手水であろう。この庭の西側には1ｍほどの距離をおいて「四阿」と見られる礎石建物ＳＢ837が付属して建てられていたものと考えられる。2.3ｍ×1.9ｍの規模で4辺には俣間石が回っていたものと推定される。2畳敷ほどの「草庵風茶室」との見方が行われている（藤原1989）。武家屋敷と見られる遺構か

らの，平庭の検出例はこれまでに第15，40，51次調査区などがあるが，今回の遺構は，その形跡を良く残しており注目される。



挿図11　庭跡 SG829平面図・立面図

＜Ⅲ$_2$期の遺構＞

SB830　礎石建物で，5.8m(3間)×5.8m(3間)を測る。柱間寸法は1.93mと考えられる。西側で半間分の庇状の張り出しがつくものと考えられる。この建物は前述のSB831と方位をわずかに異にしており（1°2′），別の建物と考えられる。

SD827　ほぼ南北方向に走る溝で，7m分を検出した。調査区北端部で方向がズレており，石敷SA857と直線的に合致した線上にあることから，もともと平行に造られていた可能性がある。Ⅲ$_2$期の段階で，SB830の雨落し溝に改変されたものと考えられる。

SA844　掘立柱の柵列である。柱間寸法は1.6mで，南北に3間以上を測る。南側で東に折れる。柱穴には丸木の柱痕が残っていた。大甕埋設遺構SX854を取り込んでいた柵列と見られる。

SK852　当初，石積施設として掘り下げてみたものである。しかし，3面に石積みが確認されたものの石積施設として認定するには至らなかった。朝倉氏の時期に攪乱を受けているものと考えられる（PL.43）。

SK853　長径2.2m，短径2.0mを測る土壙である。中には炭・焼土が充満していた。性格は不明である。

SX854　約20個の土壙が検出された遺構で，大甕埋設遺構，いわゆる甕ピットである。うち1基のピットには甕破片が遺存していた（PL.43）。

SX856　SB831の西側，山裾で検出した遺構である。まとまりから見て不安な要素も残るが，土堰基礎と見られるSA857に平行に造成されたものと考える。

SX860　SB838とほぼ直角方向に延びる石列である。プラン確認の際に，多数の灯明皿が出土している。

SE847　SB831を検出中に確認したもので，深さ5.6mを測る。今回の調査で検出された井戸の中では最も深く，井戸底で「井桁」が検出された（挿図12上）。井戸からは，井戸枠・一輪差し・楽かんの蓋・白磁皿等が多数出土した。又，「いへ」と書かれた木札が3枚出土した。

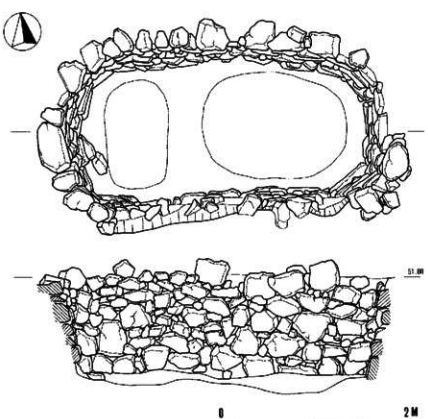
SF851　従来の石積施設，いわゆるタメマスの形態とはかなり異なり，「楕円形」を呈する。長径3.5m，深さ1.4mを測る（挿図12下）。従来の石積施設から見れば，かなり大型に属するもので機能的な問題として，「便所」や貯水槽のような機能は考えにくい。別の機能，既ち「地下蔵」のようなものを想定できないであろうか。今回の例のような比較的大型に属する石積施設の検出は，これまでにも何例か見られる。第34，46，65次などで検出されている。第34次のものは土塁を有する屋敷の一角であり，土塁の下層で検出された。第46次のものは寺院の墓地の一角で検出されたものである。第65次も「南陽寺」の庫裡と見られる一角での検出例である。

なお今回の調査では，従来の矩形を呈する石積施設は，検出されなかったが，ＳＫ852はその可能性が極めて高いものである。

以上，今回の調査によって検出された遺構について，その内容を述べてきたが，成果としては屋敷を区画する土塁以前の遺構が明かにされたことが挙げられる。ＳＡ265は石敷遺構ＳＸ874付近より東側の整地と同時に造成されており，又，土塁ＳＡ263の下位に，第Ⅰ期の遺構が位置していることが判明した。そして，「町割」が実施されたと見られる第Ⅱ期がいつの時期であるかが次に問題となってくる。この点については「小結」で再度取り上げることとし，ここでは成果を述べるに止どめる。

参考文献

藤原武二1989「庭園編」『福井県史資料編14　建築・絵画・彫刻等』福井県



挿図12　上，井戸ＳＥ847平面図・立面図　下，石積施設ＳＦ851平面図・立面図

3．遺　　物

今回取り扱う遺物は，「新馬場」と伝えられてきた武家屋敷の北隅の武家屋敷から出土した遺物群である。整理の方法は，これまでと同じく各遺構面ごとに分け，遺構面とそれを覆う整地層を一つの遺物群としてとらえ，さらにその中で井戸・石積施設などから出土した遺物のように遺構単位で扱えるものについては，その遺構ごとにまとめた。写真・図もその意図に沿って作製した。なお，同一個体の遺物が破片として遺構と整地層から出土したり，時期の異なる遺構面や整地層から出土してそれが接合した場合については，原則として破片数が多く出土している方にいれた。今回報告する第24次調査では，遺構の所で報告したように，町割り以前の遺構群をⅠ期とし，町割り以後については2時期の遺構面が確認できたので古い方からⅡ期，Ⅲ期とした。

遺物の分類についてはこれまでの報告書を踏襲した。すなわち，越前焼人形・擂鉢は「県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」[1]，土師質皿は「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ」[2]，染付は「15，16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」[3]による。その他の遺物についても，はっきりした根拠を示した分類はないが，これまで使用してきた分類及び名称による。

第24次調査で出土した遺物の総破片数は，7,580点と少ない。これは遺構がかなり削平されていたことによる。陶磁器の各器種ごとの破片数は表10のとおりで，煩瑣ではあるが各遺構面ごとに構成比も示した。土師質皿が53.67%，越前焼が36.62%，輸入陶磁器が8.07%とこの3種類で98.36%を占める。これら器種ごとの組成比については，小結のところで触れてみたい。

時期		Ⅰ期遺構面		Ⅱ期遺構面		Ⅲ期遺構面		表土遺合計	%合
種類		破片数	%	破片数	%	破片数	%		
越前焼	甕	19	11.86%	46	14.75%	1,755	25.21%	1,820	24.00%
	擂	13	8.13	8	2.57	612	8.79	633	8.35
	壺	3	1.88	2	0.64	64	0.92	69	0.91
	鉢	11	6.88	27	8.65	160	2.30	198	2.61
	その他	0		0		2	0.03	2	0.03
	小計	46	28.75	83	26.59	2,593	37.25	2,722	35.90
土師質皿	皿	72	45.00	155	49.68	3,740	53.72	3,967	52.32
	小皿	0		0		3	0.04	4	0.05
	その他	0		1	0.32	19	0.27	20	0.26
	小計	72	45.00	156	50.00	3,761	54.03	3,990	52.63
瓦器	碗	4	2.50	3	1.01	36	0.52	45	0.60
	鍋	0		0		0		0	
	羽釜	0		0		3	0.04	3	0.04
	鍋	0		7	0.64	11	0.16	18	0.17
	その他	1	0.63	0		4	0.06	5	0.07
	小計	5	3.13	7	2.25	54	0.78	66	0.88
瓦器	碗	5	3.13	4	1.29	3	0.04	12	0.16
	皿	2	1.25	2	0.64	15	0.22	19	0.26
	鍋	0		0		2	0.03	2	0.03
	一括	16	10.00	5	1.61	12	0.17	33	0.44
	小皿	0		0		0		0	
	その他	0		1	0.32	1	0.01	2	0.03
	小計	23	14.38	12	3.86	34	0.49	69	0.93
白磁	碗	4	2.50	3	0.96	4	0.06	11	0.15
天目	碗	0		2	0.96	7	0.10	10	0.13
	皿	0		3	0.96	15	0.22	18	0.24
	その他	0		0		2	0.03	2	0.03
	小計	0		5	1.93	24	0.34	30	0.40
青磁	碗	0		0		10	0.14	10	0.13
明代染付	碗	1	0.63	0		0		1	0.01
日本製陶磁器	計	141	88.13	259	83.28	6,533	92.40	6,935	91.50
青磁	碗	7	4.38	24	7.72	79	1.12	110	1.45
	皿	0		1	0.32	53	0.75	54	0.71
	鉢	0		0		2	0.03	2	0.03
	香炉	0		0		4	0.06	4	0.05
	水注・瓶	0		0		12	0.17	12	0.16
	その他	2	1.25	7	2.32	29	0.39	38	0.34
	小計	9	5.63	32	8.04	179	2.44	220	2.7
白磁	碗	4	2.50	0		6	0.09	10	0.13
	皿	6	3.13	12	3.86	161	2.28	179	2.36
	鉢	0		0		11	0.16	11	0.15
	その他	0		0		1	0.01	1	0.01
	小計	9	5.63	12	3.86	179	2.57	200	2.69
染付	碗	1	0.63	3	0.96	81	1.15	85	1.12
	皿	0		10		90	1.27	100	1.32
	その他	0		0	3.22	8	0.11	8	0.1
	小計	1	0.63	13		177	1.63	193	1.45
土師質	その他	0		6	4.18	38	0.55	38	0.5
中国製陶磁器	計	19	11.88	62		514	7.38	545	7.87
朝鮮製陶磁器	碗	0		0	18.72	5	0.07	5	0.07
	鉢・壺	0		6		10	0.14	10	0.13
	その他	0		0		0		0	
	小計	0		6		15	0.22	15	0.20
輸入陶磁器	計	19	11.88	62		529	7.60	560	8.07
陶磁器	合計	160	100.00%	311	100.00%	6,962	100.00%	7,455	100.00%

表10　第24次調査出土陶磁器組成表

a．Ⅰ期出土の遺物

Ⅰ期とは，柵列ＳＡ846，溝ＳＤ824，溝状遺構ＳＸ867がある遺構面とそれを覆う整地層のことである。時期的には，Ⅰ期の遺構面は，町割りの基礎となっている土塀のレベルより明らかに低く，「町割り以前」の遺構群と考えられる。このⅠ期からは遺構単位で扱える遺物がなかったので，遺構面及びそれを覆う整地層出土の遺物を一括して報告する。

Ⅰ期の遺構面・整地層出土の遺物（PL.44・45，第42・43図）

越前焼　甕は19点出土したが，時期がわかる口縁部はない。しかしⅢ群とⅣ群とは胎土・焼成等が異なっているところから体部の破片でもある程度判別は可能で，やや曖昧にはなるが判別を行うと，Ⅲ群の破片は少なくⅣ群の破片の方が多い。

壺は13点しかなく，口縁部などは出土していない。(401）は「大」の箆記号が見られ，(402）は高さ20cmほどの壺の底部である。

擂鉢も出土点数としてはⅢ・Ⅳ群の方が多いが，口縁部に沈線，底部に付け高台を持つⅠ群（403～409）が数点見られる。これらⅠ群はⅢ・Ⅳ群に比較して深い片口を有する。擂目がないもの（405）もある。(409）は７条の擂目が広い間隔で入り，内面に箆記号が見られる。(403・409）とも付け高台がすっかり低くなって，消失する直前の形態を示している。(410・411）はⅣ群に属する擂鉢で，(410)はよく使用されて見込み近くの擂目がすっかり摩滅して消失している。

土師質　(427・428）は，口径が14～15cm，高さが３cm前後の厚手の皿である。わりあい平らな底部から内湾気味に立ち上がり口縁端部は紡錘形になる。胎土は細かく焼成も良好である。表面が溶けているので成形技法はよくわからないが，外面に２段のナデが施されている。(433）はその小形で，口径が10cm前後である。灯芯跡がわずかに残る。(429）は，比較的丸い底部からそのまま開くように立ち上がり，口縁部でかるく外反する。成形技法は，表面が荒れているため明確ではないが，外面に２段のナデ跡が認められる。胎土はやや荒く細かい砂や雲母片が均一に混じっている。口径は15cm前後である。(430・431）は基本的な成形技法が同じで，底部が平らで口縁部が強く外反するタイプであろう。(432)はＤ類，(434・437・438）はＣ類である。Ｃ類の場合，底が丸みを帯びるタイプ（438）と比較的平らなタイプ（437）とがある。(435）は基本的な成形技法は，Ｃ類と変わらないが，口縁部が面取りされたような形態になっている点が異なる。口径は7.5cm前後で，胎土が赤味を帯びているものが多い。(439）も基本的な成形技法はＣ類と同じで，口径が５cm前後と小さい。

瀬戸・美濃製品　天目茶碗は４点出土している。(412）は口縁の屈曲が小さく全体に直線的である。釉は流れた感じがあり安定性を欠く。大窯以前の所産[6]と考えられる。(413）は天目茶碗の底部で，削り出し高台の畳付けが広く露胎となっている。(414)はいわゆる縁釉の皿で，内外面とも口縁部のみに釉がかけられその他は露胎である。

灰釉は，出土点数は鉄釉より多く23点ある。(415）は天目茶碗型の灰釉碗で，これも口縁部の屈曲が小さく，全体の器形としては割合直線的で，腰部は露胎である。大窯以前のものとしては最後の時期に属する。(416・417）は高台部からわずかに内湾しながら立ち上がり口縁部は直線状に開く灰釉碗である。(419）は口縁部の内側に返りを有する卸皿である。釉は内面には口縁部だけに，外側は体部中程までかけられている。なお，釉はすっかりかせている。胎土は白く緻密である。(421～423）は３足の鉢で，口縁部に受部がつき（421），口縁から体部中程にかけて灰釉が施されている。(423）は焼き歪のた

め実際より大きく図化されている。

（424～426）は白瓷系碗で，小さく退化した付け高台からわずかに内湾しながら立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。（425）も白瓷系碗で（424）より丸い器形である。体部には蛞蝓成形の跡が残る。いずれも白瓷系Ⅳ期のものと考えられる。

珠洲焼　小形の壺（440）が1個体出土した。体部の下半分を欠く。肩が張り，外反する頸部が付く。

中国製陶磁器　（441）は青磁碗で，碗なりの器形で口縁部がわずかに外反する。釉調はくすんだ青緑である。（442）は，見込みの釉を輪状に拭き取った鉢であろう。（443）は盤で高台裏の釉を軽く拭き取って重ね焼きをしている。

白磁は，軟質の内弯する皿（444～449）の割合が高い。小片のため全体の形を図化することは出来ないが，釉は半透明な乳白色で，全体に細かい貫入がはいる。

染付は数点出土しているが，小破片がほとんどで全体が窺えるものは少ない。皿の場合，端反りで体部外面には宝相華唐草文，見込みには玉取り獅子文が描かれるB_1群（451・452）が多い。（450）は口縁部内側に四方欄が巡る端反り皿である。（453）は染付皿で，高台部が高く畳付けの釉は削り取りである。小破片のため文様のモチーフは不明であるが，濃いコバルトで雲が描かれているように見える。

石製品　（455）は砥石で，石材はいわゆる「浄慶寺砥石」である。裏表に使用痕がみられる。（454）は石製の硯で，平面形は長方形で側面も直立する。底に抉が入り脚が付いたようになる。水野分類によればIBa になる。

b．Ⅱ期出土の遺物

Ⅱ期は町割りに従ってこの屋敷が形成された時期で，屋敷内の遺構はＳＢ841，ＳＤ316などがある。Ⅱ期の遺構面とその整地層から出土した遺物の量は少なく，326点しかない。

Ⅱ期の遺構面及び整地層出土遺物（PL.46，第44図）

越前焼　口縁を有する甕の破片はなく，壺も良好な資料がない。（456）は口縁部に沈線を有する擂鉢で，片口が付く。口縁から擂目までかなり離れており，擂目の単位ははっきりしないが7～8本である。擂目の数が多いことや口縁部全体の形態からⅠ期出土の擂鉢（403～409）より一時期新しいと考えられる。

土師質　（460）は比較的丸い底部から外反しながら立ち上がる皿である。海手で胎土は長石や雲母の細かい粒子が多数混入している。表面が荒れているので成形技法は確認できないが，外面は２段の横ナデの痕が認められる。口径は15.1cm，高さは2.6cmを測る。（464）は形態や胎土からその小形のタイプと考えられるが，外面の横ナデは１段のようである。（462）は胎土が（460・464）と同じで，器形は比較的平らな底部から段を持って横に開くように立ち上がる。（458・459）は内側に墨書がある。文字を読みとることは出来ないが，まじないに関連した文字のようである。器形はＤ類とも考えられるが，見込みの段が認められないことや底部が上げ底ふうになっているところからから，あるいはＤ類直前の形態を留めているのかも知れない。（463・465）はＣ類の皿である。

瓦質陶器　（457）は瓦質の頸部が立ち上がるタイプの風炉である。頸部に四菱花文のスタンプが巡る。

瀬戸・美濃製品　鉄釉は天目茶碗5点と壺２点だけである。（466）は腰から下を欠いているが，全体に厚手で丸みを有する。口縁部の屈曲はほとんどなく，腰部は露胎である。釉はややむらがあり，安定感に欠ける。（467・468）の場合は口縁部の屈曲は小さく，直線的に作られている。双方とも腰部から下は露胎である。釉は黒く均一である。（469）は天目茶碗の高台部で，高台脇の削り幅が少ない。外面は露

胎であるが体部の粕が高台部まで流れてきている。

灰釉は碗が4点出土しているが，皿は1点しかみられない。(472) は天目茶碗と同じ形態の灰釉碗で口縁部の屈曲部はほとんどないが，口縁端部が強く外反する。(471) は灰釉鉢で，復元口径19cmを測る。釉は全体に薄く外面は釉にむらがある。(473) は灰釉香炉で，上脊と脚を欠く。口縁部の内側に返りが付き，口縁・中央・底部の3カ所が膨らみ，細い横線が入るタイプである。

(474) は白瓷系の碗で，腰部が丸い。肖然釉が降りかかっている。

中国製陶磁器　中国製陶磁器では青磁碗が多い。(475・476) は線刻の蓮弁文碗で，緑色の釉が施されている。一乗谷出土の青磁碗では最も出土例が多いタイプである。(479) は口縁部が外反する青磁碗，(477) は篦刻の蓮弁文碗で，蓮弁が二重になっている。(478)はそのタイプの高台である。(480・481) は「竹の節」形の香炉で，灰釉香炉の原型である。(482) は釉が厚くて青い。

(483～485) は白磁皿で，口縁部は端反りとなり高台部の釉は削り取り (485) のタイプが多い。(486) は内湾する白磁皿の高台部である。

(487) は染付碗の高台部である。見込みが広く，高台の作りは薄く高い。見込みの文様は草花文で，鮮明な藍色を呈する。小野分類によれば染付碗D群に分類できる。(488) は口縁部外面に波濤文が巡るD群の碗である。(490) は見込み，外面とも草花文のC群の碗である。(491・492) は端反りの皿で，外面は宝相華唐草文，見込みは鳳凰文である。B₁群に分類される。

c．Ⅲ期出土の遺物

Ⅲ期はSF851・SG829・SE848・SB831などの遺構が存在する遺構面である。東半分は削平されてほとんど遺構がなく，遺構面自体も少し削平されているようである。これに対してSG829から西はSB831を中心とする遺構群が検出されている。Ⅲ期として扱った遺物群は，発掘調査の時，耕土・床上を除去して最初に検出した遺構面から出土した遺物群とⅢ期の遺構とした井戸や石横遺構から出土した遺物群である。

SE848出土遺物（PL.47～49，第45～47図）

この井戸からは大量に遺物が出土した。これらの遺物群は，同一個体の甕・壺や白磁皿が井戸以外からも出土しているところから，一乗谷滅亡後一括して投げ込まれたようである。

越前焼　甕は136点出土しているが，時期の分かる口縁部は少なく12点に過ぎない (494) は口縁部が最も肥厚したⅣ群cである。肩部のスタンプは格子の部分しかなく「本」を欠いている。(495) は口縁部の肥厚の仕方からⅣ群bに位置づけられる。(496) は口縁部が立ち上がるタイプである。時期的には，大甕ほど細分されていないが，大甕のⅢ群に相当すると考える。大甕は基本的には高さ90cm，口径90cmのサイズがほとんどで，大甕と同じ形で口径・高さとも50cmと小形のものが第36次調査で1個出土しているだけである。これに対して口縁が立ち上がるタイプは口径が約70cmを最大に，高さ50cm，口径20cmまで4クラスくらいサイズがある。(496) はその最大クラスの甕である。

壺は33点出土している。(498) は，口径12cmほどの壺で，口縁頸部が軽く膨らみそれに続く肩部はなだらかである。(500) は壺の下半分で，底部から体部にかけてナデ上げて整形した底が残る。

(501) はⅢ群bに属する擂鉢で，片口を有する。口縁端部から擂目までが広く，口縁端部は軽く外反する。胎土はやや粗く長石の粒子が目立つ。(502) は擂目が口縁下の凹線を越えて口縁端部まで延びており，一乗谷では最も新しいタイプの一つである。(504) は擂鉢と同じ形の鉢で，底部から直

線的に開き口縁端部が立ち上がる。内面は降灰で白くなっている。

土師質　(505) は割合平らな底部から口縁部に向かって大きく外反する皿で，外面に2段の横ナデが認められる。胎土も (430) と同じくやや粗く長石や雲母の粒子が混じる。(508～513) はC類で (508～512) は底部が平らなタイプ，(513) は底部が丸いタイプである。口縁部の返りに強弱があり，底部が丸いタイプの方が口縁部の返りが弱い傾向が窺える。(514) は粘土円盤から皿状に成形した後特にナデ調整などを行わないB類の皿で，内部はタールで黒くなっている。またその際かなり高温になったと見えて胎土の内部まで灰褐色になっている。(515) は基本的な成形技法はC類と同じであるが，底部を突き上げたいわゆるヘソ皿である。この (515) は器壁が厚い。(516) もC類と同じ成形技法であるが，口縁部外側を面取りしており，器壁が厚い。(517) はC類の小形であろう。(518) はC類と基本的に同じ成形技法によるが口縁部のナデ調整が行われていない。(519) はC類と同じ成形をした後口縁部の両側を軽く摘んでナデ調整を行っている。(520) は非常に薄く作られており，丸い底部から内湾するように立ち上がる。

この他，銅が薄く融着した土師質皿 (521～525) が多数出土した。すべて細かく割られている。(521～523) は2枚くっついており，下の皿にも銅が融着している。(524・525) は，高温のため土師質皿がすっかり変形している。

瀬戸・美濃製品　この井戸から出土した瀬戸・美濃製品は割合少なく天目茶碗が10点，灰釉皿が15点，小壺が1個体出土したに過ぎない。(530) は口縁部の屈曲が緩い天目茶碗である。

(531) は線刻蓮弁文青磁碗を写したスタンプ蓮弁文灰釉碗である。(532・533) は灰釉皿で，口縁が外反し付け高台がつく。口径は (532) が12cm，(533) は11cmあり，絵片からの復元実測のため差が出たが，12cm前後に集束する。このような外反する灰釉皿は一乗谷では最も普遍的にみられる。(534) は腰部の立ち上がりがなだらかになり，口縁部の外反が緩くなった灰釉皿である。高台は同じく付け高台である。(535) はさらに口縁部が外反しなくなった灰釉皿で，一乗谷ではこの形式まで出土する。(536) は無頸の灰釉小壺で，肩が張り底部には回転糸切りの痕跡を残す。底部以外全面に灰釉が施されている。(538) は無釉の香炉で，口縁内側に返りが付き，口縁部・中央・底部に数条の回線が回る。この形式の香炉は普通灰釉が掛かるが，このように無釉のものも時折出土する。胎土は灰釉の香炉とは異なり緻密で，堅く焼き締まっている。

中国製陶磁器　この井戸からは中国製陶磁器が多数出土した。特に青磁皿，白磁皿が多い。(540) は径が小さく見込み部分が厚いので，線刻蓮弁文碗かそれに相当する無文の内碗する碗の口縁部であろう。

(541～546) は青磁皿で，碁笥底ふうの底部からほぼ直線的に立ち上がり，口縁部は波形に，外面は鎬状に彫って成形している。釉調は灰色がかったくすんだ青緑で，部分的に虫喰い状態になっている。全体はよく似ているが，口縁端部の波形とか外側の蓮弁の形とかが少しづつ違っている。この種の皿は7個体出土した。(547) は内湾する青磁皿で無文である。釉調は透明感のある青緑である。(548～555) は端反りの青磁皿である。(550～555) は器壁も薄く白磁皿に似ているが，釉調が少し青みがかっているので青磁に分類した。また釉に透明感がなくくすんだ黄緑色したのもある。口縁部の外反の仕方が折れ曲がるようになっている点と，口縁端部が角張っている点が白磁皿とは異なる。また見込みと立ち上がりの境にわずかに段が付くもの (553・554) も見られる。(555) はこれら青磁端反り皿の高台と考えられ，高台は削り出しで，畳付けと高台裏が露胎になっている。(556～558) は口縁部が波形になった内湾する輪花皿で，くすんだ青磁釉が掛かり，(557) は畳付けから高台裏にかけてが露胎である。作り

はあまり良くない。(559) は酒会壺の蓋である。鍔も含めた最大径は24.6cmあり，口径が20cmほどの壺の蓋になる。鍔より上には鎬が入り，鍔の下と返りが跡脂になっている。釉調は緑の強い青緑で厚く掛かる。(560) は筒状の香炉である。(561) は体部に鎬が巡る小形の青磁壺で，器形は酒会壺と同じである。

白磁はほとんどが皿で，中でも菊皿 (562～566) が多数出土した。これらもサイズ，形態ともほとんど同じであるが，(563) だけがやや深い作りになっている。全面に白磁釉が施され，畳付け部分だけ釉が拭き取られている。(569～571) のような白磁端反り皿が一乗谷では最も多く出土する。口径12cm前後のものが最も多い。畳付けの部分は砂高台になっているもの，釉を削り取っているもの，拭き取っているものなどがある。

染付は以外に少なく，13点ほどしかない。(572～574) は染付碗である。(572) は口縁部に波濤文が巡り，体部の文様は欠失しているが芭蕉文が描かれていたと推定される。文様構成から蓮子形の碗でC群に属する。(573) は口縁部に雷文が巡り体部には唐草文が描かれる。(575) は外面に宝相華唐草文が巡るB1群の端反り皿である。(576) は唐草文が渦巻状に変化した文様の皿で15世紀末頃盛んに用いられた文様である。(575) は外面に草花文，口縁部内側に四方襷文が巡る。(578) は蛇籠底の皿で腰部から体部にかけて芭蕉文が巡るC群の皿である。(579) は染付杯であるが，文様構成は不明。

(580～584) は四耳壺で，砂の目立つ粗い胎土に鉄釉が腰部から上に施され底部は露胎である。底部はIII期の整地層から出土したものであるが，同一個体と考えられたのでここに載せた。(583・584) は同じく鉄釉壺であるが，鉄釉が厚く掛かり，胎土も細かい。

朝鮮製陶磁器　朝鮮製陶磁器は6点出土した。(585) は灰釉系の碗で腰部が丸みを帯びる。灰色の釉が垂に掛かる。(586～589) は，いわゆる「そば茶碗」である。(587) は重ね焼きの際下の碗が融着したが，下の碗を割ってこの碗を製品としたものである。釉調はいずれも灰色の釉の中にそばかす状の小さく黒い斑点が散らばる。

金属製品　(590) は鋳物の鉄鍋である。直径が21.0cmと比較的小形で，釣り手をもち底部には3本の足が付く。底部中央には直径2cmほどの湯口が残る。一乗谷では煮沸容器はこの形式の鉄鍋だけで，土鍋，石鍋などは出土していない。(591) は桔梗のつまみを持つ銅製の蓋で，直径は13.2cm，内側に返りがある。おそらく茶釜の蓋であろう。(592) は銅製の花瓶で，高さ9.7cm，耳も含めた幅は6.4cmある。耳を付けた壺形の銅板に，打ち出して作った壺を張り付けている。裏には小さい穴が穿たれており鑢や柱に掛ける一輪挿しである事がわかる。(593～602) は銅製の飾り金具の一部である。(593) は隅金具と考えられ，(598～602) は小さい穴が穿たれている。(602) は鋲である。銅銭は6点出土し，(603～605)は銭種がわかる。(603) は永楽通貨，(604) は弘治通貨，(605) は元豊通貨である。弘治通貨の初鋳年は1488年で一乗谷の城下が本格的に形成され始めた頃にあたる。

木製品　「いへ」と墨書された付け札が4点出土した。(609) 以外は長さ6.2cm前後で，幅は最も形を残している (607) の場合1.4cmある。(609) は下半分が折れてなくなっている。頭部にはくくりつけるための刻みがあり，形態的に朝倉館漆出土の「少將」と墨書された付け札に似ている。「いへ」は解釈が困難だが，人名と考えられ「伊部」とも推定される。ただこの人名は，古文書や「朝倉始末記」などには見あたらない。

このほか木製品では漆器碗と曲物(挿図13)が出土している。漆器椀は高台部が高いタイプで，内面は朱色の漆が薄く塗られ，外面は黒い漆を薄く塗った上に朱色の漆で文様が描かれている。曲物の材は檜で，桜の

皮で纐を止めている。直径は20cm前後である。

SE 849出土遺物（PL.50，第48図）

この井戸からは，15世紀前半に位置づけられる土師質皿がまとまって出土した。

土師質　(610) は口径15.0cm，高さ2.7cmを測る。厚手で丸い底部から内湾しながら立ち上がり，口縁端部は紡錘状になる。表面が荒れているため制作技法はわからないが，外面は指痕がほぼ全面に残り，内側はナデ調整を施した痕が見られる。(611) は，(610) の小形で，口径9.3cm，高さ2.3cmを測る。これも内面には方向性のないナデの痕がみられ，外面は指痕が面として残る。(612～614) はそれぞれ口径20.0cm，17.8cm，15.1cmを測る。いずれも底部を欠いているが (612・614) はわりあい丸い底部を持ち，(613) は平らな底部となるようである。胎土はやや粗く長石と雲母の粒子が目立つ。外面には2段の横ナデが認められる。(618) は，底部を突き上げたいわゆるヘソ皿であるが，A類のヘソ皿とは成形技法が異なり内面にナデは認められるが，ナデ抜く技法は取っていない。そのため口縁端部の返りも認められない。胎土もやや粗く長石や雲母の粒子が認められる。(615～617) は，胎土が同じところから (611～613) とセットになるタイプと推定される。(616・617) は口径がそれぞれ9cmと8.2cmあり，平らな底部からはっきりと屈曲して外反するように立ち上がる。外面ナデは，小形のせいか (612) などとは異なり1段だけである。(617) は口径が8.2cmで，底部がやや丸く外面のナデも2段ある。(619) は底部と体部の境に段が認められる。内面は見込み部分を残して右回転のナデ調整，外面は体部に同方向のナデ調整があり，底部は細かく箆で削ったような痕がある。

挿図13　井戸SE 848出土漆器椀・曲物

SD 827出土遺物（PL.51，第48図）

越前焼　(620) は口径が15.5cm，現存する最大径が35.7cmあり，越前焼壺では最も大きい部類に属する。大きく丸い肩から小さめのかるく外反する口頸部がつく。肩部には「H」の箆記号が刻まれている。

瀬戸・美濃製品　(621) は口縁部内側に受部つく灰釉三足鉢である。釉は内外面とも口縁部のみでその他は露胎である。胎土はボソボソしたいわゆる「もぐさ土」である。体部には轆轤成形の痕を残す。

SX 845出土遺物（PL.51，第49図）

越前焼　(622・623) は甕ピット群SX 854出土の甕であるが，元位置を保った状態では出土していない。いずれも口縁で，口縁部が肥厚したⅣ群cに属する。(622) は肩部に四字の「本」と格子の組合わさったスタンプが巡り，傘の上に横一の箆記号が刻まれている。(624) は口縁端部を失っているが，擂目の状態などからⅢ群eの擂鉢であろう。(625) はよく使用されて見込み付近の擂目が摩滅している。

SX 854出土遺物（PL.51，第49図）

瀬戸・美濃製品　(632) は，口縁部の屈曲がほとんどなく，全体の器形が丸い。また鉄釉の調子や腰部から下が露胎になっているところから大窯以前の天目茶碗と考えられる。(633) は口縁部の屈曲部がはっきりしているところから大窯期の天目茶碗と考えられる。

中国製陶磁器　(634) は線刻蓮弁文青磁碗で，線刻ではあるが蓮弁の形はしっかりしている。

SX 855出土遺物（PL.51，第49図）

瀬戸・美濃製品　（635）は天目茶碗で，口縁部の屈曲が緩く全体に丸みを帯びる。

中国製陶磁器　（636）は青磁花生の底部と推定される。碁笥底状になっており，融着を防ぐための砂が付着している。釉調は白くくすんだ黄緑である。

SB 890内ピット出土遺物（PL.51，第49図）

中国製陶磁器　（637・638）は見込みの蓮弁文が崩れたいわゆる十字花文が描かれたB₁群の染付皿である。

SF 851出土遺物（PL.51，第49図）

このSF 851からは古いタイプの土師質皿がまとまって出土した。

土師質　（626）は口径が18.2cmあり，丸い底部から開くように立ち上がり，口縁部で外反する。外面は2段のナデ調整が認められる。（630）はその小形で口径は9.0cmを測る。（627～629）はその中間のサイズで口径は約14.5cmある。（631）は平らな底部から屈曲して外反しながら立ち上がるタイプで，内外面ともに1段のナデ調整が認められる。

Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物（PL.52～57，第50～55図）

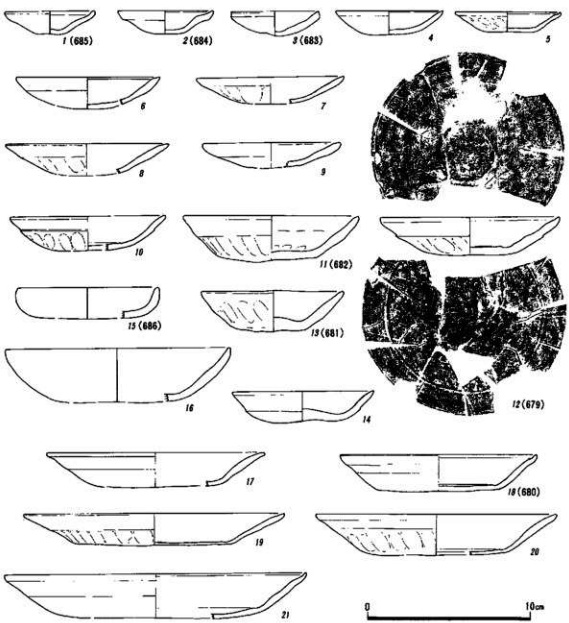
越前焼　越前焼甕は1500点出土しており，その内口縁部は54点ある。大部分は口縁部が肥厚したⅣ群cもしくはⅣ群d（643・644）に属する。（639）は口縁端部が肥厚し始める直前Ⅲ群cの形態を示している。スタンプの組み合わせが不明であるが，格子は窓の部分が大きい古い形式を保っている。（641・642）は，口縁部が肥厚し始めた段階のⅣ群aである。（642）には傘と十（？）の箆記号が刻まれている。なおこのⅣ群aの段落の大甕が被も容積が大きく，口縁部から15cmまでの容量を他の完形品の甕で計算すると約250ℓ入る。ちなみにⅣ群dでは約220ℓ入る。（646）は口縁部が立ち上がる甕である。（645）は甕ピットと思われるSX854付近から出土したが掘わった状態ではなく，口縁部が下になり底部も失われていた。このほか（648～651）は大甕の底部で，窯詰めの際融着を防ぐための砂が付着したもの（648・649）や，焼台とした越前焼甕の破片が融着したもの（650・651）である。

越前焼壺は550点出土している。（652）は口径7cm，高さ28.6cmの壺で肩から体部にかけてよく膨らみ，口頸部が割合小さい壺である。表面は黒く肩には降灰がかかる。（653～655）は口頸部の作りが（652）と同じで，口径が10cm前後と一回り大きく，口縁部の形態がそれぞれ少しずつ異なる。（657）はいわゆるお歯黒壺で，口径4.4cm，高さ8.3cmを測る。この種の壺は大きさの割に器壁が厚く，口縁が片口になるのが一般的（657は復元実測のため片口を図化していない）である。（661）は無頸壺として壺に分類してきたが，よく似た形態のより大きい甕がある。したがってこれも甕に入れた方がよいのかも知れない。断面逆三角の口縁がつく。（663）も甕に分類した方がよいのかもしれない。

擂鉢は150点出土している。（664～667）は口縁部に沈線が入るⅠ群の擂鉢で，（664・665）には片口がついている。（668～670）は口縁部の形態に違いはあるが，口縁から擂目までの距離が長く，擂目の間隔も広いところからⅡ群に属すると考える。（671）も口縁の形態と擂目の間隔からⅡ群と見て良い。（672～675）は口縁部直下に段が付きそこまで擂目が上がってきているところがⅢ群と推定される。（678）は，小片ではあるが，口縁下の段が失われ，擂目が口縁の上まで上がってきている点からⅣ群に属すると考える。Ⅳ群は一乗谷の調査地点のほとんどで出土するが，最上層に限られ出土点数も極少ないところから，一乗谷が滅亡する直前から生産が始まったと考えられる。

土師質　土師質皿は多数出土しているが，これまで一乗谷の調査であまり確認できていなかったものを

中心に報告する。（糾体の番号は挿図14の番号）*1*～*3*は基本的にはC類と同じ技法で成形された小形の皿である。口径は6cm以下である。表面が摩滅していて成形技法を十分確認できないが，手づくねで皿状に成形し，一段階ナデ調整を行った後，内面は中央まで親指を入れ，口縁部はその親指と人差し指の根元で挟むようにして右回転にナデ1回転したところでそのままナデ抜く。*1*は底が窪んだ「へそ皿」状になっている。これらの皿は井戸 SE. 848から出土した銅が厳着した皿と同じである。*5*・*7*はC類の皿で，*5*の口径は8cm，*7*のそれは9.3cmある。*4*・*6*・*9*は基本的な成形技法はC類と同じであるが，口縁部の上端部だけを摘んでナデているため口縁部の返りがない。この点がC類と異なっている。*8*・*17*・*21*は井戸 SE 849出土の（612～614）と同じ形式の皿で，薄い器壁がやや外反に伸び，内外面ともナデ調整が2段になる。雲母片が混じったやや粗い胎土を使用している。ただ*8*の場合は基本的な形は*17*と同じであるが，小形のためかナデ調整が1段で，胎土も赤く細かい土が使われている。*11*・*12*はやや深い器形で，内側は見込みとの境と口縁部付近とに2段のナデ調整。外側は口縁部に1段のナデ調整が



挿図14　Ⅲ期遺構面・整地層出土の土師質皿

見られる。*12*の場合見込みと外面のナデ調整が強くD類の様に段がつく。*13*・*14*もやや深く、見込みが中央で盛り上がるようになっているのが特徴である。内面と外面口縁部にかけてナデ調整が施されている。*14*の場合体部が小さくかなり摩滅していたためナデ調整は認められない状態であった。また、底部は表面に凹凸がありしわのようになっている。*18*～*20*はD類の皿である。*19*は底が平で非常に薄く丁寧に作られている。胎土も白くいわゆる「白かわらけ」の部類にはいる。*16*は皿というより碗形態で、口縁部が内側に返っている。表面がすっかり摩滅しているため成形技法は不明である。*15*は底部から直立して口縁部が丸くおさまり、これまで土師質小壺の蓋としてきたものと同じ形態をしている。また内部が黒いことや胎土から瓦質土器の可能性がある。

瀬戸・美濃製品　瀬戸・美濃製品の内、天目茶碗は29点出土している。(687) は口縁部の屈曲が弱く、全体に丸みを帯びているところから大窯初期の製品と考える。(688～693) は全体に直線的で口縁部の屈曲がはっきりしている。(689) にその傾向が強く高さもやや低い点など、美濃尼ヶ根窯出土の天目茶碗に形態的によく似ている。(694) は、口径7.2cmと広い口を持つ鉄釉小壺で、よく張った肩から短く外反する口縁部が付く。下半分を欠いているが、内外面ともに鉄釉が施されている。なお火を受けて釉が膨れている部分がある。(695) はその底部であろう。(703) は、胴径4.2cm、高さ2.5cmと小さい鉄釉水滴である。水注の一部と底部の一部を欠いているがほぼ完形である。鉄釉は内側全面と外面は腰部まで施され、底部は鋸歯で回転糸切りの痕が残る。

(704) は口縁部に向かって直線的に開く灰釉鉢で、外面にはかるく轆轤挽きの痕を残す。破片が小さかったので正確ではないが、口径は18.2cmある。(705) は鉄釉天目茶碗に似た形態の灰釉碗であるが、やや器壁が薄い。(706) は口縁部が軽く外反する緑釉皿で、内外面ともほんの口縁部に灰釉が施されているだけである。(707) も緑釉皿の1種であるが、釉がムラムラと (706) より広く施されている。(708・709) は灰釉端反り皿で、(709) は口縁端部と見込みを欠いているが、器壁が厚く付け高台もしっかりしているところから、端反りの皿でも古い部類に属する。(710) は口縁部に返りの付く卸皿で、釉は口縁部だけに施されている。卸皿としては深い部類に属する。(715) は灰釉の壺と考えられ、上半分が欠けているが、筒形で外側の腰の部分まで釉が施されている。内側は露胎であるが、あまり轆轤成形の痕が目立たない。高台は削り出し高台である。

(716～718) は白瓷系の碗で、高台が退化した (717・718) 白瓷系Ⅳ期のものである。内湾気味に立ち上がり、口縁はわずかに外反 (716) する。

瓦質陶器　(723・724) は瓦質の火鉢である。平面形は四角く口縁部近くに小さい突帯に沿まれて菱形 (724) と巴 (723) のスタンプ文が巡る。(725・726) は瓦質風炉、(727・728) は瓦質花瓶であろう。

信楽焼　(719～721) は壺で、明灰色の表面に長石が吹き出している。口径は15.8cmとかなり大きい。

中国製陶磁器　青磁碗は61点出土しているが、その大部分は内湾する無文の碗か (730・731)、線刻の碗 (729) である。(732) は口縁部が外反する碗で、一乗谷では出土例が少ない。釉調は少し灰色がかった緑である。(729) は線刻の蓮弁文碗であるが、器形やや開き気味な点、山梨県荒巻本村出土の青磁碗の中に同例を見ることが出来る。(733～735・737) は青磁碗の底部で、(737) は角張った低い高台、見込みの文様、やや褐色がかった青磁釉などから13世紀末の龍泉窯系青磁碗であろう。(735) は外面に蓮弁文が巡り、見込みには印花がある。高台は低い削り出し高台である。一乗谷ではあまり見ない青磁碗である。(733・734) は (732・729) にそれぞれ対応する高台である。底部が厚く高台裏は重ね焼きするために蛇の目状に釉を拭き取っている。またその際の輪トチンが付着 (734) していることもある。(738

～740）までは内湾する青磁皿である。見込みの部分が少し盛り上がり，腰の部分の器壁がもっとも薄い。（741）は稜花皿の口縁部で，器壁は厚く胎土はやや粗い。（742）は口縁部が稜花になった盤で体部は蓮弁状の膨らみをもつ。（743～746）は青磁香炉で，（744）は足が体部から張り出して付き，釉調は深みのある青緑である。（743）は竹の節状の香炉で口縁部には返りが付く。一乗谷ではこのタイプが最も多く出土する。（745）は筒状の体部に細い沈線が数条刻まれている。（750）は青磁托である。天目台と同じ形態で，口径5.7cm，鍔の径は12.8cmある。一部に火を受けて釉が荒れている。（747）は不逝環の青磁花瓶で，高さは27.5cmある。口縁は方形で，山形の文様がある。やや偏平な体部に長い頸部が付く。頸部の文様は芭蕉文と雷文で，体部は連続花文である。これらの文様は型押しによる。高さ5.5cmほどのしっかりした高台が付く。釉調は透明感のある緑色を呈する。この花瓶は庭園SG829から出土したものであるが，第15次調査地区からも破片が出土し接合した。（749）は鶴首の花瓶であろう。最大径は11.0cmあり，腰部に文様が刻まれているがはっきりしない。底部は蛇苔底状で露胎である。釉調はうすい緑を呈する。

白磁の場合，皿が96点とほとんどで，杯が13点と碗が1点混じるだけである。（752）は内湾する白磁碗で，薄く作られ口縁部が釉の厚みでわずかに膨らむ。（753～756）は端反りの白磁皿で，（754・755）は口径が18.6cmと大きくその分高台も高くなっている。なお端反り白磁皿の普通の大きさは12cm前後である。（760）は内湾する白磁皿である。釉調は灰色で全面に貫入がはいる。（762・763）は内湾する白磁皿で，胎土は磁質化しておらず，釉も乳白色である。一乗谷ではたいていの調査地区で出土するが，その量は少なく，15世紀中ごろの製品である。（761）も端反りの皿ではあるが，（753～756）とは形態が全くことなりやや厚い底部から大きく屈曲して直立するように立ち上がり口縁部が外反する。胎土などは（762）の硬質のものと同じである。（767・768）は白磁杯で蛇苔底状の底部かららっぱ状に開く。（767）は非常に薄く作られている。胎土や釉調は（753）の皿と同じである。（769）も白磁杯で小さい高台部から腰部で大きく屈曲して開き気味に直線的に立ち上がる。見込みは重ね焼きのため蛇の目状に釉が拭き取られている。（770）も白磁杯の底部であるが，これは厚手の底部に小さい高台が付き，体部は丸い腰部から内湾風に立ち上がる器形である。

染付は碗が37点，皿が64点出土している。（771）は，口縁部が外反する染付碗で，小片のため文様はよくわからないが「ふくろう」が描かれているように見える。（772）は高台が高くしっかりしており，畳付けの釉は削り取っている。見込みにねじ花が描かれる。（771・772）は一乗谷で出土する碗としては古い部類に属する。（773～774）はいずれも蓮子碗タイプの染付碗である。（775・776）は同じ文様で，唐草文が退化した小さい点点状の文様が全面に散らばる。（778・779）は外面に唐草文が描かれ，腰部に蓮弁状の文様が巡る碗であろう。（783・784）は腰部に芭蕉文が巡り，文様構成は蛇苔底の染付皿C群と同じである。（780～782）は縁頭心タイプの碗で（782）は高台裏に銘がある。染付皿は（783・784）のように外面の文様が宝相華唐草文をもつB₁群が多い。（784）のように焼成の際の砂が付着したままのものも時たま見受けられ，これらの皿が廉価な日常用の皿として使用されていたことがわかる。（787）は形態は端反りであるが，文様を描くとき縁取りをして中を塗るようにしており，（783）などとは文様構成だけでなく文様の描き方も異なる。（788～790）は内湾する口径19.2cmの皿である。全面に崩れた牡丹唐草文が早いタッチで描かれている。（791～795）は平面形が不正形な合子で，（776）の部分では内側に深んでいる。文様は丁寧に描かれ，呉須の色も濃い。

朝鮮製陶磁器　（796～799）は粉青沙器壺で，胴中央部に白象嵌による文様が施されている。

鉄製品　鍛造の和釘が多数（800～806）出土している。断面は四角で頭部をたたいて偏平にして，さらに巻き込んでいる。すっかり錆びて原型を止めていないものが多い。（825）は鉄の鉱滓で，重量が250gあり，一乗谷で出土した鉱滓では最も大きいものの一つである。

銅製品　簪（807）が1点出土した。原型をよく止めているが，飾りの部分がなくなっているのは，薄い金属か，有機質でできていたためであろう。（808）は銅製の切羽で，周りに細かい飾りが付く。（809）は，箱状になった飾り金具であろう。釘で止められていたらしく側面に小さい釘穴がある。銅銭は15点出土し，開元通寶から永楽通寶まである。最も多いのは北宋銭で，わずか15点であるが一般的な出土傾向と合致している。大定通寶の出土は珍しい。

石製品　硯は2点出土しており，（826）は長さ6.1cm，幅3.4cmの小形硯である。底が平で水野の分類によれば長方硯IBcにあたり，16世紀以降の硯である。（827）も同じ形式の硯であろう。（828）は花崗岩系の茶臼で，鐏も含めて1石から彫り出されている。臼の部分の径は17cmあり，鐏も含めた直径は34cmある。臼の刻み目は7本8分割であろう。（829～834）は，福井県地方では「バンドコ」と呼ばれる行火である。「バンドコ」にはその平面形から「O」型と「D」型があるが，これらはいずれも「O」型である。（829～831）はその蓋で，（832・833）は身の部分である。身には前面に細い長方形の窓が数個開けられる。（834）は前面が開く「バンドコ」で（第15次調査PL 22—186参照）「O・D」型の古い形式と考えられている。

注

① 福井県立朝倉氏遺跡資料館
『県道結江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983

② 福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所
『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』 I

③ 小野正敏『15，16世紀の染付碗・皿の分類とその年代』
『貿易陶磁研究』No.2　1982

④ 横崎彰一・美濃古窯研究会
『美濃の古陶』編年表（井上喜久男作製）1976

⑤ ④に同じ

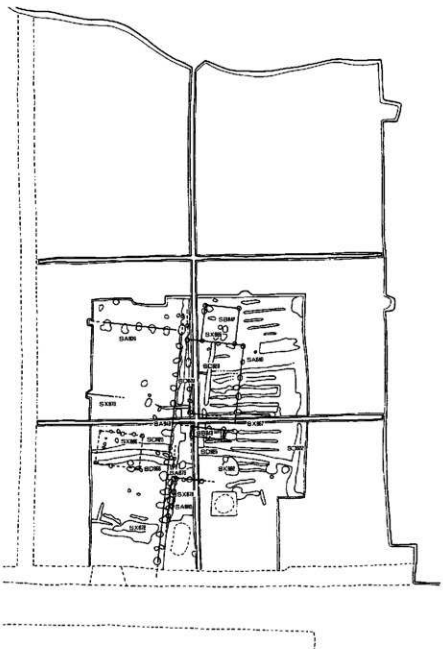
4．小　　結

a　遺　構

前項では，検出された各遺構の規模や性格などについて述べた。本項では，それらの各遺構について，第Ⅰ期～第Ⅲ期までの時期的な区分の問題や，各時期における遺構の面的なつながりについて分析する。そして本調査区における武家屋敷としての性格を，可能な範囲で考察することで若干のまとめとしたい。

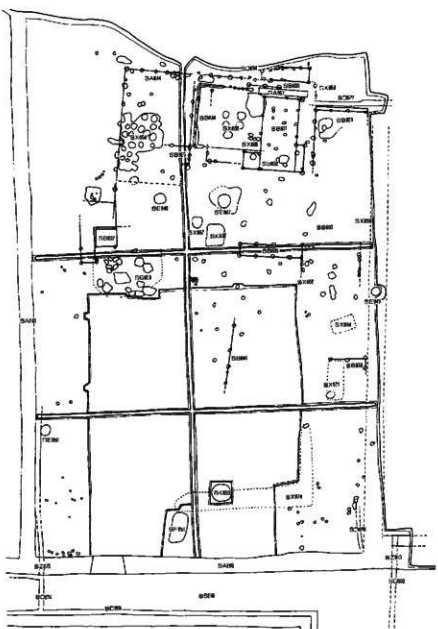
第Ⅰ期の遺構

各遺構の概要については，既に触れてきたとおりであるが，柵列，礎石建物，溝が錯綜しており時期の判断に苦しむところがある。ただ，おおまかな流れとしては先行的にＳＤ822，825，868がある。これを切るかたちでＳＤ824が造成されるが，この継続期間は短く，継起的に造成されたものと見られる。更にこの溝を埋め立てて，柵列ＳＡ846が造成される。この柵列が造成された時期に礎石建物ＳＢ842，843などが造成されており，この段階になってようやく，第Ⅰ期の主要な遺構が出そろったかたちとなる。この柵列SA846は第Ⅰ期の各遺構の方位，軸線と概ね一



挿図15　第Ⅰ期遺構配置図

致しており，基本的な遺構であることがうなづける。ただ，これらの軸線とかなりずれる遺構としては，先に「宵暗堀」としたＳＸ866やＳＸ867があり，先行的に営まれるＳＤ822・ＳＤ825などがある。いずれにしても，屋敷の中央を縦断するかたちで，溝ないしは柵列が造成されるようなパターンは，南隣している区画，「新馬場」でも見られたとおりであり，Ⅰ期、Ⅱ期としているような，古い時期に造成されているということも一致している，というように隣合う区画どうしの造成方法は無関係ではありえず，第10・11次調査区である「新馬場」の，東西に縦断する柵列および溝から，今回の第24次調査区の柵列ＳＡ846までが，いわゆる町割以前のひとつの「広がり」ではないかと推測する。この広がりの間口規模は約36ｍとなり，今回の調査区である，第24次の区画の間口とほぼ同規模である。この広がりは更に第15次調査区にも及び，「新馬場」の溝ＳＤ312の東側延長上には，門ＳＩ279があり，溝ＳＤ387がある。第24次調査区の柵列ＳＡ846の東側延長上には，現「復元武家屋敷」の「主殿」とされる礎石建物ＳＢ405があり，塀ＳＡ895やＳＤ897が一直線上に連なる，というように，時期的な点では合致しないが，ひとつの区割り線を形成している，と思われるのである。この点については，更に広い範囲をカバーして検討しなければならず，紙数の制限もあり，これ以上の憶測は差し控えたい。



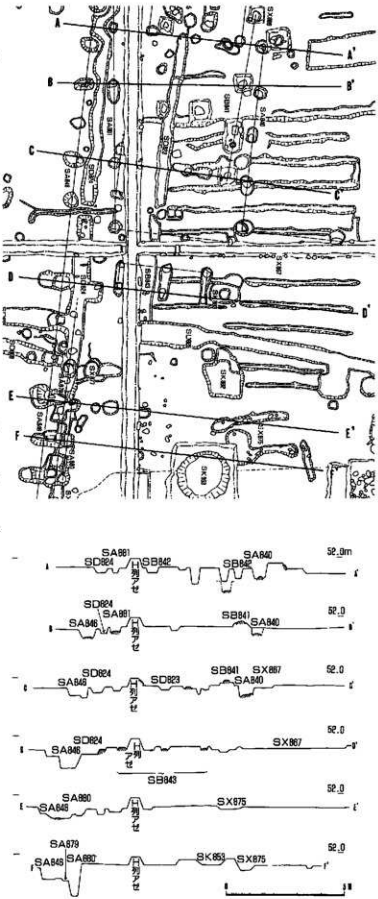
挿図16　第Ⅱ・Ⅲ期遺構配置図

挿図17には第Ⅰ期遺構における主要部分の断面図を呈示した。柵列ＳＡ846，ＳＡ879，ＳＡ880の切り合関係や，ＳＤ824，ＳＢ843，或はＳＡ840，ＳＢ842の上下関係を再度見てみれば，特にＤ・Ｅ・Ｆの断面においてＳＡ846がＳＤ824を切っている関係が

読み取れる。更にＳＡ 840 とＳＢ 843 は方位を同じくする遺構であるが，その掘り込みの深さは両者で異なることから，時期を別にして造成されたものと判断される。

第Ⅱ・Ⅲ期の遺構

調査区の東側半分は上層の遺存度が良くなく，その内容については不明としなければならない。しかしながら，Ⅱ・Ⅲ期の遺構を併せてながめると，遺構の造成にかかる方位から，大きく２つに分けることが可能である。即ち，Ⅱ期の造成と見られる，土塁の方位に沿った建物群と，Ⅲ期の山際に集中する建物群との２分類である。中央部の庭跡を中心とする建物群はＳＥ 849 の東側で検出されたＳＢ 839 などとほぼ同じ方位になり，同時期に造成されたものと見ることも可能である。いずれも$Ⅲ_1$，$Ⅲ_2$期とした遺構群であり，他のⅢ期の建物群とは方位がズレており，特に雑舎群とされる山際の建物群とははっきり分かれる。この分類は，南側土塁ＳＡ 263 の石垣の積み方が，東側半分と西側（山際）半分とが異なっており，西側半分は比較的小振りの河原石を細かく積み上げていることと関連しているのではないか（ＰＬ.40）。Ⅱ期からⅢ期のある時期に，山際に敷地を拡張し，山際を中心とした建物群が造成されたことが考えられるのである。



挿図17　第Ⅰ期遺構主要部断面図

b．遺　物

遺物組成について

第24次調査地区の武家屋敷から出土した陶磁器の破片数は表10の通りである。土師質皿が最も多く53.62％を占める。土師質皿の用途は，灯明皿と酒杯と考えており，その比率については第35次調査の結果から３：１と推定している。次に多いのは越前焼で36.76％を占める。越前焼は甕・壺の貯蔵用具と鉢・擂鉢の調理用具とに別れるが，中でも甕が24.64％と多く，鉢が8.56％ある。調理用具は鉢・擂鉢合わせて2.71％と少ない。破片数で集計しているため，器形の大きい甕が多くなっているが，個体数ではこれほどの差はなく，むしろ擂鉢の個体数の方が多くなるかも知れない。次に多いのは青磁・白磁・染付などの中国製陶磁器で，7.60％を占める。青磁は碗が多く，白磁は皿や壺で，染付は皿の方が多い。中国製陶磁器で注目されるのは，青磁不遊環花虫と青磁托である。２点とも明時代の製品であるが，なかなか立派なもので，この屋敷の規模，ひいてはこの屋敷の住人の地位を現しているといえよう。朝鮮製陶磁器は碗が５点と象嵌壺が１個体出土している。朝鮮製陶磁器は量は非常に少ないが，一乗谷内の各地から確実に出土する。日本製陶器では，瀬戸・美濃製の鉄釉碗（天目茶碗）が45点，灰釉碗12点，皿18点，鉢29点出土しているだけで，あとは１桁の出土点数である。日本製施釉陶器である瀬戸・美濃製品は全体で1.71％を占めるに過ぎない。

南北道路ＳＳ976より西の武家屋敷を1992年度分も含めて５区画発掘調査してきた。これらは立地や規模からほぼよく似た地位の武将の武家屋敷だったと推定される。そこでこれらの武家屋敷から出土した陶磁器の組成を比較してみよう。さらに他の地区の武家屋敷や町屋・寺院，朝倉館などとも比較してみたい（表11）。最も多いのは土師質皿で，次に越前焼，中国製陶磁器，瀬戸・美濃焼の順序は，これら４区画の武家屋敷も朝倉館，町屋でも変わらない。しかし，土師質皿の割合を見ると「ショーゲドン」が83.59％と最も高く，次に「新馬場」・「第77次武家屋敷」が約76％あり，「第24次武家屋敷」が53％とかろうじて50％を越えている。しかし「第78次武家屋敷」にいたっては49％しかない。これらの武家屋敷群は全体に遺構の残存状態が良くない点では共通しており，この差が遺構，遺物の残存状況によるものではない。「第24次武家屋敷」と「第78次武家屋敷」は屋敷内に数個の甕が据わっていた跡があり，他の屋敷の甕の割合が13％未満なのに対してこれらの屋敷では24％ある。このことから土師質の割合が低いのは甕の割合が高いことによる。たとえ甕の割合が低かったとしても，この２区画の武家屋敷の土師質の割合は，60％を少し越える程度であろう。ただ，これら周規模の屋敷について土師質の割合が違うことに付いては明確な考えを持ち合わせていない。

朝倉館では土師質皿が90％近く占め，表にはないが義景の母光徳院の屋敷と伝えられる「中の御殿」，朝倉氏代々の子女がはいったと伝えられる「南陽寺」も同じ傾向を示し，「40次寺院」では72％を占める。これに対して赤渕・美間野地区の屋敷群では50％近くまで下がる。武家屋敷や一般の寺院の場合は，朝倉氏に関連した館・寺院群と町屋との中間に位置する。なお，一乗谷から出土する土師質皿は数種類あるが，中心となるＣ類・Ｄ類は，京都で出土する土師質皿とよく似ており，一乗谷の土師質皿が京都の影響を受けていることは間違いない。

こうした土師質皿の割合は，公家を中心とする京都の土師皿（カワラケ）文化との遠近を示していると考えられている。それは京都を中心に同心円状に広がりを見せ，京都から離れるほどその文化は薄くなり，東北地方や九州地方にカワラケがほとんど見られなくなる。また，それは地理的な距離だけでな

	倚金幅	%	中の胴幅	%	胴周巾	%	40 次 中胴法	%	54 次 武蔵胴巾	%	脚 巾	%	鐙巾	%	77 次 武蔵脚巾	%	78 次 武蔵鐙巾	%
縦無鐙	1,744	2.67	772	2.33	1,047	2.93	2,648	7.41	1,820	24.37	1,155	9.74	900	5.76	1,350	13.50	1,795	24.15
壺	692	1.06	200	0.85	141	0.40	1,662	4.65	633	8.48	225	1.90	537	3.43	10	0.43	250	3.36
修整	586	0.90	322	1.05	210	0.59	1,523	4.26	67	0.90	292	2.46	200	1.28	51	2.30	187	2.52
他	216	0.33	106	0.41	56	0.16	333	0.93	148	1.65	65	0.55	43	0.29	4	0.17	559	7.52
他	11	0.02	6	0.02	3	0.01	28	0.08	2	0.03	10	0.08	3	0.02	0	0.00	22	0.30
縦鐙無	3,249	4.97	1,405	4.60	1,457	4.08	6,165	17.24	2,720	36.42	1,747	14.73	1,085	10.78	381	16.40	2,816	37.89
上部貫通	60,000	91.82	27,770	90.94	33,349	93.46	29,767	82.24	3,967	53.11	8,963	75.55	13,070	83.56	1,765	75.96	3,675	49.44
他	2	0.00	15	0.05	71	0.20	180	0.50	22	0.29	33	0.28	55	0.35	26	1.12	20	0.27
上部貫通	66,000	91.82	27,785	90.99	33,420	93.66	26,277	72.92	3,989	53.41	8,996	75.83	13,125	83.95	1,791	77.10	3,695	49.71
五寸以下	13	0.02	2	0.00	53	0.15	36	0.10	10	0.13	10	0.08	27	0.17	10	0.43	13	0.17
五寸以上	3	0.00	4	0.01	14	0.04	63	0.11	17	0.23	5	0.04	60	0.38	2	0.08	83	1.12
大貫孔	16	0.02	5	0.02	67	0.19	76	0.21	27	0.36	15	0.13	87	0.56	12	0.52	96	1.29
無無鐙	267	0.41	124	0.41	53	0.15	462	1.29	45	0.60	102	0.86	43	0.28	6	0.27	58	0.78
他	0	0.00	5	0.02	0	0.00	20	0.06	0	0.00	1	0.01	1	0.01	0	0.00	1	0.01
他	42	0.06	46	0.15	31	0.09	224	0.63	19	0.25	23	0.19	18	0.12	4	0.17	36	0.48
無無鐙	309	0.47	175	0.57	84	0.24	730	1.97	64	0.86	126	1.06	62	0.40	9	0.39	95	1.28
無無鐙	16	0.02	9	0.03	24	0.07	45	0.13	12	0.16	48	0.40	27	0.17	8	0.34	27	0.36
江	83	0.13	17	0.06	10	0.03	372	1.04	18	0.24	35	0.30	23	0.15	10	0.43	9	0.12
鉄・釘巾	36	0.04	11	0.04	36	0.11	2	0.01	31	0.42	38	0.32	18	0.12	6	0.28	12	0.16
青砥・他	18	0.03	6	0.02	0	0.00	25	0.07	2	0.03	2	0.02	11	0.07	0	0.00	1	0.01
無無鐙	143	0.22	43	0.14	72	0.20	445	1.24	63	0.84	123	1.04	79	0.51	24	1.03	49	0.66
縦二・他鐙付	452	0.69	224	0.73	256	0.44	1,151	3.22	127	1.70	248	2.10	141	0.90	33	1.42	144	1.94
国産陶器	0	0.00	42	0.14	0	0.00	29	0.08	11	0.15	90	0.76	4	0.03	0	0.00	25	0.34
日本製品	63,717	97.51	29,497	96.59	35,200	98.39	33,327	93.18	6,885	92.18	11,187	94.30	15,016	96.23	2,217	95.44	6,801	91.59
有蓋脚	115	0.18	5	0.02	75	0.21	112	0.31	133	1.78	83	0.67	107	0.68	22	0.95	115	1.52
他	134	0.21	85	0.28	45	0.13	167	0.47	54	0.72	68	0.56	24	0.15	7	0.30	59	0.79
他	73	0.11	4	0.05	22	0.06	20	0.06	2	0.03	23	0.17	22	0.14	3	0.13	8	0.11
他	145	0.22	75	0.66	18	0.08	75	0.21	49	0.66	59	0.50	5	0.03	3	0.13	13	0.17
有蓋脚	667	0.71	169	0.55	160	0.48	374	1.05	238	3.78	225	1.89	158	1.01	45	1.94	193	2.60
行燈脚	0	0.00	2	0.04	4	0.01	16	0.04	10	0.13	7	0.06	11	0.07	0	0.00	1	0.15
江	478	0.73	550	1.80	180	0.50	784	2.19	178	2.36	257	2.17	224	1.43	34	1.47	298	4.47
他	111	0.17	36	0.12	30	0.08	49	0.14	12	0.16	7	0.06	24	0.15	3	0.13	4	0.19
行燈脚	595	0.90	598	1.96	214	0.60	849	2.37	200	2.68	254	2.23	259	1.66	27	1.16	283	3.81
青磁脚	254	0.39	126	0.38	88	0.25	236	0.63	13	0.18	67	0.56	76	0.49	4	0.17	69	0.79
他	161	0.25	156	0.38	89	0.25	606	1.69	90	1.20	95	0.83	82	0.52	24	1.03	82	1.10
他	65	0.10	13	0.04	5	0.01	40	0.11	8	0.11	0	0.00	13	0.08	3	0.13	3	0.04
青磁脚	480	0.73	245	0.80	182	0.51	872	2.44	141	1.89	162	1.37	171	1.09	31	1.33	144	1.94
中国製品	26	0.04	4	0.01	2	0.01	59	0.14	15	0.20	13	0.11	0	0.00	2	0.09	1	0.01
中国製品計	1,562	2.39	1,026	3.33	568	1.59	2,154	6.00	562	7.52	654	5.50	568	3.76	105	4.52	621	8.35
鉄釘巾	28	0.04	0	0.00	0	0.00	10	0.03	3	0.07	3	0.03	1	0.01	0	0.00	1	0.01
他	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1	0.04	0	0.00
その他	37	0.06	22	0.07	5	0.01	72	0.20	17	0.23	9	0.08	0	0.00	0	0.00	10	0.13
鉄釘巾計	65	0.10	24	0.08	5	0.02	82	0.23	22	0.29	12	0.10	1	0.01	1	0.04	11	0.15
鉄釘巾総計	0	0.00	0	0.00	0	0.00	6	0.02	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
輸入陶磁計	1,627	2.49	1,050	3.41	575	1.61	2,239	6.24	584	7.82	675	5.70	569	3.77	106	4.56	632	8.50
合 計	65,344	100.00	30,537	100.00	35,675	100.00	35,760	100.00	7,469	100.00	11,863	100.00	15,135	100.00	2,323	100.00	7,432	100.00

	国産品	%	49 次 武蔵鐙巾	%	50 次 武蔵鐙巾	%	46 次 A鐙巾	%	36 次 B鐙巾	%	35 次 C鐙巾	%	55 次 D鐙巾	%	56 次 E鐙巾	%
縦無鐙	2,147	25.05	896	12.43	1,235	36.37	2,148	27.96	1,599	12.59	3,147	25.30	3,187	19.19	3,942	19.11
壺	152	1.77	301	4.18	184	5.42	893	11.62	831	6.16	1,158	9.81	1,592	7.77	716	3.51
修整	330	3.85	293	4.07	325	9.57	431	5.61	359	2.86	984	7.77	1,069	5.22	793	3.88
他	69	0.80	82	1.14	9	0.26	198	1.41	164	1.25	0	0.00	0	0.00	0	0.00
他	3	0.04	2	0.03	3	0.09	31	0.40	34	0.25	27	0.16	30	0.15	9	0.04
縦鐙無	2,703	31.53	1,574	21.84	1,747	51.44	3,611	47.01	3,092	22.91	5,321	38.04	6,008	29.32	5,420	26.54
上部貫通	5,357	61.31	6,786	66.46	1,184	33.77	5,568	36.42	7,822	57.94	7,758	65.25	11,226	54.97	13,248	64.88
他	57	0.66	49	0.68	17	0.50	19	0.25	95	0.70	64	0.37	135	0.66	108	0.53
上部貫通	5,304	61.88	4,838	67.14	1,141	33.60	5,567	20.66	7,916	58.65	7,822	45.63	11,399	55.62	13,357	65.40
五寸以下	8	0.09	7	0.09	13	0.38	57	0.74	7	0.05	40	0.23	100	0.49	16	0.13
五寸以上	12	0.14	17	0.24	0	0.00	2	0.01	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
大貫孔	20	0.23	17	0.24	13	0.38	58	0.76	7	0.05	40	0.23	100	0.49	31	0.15
無無鐙	63	0.47	99	1.37	45	1.33	90	1.17	30	0.56	103	0.76	305	1.49	156	0.73
他	2	0.02	11	0.15	5	0.15	17	0.22	9	0.07	10	0.06	17	0.08	7	0.03
他	27	0.31	27	0.37	18	0.53	152	1.98	60	0.44	147	0.86	154	0.75	68	0.33
無無鐙	69	0.80	137	1.90	68	2.00	259	3.37	101	0.75	171	1.46	476	2.32	225	1.10
無無鐙	15	0.17	24	0.33	5	0.15	11	0.14	19	0.14	33	0.19	17	0.08	68	0.34
他	51	0.59	51	0.85	13	0.38	38	0.49	76	0.56	227	1.91	320	1.56	206	1.01
鉄・釘巾	3	0.03	2	0.03	22	0.65	18	0.23	5	0.04	19	0.11	25	0.12	29	0.13
青砥・他	10	0.12	1	0.01	0	0.00	3	0.04	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
無無鐙	39	0.69	84	1.22	43	1.18	67	0.87	102	0.76	379	2.21	362	1.77	301	1.47
縦二・他鐙付	128	1.49	229	3.12	138	3.18	326	4.24	301	2.23	696	4.06	838	4.08	526	2.58
国産陶器	0	0.00	0	0.00	14	0.41	26	0.34	3	0.02	114	0.66	30	0.15	6	0.03
日本製品計	8,195	95.14	6,654	91.34	3,037	89.43	5,634	73.34	11,322	83.88	15,307	89.29	18,405	89.81	19,346	94.73
有蓋脚	97	1.13	54	0.75	45	2.50	147	1.91	103	0.76	161	0.94	163	0.79	166	0.81
他	43	0.50	67	0.93	28	0.82	206	2.68	335	2.48	189	1.10	193	0.94	106	0.52
他	5	0.06	17	0.24	0	0.00	65	0.85	63	0.47	0	0.00	0	0.00	0	0.00
他	9	0.10	9	0.12	15	0.44	166	2.16	55	0.41	89	0.52	75	0.37	51	0.25
有蓋脚計	154	1.80	147	2.04	128	3.77	584	7.60	556	4.12	439	2.56	431	2.10	323	1.58
行燈脚	2	0.02	0	0.00	0	0.00	23	0.30	12	0.09	8	0.05	19	0.09	5	0.02
江	111	1.29	169	2.35	105	3.09	786	10.23	827	6.26	578	3.37	683	3.33	303	1.48
他	10	0.12	5	0.07	14	0.41	42	0.55	30	0.22	15	0.09	21	0.10	15	0.07
行燈脚	123	1.43	174	2.42	119	3.50	851	11.08	889	6.59	601	3.51	723	3.53	323	1.58
青磁脚	38	0.44	40	0.56	3	0.09	92	1.20	122	0.92	182	0.94	132	0.64	124	0.61
他	83	0.97	130	1.80	52	1.53	209	2.72	311	2.30	518	3.02	524	2.56	217	1.06
他	2	0.02	3	0.04	0	0.00	72	0.94	5	0.04	8	0.05	18	0.09	10	0.05
青磁脚	123	1.43	173	2.42	55	1.62	373	4.86	438	3.24	688	4.01	674	3.29	351	1.72
中国製品	1	0.01	1	0.01	20	0.59	193	2.51	151	1.19	19	0.11	10	0.05	8	0.04
中国製品計	431	5.00	520	7.22	35	10.34	2,001	26.05	2,044	15.14	1,747	10.19	2,021	9.86	1,005	4.92
鉄釘巾	2	0.02	2	0.03	2	0.06	16	0.21	2	0.01	22	0.13	16	0.08	17	0.08
他	0	0.00	0	0.00	0	0.00	6	0.08	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
その他	16	0.19	12	0.17	0	0.00	37	0.48	109	0.81	68	0.40	51	0.25	54	0.26
鉄釘巾計	18	0.21	14	0.19	2	0.06	59	0.77	111	0.82	90	0.52	67	0.33	71	0.35
鉄釘巾総計	0	0.00	23	0.32	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
輸入陶磁計	449	5.22	552	7.65	38	10.57	2,060	26.82	2,176	16.12	1,837	10.72	2,088	10.19	1,076	5.27
合 計	8,572	100.00	7,206	100.00	3,398	100.00	7,692	100.00	13,496	100.00	17,144	100.00	20,493	100.00	20,422	100.00

表11. 一乗谷朝倉氏遺跡出土陶磁器組成表

く，同じ一乗谷においても，朝倉館を筆頭に身分的に低くなるほど土師質皿の割合が低くなることは，その生活様式が京都のカワラケ文化との距離を現しているといえよう。

古手の土師質皿について

この第24次調査地区では，これまで報告してきた土師質皿とは形式的に異なる土師質皿が数種類見つかった。これらの内いくつかのタイプについては断片的には知られていたが，それらは小破片であったので十分検討することが出来なかった。しかし，今回はそれらが完形もしくはそれに近い形で出土したので報告することができた。

それらは，本文のところで報告しているが，改めてまとめると挿図18のようになる。分類の名称については，これまでの名称を考慮して取り敢えず仮称ということにしておきたい。これまでの名称がG類まで付けられているのでH類からとする。

H類　1・2は器壁がやや厚めで，平らな底部から腰部で屈曲して口縁部が立ち上がる。内側は見込みを残して，外面は体部から上を親指と曲げた人差し指で挟んでナデ調している。

I類　3～6は器壁が薄く平らな底部から腰部で屈曲して斜め上方に直線的に開く。内側は見込みをのぞいた部分に，外側は口縁部のみにナデ痕がみられる。胎土はやや荒く胎土のなかに雲母や長石の粒子が混じる。

A類　7・8は底部を突き上げたいわゆる「ヘソ皿」ということで一括した。7は口径が5.6㎝前後と小さいが，基本的な成形技法はこれまでのC類と同じであろう。8はB類の底部を突き上げたものと推定される。

J類　9・10は底部の中央が厚くなるのが特徴で，内側は厚い見込みをのぞいて，外側は体部中程から上にナデが施されている。9の方が深く胎土も細かい。

K類　11・12は基本的な成形技法はこれまでのD類に似るが，底部が少し上げ底状で，内面の横ナデが2段になっている。その分D類より深い。13・14はやや深く，器壁も厚いことと口縁部が丸く収まっている点がJ類と異なり胎土もやや赤い。

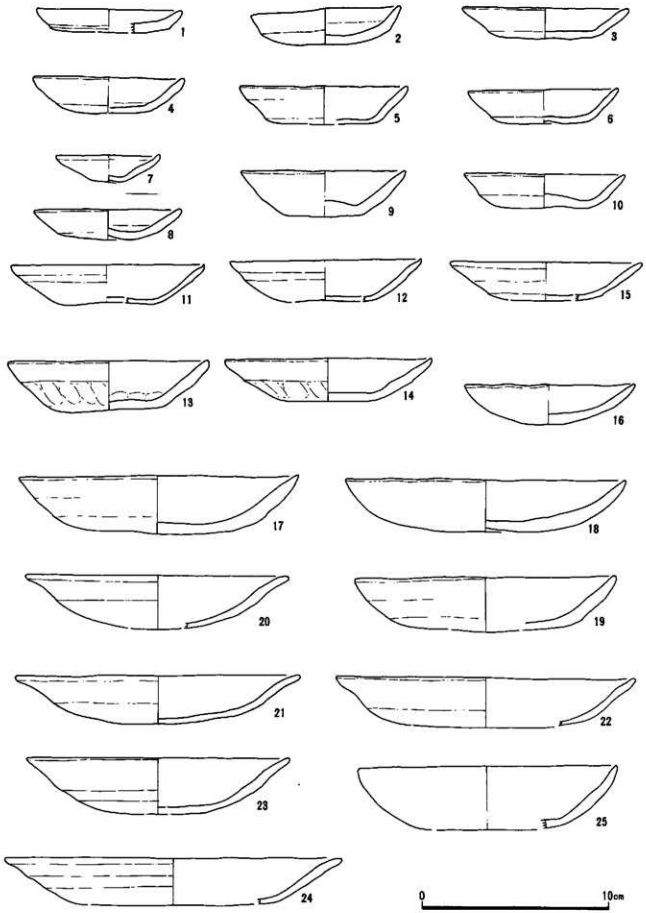
L類　16はまるい底部から内湾気味に立ち上がり口縁端部は紡垂形になる。胎土は細かいが灰色を呈する。17～19は16の大型で口縁部の直径は15㎝ほどである。

M類　20～24は比較的丸い底部から外反するように立ち上がり，見込みをのぞく内側と外側口縁部はナデが施され，23・24の場合は外側のナデが2段になる。胎土はやや荒く長石や雲母の粒子が混じり，3～6と同じ胎土である。23・24は胎土も細かい。25は皿というより杯であろう。

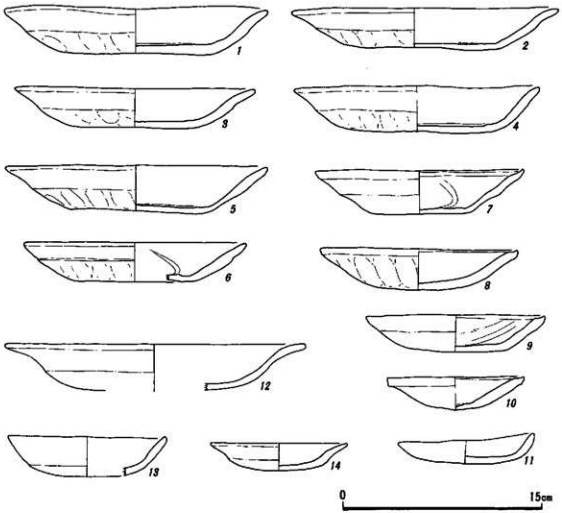
また，挿図19の1～6は平成4年度に実施した第77次調査の下層から出土した土師質皿で，図にするとこれまでのD類・C類と基本的な成形技法は変わらないが，口縁部の端部がナデによって内湾していない点が異なっている。7は内面のナデが2段になっている。12～14は挿図18と対応する。なお8～10は口縁端部が内湾しており，D類・C類と同じである。

これらはかならずしもこれまでに分類してきたA～G類より古く位置付けられるものばかりではないが，L・M類は興行寺跡遺跡の炭化面からも出土しており，これらは確実に15世紀前半に位置付けられるものである。そのほかのものも，一乗谷の長い調査でも出土してこなかったことから，これまでの土師質皿より一時期古いものとみて良いのではないか。

越前の土師質皿の研究状況は，これまで中世の遺跡の調査例が一乗谷に片寄っていたこともあって，



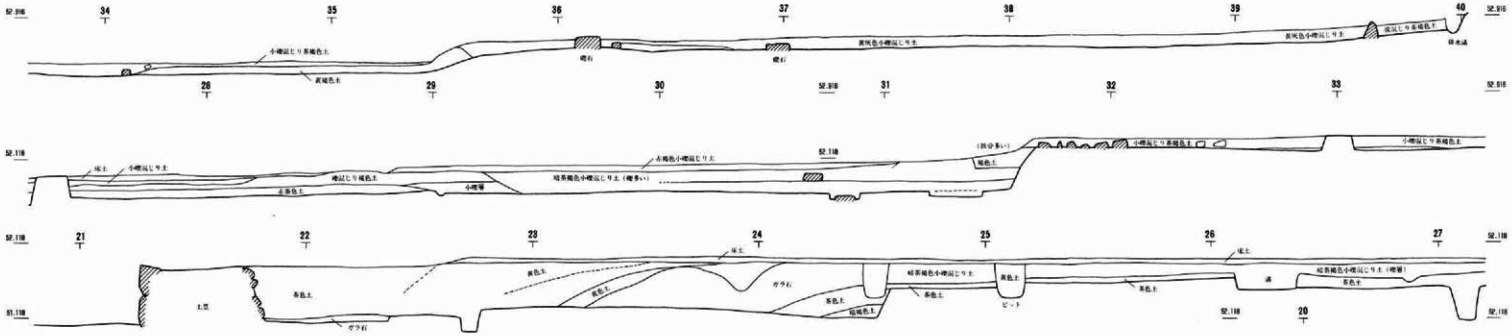
挿図18　第24次調査出土の土師質皿



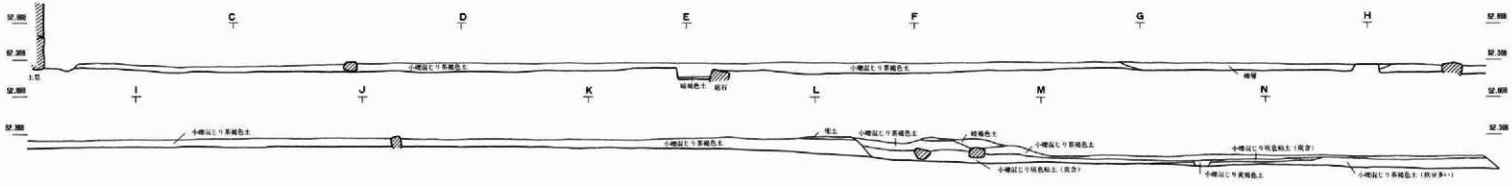
挿図19　第77次調査出土の土師質皿

中世前期から15世紀までについては小野正敏が「豊原寺跡II華厳院跡第２次発掘調査概報」の中で，その大まかな見通しを示している。ところが，福井県埋蔵文化財調査センターが，1989年から92年にかけて福井県吉田郡永平寺町諏訪間54字奥ノ谷にある興行寺遺跡を調査したところ，15世紀前半代の資料が発掘された。この資料は火事で焼けた灰・炭層の中から出土したもので，ほとんど時代の異なる遺物を含んでいない非常に良好な一括資料である。また，大野市の新庄遺跡でも鍛冶関係の遺構から13世紀後半代の資料を得ることが出来た。これらの資料によって，南洋一郎は北陸中世土器研究会の発表資料の中で小野の見通しに定点を与えた。一乗谷の土師質土器の編年も，こうした越前全体の中でとらえていきたい。

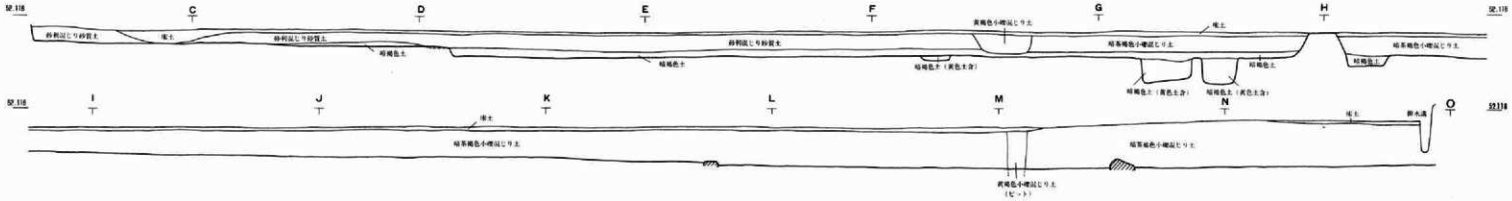
第33図　土層図



Hライン・東西土層セクション図



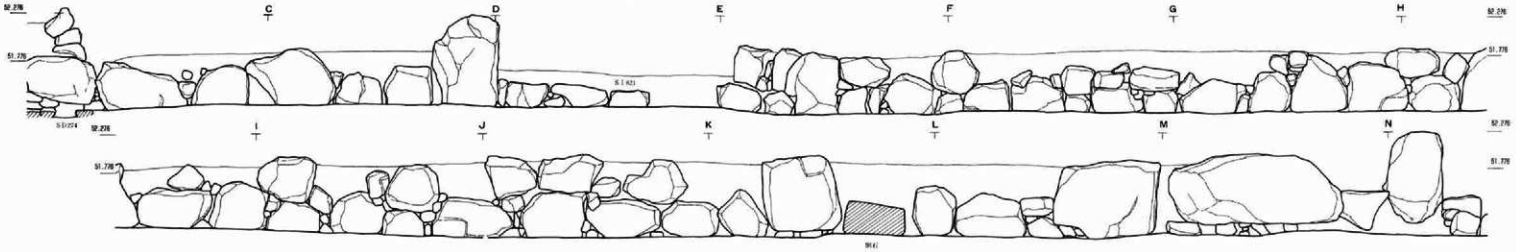
33ライン・南北土層セクション図



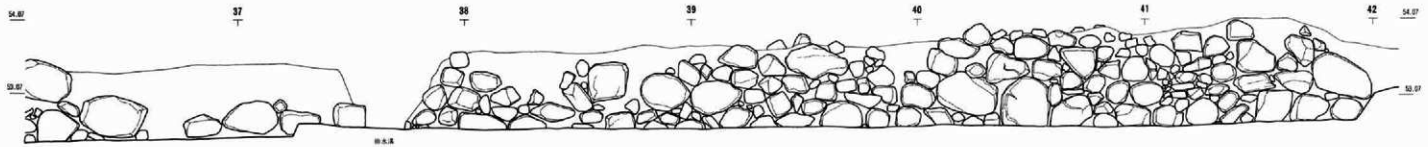
27ライン・南北土層セクション図

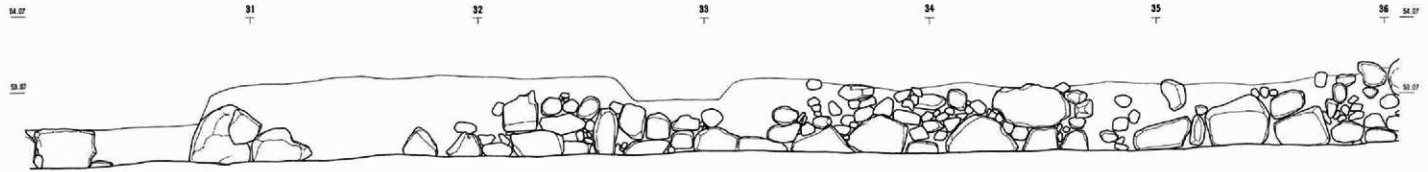
0　5M

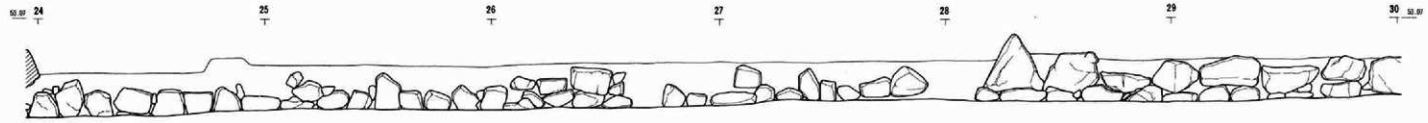
第34図　石垣立面図



東土塁エレベーション（東面）







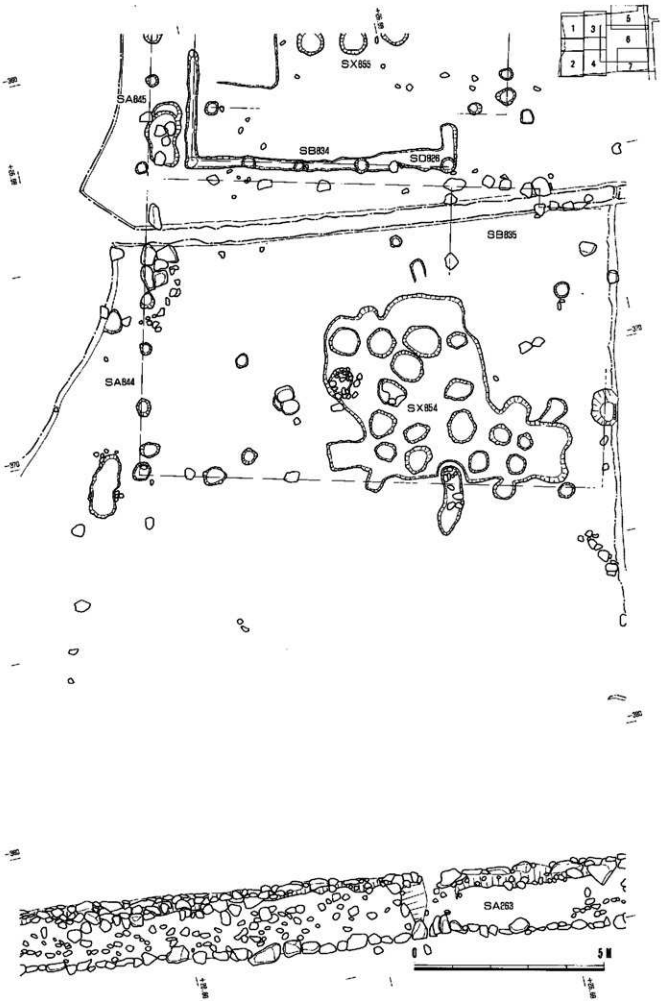
南土塁エレベーション（北面）

0　5M

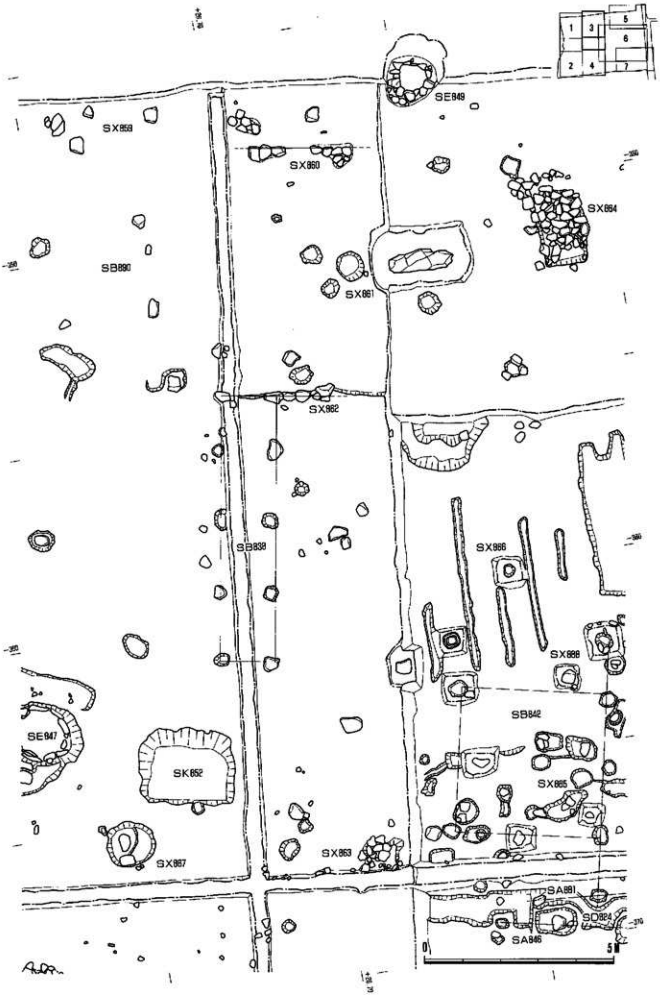
第35図　遺構詳細図(1)

1
2
3
4
5
6
SD827
SB830
SX829
SX858
SA857
SB831
SB832
SD864
SB833
SK866
SX865
SX855
SA845
SE847
SB834
SD828
SB835
SA844
0
5m

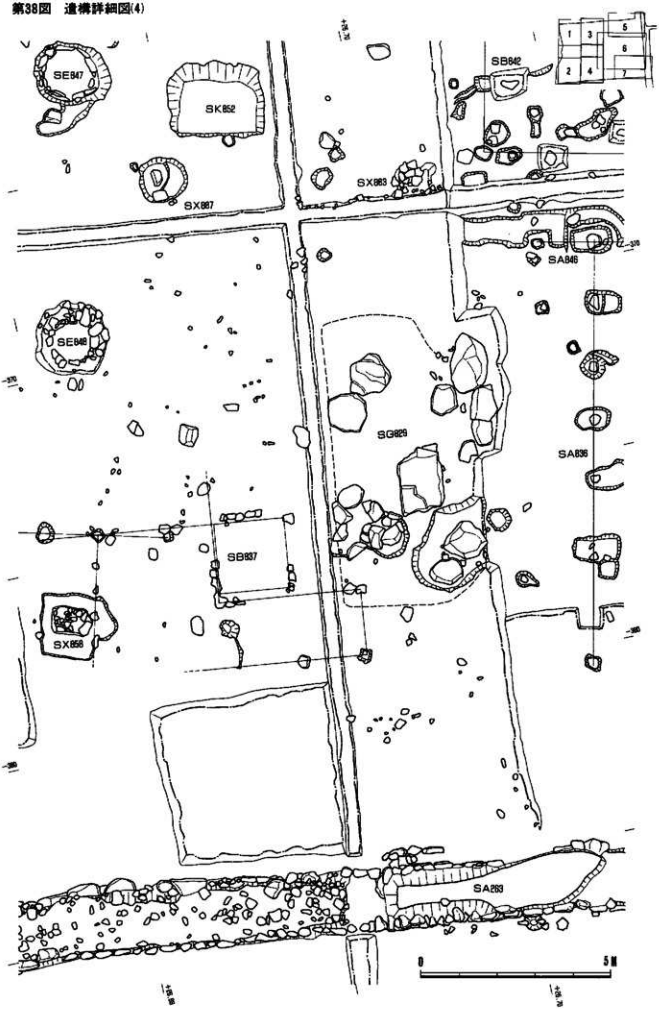
第36図　遺構詳細図(2)



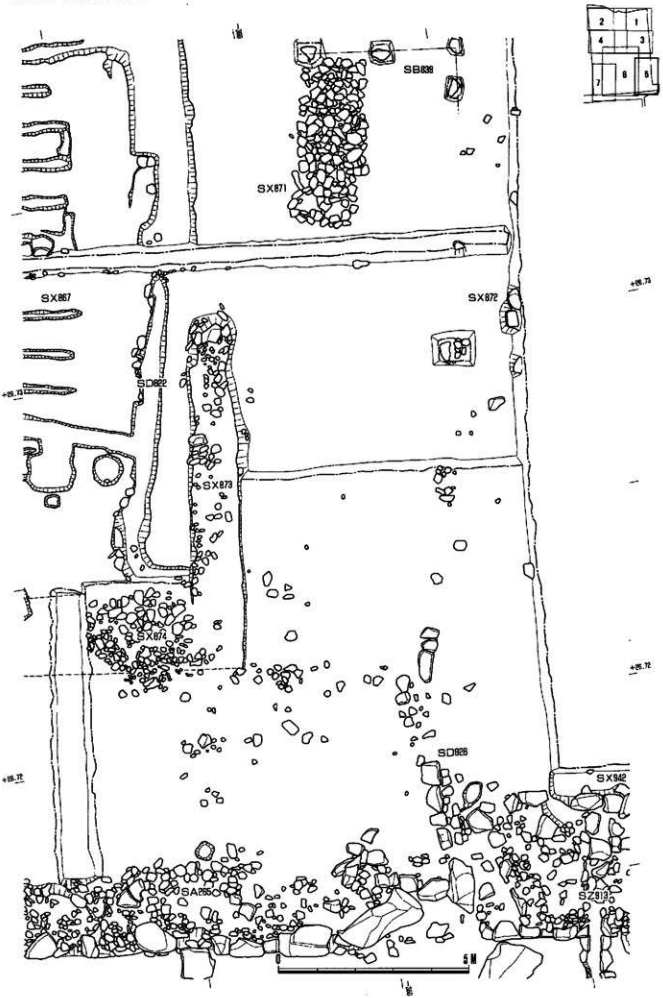
第37図　遺構詳細図(3)


1
2
3
4
5
6
7
SE849
SX859
SX860
SX864
SB890
SX861
SX862
SB838
SX866
SX868
SB842
SE847
SK852
SX865
SX857
SX863
SA881
SD824
SA845
0
5

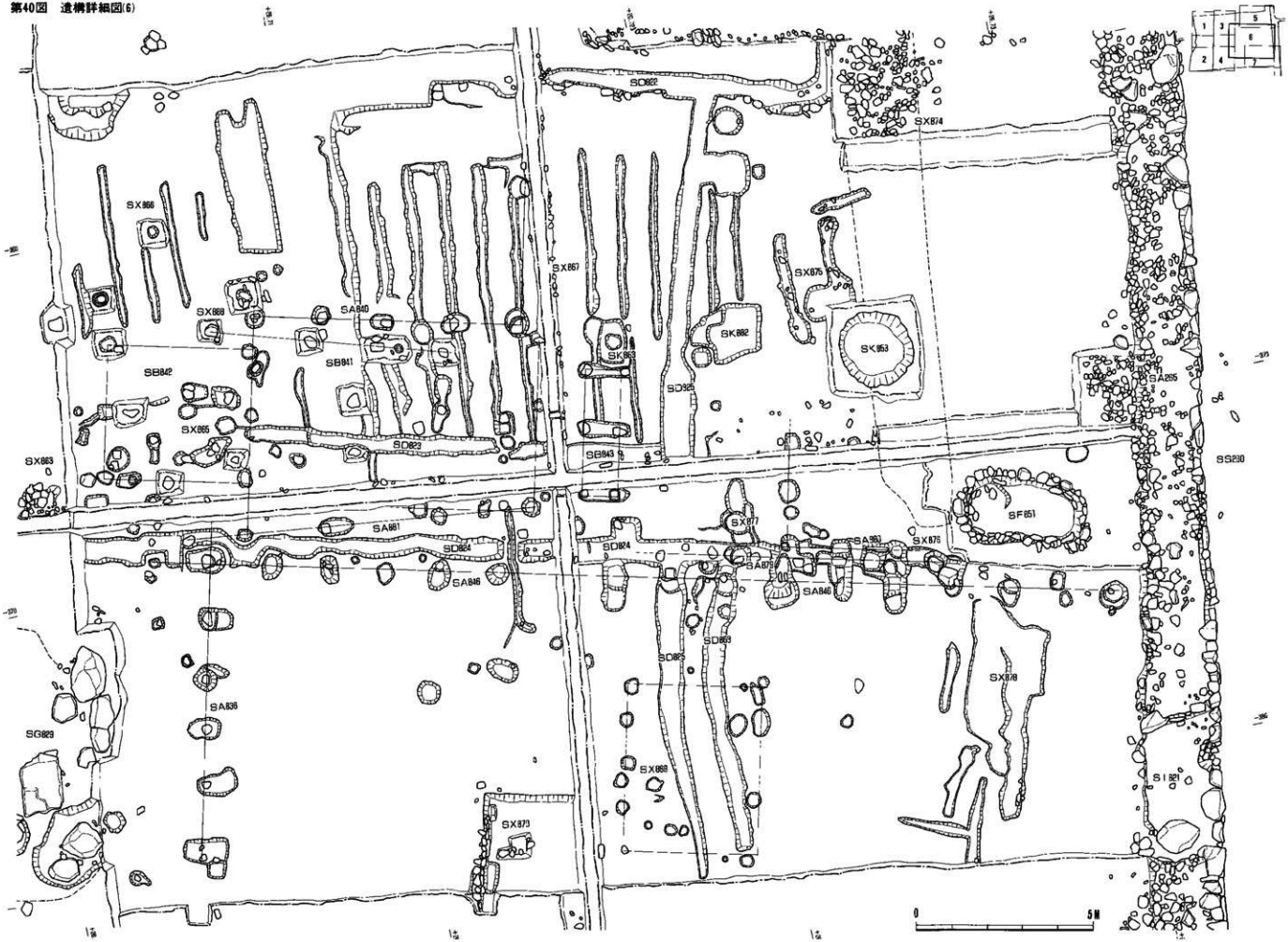
第38図　遺構詳細図(4)


SE847
SK852
SX867
SX863
SB842
SA846
SE848
SG829
SA836
SB837
SX858
SA283
0
5M

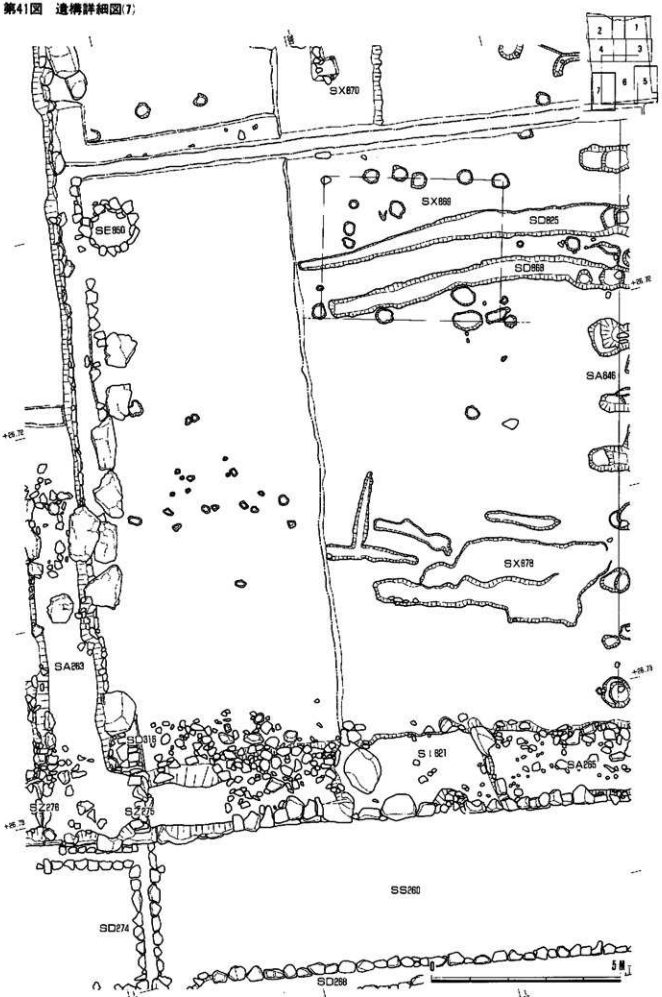
第39図　遺構詳細図(5)


SB839
SX871
SX867
SX872
SD862
SX873
SX874
SD926
SX942
SA850
SZ915
5M

第40図　遺構詳細図(6)


SD822
SX874
SX866
SX867
SX876
SX869
SA840
SK882
SK853
SB842
SB841
SD825
SA855
SX865
SD823
SX863
SB843
SS230
SF851
SA861
SX877
SD824
SA860
SX875
SA846
SA879
SA846
SD869
SD825
SX878
SA836
SG829
SX868
SX873
SI821
0
5M

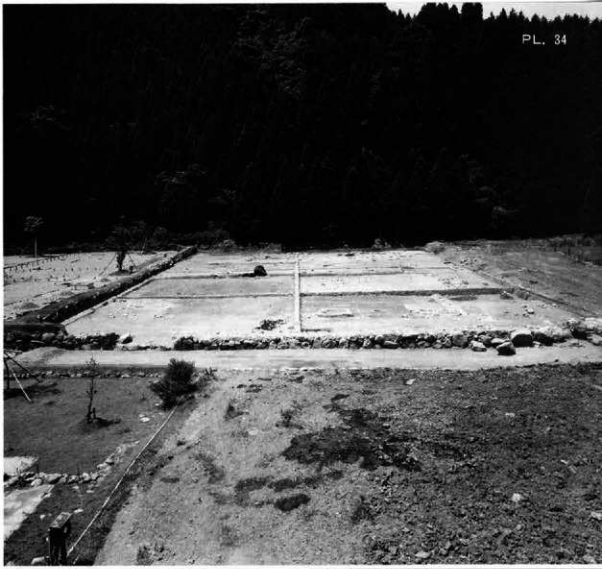
第41図　遺構詳細図(7)


SX870
SX888
SD825
SD868
SE858
SA846
SX878
SA263
SD316
SI821
SA255
SZ276
SZ275
SS260
SD274
SD268
5M

調査区全景

全　景
（北東から）

全　景
（東から）



◀土壘SA265
道路SS260
（北から）
▶　（南から）

礎石建物SB 830・SB 831

礎石建物SB830
SB831
（北から）

（東から）

礎石建物 SB 835 他

礎石建物 SB 835
S X 854 他
（北から）

礎石建物 SB 830
SB 831 他
（南から）

大型煙道遺構
S X 854（南から）

庭 SG 829他

礎石建物SB838
（南から）

礎石建物SB837
庭SG829
（西から）

（南から）

土壙・石敷・盲暗渠

SX867・SK853
（南から）

SX864・SX874
（南から）

SX871・SX867
SX866

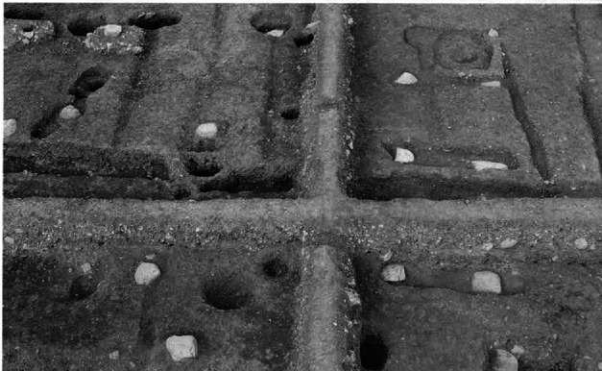
（北から）

構列SA846他

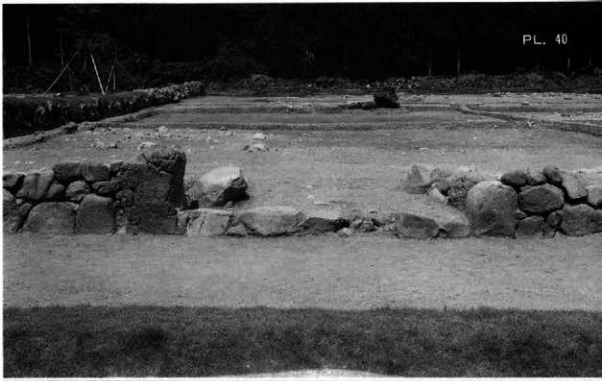
SF851・SK853他
（東から）

構列SA846
溝SD824他
（西から）

礎石建物SB843他
（南から）



門SI821
(東から)



(西から)

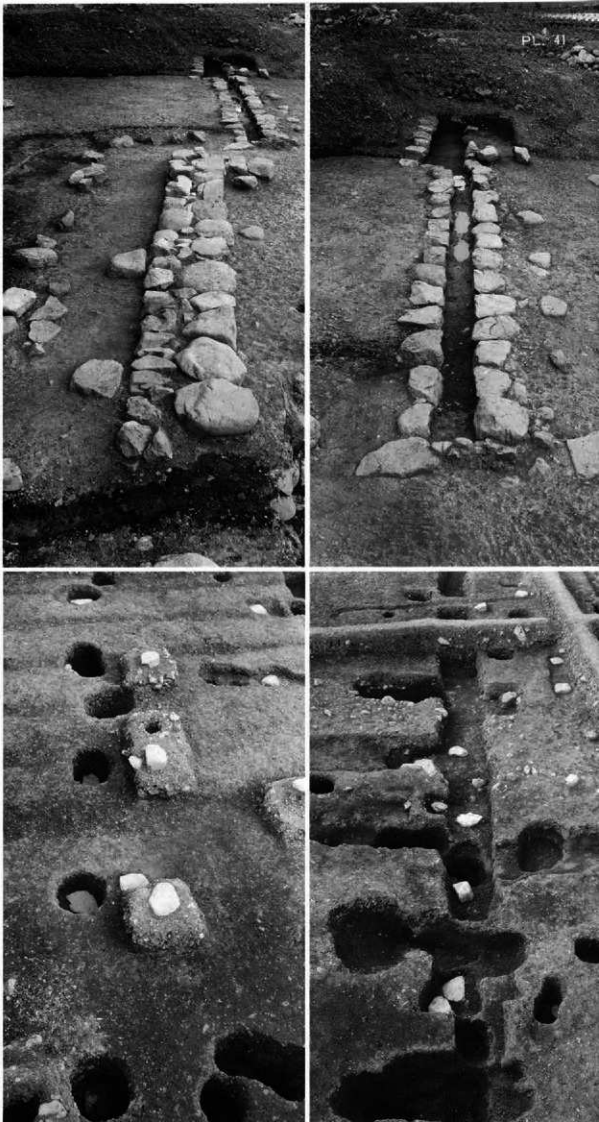
土塁SA263
(西半・北面)

◀石敷SA857
（南から）

▶溝SD 827
（南から）

◀礎石建物SB841
柵列SA840
（西から）

▶柵列SA846
（東から）



SF851
(南から)

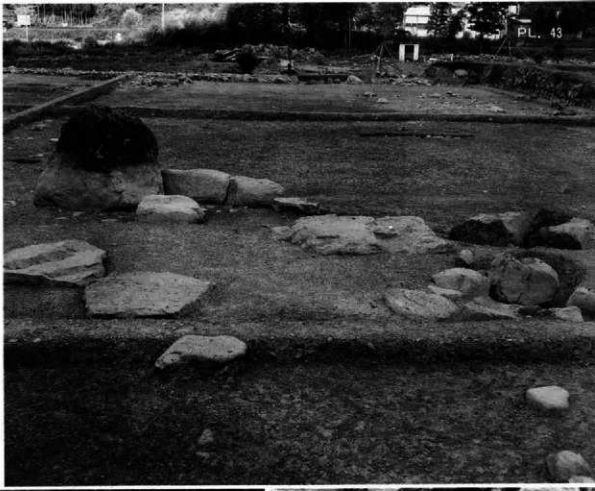
◀SF851
(西から)

▶SE848
(南から)

◀SE849
(南から)

▶SE850
(北から)

庭跡SG829
（西から）



◤SG829
（北から）

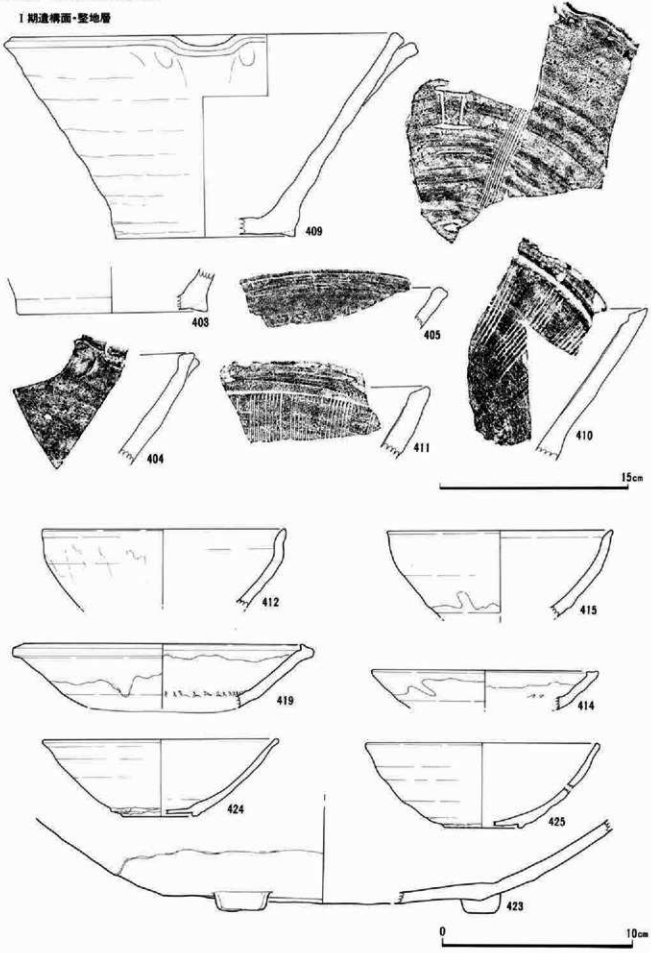
◥SX854
（南から）

◣SX870
（東から）

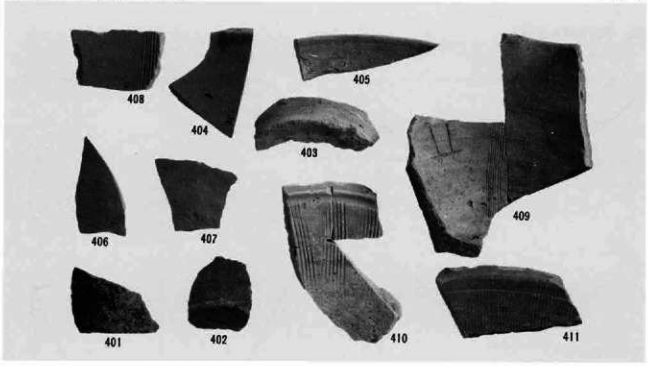
◢SK852
（東から）

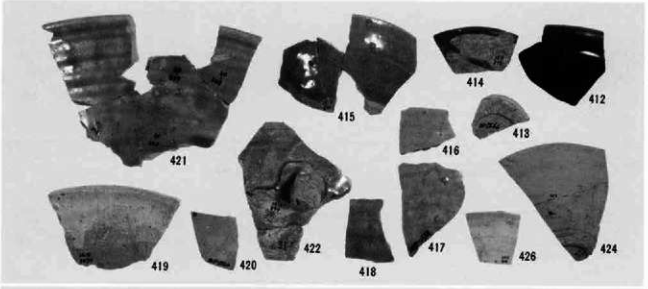
第42図　第24次調査遺物(1)

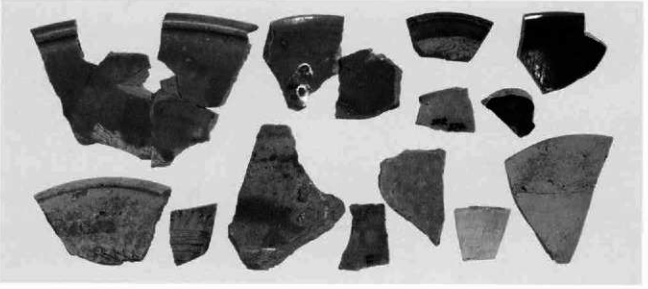
Ⅰ期遺構面・整地層



越前焼鉢403～405　擂鉢409～411　**鉄釉**碗412　卸皿414　**灰釉**碗415　卸皿419　三足鉢423　**白瓷系**碗424・425

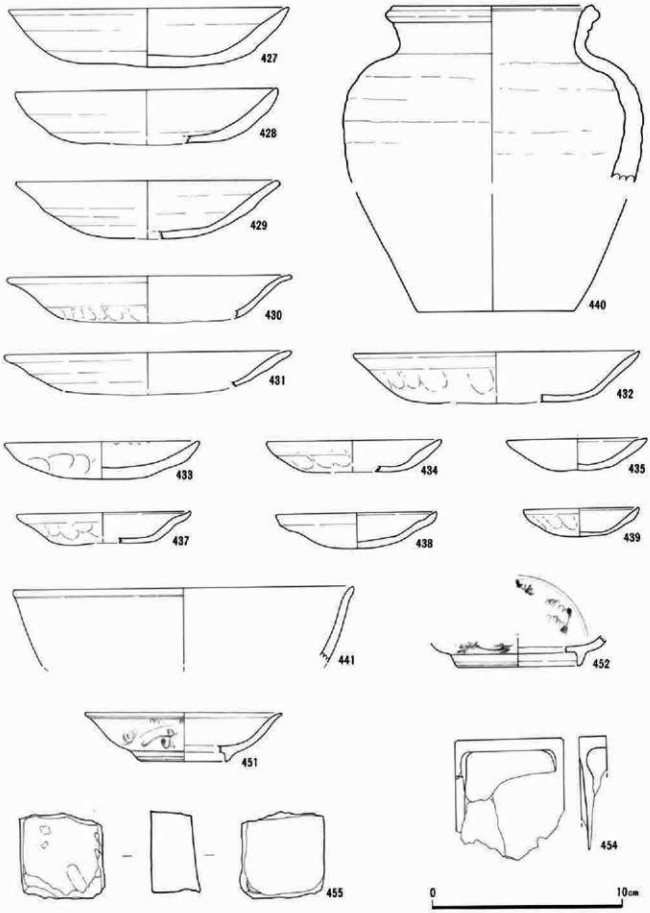




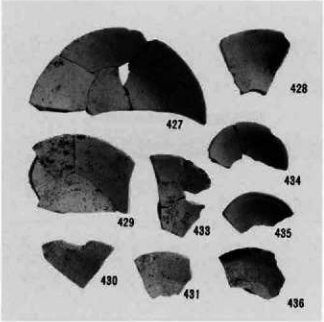


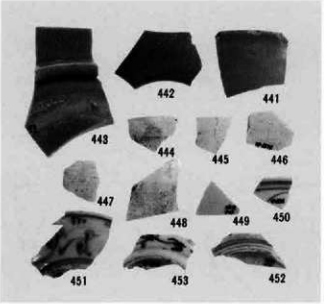
Ⅰ期遺構面・整地層　**越前焼**壺401・402　鉢403～407　壷鉢408～411　**鉄釉**碗412・413　卸皿414　**灰釉**碗415・416　鉢417～418　卸皿419・420　三足鉢421・422　**白瓷系**碗424・426

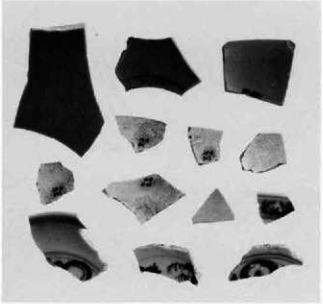
第43図　第24次調査遺物(2)

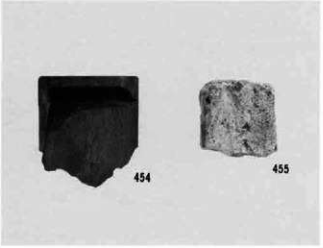


土師質皿427～435・437～439　珠洲壺440　青磁碗441　染付皿451・452　石製品硯454　砥石455





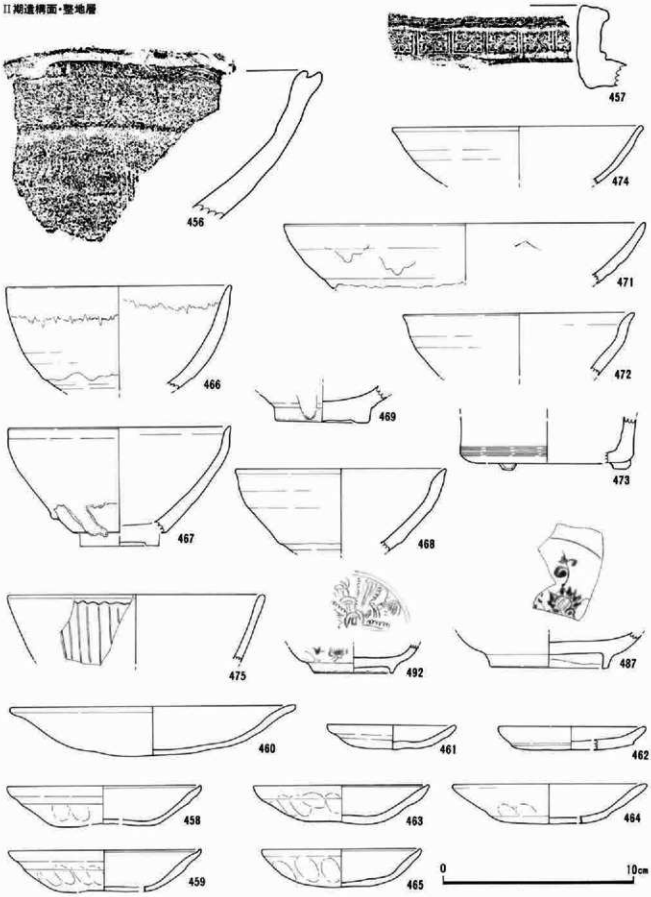




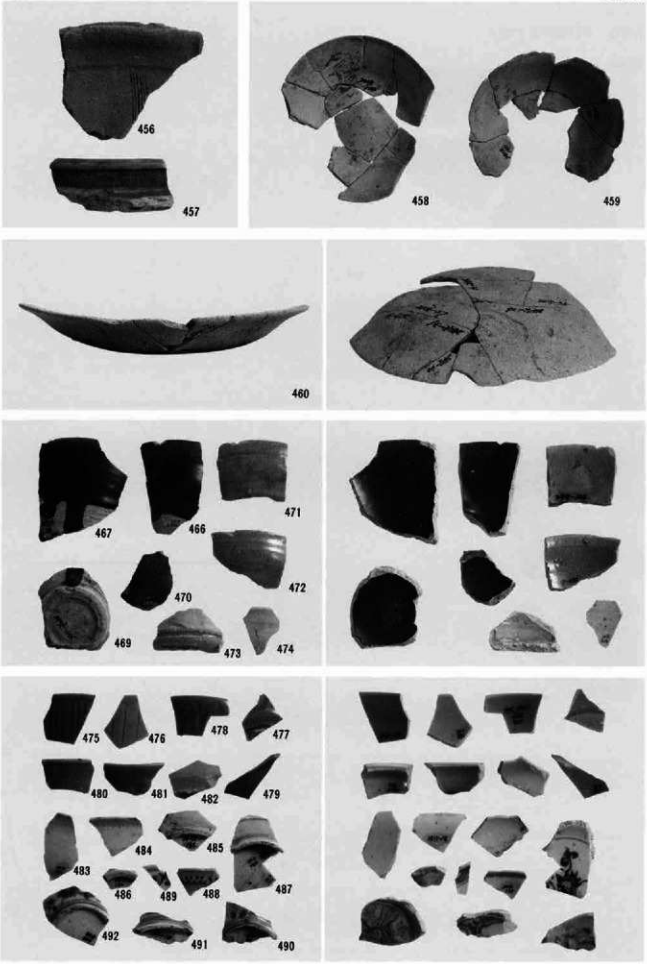
Ⅰ期遺構面・整地層　**土師質**皿427～431・433～436　**珠洲**壺440　**青磁**碗441　鉢442・443　**白磁**皿444～449　**染付**皿450～453
石製品硯454　砥石455

第44図　第24次調査遺物(3)

Ⅱ期遺構面・整地層

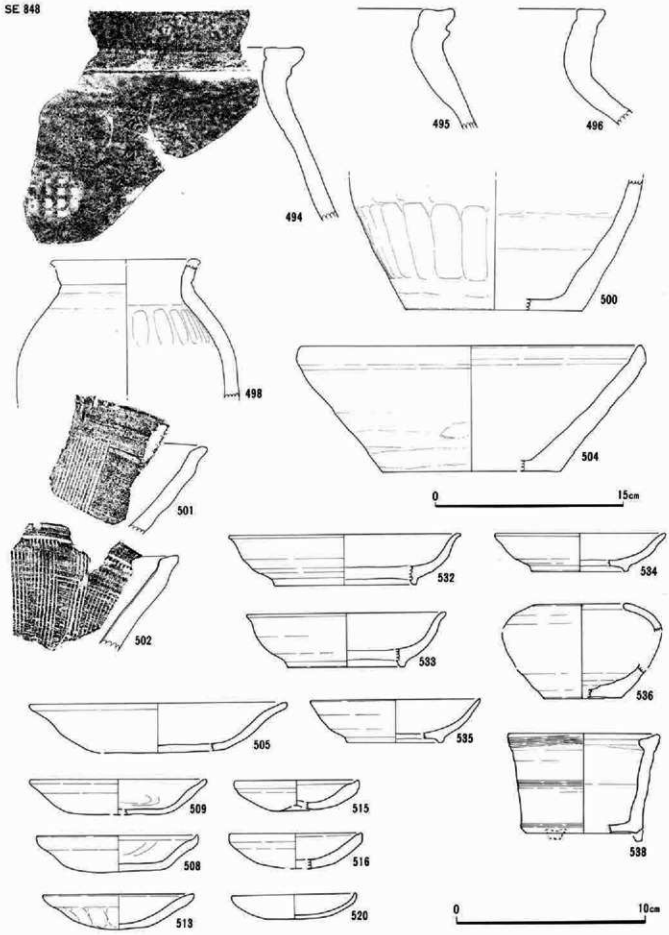


越前焼擂鉢456　**瓦質**風炉457　**土師質**皿458～465　**鉄釉**碗466～469　**灰釉**鉢471　碗472　香炉473　**白瓷系**碗474
青磁碗475　**染付**碗487　皿492



II期遺構面・整地層 **越前焼**擂鉢456 **瓦質**風炉457 **土師質**皿458～460 **鉄釉**碗466～469 小壺470 **灰釉**鉢471 碗472 香炉473 **白瓷系**碗474 **青磁**碗475～479 香炉480～482 **白磁**皿483～486 **染付**碗487～489 皿490～492

第45図　第24次調査遺物(4)



越前焼甕494～496　壺498・500　擂鉢501・502　鉢504　**土師質**皿505・508・509・513・515・516・520　**灰釉**皿532～535　小壺536
無釉香炉538

493 494 496 497 495 498 501 503 499 502 504

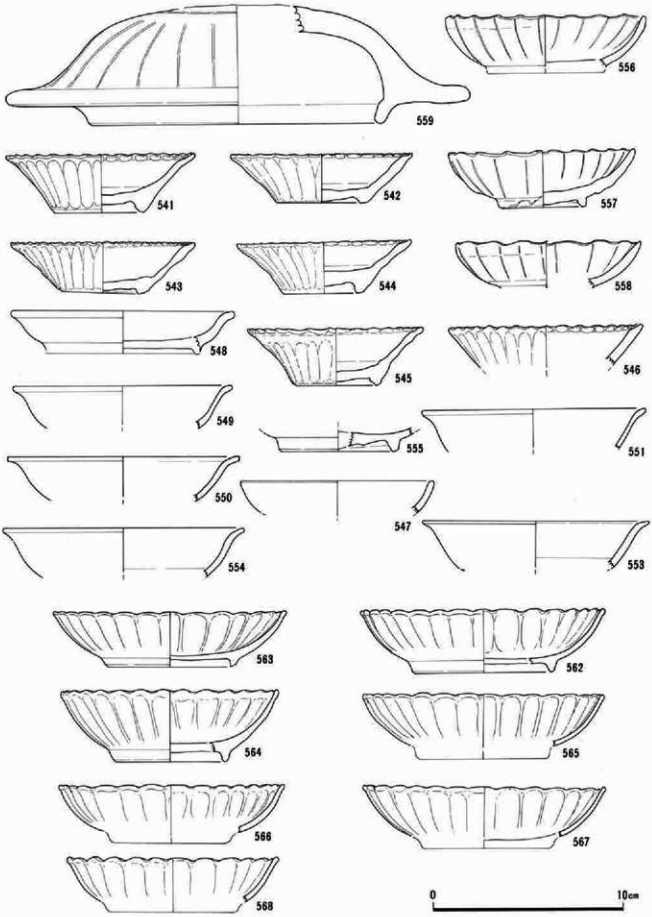
507 506 505 508 509 510 514 517 518 520 519 511 512

525 521 524 522 523

530 531 535 538 536 533 537 539

SE848 **越前焼**甕493～496　壺497～499　擂鉢501・502　鉢503・504　**土師質**皿505～517　金属が融着した皿521～525
鉄釉碗530　**灰釉**碗531　皿533・535　小壺536・537　**無釉**香炉538・539

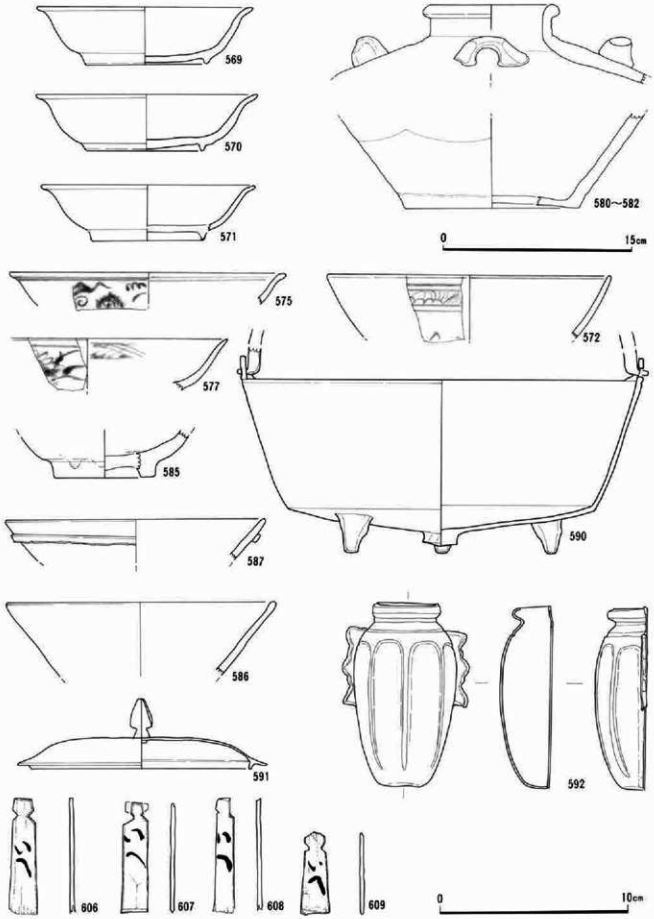
第46図　第24次調査遺物(5)



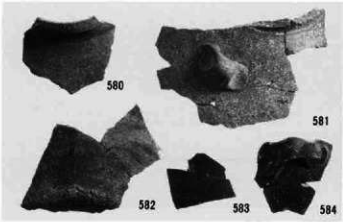
青磁皿541～551・553～558　酒会壺蓋559　**白磁**皿562～568

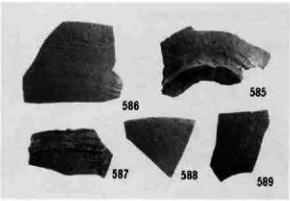
SE847　**青磁**碗540　皿541～543・547～555・557　香炉560　壺561　**白磁**皿562・563・569・570　**染付**碗572～574　皿575～578
杯579

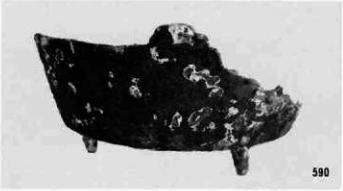
第47図　第24次調査遺物(6)

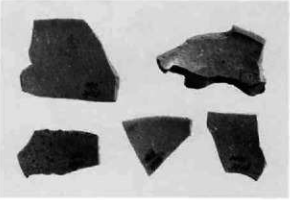


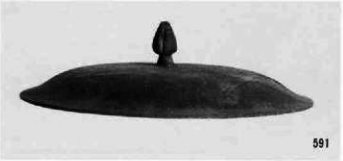
白磁皿569～571　**染付**碗572　皿575・577　**中国製褐釉**壺580～582　**朝鮮製**碗585～587　**鉄製品**鉄鍋590
銅製品茶釜壺591　花瓶592　**木製品**付札606～609

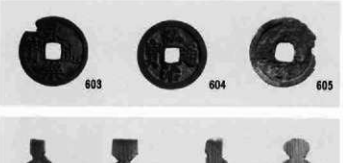


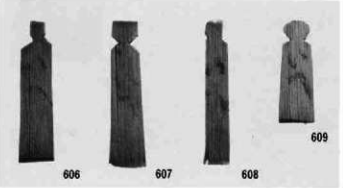


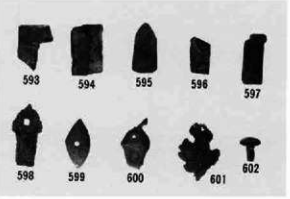






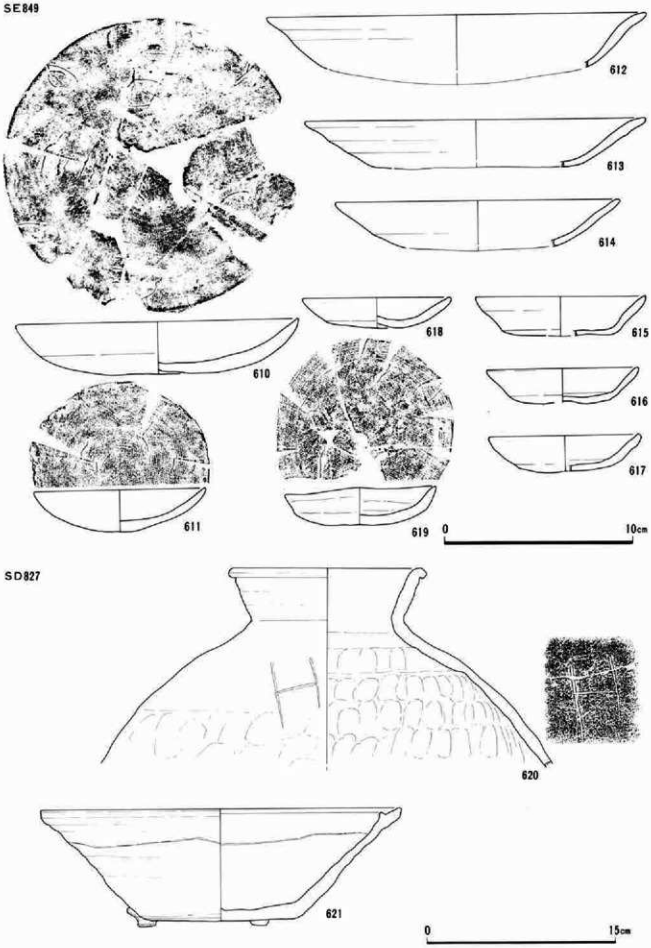




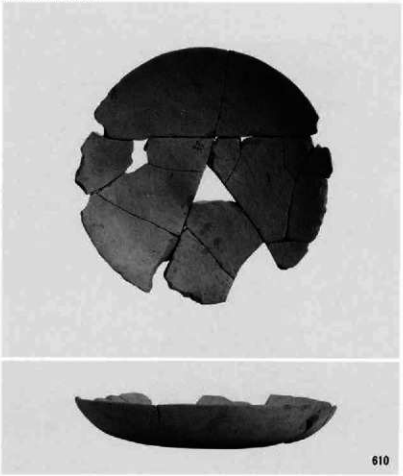


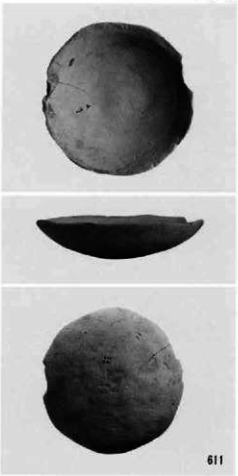
SE847　**中国製褐釉**壺580～584　**朝鮮製**碗586～589　**鉄製品**鉄鍋590　**銅製品**茶釜蓋591　花瓶592　飾金具593～602
銅銭603～605　**木製品**付札606～609

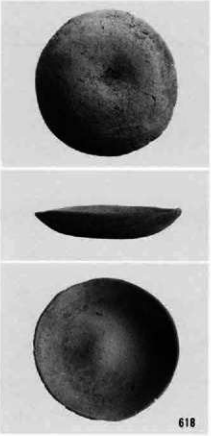
第48図　第24次調査遺物(7)

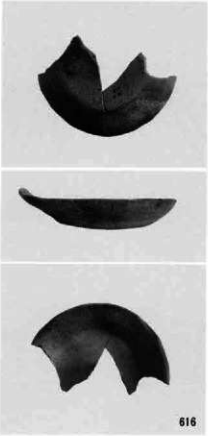


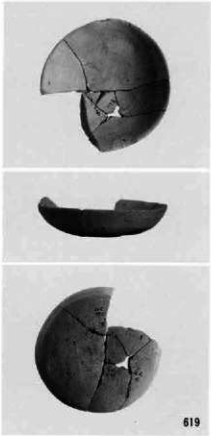
土師質皿610～619　越前焼壺620　灰釉三足鉢621





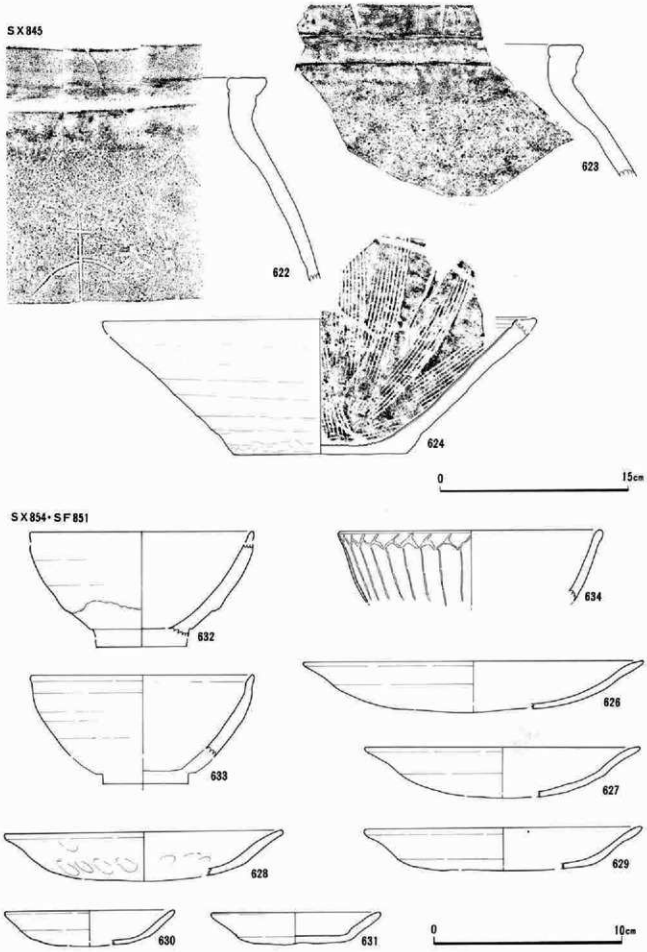




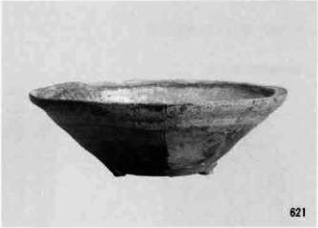


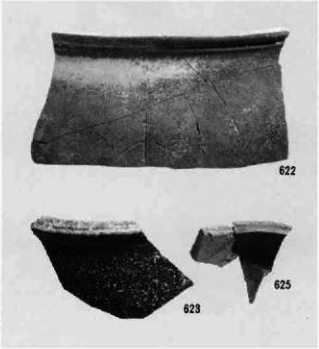
SE849 土師質皿610・611・616・618・619

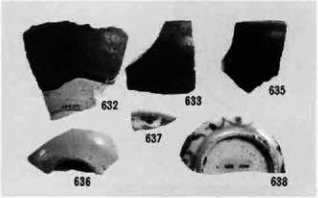
第49図　第24次調査遺物(8)

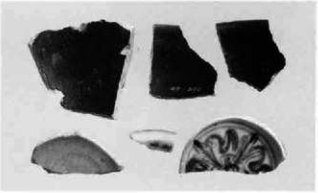


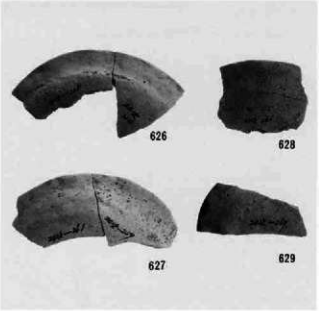
越前焼壺622・623　擂鉢624　鉄釉碗632・633　青磁碗634　土師質皿626～631







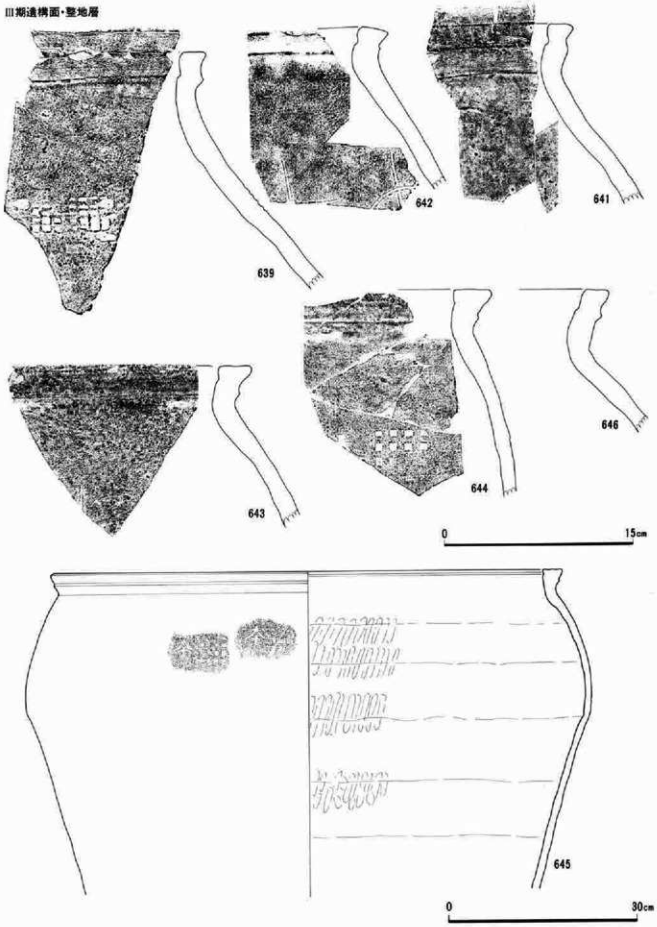




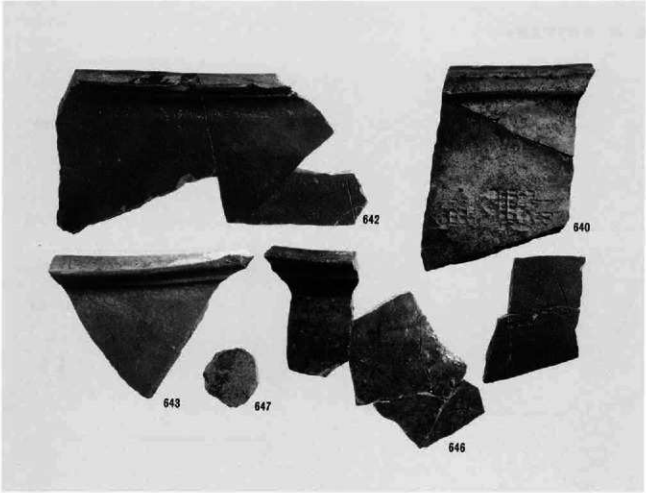
SD827 越前焼壺620 灰釉三足盤621 SK855 越前焼甕622・623擂鉢624・625 SX858 鉄釉碗635 青磁板636
SB890内ピット 染付皿637・638 SF851 土師質皿626～629

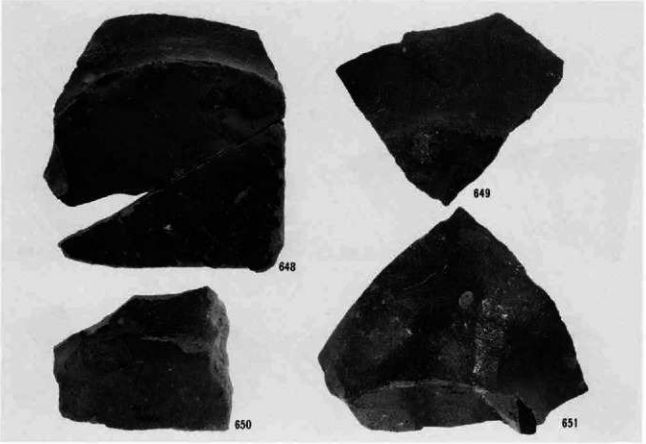
第50図　第24次調査遺物(9)

Ⅲ期遺構面・整地層



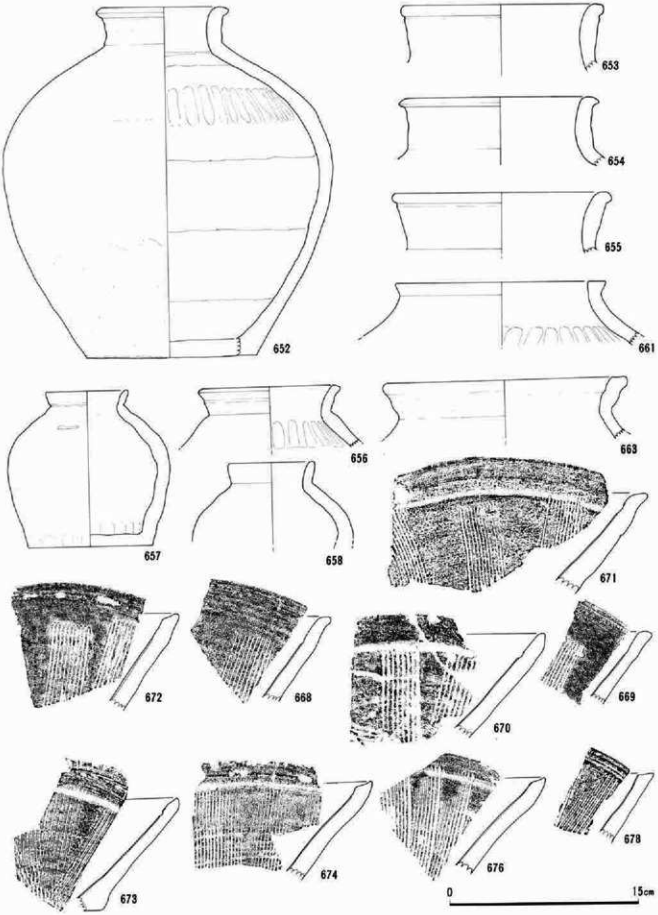
越前焼甕639・641～646



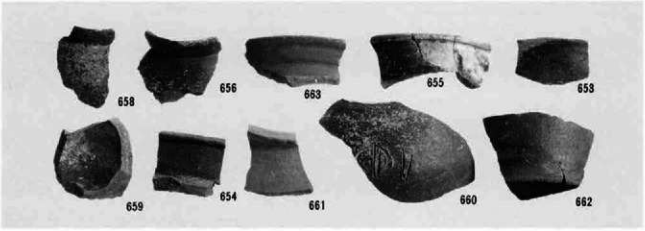


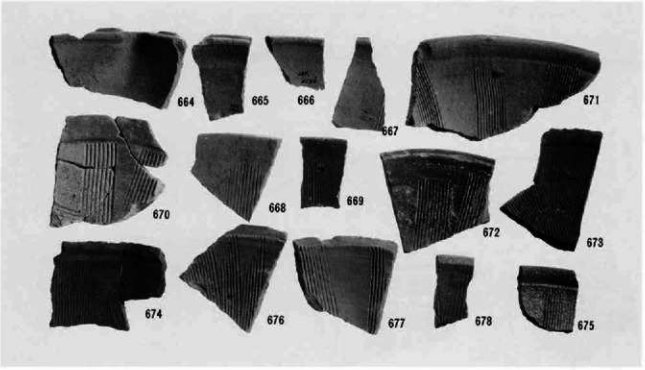
III期遺構面・整地層　越前焼甕640・642・643・646～651

第51図　第24次調査遺物10



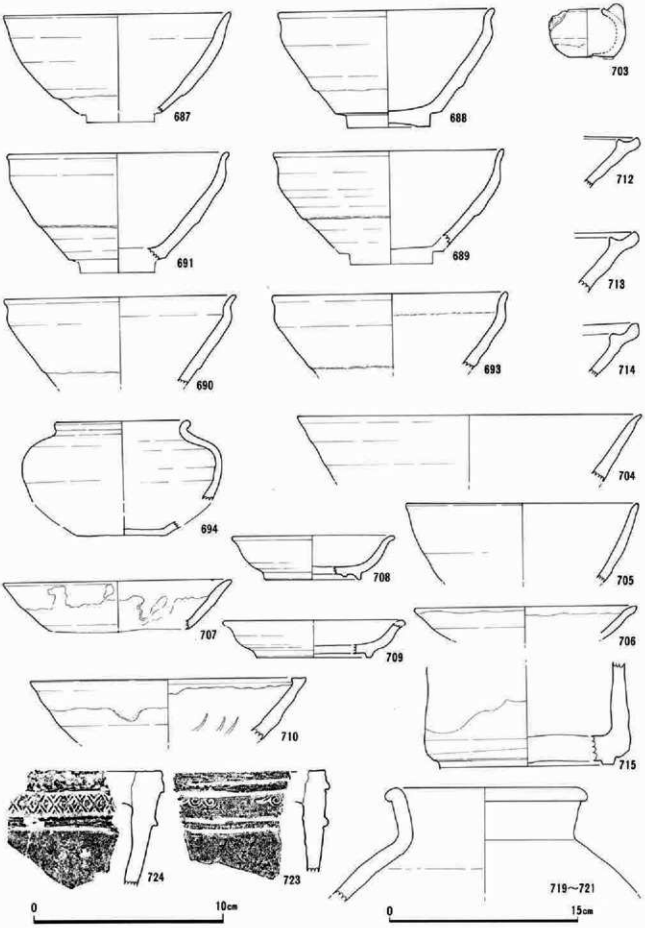
越前焼壺652～658・661・663　擂鉢668～674・676・678



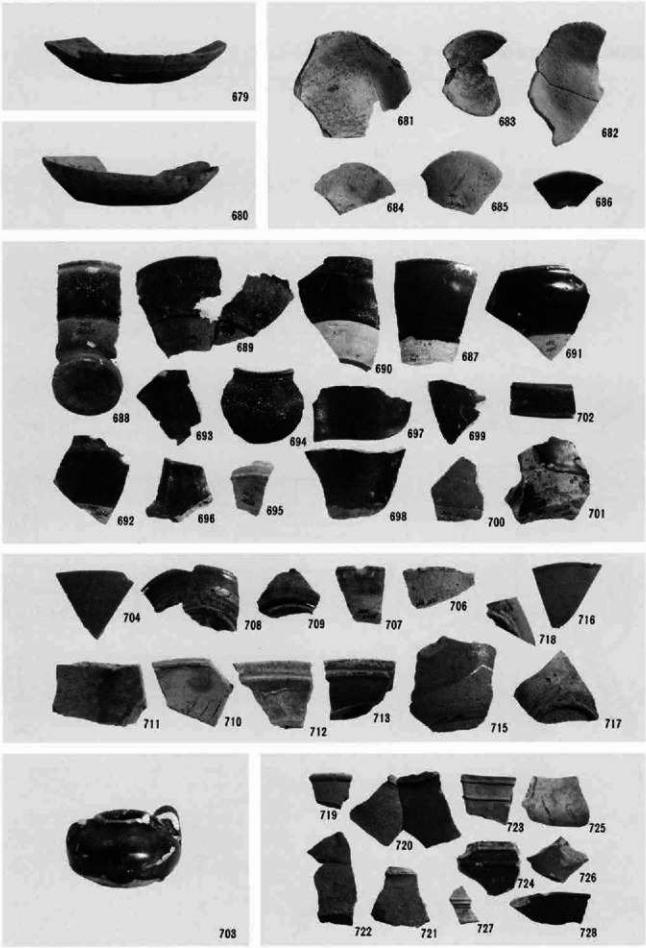


Ⅲ期遺構面・整地層　**越前焼**壺652～663　鉢664～666　擂鉢667～678

第52図　第24次調査遺物(1)

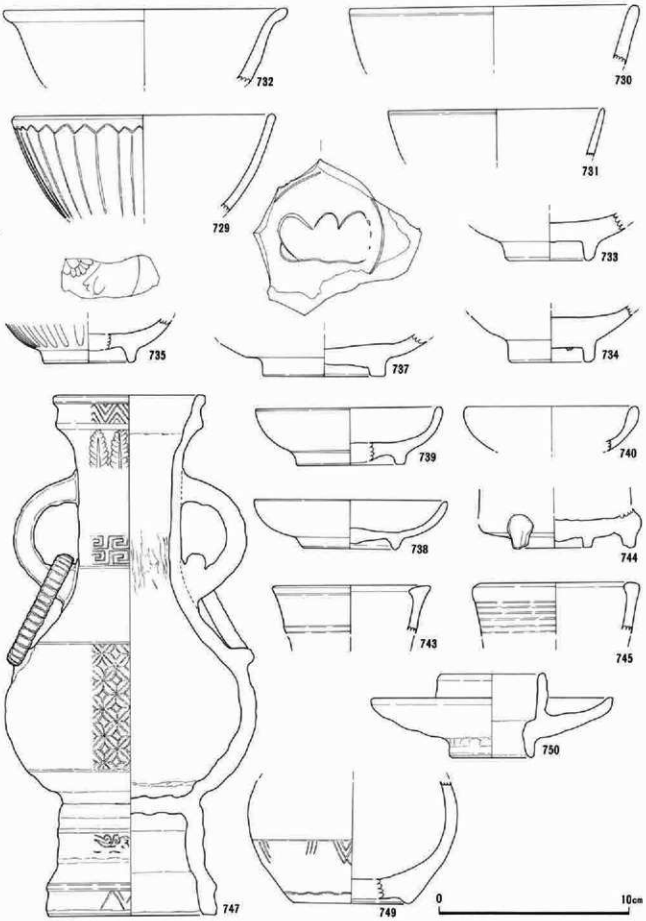


鉄釉碗687～691・693　小壺694　水滴703　**灰釉**鉢704　碗705　皿706～709　郷皿710　盤712～714　壺715　**瓦質**火鉢723・724
信楽壺719～721

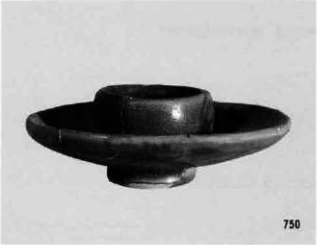


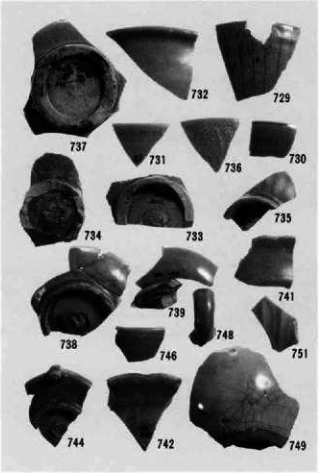
Ⅲ期遺構面・整地層　**土師質**皿679～686　**鉄釉**碗687～693　小壺694・695　片口696　壺697～701　水注取手702　水滴703
灰釉鉢704　皿706～709　卸皿710　盤711～713　壺715　**白瓷系**碗716～718　**信楽**壺719～722　**瓦質**火鉢723・724　風炉725・726
花生727・728

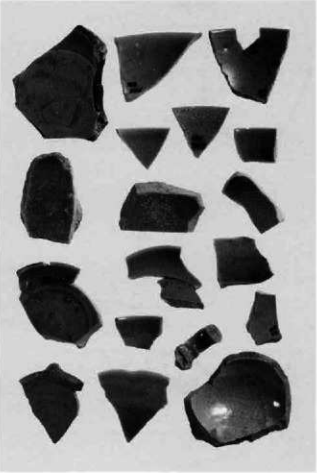
第53図　第24次調査遺物⑫



青磁碗729～735・737　皿738～740　香炉743～745　花生747・749　托750

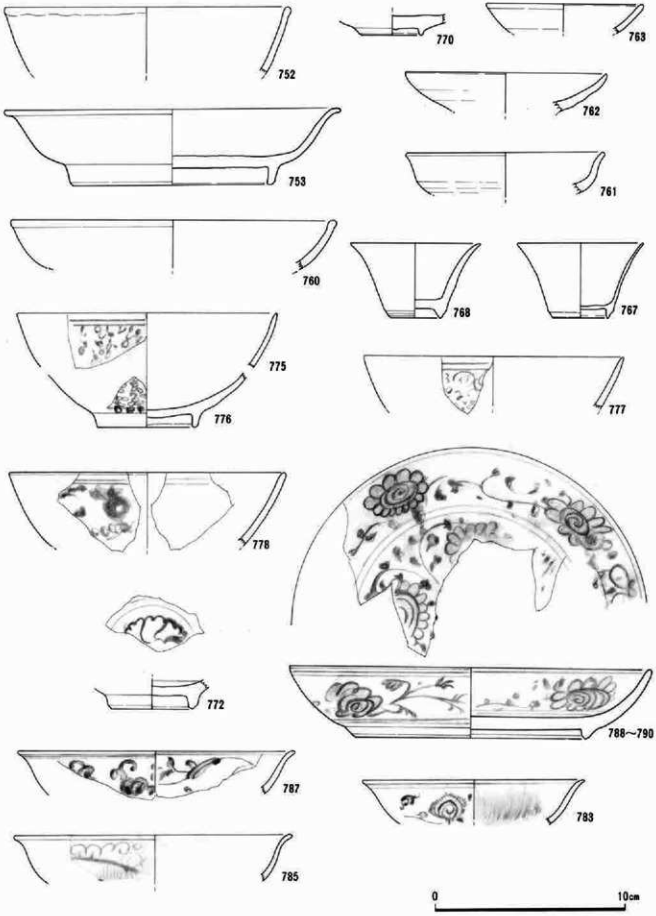




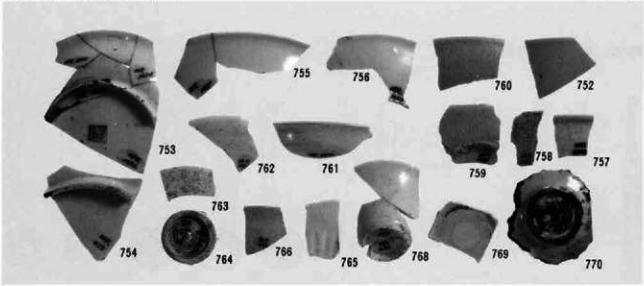


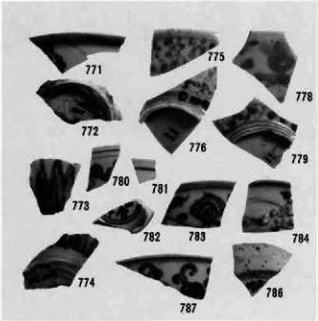
III期遺構面・整地層　**青磁**碗729～737　皿738・739・741　盤742　香炉744・746　花生747～749　托750　小壺751　**白磁**杯767

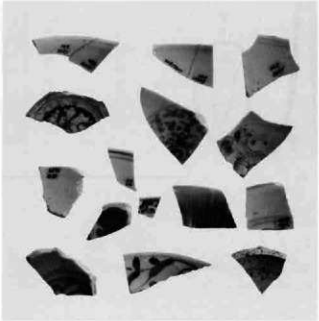
第54図　第24次調査遺物13)

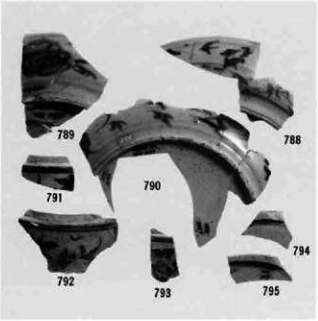


白磁碗752　皿753・760～763　杯767・768・770　染付碗772・775～778　皿783・785・787～790



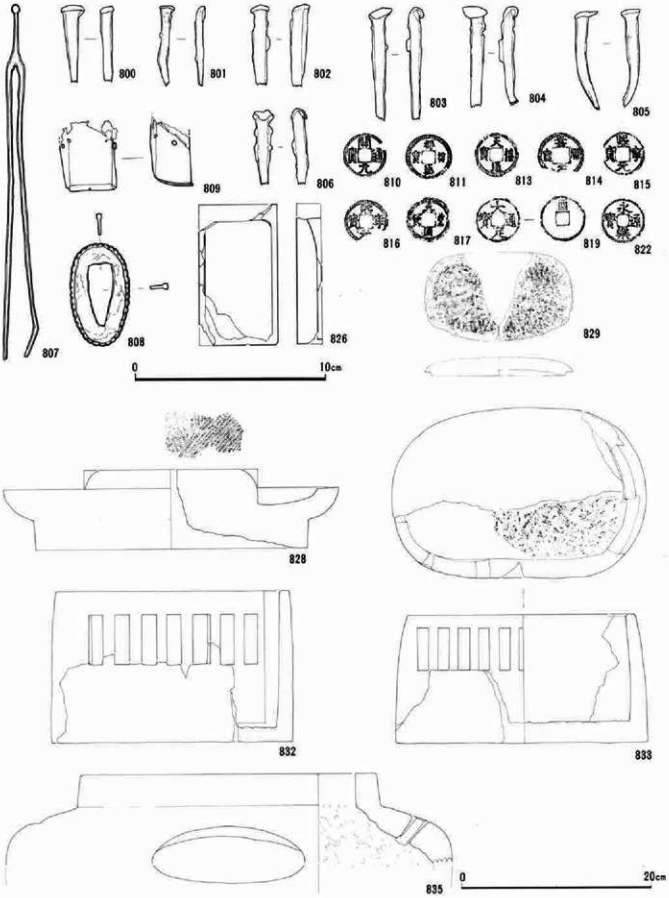




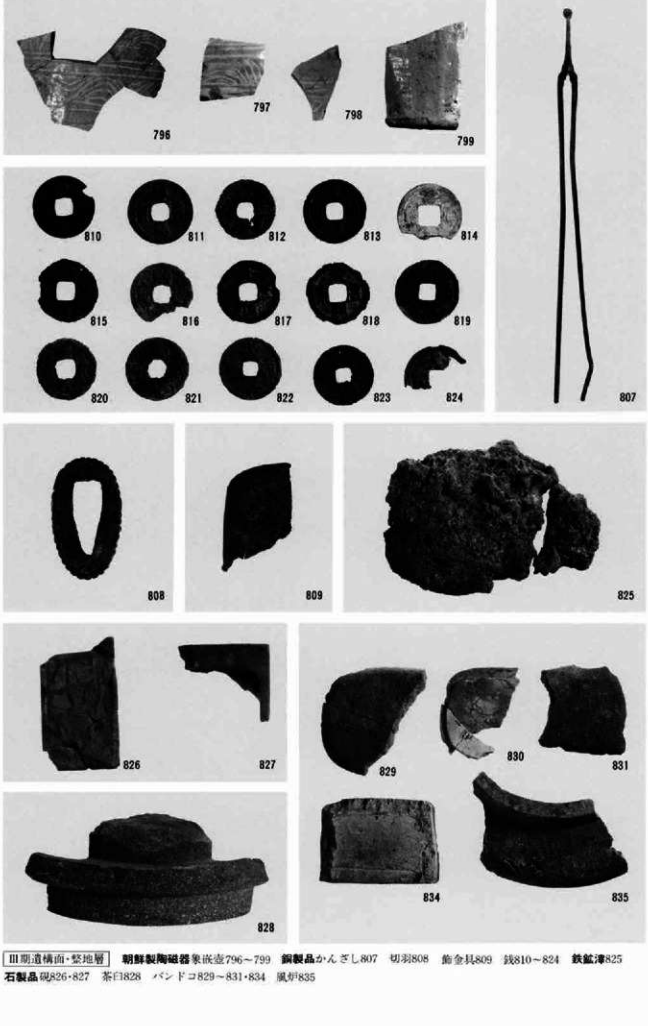


III期遺構面・整地層　白磁碗752　皿753～766　杯768～770　染付碗771～776・778～782　皿783・784・786～790　合子791～795

第55図　第24次調査遺物(4)



鉄製品釘800～806　**銅製品**かんざし807　切羽808　飾金具809　銭810・811・813～817・819・822　**石製品**硯826　碁石828
パンドコ829・832・833　風炉835



III期遺構面・整地層　**朝鮮製陶磁器**象嵌壺796～799　**銅製品**かんざし807　切羽808　飾金具809　銭810～824　**鉄鉱滓**825
石製品硯826・827　茶臼828　パンドコ829～831・834　風炉835

平成5年3月20日　印刷
平成5年3月31日　発行

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ

第15・25次、第24次調査

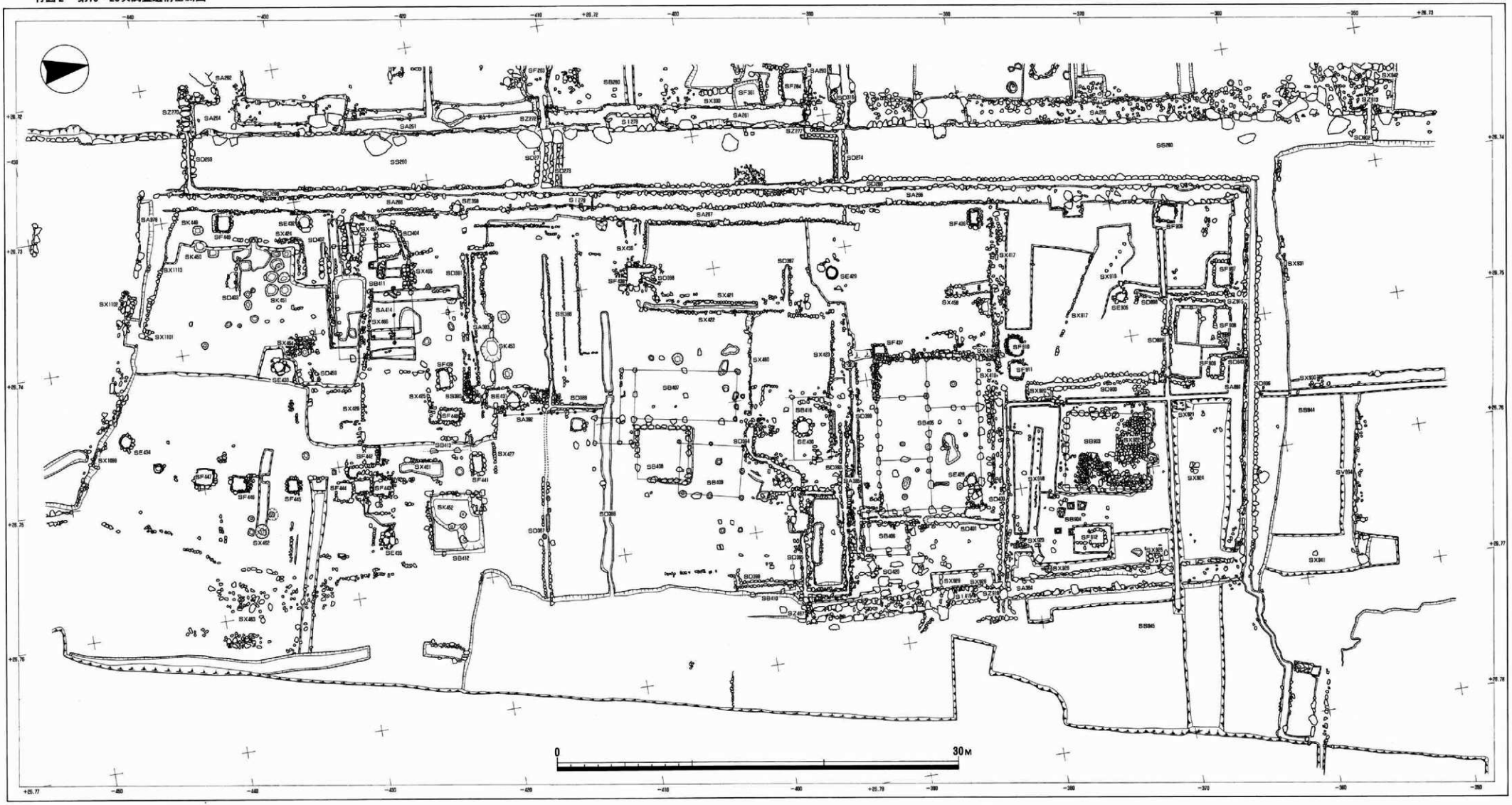
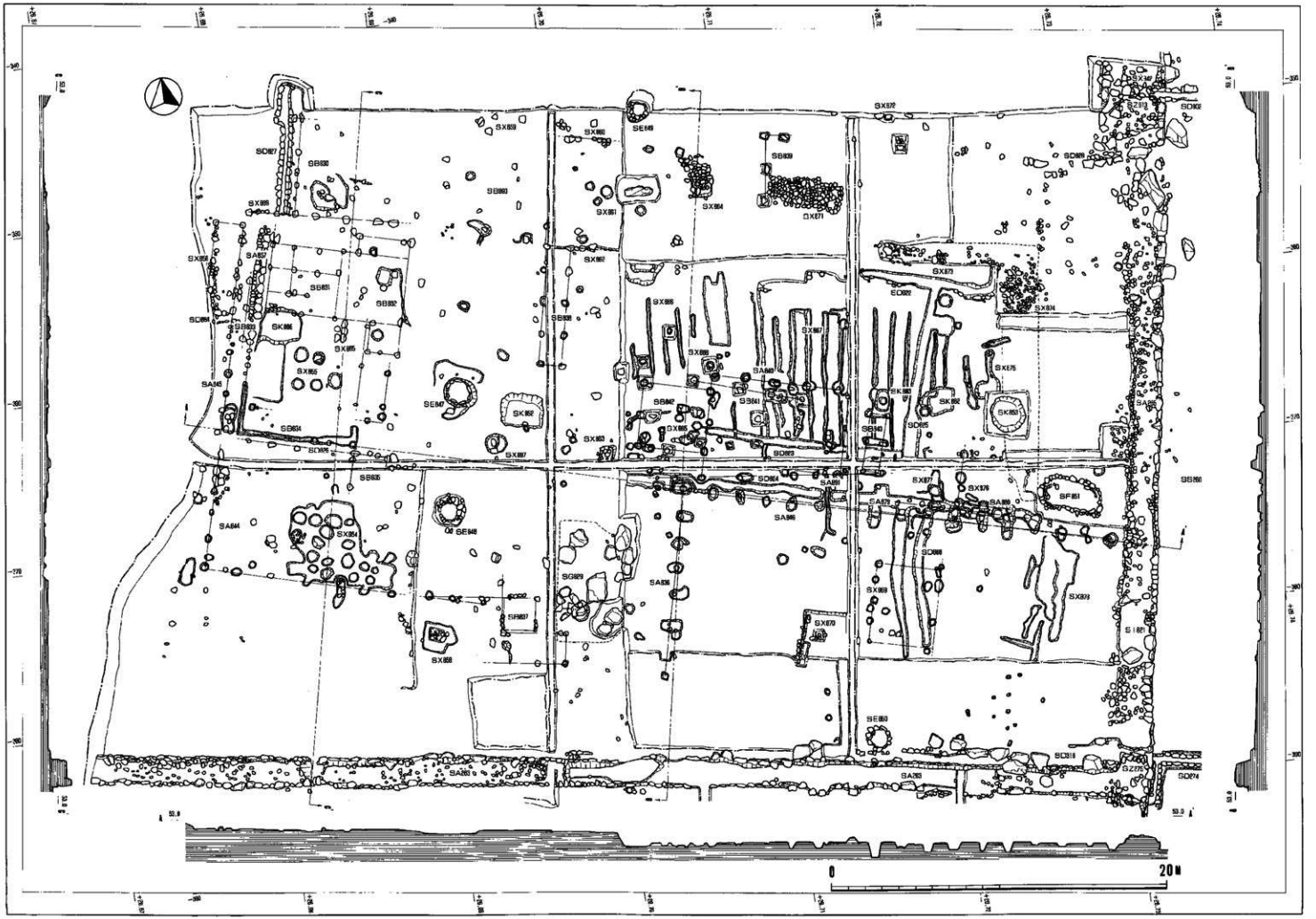
執筆・編集　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
発　　行　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
福井市安波賀町4－10
印　　刷　河和田屋印刷株式会社

付図 1

特別史跡　一乗谷朝倉氏遺跡

1 : 4,000

付図2　第15・25次調査遺構全測図



付図3　第24次調査遺構全測図